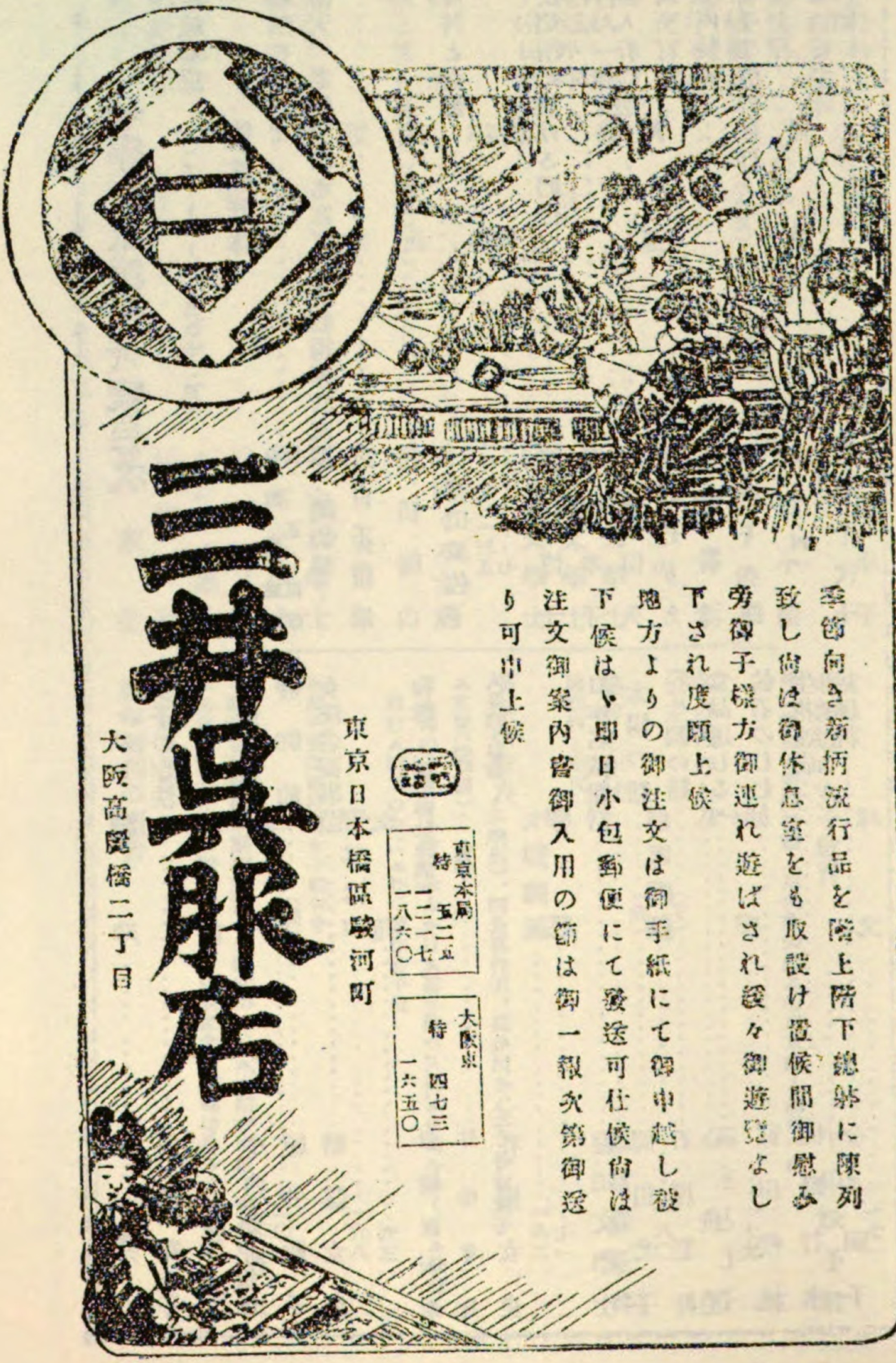
女學世界

第一巻第拾六號

口繪

梨本宮妃殿下
泰西名畫
塩原の紅葉
鷲と角鷹（[illegible]西共進會出品）
群鴨（同上）
臺灣神社鎮座式
四縣瓜生會秋季大會
世嗣觀世音
馬来半島の婦人
水仙（西郷侯爵夫人筆）



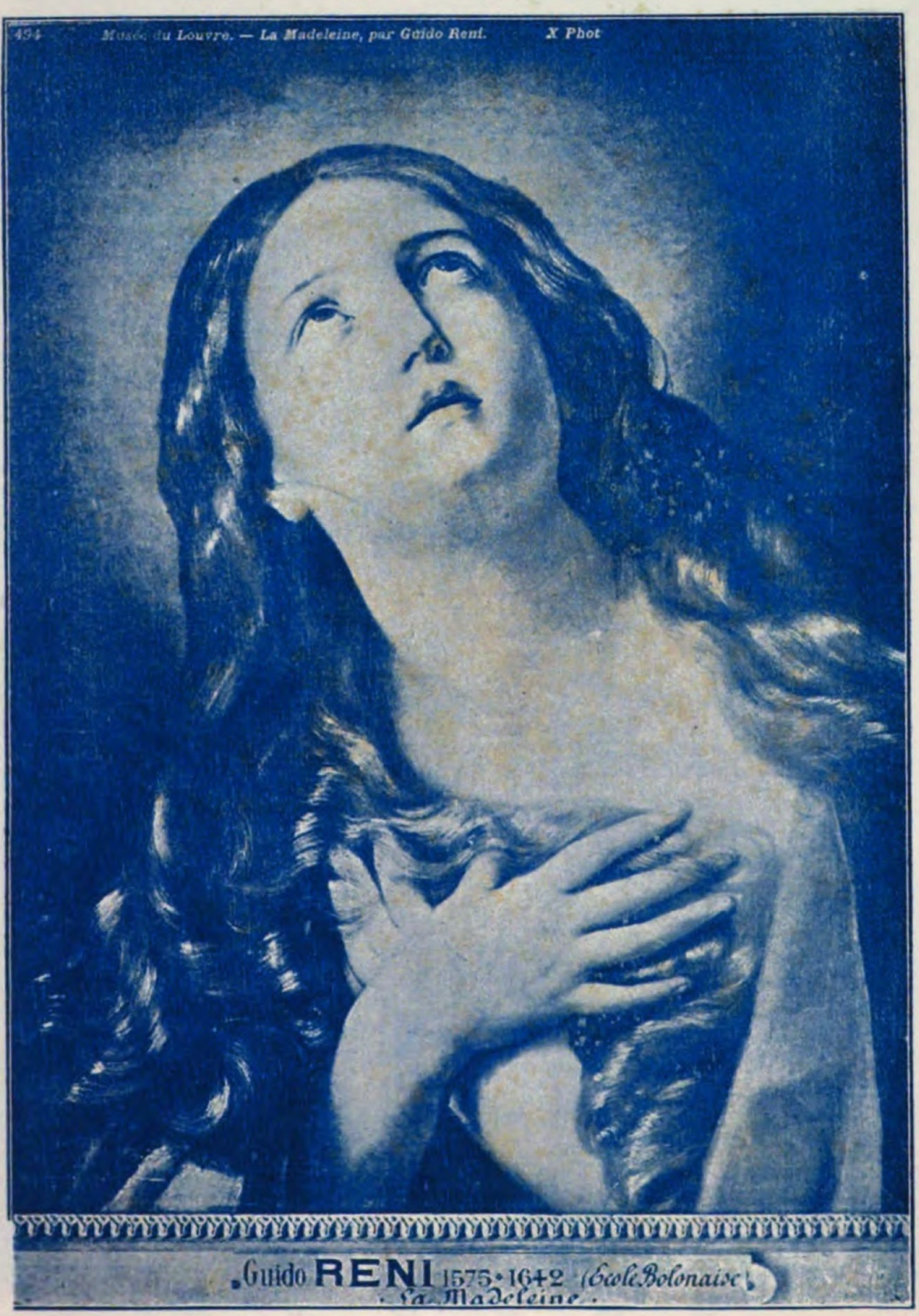

三井呉服店
季節向き新柄流行品を階上階下總躰に陳列致し尚ほ御休息室をも取設け置候間御慰み旁御子様方御連れ遊ばされ緩々御遊覧なし下され度願上候
地方よりの御注文は御手紙にて御申越し被下候はゞ即日小包郵便にて發送可仕候尚ほ注文御案内書御入用の節は御一報次第御送り可申上候
東京日本橋區駿河町
東京本局 特 五二五 一二一七 一八六〇
大阪東 特 四七三 一六五〇
大阪高麗橋二丁目

女學世界第十六號目次



梨本宮妃殿下

泰西名畫



マグダレナのマリア(レニイ畫伯筆)

(ルーブル美術館備品)

群鴨



（繪畫共進會出品）

岡田櫻郎氏筆



野州鹽原の紅葉

総裁　小松大宮妃殿下

副総裁　鍋島侯爵夫人

大日本女學會

新學年を開き會員を募集す

●本會は明治二十八年の創立にて既に學年を改むること三回講習終了者一萬六千餘人を出せり●講義を囑托せる師は華族女學校女子高等師範學校日本女子大學校等の諸教授及び其他博士等著名の專門家なり

本會は國家開明の本源たる女子教育の普及發達を圖らんが爲に女子必須の諸學科を掲げたる講義録を發行し家庭を離れ難き女子をして居ながら通信教授を受けしむ仍て一般女子素養の程度に應じ高等簡易兩科を設くると左の如し

高等科（毎月一回廿五日女學講義發行一個年終了東脩四拾錢月謝四拾錢紙數菊判參百頁）

○倫理坪内雄藏○禮法佐方鎭子○教育學安井哲子○兒童學高島平三郎○國文坂正臣○文法今泉定介○作文同○作歌大口鯛二○美辭學島村瀧太郎○漢文土屋弘○日本歴史大森金五郎○日本婦人列傳下田歌子○萬國歴史喜田貞吉○日本地理同○萬國地理同○地文脇水鐵五郎○理化同○算術上野清○博物津田梅子○生理衞生三宅秀○家事衞生同○小兒衞生三島通良○家事經濟後閑菊野○家庭教育三輪田眞佐子○割烹石井泰次郎○裁縫渡邊辰五郎○習字坂正臣○繪畫武村千佐子○圖案同○美學島村瀧太郎○音學東儀季治○挿花秀島成績○點茶松浦伯爵○園藝池田伴親○法制濟濟岡戸謙介○民法鳩山和夫○社會學岸本能武太○御伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

簡易科（毎月一回五日女學講義發行一個年終了東脩貳拾錢月謝貳拾錢紙數同百五十頁）

○修身談本會編纂○禮法佐方鎭子○國文同○作文今泉定介○漢文土屋弘○日本歴史大森金五郎○日本地理喜田貞吉○算術上野伊志子○博物小此木忠七郎○理化脇水鐵五郎○生理衞生三宅秀○家事大要後閑菊野○家庭教育三輪田眞佐子○割烹石井泰次郎○裁縫渡邊辰五郎○習字坂正臣○圖畫武村千佐子○史傳下田歌子○御伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

●會則は請求次第送呈す●東脩月謝を添へ申込あれば假入會を許し直に送本すべし

☞初巻發行　簡易科十一月五日　高等科同月廿五日

今般轉居　東京麴町區[illegible]番町三十七[illegible]

大日本女學會

（甲の一）

文學士寺內子誠君著　一條成美君畫

新婦人觀第參

女學生

全一册　定價廿五錢　郵稅金四錢

『新婦人觀』は第三編に入りて、最も興味ある題目に就いて描けり。蓋し女學生は、明治の社會が新に產みたるもの、人或は其長所のみを見て嘖々稱贊し、或は缺點のみを擧けて喋々之を罵る。憐れむ可き女學生は、今や雨の如き毀譽の辭を冠りつゝある也。本書は最も進歩せる思想と、嶄新なる觀察とを以て女學生の眞相を喝破せるもの、長短其兩面を看て褒貶苟くもせず。而も敍述極めて奇拔、文辭流麗流るゝが如し。婦人の好讀物として他に比を見る可らず

『新婦人觀』は月刊の婦人叢書也。每月五日發行　新婦人會の編輯になるものなり。

文學士　內海月杖君著

國文評釋

再版　定價二拾錢　郵稅金四錢

本書は國文學專攻の文學士內海先生が、國文評釋類を解釋し、合せて批評したるもの、文辭平易にして而も流麗趣味溢るゝが如し

發行所　東京神田錦町二丁目六番地　新聲社

通俗百科全書

昆蟲學特色

第廿四編

永島長五郎君著

通俗昆蟲學

（十二月中旬發兌）

通俗百科全書の完結として茲に通俗昆蟲學を發行し製本近日を以て成り發賣す本全書貳拾四冊は愈よ本篇を以て完成せり!!

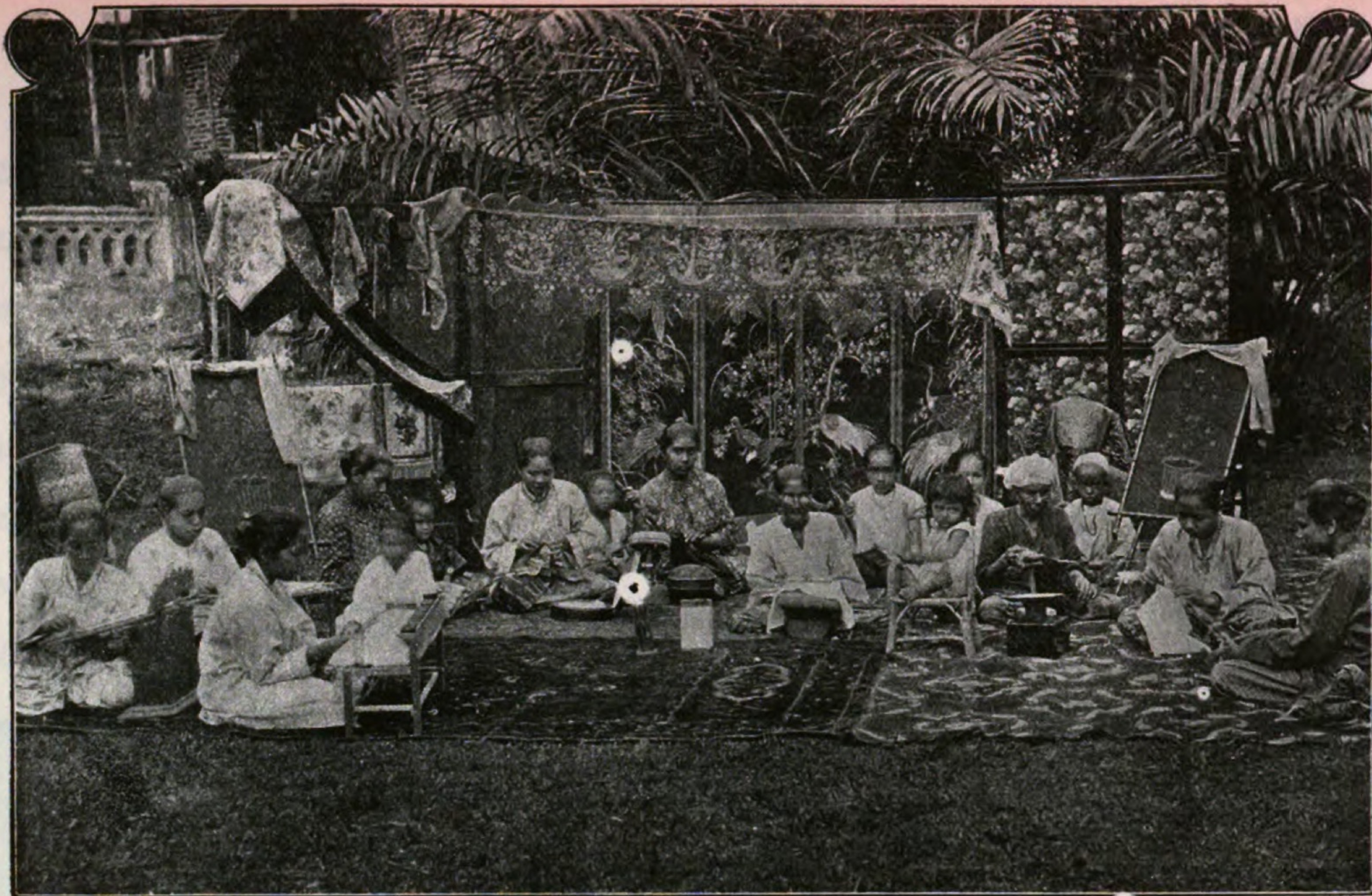
全壹冊洋裝菊判　正價金三十錢　郵稅金八錢

我等人類の生活する地球表面に種々なる形態及生活を有する動物生存せり其種類千差萬別而して今茲に論究する所の昆蟲類は即ち節肢動物門にして此門に屬する動物は其體軀環狀の體の相連續せるより成れり之を研究する科學中最も趣味あるの學問なり永島氏之を通俗的に說明し懇切に其學理を初學者に示せり請ふ御購讀あんことを

發兌元　東京本町三丁目　博文館

（甲の二）

(甲の三)



馬來婦人作業の圖

四恩瓜生會秋季大會





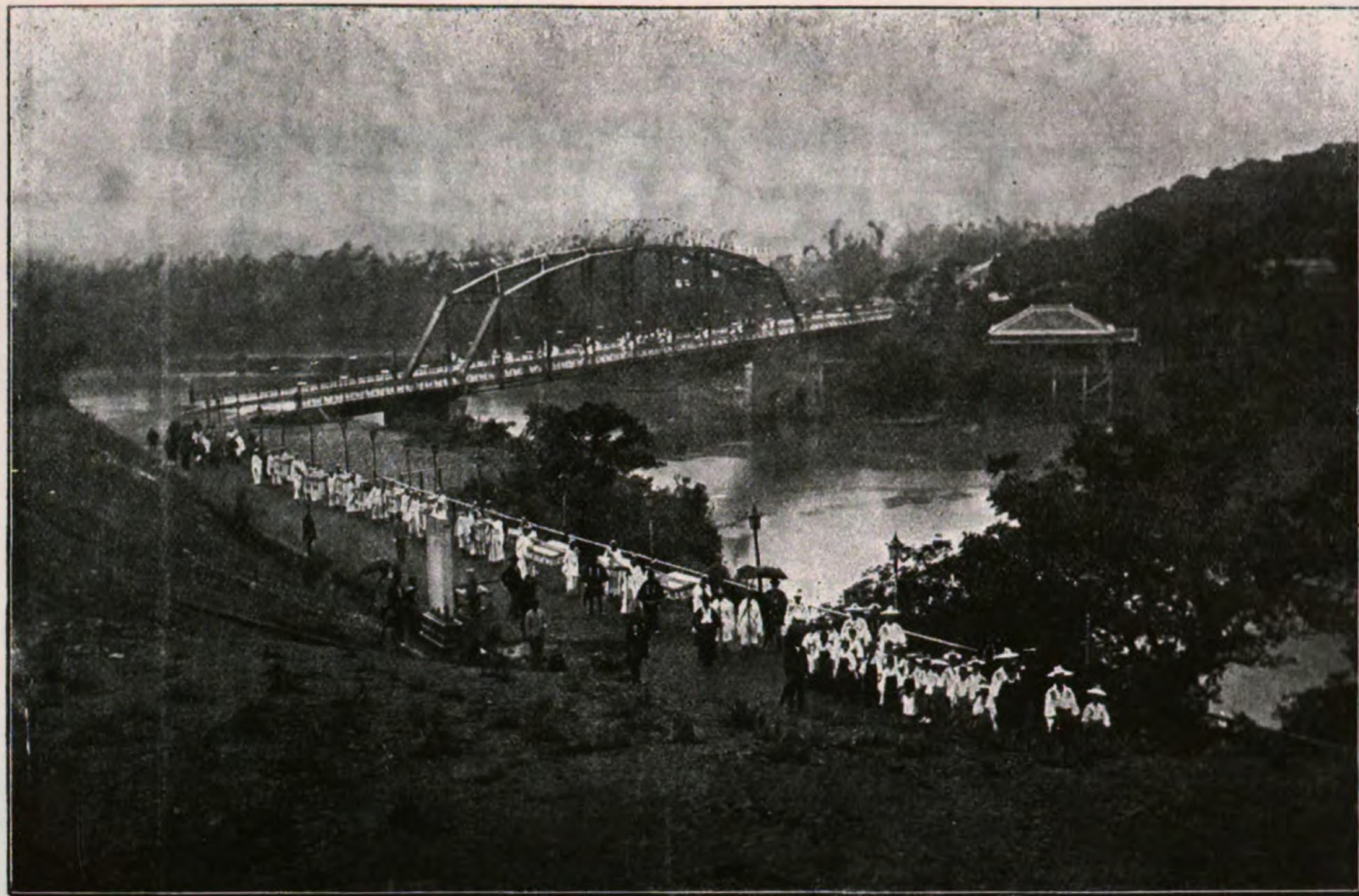


（圖十坂氣騰ノ庭ニテ）

（齋藤紫白氏撮影）



信濃善光寺全景



臺灣神社遷座式　（明治橋附近）

(その三)

巖谷漣山人著　有名畫伯挿繪

世界お伽噺

菊版洋裝美本

毎月壹回發行　全部壹百冊

既刊目次

- 第壹編　世界の始　不折書
- 第貳編　五色の石　半古書
- 第參編　珊瑚島　年方書
- 第四編　魔法博士　求洗書
- 第五編　無人島大王　審也書
- 第六編　鬼婆と少女　不折書
- 第七編　法螺先生　古洞書
- 第八編　二人王子　象堂書
- 第九編　小人島　年峰書
- 第拾編　孫悟空　半古書
- 第拾壹編　驢馬姫　審也書
- 第拾貳編　大人國　年峰書
- 第拾參編　豫言書　古洞書
- 第拾四編　王城乘取　金秋書
- 第拾五編　續法螺先生　清親書
- 第拾六編　猿智惠小僧　年方書
- 第拾七編　酋長征伐　耕溪書
- 第拾八編　夢の三郎　月耕書
- 第拾九編　鷲の蛹　審也書
- 第貳拾編　光明姫　葦舟書
- 第廿一編　鶏の使　華邨書
- 第廿二編　日の車　葦舟書
- 第廿三編　三人片輪　古洞書
- 第廿四編　白い鳥　月耕書
- 第廿五編　消炭太郎　半古書
- 第廿六編　十二王妃　月耕書
- 第廿七編　狐の裁判(上)　春帆書
- 第廿八編　狐の裁判(下)　沖舟書
- 第廿九編　奇躰の洋燈　金秋書
- 第三拾編　獵師の大臣　不折書
- 第卅壹編　九重の塔　古洞書
- 第卅二編　虹の橋

中川葦舟君畫

露西亞　魔法の卵

全壹册

正價金七錢　郵税貳錢

雲雀と龜との喧嘩から鳥と獸の戰さとなり蛾に嚙まれた一羽の鷲が一人の獵師に助けられ三年飼はれた御禮として獵師に魔法の卵を與へ卵がこはれたばつかりに獵師の息子が龍に拐はれ其子は龍の難題を一々解いて逃げ歸ると云ふ露西亞流の口碑傳説早く買つて讀まないと卵が孵化つて飛んで行つてしまふかもしれませぬ.

（乙の四）

發兌元　博文館

正價　前金壹册七錢　●六册四拾錢　●拾貳册七拾八錢　郵税壹册貳錢宛



(齋藤紫白氏撮影)

世繼觀世音（武州岩淵）



獨逸國トレスデン府の畫堂

鷲



岡田梅村筆

角鴟



（繪畫共進會出品）

鈴木華邨筆

名流墨蹟

水仙



西郷侯爵夫人の筆

著名文學大家執筆◎有名和洋畫伯挿畫

壹冊百廾頁餘　　菊版美本

少年讀本

全部五拾冊　毎月壹回發行

- 福地櫻痴君著（年方畫）1 高島秋帆
- 中村秋香君著（永洗畫）2 白河樂翁公
- 戸川殘花君著（半古畫）3 河井繼之助
- 依田學海君著（廣業畫）4 三條實美公
- 饗庭篁村君著（觀山畫）5 曲亭馬琴
- 巖谷小波君著（沖舟畫）6 井伊掃部頭
- 遲塚麗水君著（春汀畫）7 山田長政
- 桐生悠々君著（永洗畫）8 錢屋五兵衛
- 岸上質軒君著（春汀畫）9 春日局
- 野口寧北君著（大觀畫）10 水戸烈公
- 春山鶴谿君著（象堂畫）11 桐野利秋
- 大和田建樹君著（不折畫）12 藤田東湖
- 幸田露伴君著（永洗畫）13 伊能忠敬
- 武島羽衣君著（敬中畫）14 新井白石
- 中村桂軒君著（永洗畫）15 水野越州
- 田山花袋君著（觀山畫）16 池大雅
- 松原廿三階堂君著（春汀畫）17 木內宗吾
- 川崎紫山君著（年方畫）18 西鄕隆盛
- 坂崎紫瀾君著（年方畫）19 阪本龍馬
- 大野酒竹君著（不折畫）20 横井小楠
- 石原笠堂君著（春汀畫）21 貝原益軒
- 渡邊霞亭君著（年方畫）22 渡邊華山
- 石井研堂君著（耕溪畫）23 中濱萬次郎
- 勢多章之君著（不折畫）24 近衛忠熈公
- 文學士笹川臨風君著（古洞畫）25 間宮倫宗
- 堺枯川君著（松亭畫）26 周布政之助
- 內田魯庵君著（蓬舟畫）27 荻生徂徠
- 森山吐虹君著（華邨畫）28 松平伊豆
- 國府犀東君著（古洞畫）29 中江藤樹
- 春山鶴谿君著（弘光畫）30 島津齊彬公
- 千河岸貫一君著（春汀畫）31 高野長英
- 桐生悠々君著（蓬舟畫）32 橋本左內
- 千河岸貫一君著（春汀畫）33 釋月性
- 文學士白河鯉洋君著（古洞畫）34 平野國臣
- 文學士幸田成友君著（年方畫）35 熊澤蕃山
- 玉木椿園君著（古洞畫）36 雲井龍雄
- 北村香陽君著（耕溪畫）37 野中兼山
- 堀紫山君著（蓬舟畫）38 大鹽平八郎
- 塚原[illegible]著（春汀畫）39 佐久間象山
- 勢多桃陽君著（古洞畫）40 小栗上野介
- 熊田葦城君著（古城畫）41 阿部伊勢守

第四十二編

石川丈山

田岡嶺雲君著　松村松仙君畫

洋裝全壹冊　正價金拾三錢　郵税四錢

勇武絶倫を以て一旦一乘寺村に隱棲せしより筆を以て劍戟に代へ詩酒悠遊風月を樂しみ復た功名の何たるを知らず所謂英雄首を回らせば則ち神仙とは其れ丈山の謂に非ずや本傳其出所進退を審にして彷彿其人に接するの思あらしむ

正價　前金壹冊拾三錢◎六冊金七拾錢◎十貳冊金壹圓三拾五錢◎郵税壹冊に付四錢

（其の一）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

最も信用ある
最も正確なる
當用日記懷中日記發兌廣告

明治三十五年

當用日記

菊判形四六判形は紙數各五百四十頁菊半截形紙數五百二十餘頁
御注文は必前金

當用日記 五種

菊判大形 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）…正價金六拾五錢 郵税拾四錢
菊判大形 上製（舶來洋紙總クロース金文字入）…正價金五拾錢 郵税拾四錢
四六判形 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）…正價金五拾錢 郵税拾錢
四六判形 上製（舶來洋紙總クロース金文字入）…正價金三拾五錢 郵税拾錢
菊半截形 上製（舶來洋紙總クロース金文字入）…正價金三拾錢 郵税八錢

十二版發兌

中江兆民先生著

續一年有半

（一名。無神無靈魂）

全壹冊
洋裝菊判
正價金卅八錢
郵税八錢

兆民先生曩に客寓に在て病疾を發、醫師診して餘命一年半を出でずといふ。茲に「一年有半」の著あり遐邇爭ひ睹て快とす、既にして九月中旬京に歸り、爾來病勢大に進み、醫師以て**餘命纔に一ヶ月**を支ふべしとなす。先生此二ヶ月の間に於て更に一家の哲學を留めんとて非常の痛苦と勞憊を忍んで亦此著あり。前編とは頗る其趣を異にし、高遠なる學理の見地と、卑近なる實際とを以て古今東西の聖賢哲學者宗教家の所説を縱横論駁罵倒して殆ど完膚なからしめ以て先生一家の哲學を創建し組織したるもの、哲學家としての先生が**五十年間**の蘊蓄造詣したる所は一に此書に依て發揮し盡せり其天馬空を行、底の筆力と廻飆林を拂ふ的の論鋒とは實に先生の壇篇、前篇を味ひたる者亦此書を一讀せざるべからず。

第十八版!!

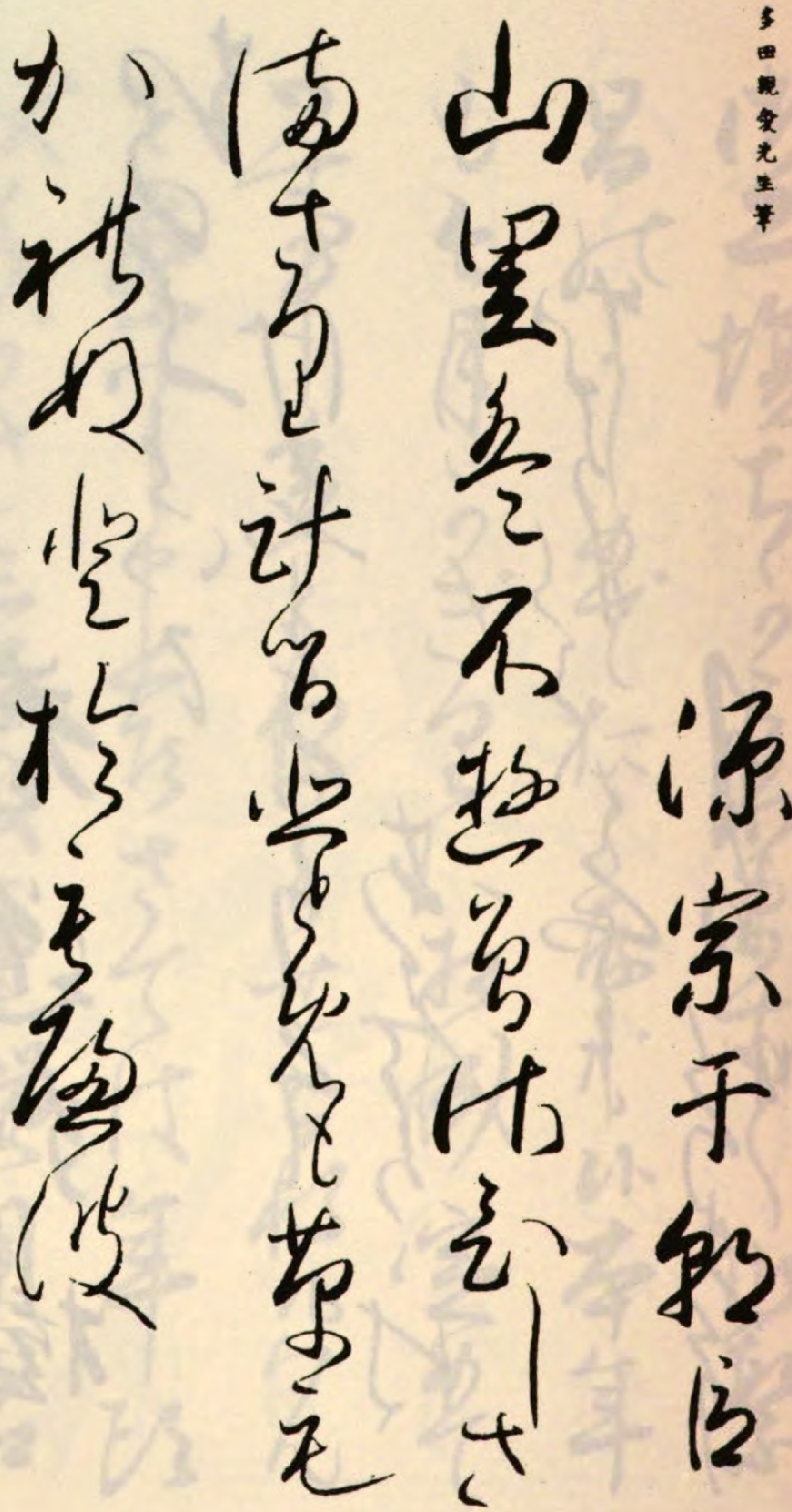
一年有半

全壹冊洋裝
正價金卅五錢
郵税六錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（四の四）

多田親愛先生筆



多田親愛先生筆

春道列樹

きのふといひ
けふとくらして
あすかゞは
ながれてはやき
月日なりけり

Digitized by Google

坂正臣先生筆

此之場ちてごろまかし此祭
君れよしめでたく存じ候本年
も七月こゝぎる里に相成寛めて
日筆多くわらせられん
と存し申上候さて付年頭
状をつぎゝ三百枚年禮用名

刺二百枚別紙見本之通
印刷の義申上候様兄より申
付られ候一年の計ハ元日
に有之と申候得共是ハ元日
よりの事にて候ハ萬善との付
にほ申上度候返文まてにてしく

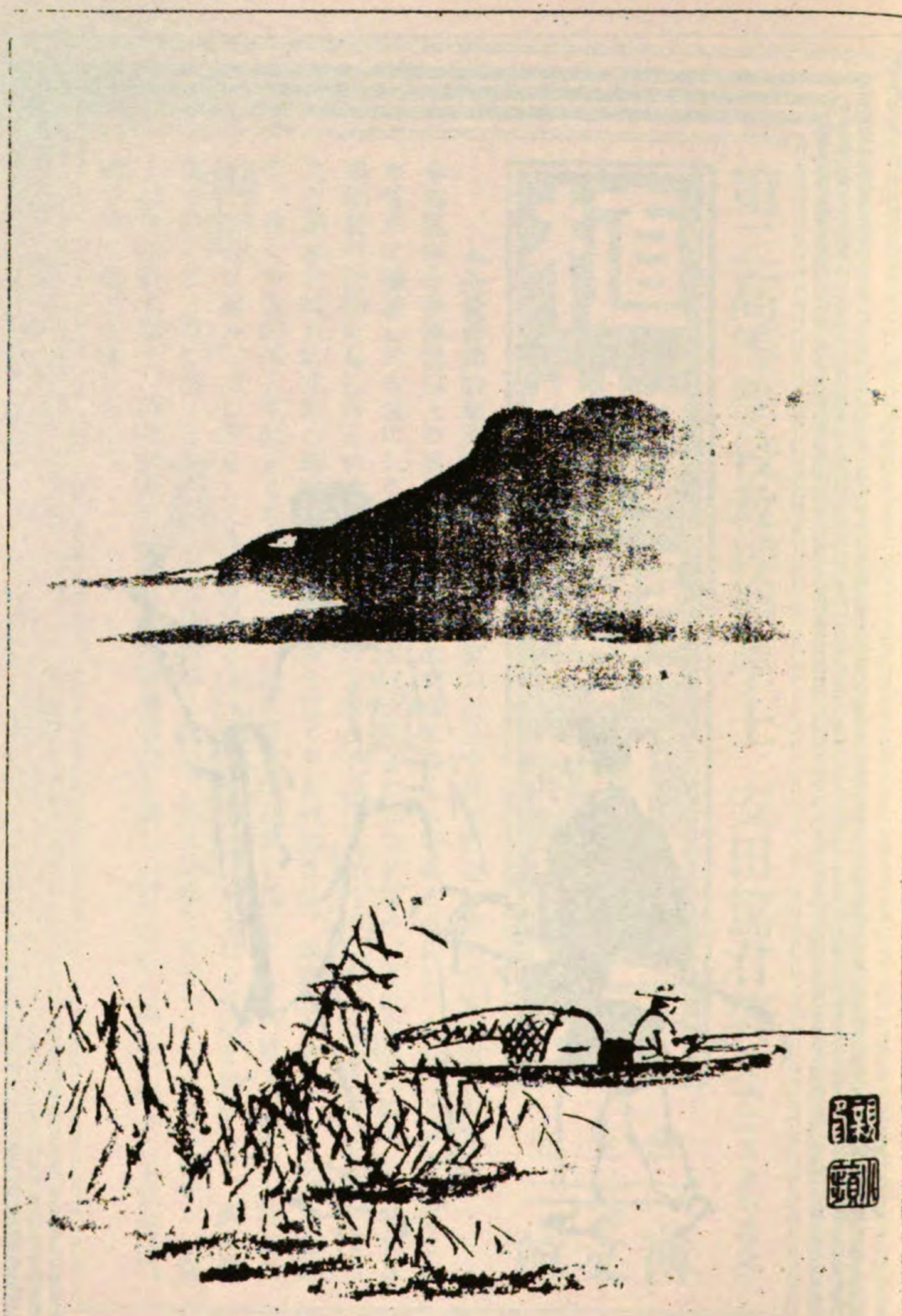


野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆



野口小蘋女史筆



野口小蘋女史筆



第二高等學校教授理學士　安田篤君著　（十二月上旬發兌）

植物學汎論

▲全壹冊洋裝菊判背皮金文字入紙數六百三十頁正價金一圓五拾五錢郵稅拾五錢▽

本邦從來中學課程以上の高等教育植物學教科書に缺くる所あるや久し、本書は之が缺を補はんが爲めに編述したる者にして、併せて**植物學**の初歩を修め、更に其專門に入らんとする獨學者の楷梯たらしめんが爲めに編纂したる者なり。抑も**植物學**は實驗的の學問なれば、之を學ぶに徒らに文章の暗記、字句の解說を以てするが如きは、到底之を領會するの道にあらず、況んや其趣味を覺知するに於てをや、故に著者は此書を編述するに當り、勉めて各處に**例證**を擧け、讀む者をして直に實物と**比較對照**せしむるの便を得せしめ、殊に每編の終には一般に關する**實驗**の方法材料を揭げ、以て斯學を實習する者の便に供せり、冀くは此指針に依て、肉眼的並に顯微鏡的の觀察實測を爲し、以て斯學の興味を覺ることを得は、思ひ半に過ぐる者あらん。

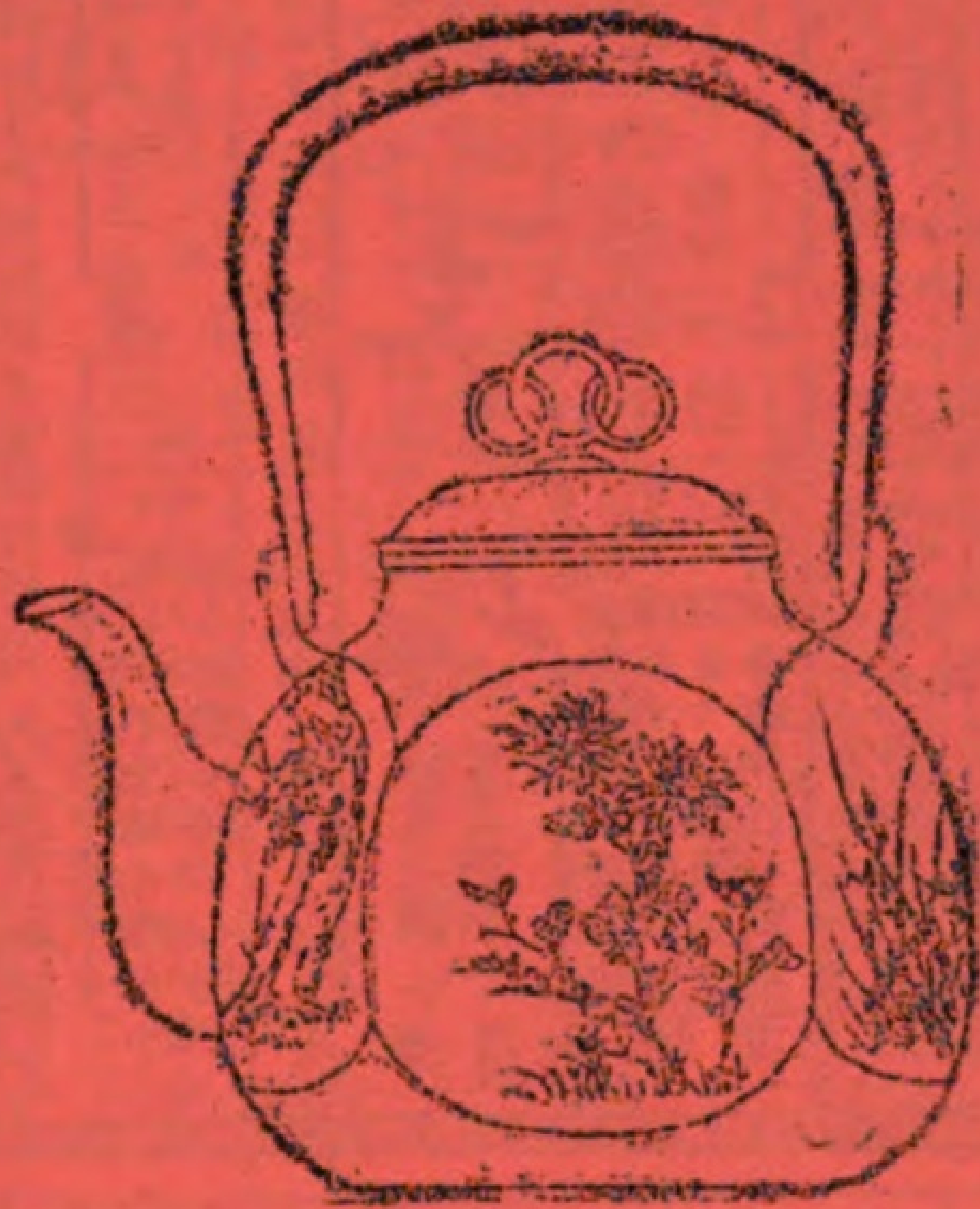
發兌元　博文館

（丁の一）

（丁の三）

宮内省御用

美術製品 銀瓶



此他精美なる美術品
いろいろ調製有之候

弊店は金銀物各種の製作に付ては已に諸君の御好評を蒙り日に増し繁榮の段奉深謝候然るに猶又今度形模様の意匠考案は美術の大家に彫刻は府下銘家に特約を致し愛顧諸君の御好みに從ひ廉價にして且迅速に美術の製作に應じ可申候間陸續御注文の程奉冀上候　敬白

（丁の四）



東京市下谷池の端仲町

貴金屬及美術袋物商　玉寶堂

電話（本局九百六十五番
本局一千二百四十四番）

明治三十四年十二月五日發行

女學世界

第壹巻 第拾六號

紀元二千五百六十一年 西暦一千九百一年（辛丑）

論説

女智と女徳

女子大學講師 三輪田眞佐子

わか國の女子教育か、比較上男子教育よりも幼稚にして振はさるは、掩ふへからさる事實にこそありけれ。されは其の反動にや、近來女子教育の聲いと高く、即ち教育家は更なり、苟も社會の經營を憂ふるものは、其の職業の如何を問はす、其の位地の上下を論せす、或は家庭改良の點より、或は風俗改善の點より、若しくは國民の母たるへき身分の點より、

女子敎育の必要を議せざる者はなし、從ひて種々女子專門の學術及ひ技藝を硏究すへき學校の勃興するのみならず、亦公の制度に由りて少くとも各府縣に一校以上の高等女學校を見るに至らんとせり。あはれわれ等女子界の幸福はなどかこれに如かん。加之種々の學會及び種々の雜誌日に月に生れて女子界の進步を助けんとせり、實にわれ等の嬉しさたとへんにものなかるべし。

たゞ恐るゝ所は斯く春草の一時に萌え出つるか如き觀ある女子敎育をして、果して燦たる花を着け郁たる香を放たしめ、遂に人生の福祉に供すべき收穫の秋あらしむるを得へきか若し幾とせの春秋を經ぬれとも、花も實もなきのみならず偶々人生を害する毒草の蔓々と茂るを見んか、失望も悔悟も何の効かあらん、故に女子敎育を論議し亦女子敎育に關係するものは將來如何なる女子を作り如何なる結果を得へきかを洞察し以て今日より其の方針に進行せさるへからず徒らに其の聲の高きを聞きて安堵すへきにあらざる也。

凡そ敎育上一般に注意すへきは敎授と訓育との區別なり、思ふに敎授とは外部より智識を注入するものなり、これに反して訓育とは內部より道德を自覺せしむる者なり、從ひて女智を養成するには、敎授を以て足れりとせんも、女德を修養せんには、是非との訓育に重

きを置かさるへからず、然るにヘルバルト派のみに偏したる教育學者は、教授にのみ重きを置きて、概ね人を教育するには智識だに教授せは、利害得失を判別する能力の發生と共に完全なる人格のものとなるを得へしとする傾向あり。勿論今日教授法の形式等か進步せしは、同學派の賜ならんも、實際上知りて行はさるものあり否人を教授するに足る博識者にも屢々操行の正しからさるものあり、或は古今東西の書に通する人にして、往々匹夫野人だに耻つべき行動のものあり、由りて完全なる人格の人を作らんと欲せは教授の一方のみより工夫するは非なり、なほ他の一方なる訓育を盛にして智德全備の人を作らんことを勸めさるへからす、殊に女子は其の天職上最も重んすべきは女德なり是を以て女子教育上に於て缺ぐべからざるものは訓育なり、若し訓育なくして女子教育をつとむるはさながら水なら池に魚を養はんとするか如し。

されは女子教育上第一に研究すべき問題は、訓育を如何にして施し得るかにあり。如何となれは教授に至りては必要は必要に相違なきも、固と教授は人の妻たり、將たることなき者よりも普通の智識としての妻道及ひ母道は學ふを得べし、甚しきは女子たる本分を盡す能はさるのみならす、女子たる本分に戻るものよりも女子に一般必要なる心得を教授せら

るゝも眞理に合したる以上は、眞理を教授せらるゝとして妨けなかるべし。然れとも教授を受けし女生をして其の教授に感激し、以て良妻賢母の眞正なる資格を具備したものとなさんには、是非とも眞正に師と仰ぐに足る經歷と實踐とを有するものより、教授せられさるへからす、故に教授のみを以て女子教育の目的を達するを得ば全く僥倖なるのみ。

おのれの信する所に由れば、訓育を施す道は他なし、先つ家庭を改良し、家庭の風儀を以て悉く教育的となし、其の寢食起居の折に觸れ機に接し、知らす識らす一種高尚なる且つ善良なる品性を作らしむるにあり、例之は南風薰して以て萬物を呴育するに足る暖氣に圍繞せらるれはおのつから新綠の菁々として發生するか如く、父は君子人なるのみならす母も亦烈婦節女にして兄弟姉妹さへ各摸範とするも可なり、なほ婢僕をも教育を助け得る等全く一家の風儀教育的ならんには其の間に成熟する女子の邪道に陷らんとするも能はさるべし、決して讀書や修藝などの教授のみを以て教育の道を盡せりと思ふべからず。

次に善良なる習慣を作り、其の交る友其の行ふ業をして悉く影響を受くるも妨なきのみならす、知らす識らすの間に善良なる習慣を以て善良なる品性に變せしむる工夫を以て訓育に必要なるものと信す決して女子教育を加ふるものは學校のみに依托して滿足すへからす、

其の日常の生活全般に着眼して始めて女德の完全なる女子を作らるべし必す教授のみを以て目的を達するものとな思ひそ。

終に最も肝要なるものあり其は教師の感化なり、抑も女子を教育する教師なるものは其の言行動作悉く好き摸範たらさるへからず、例令は自ら嫉妬の心深くして嫉妬心の少き女子を作るは難し、自ら多言にして寡言の女子を作るは難し、自ら母たり將た子たる道を踐まずして慈母孝子を作るは難し、自ら操行正しからずして貞婦を作るは難し、されは眞正に良妻賢母を養成せんとならば自ら教授せんため喋々喃々せんよりも、默して自ら實踐的摸範を示すべし果して然らは千言萬語を以て教授せらるゝよりもこれを仰きこれを慕ふ念より發する感化の力は訓育上莫大の効あるべし、今日女子教育の盛なるため女智を以て見るへきもののあるに比準して女德を以て見るべきもの少きは教授をは唯一の教育法となし、而かも眞正の教育法は訓育に存するを知らさるかためならんかあゝ

斯く女子教育につきて教授のみを以て安んせずして反りて訓育を重しとする所以のものは他にあらす、おのれ幼時より讀書を好み種々の作を繙きけり而して書は能く人をして慷慨せしめ亦能く感泣せしむるのみならず、亦能く恍惚として失神せしむることさへあり、而

れども翻りてつら〳〵其の作者は如何なる性行の人なりしやを思繹し始めて聖賢人の作と心服することあり。亦僞善者の作と放棄することありけり故に訓育は人物養成上教授の爲し能はざる勢力を有するものなりおのれが幼時の師なる星巖先生の夫人、紅蘭女史は高潔の女子にしておのれを教授せずして訓育すること大なるを知りて、恒に感謝多々なり、今其の一例を擧ぐれば女史は良人の勤王事件に附帶して獄中に投ぜられき、時に安政六年正月廿九日獄中の作あり曰く

誰把㆓孤鸞㆒付㆓網塵㆒　四飛禁錮大艱屯
榮衰寵辱固常事　何害乾坤不測神

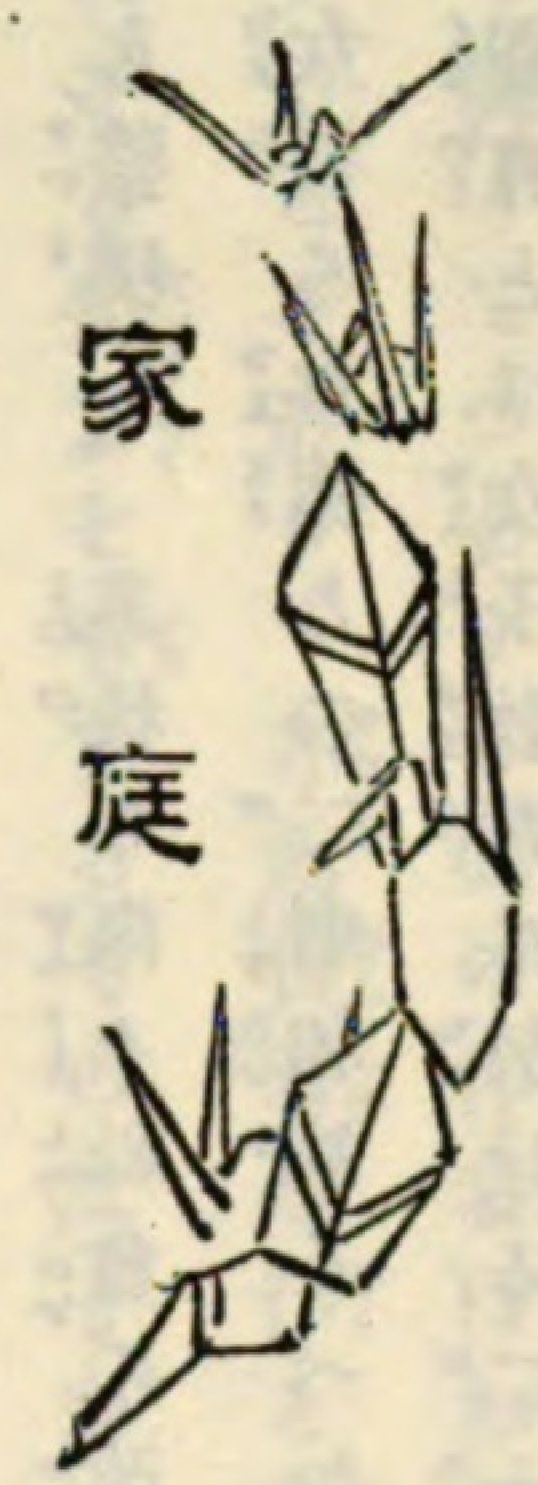
と實に女史は孤鸞を以て自ら任ずるものなり、其の氣品の凡ならざる知るべきなり、おのれ女史と寢食を共にすること年ありきされはにや今日人に向ひて語るに足る性行なしと雖もつねに大君に事へ國事に盡す心に至りては敢て人の後に遲るゝを欲せず、亦今日まで一點たりとも身に不潔の塵を受けしこと及び他人の前に立ちて公言し能はざる行爲のなきを自信するを得るは必竟女史より受けし訓育の賜なりと感涙に堪へざるなり。

要するに近來隆盛に趣きし女子教育をして、眞に好結果を得しむる道は全く學校に於て如

何に教授するかを注意するに止まらず、如何にして女生を訓育するかに着眼すべし、亦教授を以て女智のみを增進せしむるは恰も隻輪の車の如く智も智の用をなさゞるべし、反りて社會に害毒を流すに至らん、故に女子教育に於ては女德を以て中心となし女智をこれに伴はしめざるべからず、勿論世に女德養成を言ふものなきにあらずも往々固陋の弊に陷り、例之文明風の女子教育に魁をなすを知らず反りて改良すべき女風の改良を拒むものあり、或は體育を以て優美を損するに誤信し、智育を以て謹愼を害すると妄信し唯柔弱事に堪へざる女子を作り以て女德を全うするものとなすものあり、これ痛く戒むべき僻見ぞかし、夫れ女智と女德とは相待ちて一家の主婦たる任を全うするのみならず、餘力を以て女子に相當したる社會事業は決して男子にのみ勞を讓るべからず、故に社會の慈善事業を始め風儀の改良なども女子に關係あるものは自ら進みて勞を執るを以て、眞正に女德の全部を全うしたる女子と言はまほし、蓋し修德の順序より言へは先づ內部の精神界を清淨にし、次家庭を整理し、其後ち漸々社會の改良等に及ぶべきなり。而して其の任を充さんとなれは必ず女智と女德との二者相缺くべからず、これ女子教育に於ける二大要素なり、從ひて教授と訓育とは女子教育に於ける二大方法なり。

《完》

家庭



公の場所に於ける禮儀

理學博士　箕作佳吉

是は近頃世間て八ヶ間敷なりて來た公德問題の一部分てある、昔し德川の時代には士農工商と云ふ社會の階級が定つて居つて、社會の秩序が非常に嚴肅であつた爲め、公衆の場所に於ても自然禮儀作法が定つて居つて、隨分窮屈であつたか知らんが、其時は其時に應じて不體裁の無ひ様になつて居た、余は無暗に昔時を慕ふて、作法は何でも德川時代の作法に限る、などと只管昔時を崇拜する者ではない、今日は德川時代とは萬事變りて居るから行儀作法も自然變りて來なければならん、例へば今日は公侯貴人が途を歩いて行くと、其後から土方體の者が人力に乘つて行き、車夫は「ハイ〳〵」と從何位勳何等の方も遠慮會釋なく側に追ひ退て行く、昔ならば一々切り捨てゝも宜き場合だの、時世の變遷は驚くべきもので、此の如き場合に一々刀を拔ひて居つたならば、夫こそ社會は立ち行かぬ、時代が變れば禮儀も變らねばならねのは此例でも明らかだ。

然れば今日は我々が見る所の禮儀て十分滿足が出來るかと問ふたならば、心ある者は皆今日の儘にては、迚も滿足は出來ぬと答へるであろうと思ふ、今日の社會には道德の頽敗と共に禮儀作法も紊亂を極め、此儘に捨て置いては我日本の將來に大に影響を及ぼし、今世紀の我々は祖先に對し子孫に對し申譯なき様なる事に立ち至るだろうと思ふ。

試に今日容易に世上に目撃し得らるゝ二三の例を揭ぐれば、夜會或は其他集會の場所にて、其有様は如何てあるか、此の如き集會は元來西洋より輸入したもので西洋には西洋風の禮儀がありて、萬事之に相應する様に仕組であるから何事も圓滑に行くけれども、之を直譯的に我國に輸入し、之に參會する者は十中八九西洋禮

儀を知らばこそ、之を知らざるを以て自慢する東洋男子、其僻東洋の美風をも忘却した人々なれば、禮儀作法などは全然ない人で、何事にまれ我勝主義を取り、他の客と推し合ひ、さて立食となれば、食卓に向ふ狀恰も敵の壘に向ひて吶喊をなすが如し、實に不體裁の至である、然して其地方にては小刀、肉刺、匙等夜會の食卓上から消失する事決して少なからずと云ふ、言語同斷の事どもである。

又人の葬式に會し讀經の際高聲にて用談を爲す者、煙草をフカス者等は折々見る處であるが、實に禮儀を知らざるの甚しいものと云ッてよい、又葬式の行列に遇ふて、棺の直に後を横切りて行く者がある思はざるの甚しきである、

又滊車の中、停車場にて切符を買ふ時、鐵道馬車の中、滊船に乘込みたる時の如き、今日は皆我利々々主義、何んでも進んで取らぬは損、取れば勝と云ふ主義が行はれて居るが、實になさけない事である、試に切符を買ふ時に「サアー貴君より」と言ふて先を讓り、老弱の人あれば之が爲には買ふてやらぬ迄も、買ひ易き樣に爲してやり、滊車の中にて新に入り來る者があれば、「先づ此方へ」と席を分けてやる樣にせば其心地好い事は筆にも盡し難い、又人に讓られたる時は、人情として之に乘じ無頓着の振舞をなす者はなき譯だ、過日私は京都から滊車で歸京した時に昔風の紳士一名が二三の從者を伴れて乘り此溫和主義を行ふた故、滿車の人が之に化せられ長き乘車中和氣藹然として實に乘りて居りても愉快であつた。

又郵便局、區役所の小使人、諸所(公私共)の受付の暴慢なる事は度々新聞紙にも投書があるが、彼等は實に人を思はざるの甚しき者だ、少しく社會上の位置ある者が、此等の處に至り腹を立てずに濟む事は少ない、つまり小役人等は禮儀作法を知らないからである。

又此頃は商人の店に居る番頭、小僧が無禮になつた場合が多くなつた、商人は以前は餘り卑屈であつた、其反動が來て卑屈でない、獨立の人であると言ふ事を示す積りでゝもあるか知らぬが、此節は客に對し挨拶も碌

にせず、手前等がおれ樣の處で物を買ふと云ふは分限に過ぎたと云ふ樣な擧動をなし、又啣煙管をなし、卷煙草を燻し、柱にもたれながら客に接する實に作法を知らざる無禮者と云はねばならぬ、若し私が商店の主人てあッたならば接客の際は煙草をふかす事を店員に嚴禁する、外國では婦人の煙草を好まざると一通りならねば啣煙管をしながら客に接するやうなことは小賣店にて見るとはない、右樣の事に反し、顧客が店に來てから去るまで心地好い樣に取扱はは、自然其數も增加する筈で、商賣も繁盛するに至らう、奇なるとは以前京都の商人は實に無愛想で、東京より行きた者は不愉快に感じたのに此頃に至り京都の方は大に改良し、東京の方に佛頂面の商人多くなりたるは、如何なる理由であるか。



此等の事は外形上の事、眞の道德さへ正しければ、行儀作法などは何ふても宜いと云人あらんも計り難い、然ども此說には同意する人は少なからう私は全然反對である、人は外形に制せらるゝ事が多い、外形が正しければ內心も正くなるに易い、外形が亂るれば內心も亂るゝ事が多い、又人は社會的動物であッて社會なしに生活は出來ず、社會ある以上は他に對し、其時々々の需要に相應した禮儀がなければならぬ、そこで私は特に東京市敎育會に進言し東京市敎育會の會員なる小學校敎員諸君の贊成を乞ひ諸君の力を借りて幾分か禮儀改良の端緒を開かん事を切に希望して止まないのである

禮儀改良の手段

諸君は學校に於て修身倫理の大略を生徒に授けられ彼等をして正しき有用なる人に養成せられんとするは諸君の職務なれば余は今更玆に之を喋々するには及ばず、唯余の言はんとする處は左の如きなり

小學校の生徒が途中にて葬式に遇ふた時には其葬式は自分の知れる

ものと知らぬものとに拘はらず又大小、華美質素に拘らず、凡て帽を脱して禮を爲す事と爲し度きなり。

凡そ葬式は人の死したる時にあるものにして人死すれば之が爲めに悲む者は必ずあるものなり、或は父母を失ひたるか或は夫妻に別れたるか或は兄弟或は愛子を失ひたるか或は其人死して活計にも困難するに至るものあらん、或は壯年强壯の者一瞬間の出來事にて忽に世を去りたるものあらん或は功成り名遂げて敬慕すべきの人なる事もあらん、兎も角も葬式は必ず悲哀の伴ふもの、途に之に邂逅すれば縱令知らざる人の葬式にせよ其悲哀に討れ同情を表するは當然の事なり、人如何に多忙なりと雖も帽を脱して一瞬間の禮を爲すの時なからんや、況んや、小學生徒に於ておや、反りて禮する者の心を淸め幸を招くことあらん。

而して葬式の如く同情を表するとの極めて容易なる場合に他人に禮を盡せば即ち他人に對し公の場所に於て禮を盡すべきものなるを敎ゆるの端緒を開きたるものにて常に其精神を以て他人に接すべき事を忘却せざる樣敎員諸君より懇切に敎へ賜はらば其兒童生長の後も公衆の場所に於て禮儀を重んずるに至らんか是即ち社會改良にあらずして何んぞや。

葬式に遇すれば脱帽して禮を爲すの習慣は余の新案にあらず、巴里にては此習慣一般行はれ葬式來れば貴賤老弱皆帽を脱して禮を爲す實に美風と云ふべし、若し此習慣に違背する人あれば傍にある者之に注意を與ふるに至る。

此の如き事は單に形式のみとなりては面白からずと雖も其精神を忘却せずして之を行へば實に好結果を呈するに至らん、諸君、余の建議を採用せられ之を實行せられん事は余の切に望む所なり、東京市の如き大都會にて何人か向ふ三軒兩隣りに住むかも知らぬ人々には此の如き養成は最も必要なり。（東京市敎育會時報所載抄錄）

主婦の務

嘉悦孝子

主婦の務といはんより、寧ろ女子の務といつた方が廣くてよろしからうと思ひます。私の考は外でもなく、極手短かに一と口に云へば、女子の爲すべき業と云ふ事業を非常に立派に、かつ完全に行ひ遂げやうと云ふ事を、しばらくも忘れぬやうしたいので、云ひ換ふれば女子と云ふものが世になくてならぬごとく、その必要だけの眞價を持つて世に處し情の泉、愛の女神、を以て自ら任し、すべての人をたのしましめ、すべての家を面白くし、すべての社會を愉快に勇ましうする原動力となるやうにしたいと、私は思ふのです。一家をして出來得るかぎり樂しく、出來るだけ面白くさせるには、おのれ先づ愉快そのものにならねばなるまいと思ふのです。それには婦人特有の、心の狹いといふ事、些細の事

に苦勞する、など云ふ事をすべて捨て、世に天命といふ文字のある事を知り、さもなき事に心を苦しめ、いさゝかの恨みに、百年の命縮むる狹量これが所謂天命に安んぜぬから起るのですが、それらの狹量をすべて忘れて、今少し心を安らかに平かに持ってもらひたいと思ふのです、一と度しりぞけられし佛御前を、同情の涙もて汲み上げ迎ひし妓王は、これがために己の寵を失ひ、嵯峨野の奥に秋風を喞つ身となりはてしも、因あり果ある、これ天命と云ふ事を知らば何なげく事がありませうか。世に遇ふも天命、そむくも天命、幽蘭女史ではありませんが命運は天のみ亦何ぞ怨みんと、かく覺り來らば少しも苦しむ處はありますまい。世にそむける身よりは、時を得がほに、なり上りたる人の驄馬に濺ち輕車に駕し、王良造父之が前後をなすと



でも形容するやうに、かけ聲勇ましう飛び行く車の主、或はうらやましと、思ふ人もありませうが、これがおのれのさとりかたで、皮一重に髑髏のそれを包みたると覺り、棺を覆うて定まる人生の榮華を思へば我に自由の口舌あり、思ふ事云ふに憚らず、我に自由の手足あり、採るに歩むに心のまゝである事を、樂しまば、隅田堤の春の花、九段坂上の夏の夜景窮屈なる箱中よりかいま見ると、天の授くる自然の美を自由にたのしむおのれ等の趣味は、たしかに其比てなき事を、信じましたら、彼の人々の不自由不幸こそ、却てあはれむべきものでせう。

孔子もいはれて居ます、位なきを患へず、以て立つ處を患ふと。かやうに世の中の事は、心のとりかたでよ

くも惡しくもなるものですから、九尺二間の裏家でも、主婦の一言一行で樂しい家庭はきつと出來ます。赤壁における蘇氏は、只一瓢を持ちたるばかりて、仙境に入りたるやうな樂しみをとられ、其賦を讀むものまた羽化するのではなきかと疑ふも、これ則ち樂しみのとりかたにあるのです。それで私はまづ一家を出來得るだけ樂しく送りたし、それは主婦の心のとりかた一ツにあると、かく斷定を下します。

かくして之を一家にほどこし延て一村に渉り、一國に及ぼす事、さほど六ヶ敷はあるまいと思ひます。みなさんも御存じの『古公亶父故國を去りて岐山の下に移りすむ、國人皆云ふ仁者なり失ふべからずと、老を扶け幼を携え相從ふ』と德の及ぶ處誠にあきらかではありませんか。かういふ風に世を覺り來らば、何も外見をはるために日々の食膳を節して、衣服の料にあつるやうな愚かな業をするにも及びますまい。或は手車の見えをとりたさに、子女の學費を惜しむにも及びますまい。現に私の知る或る人は、奏任官のそれほど高い處でもありませんが、いつも其お召の美々しいのに驚きまして、あれ位のお身分で、あれほど立派にやらるゝとは、これこそ實に主婦の手本、一家の經濟もどんな風に、かと、家内の樣子を聞けば、それは〱非常な儉約で、姑なるかたは、あれが來てこのかた一度も食事をおいしくたべた事がないとかこたれ、下婢は例の口善惡なさに、逢ふ人ごとに夫人の吝嗇を吹聽すると云ふ有樣、これが中流夫人の家政かと、そゞろかなしくも思はれ、こんなかたにこそ割烹のごとき稽古をすゝめ、餘計な入費をかけずに、美味くたべられる法を敎へてあげたく、かつはこれでは老たる人々の嫁のかげごと云ふも無理ではないと思ひました。

又或る人は先頃もある處で、こんな事をいつて居ました。『私に二人の子供がありますが、二人とも、どうも云ふ事を聞きませず剛情で』云々と、これなども、私は決してそんな筈はないと思ふのです。親が正しき道を踏み、愛の泉より汲み出す敎訓、無邪氣の子供が受けぬやうな事は萬々ありません。尤もなさぬ中の子ども

ですと兎角親しみが薄くつて『私の實子でないから歪がんで』云々など云ふ人もよくありますが、これらも親のしむけかた、則ち愛の泉の汲み出しかた一ツで、どうにでもなるのであらうと、私は思ひます。かやうにのべ來れば、主婦は愈々一家萬政の中心となるのですから、主婦の務はなか／＼容易なものではありませんが、又よく味ひ來れば決して六ヶ敷事でもなく、兎に角自分と云ふ事を次にし勞を惜まず、家を愛すると云ふ事を深く心にしるして居ればよいのです。

そこでます／＼廣く物事を知り、世におくれぬ樣注意する事の必要が、愈々起つて來るのです。子供の小さき胸に絶えず起る疑の雲は、賢き母の明晰なる説明に煙と消えて光を得、世界の嵐と終日戰ひ、沮喪し盡したる男子の勇氣も愛らしき妻のやさしき介抱にて新らしき希望の光を得るでせう。嘗て『雲は龍に從ひ風は虎に從ひ、聖人位にありて萬物生す』と云ふ事を聞きましたが、誠にそれのごとく、賢夫人がありて初めて一家はたのしく、良人は其職を全うする事が出來るのでせう。

また熟練なる夫人の整理によつて家の富むと云ふは、つまり金錢を生かして使ひ、無駄費用を省くからの事です。世には無用な處に消費を多くし、或は單に己の慾情を滿たすためのみの物品を購求する人があり、又よくありますが非常に吝嗇なやうで、金錢其外萬の物、自分の手より出す時には必らず兎や角云ひながら譏り勝ちの人があるが、そんな人に限り、きつと火の熱は面にありて容積にあらぬ事なども知らす、下婢の手から無駄の費用がどん／＼漏るものゝあるのも氣がつかないなど、これ等が即ち金錢を生かさぬので、無駄な處に費用をかけるのでせう。それで私は思ひます、貴女がたの指輪一本づゝの價を集めたら、今以上に慈善事業の五つや六は必らず出來ませうし、又中流以下の家内でも臺所の炭薪石油の無駄に捨たる處に注意したら、これでも社會的の事業が澤山出來、西郷侯、板垣伯を俟たないで社會風俗の改良が出來はすまいか。これらを爲すのも私どもの務の一ッで、又其成効も愈々女子の手にある事を私は信じて疑はないのです。

尚一言、私の前に愛らしと申したのは、世に云ふ容色の美人ではありません。或人は云ふて居ます、『眞正の美人なるものは、容色秀麗の謂ひにあらずして、社會の人情に慣れ、粗ぼ文學技藝に達し、男女の交際愛の眞味、風流韻事、詩歌音樂の事、語り得ざるなく、通ぜざる事なく、而して後初めて眞成の美人と謂ふべし』と誠に此通りであつて、これはたしかに座右の銘として宜敷き詞と信じます。當今の世の中で上下の人々の有樣を見ますに、口でこそ容色は次として、敎育ある人をなど云ひますが、實際は容色を第一にするが一般の有樣の樣です。思ふに家庭の平和の保たれぬ原因の第一は、たしかにこれでありませう。しかし遠からず眞理が打かつて眞成の美人を求むる世紀、即ち實用の材ある夫人を要する時代か來るだらうと信じます。

（完）

素人看病法

淑徳女學校講師醫學士　佐藤恒久

（第壹）解剖學及生理學大意

凡て看病を爲す人は、先づ身體の出來工合即ち身體の構造と、身體の内部に在る諸機關の活動する原理とを能く知つて居らなければ何角に付いて不都合でありますから、極概略ではありますが一通りお話致さうと思ひます。

人の身體の出來工合を知るには即ち解剖學、又體内の諸機關の活動する原理を知るには即ち生理學に依らなければならないから、此二ツの學問の概略を極簡單にお話致しませう。

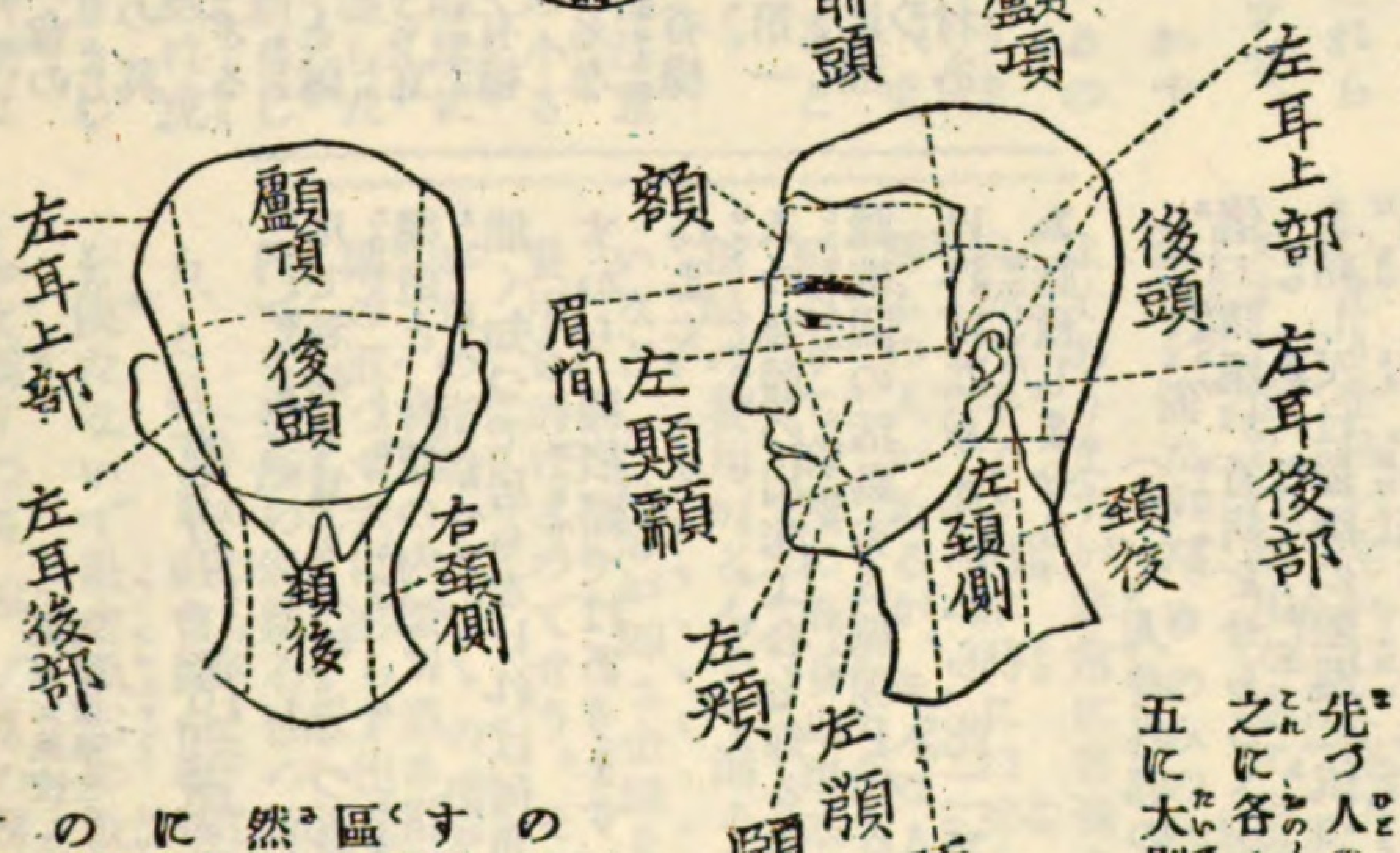
（一）人身外部の名稱

偖て諸嬢が看病をせらるゝに就いて、或は醫師に容體を話し又は醫師の差圖に依つて何か手當を爲ると云ふ場合に若も諸嬢が身體の外部即ち表面の名稱を能く御

承知でないと、例へば腹痛で醫師の診察を受けらるゝに、唯腹が痛いとばかり仰ると腹の中にも種々の部分が在るので在いますから、醫師の方では早判りが致しませぬ。其を同じ腹が痛いと云ふとしても、此方が痛むとか彼の方が斯うであると仰れば大に醫師の助けと成るのでありまして、醫師は其を能く診察致しまして、此部分は氷で冷しなさいとか、彼の部分は暖めなさいと云ふやうに容易に其手當法を敎ふる事が出來、又敎へらるゝ諸孃の方でも早判りがするやうなわけで相方共利益があるのでありますから、私は第一に所謂醫師の學問に用ゆる名稱をお話して置かうと思ひます。

第一圖





先づ人の身體を外部から見まして之に各々名稱が付けまするに之を五に大別して第一が頭首第二が頸項第三が軀幹第四が上肢第五が下肢と斯う云ふ順序になつて居るので在います。

第一の頭首と云ふのは俗に頭と云ふ所でありますが、之を又頭部、顔面の二に區別してあるので在います。然うして此頭部は如何なる所に在るかと云ふに、是は毛髪の生えて居る部分であります。故に此部分を生髪部と云ふ人も在います。此頭部を又七部に分けて前頭、顱頂、

後頭、左右の耳上部、左右の耳後部と爲てあります。
(い)前頭部は頭部の最前に在りまして毛髮の生際から頂の方に當つて凡そ掌を以て押へた位の部分を云ふのであります。
(ろ)顱頂とは前頭の後に續いて頭の一番高い所でありまして是も矢張掌の大さ位の所であります。
(は)後頭とは顱頂の又後でありまして後の髮際の稍ゝ上に骨の少し高くなつて居る所までを謂ひます。
(に)左右耳上部とは顱頂の左右で耳迄の間を云ふのであります。
(ほ)左右耳後部とは後頭の左右であります。
それから顔面と云ふのは毛髮の生へて居らない所即ち俗に顔と云ふ部分であります。之を詳細にお話すると上は髮の生際から下は顎まで、左右は耳までの間を云ふのであります。此顔面を又九分して額、眉間、左右の顳顬、左右の頰、頤、左右の顎と爲てあります
(い)額とは髮の生際から眉毛までの間を云ふのであります。
(ろ)眉間とは眉と眉との間の所を云ふのであります。
(は)左右の顳顬とは左右の眼の外側から耳迄の間を云ふのでありまして、俗にてめがみと云ふ所であります。
(に)左右の頰とは眼の下の所で鼻から耳までの間を云ふのであります。
(ほ)頤とは口の下で骨の突出して居る所であります。
(へ)左右の顎とは頤の左右で耳の下の所であります
先づ頭首の方は斯う云ふ樣に定めてあります。
第二頸項是は狹い所でありますから、從つて名の付所も少く之を四に分けて頸前、頸後、左右頸側と爲てあります。
(い)頸前とは俗に喉と云ふ所でありまして、頤から胸の骨のある所までの間を云ふのであります。其頸前の中央に瘤の樣に突出して居る所があります之を結喉と云ひ又此結喉の下の窪むだ所を頸窩と名けてあります。
(ろ)頸後とは後頭の下所でありまして上は後頭の突出した所から下は脊骨までの間と定めてあります。此

頸後の部内で後頭の下に當つて毛髪の生へて居る所で窪むだ所を項窩と申します。

(は)左右の頸側、是は耳の下の所と思へば間違ひはありませぬ。一躰頸と云ふものは頭首と軀幹とを結び付けて居る所でありまして種々の交通機關を備へて居るので在います。殊に此頸側には大動脈其他最も必要なる交通機關が隱れて居りますから極めて大切な所であります。却て頸後などは然程に必要ではありませぬ。

第三軀幹　は全身中で一番大い部分で俗に胴と申す所であります。之を大別して胸廓、腹部の二部と爲てあります。

胸廓とは軀幹の上の部分でありまして其周圍は骨と軟部即ち筋肉と皮膚とを以て包むで居り恰も竹の筒の樣なものであります。然うして其中に種々の臟腑が在るので在います。それから腹部は後には骨がありますけれども前の方は筋肉皮膚ばかりで成つて居ります。

(い)胸廓　の前面を胸と申します。之を又五に區別して胸骨部、左右の鎖骨下部、左右の乳房部と、爲てあります。

(甲)胸骨部とは胸骨の在る所でありまして胸の中央即ち上は頸窩の下の所から下は胸骨の尖端俗に心窩と云ふ所までの間であります。其胸骨は一枚の骨でありまして其左右に肋骨が在るので在います。

(乙)左右鎖骨下部とは胸骨部の上の部分の左右を云ふのでありまして、上は頸の方に屬して居ります。

(丙)左右の乳房部とは左右の腋下より乳房の在る間を云ふのであります。

(ろ)胸廓の後面を脊と申しますが之も亦七つに區別して胛間、左右の肩、左右の胛部、左右の胛下と爲てあります。

(甲)胛間とは脊の中央の部分でありまして、上は後頸から下は胸廓の下部の直後に當る所までの間を云ふのであります。然うして此部分は少しく凹むで居る所で其中央は小骨が澤山固つて居るやうに見えますのは脊骨であります。

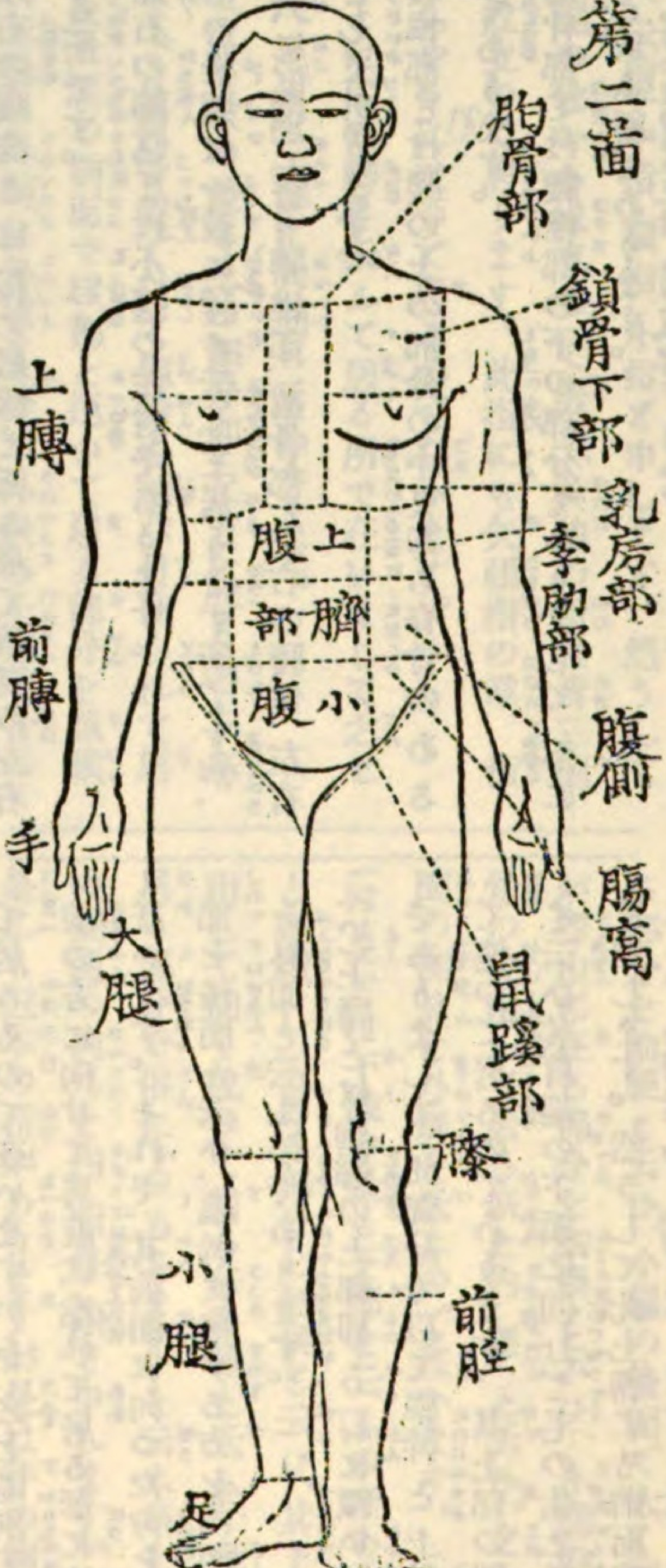
(乙)左右の肩とは胛間の最も上の部分を云ふのであ

ります。

(丙)左右の胛部とは肩胛骨所謂貝殻骨の在る部分であります。

(丁)左右の胛下とは胛部の下を云ひます。

(は)胸廓の左右の側面で胸と脊との間に狭長い部分が残る、之を脇といひます。胸廓の事は先づ是だけであります。それから腹部とは即ち胸廓の下の部分でありまして、是と矢張前面後面に區別してあります。



(い)腹部の前面即ち腹、是は上腹、臍部、小腹、左右の季肋部、左右の腹側、左右の腸窩と九々區別してあります。

(甲)上腹とは俗に胸先と云ふ所でありまして、上は胸骨の尖端より下は臍の所までを云ふのでありますが、是は極機械的に區別したものでありまして、兎に角此腹膓を平等に三分して其最上部を上腹と云ふのであります。然うして左右の堺は乳から割り出したものであります。此上腹部の一番上部で凹むだ所があります。之を心窩と申します。

(て)臍部とは上腹の下部でありまして、俗に臍と云ふ所であります。然うして其下は

(丙)小腹になります。

(丁)左右の季肋部とは上腹の左右の所であります。

(戊)左右の腹側とは俗に脇腹と云ふ所で臍部の左右に在る所です。

(己)左右の腸窩とは小腹の左右であります。

(ろ)腹廓の後面は一般に腰と云ふて居ります所ですが、是を又六に區別して腰椎部、薦骨部、左右の腰側、左右の臀、としてあります。

(甲)腰椎部とは腰の上の部分の中央即ち脊骨のある部分であります。

(乙)薦骨部とは腰椎部の下の部分でありまして、俗に帶下と云ふ所であります。

(丙)左右の腰側、是は腰推部の左右であります。

(丁)左右の臀とは薦骨部の左右に當る所で軟く突出して居る所であります。

骨盤部とは腰と腹その下の部分だけをぐるりと取り巻いて居る堅い部分を云ふのであります。

第四、上肢とは俗に腕と云ふ所であります。是は左右共指頭から肩迄の間で在います。之を三に區別して上膊、前膊、手、としてあります。此上肢と云ふものは拗れて居るもので在いますから、之を區別するのは、手掌を前の方に向けて眞直に垂れて居る形に依つて致すので在います。それで、其前面に向つた方を前面と云ひ、後部を後面と云ひ、軀幹に接する方を內面と云ひ、其反對を外面と云ふのであります。

(い)上膊とは胸廓の上部即ち肩に續いて外部を云ふのでありまして、此部分で以て軀幹と上肢とが結び付いて連つて居るのであります。其上部の圓き部分を肩頭と云ひ其肩端の下面に凹むで毛の生えて居る所を腋窩と申します。然うして此上膊にも前面後面と云ふやうになつて居るので在います。

(ろ)前膊とは上膊の下部でありまして是も上膊と同じく前面後面の區別があります。此上膊と前膊の境で曲る所を肘と云ひ、肘の前面を尺澤と申します。此前

膊と連つて下の部分で平たくなつて居る部分を腕と云ふので在います。

(は)手とは上肢の一番下部で在います是は手掌部、手背部と區別してありまして、是には五本の指が在います。即ち拇指、示指、中指、環指、小指と申します。然うして拇指は二個の骨から成立つて居り、其他の指は皆三個の骨から成立つて居ります。此指にも矢張指の掌、指の甲と云ふやうになつて居るので在います。

第五下肢とは俗に脚と云ふて居る所で在いまして之を大腿、小俗、足、の三部に大別してあります。

(い)大腿とは下肢の最も上の部分即ち俗に股と云ふ所で在います。是は骨盤で以て軀幹と結び付けられて居ります。此大腿の前面で腹部と連つて居る部分を鼠蹊部と云ひ、大腿の外面を外股と云ひ、外股の上部で骨の突出した所を腰側と云ひ、又大腿の内面を内股と云ひ、又大腿の後面で臀部と連つて居る部分で皺の寄つて居る所を臀皺と申します。

(ろ)小腿とは大腿の下部でありまして下は踝迄の間を云ふので在います。此小腿と大腿と結び付けられて居る所で自由に屈伸し得る部分を膝と申します。膝の前面の高くなつて居る部分を膝蓋と云ひ、膝の後の凹むだ所を膝膕と云ひ、小腿の前面で骨の堅く成つて居る部分を前脛と云ひ、小腿の後面で太く圓くなつて肉が澤山に在る部分を腓腸と云ひ、小腿の下部の内面で骨の突出して居る所を内踝と云ひ、之と相對して外面の部分を外踝と云ふので在います。

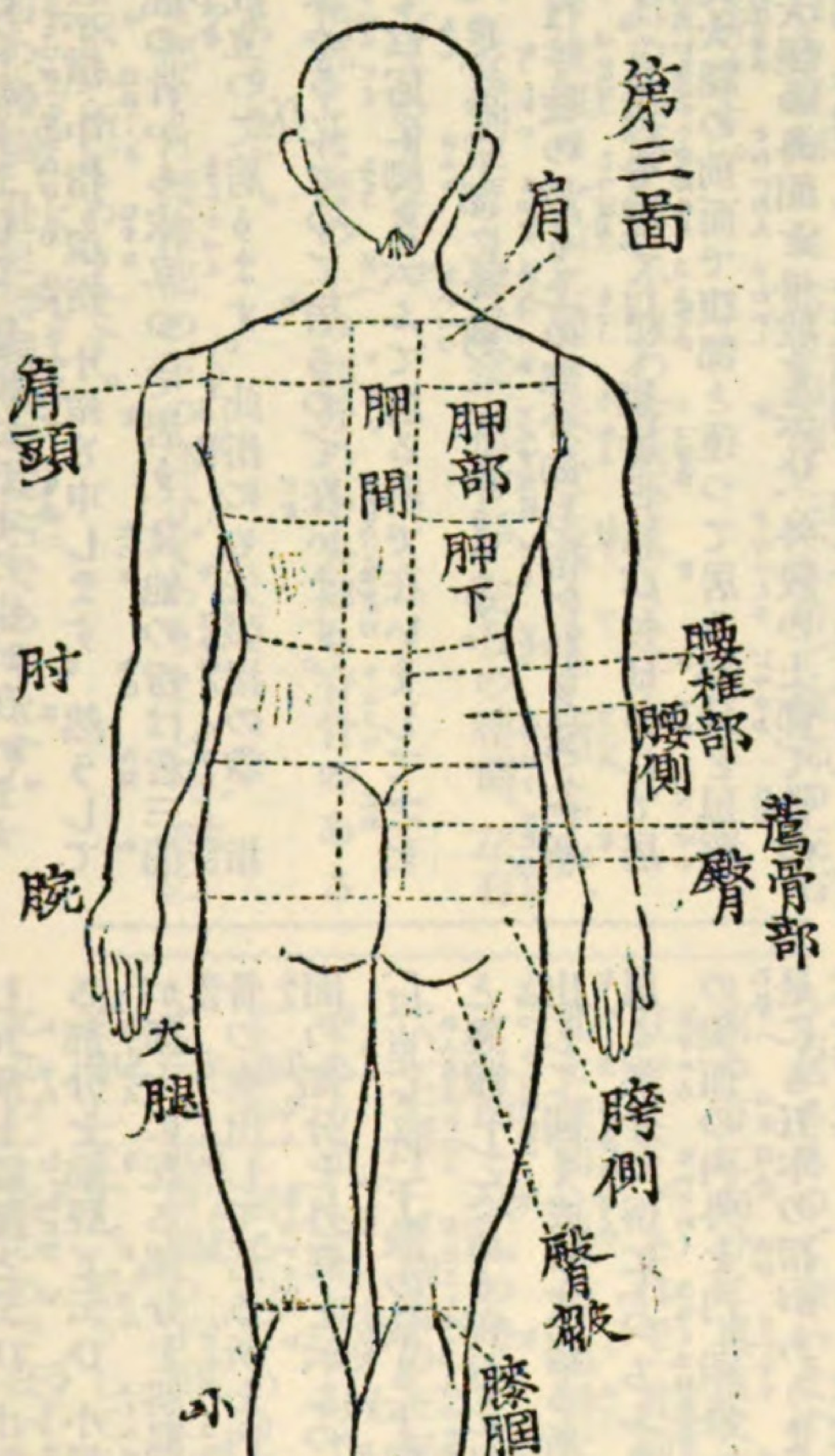
(は)足とは下肢の最も下部を云ふのでありまして小腿と連續して居る部分を足根と云ひ、其下部で少しく突出して圓く成つて居る所を踵と云ひ、足蹠の一番凹で居る部分で俗に「つちふまず」と云ふ所を蹠窩と云ひ足の側面の内外を内蹠外蹠と申します。御承知の通り是にも五本の指がありますが是は手の指の如くに一々名稱は在いませぬ。唯拇指を大指と云ひますから其順に第一第二第三第四第五指と云ふやうに成つて居ります。

是迄私は人體の外面に就いてお話致しましたが是か

らは其外面及内面を掩ふて居る所の被膜に就いてお話を致しませう

第二　被膜

人の身體は恰も竹の筒の様なもので在います。彼の竹の筒に就いてお話致しますれば、外部は青竹でありますが其内部には薄い甘皮が在ります。人體も其通りで外面には外面の皮があつて内面には別の皮が在り之を總稱して被膜といひます。此被膜の事を簡單にお話すれば二種に別れて居ります。一を皮膚と云ひ、一を粘膜と申します。



第三圖

皮膚とは竹の筒て云へば其青い部分でありますから、人體の外面を被包して居るもので在りまして之には毛が生えて居り、又場所に依りては爪も生えて居ります。然うして皮膚は全體同じ厚さのものではありませぬ。所に依つて厚い薄いの差が在います。一般に薄い所は眼の周圍でありまして最も厚い所は脊の部分であります。此皮膚の下には脂肪がありまして其下には筋肉がありますが此筋肉と脂肪に就いては此次に申し述べます然うして皮膚から

は始終皮脂と云ふ脂が吹き出で居ります。其皮脂が薄く皮の様に成つて居て之を洗ひますと、直に除けると云ふやうに成つて居ります。一躰皮膚は啻に人體の外面を被包して之を保護して居るばかりで無く、前申したやうに皮脂も分泌し、汗も出すと云ふ様な役目があり、又僅少の呼吸作用をも爲すと云ふ働きを司つて居るので在います。

粘膜とは人體の内面を包むで居る所のもので在いまして、竹の筒の甘皮に相當する是は名の如く粘液と云ふ液躰を出す性質のあるものですから、粘膜の表面は終始水氣を帶びて居り、且つ皮膚に比ぶれば、餘程柔軟で最も疵つき易いのでありまして、其色は赤く下に脂肪を保つて居りませぬ。例へば口腔、鼻の孔、胃の中或は腸の中にその如きは皆粘膜を以て包むで居るので在います。又場所に依つては粘膜と皮膚とが自然に移り往くやうに成つて居る所が在います。例へば唇、耳の中其他體の中で孔の在る所には必ず斯う云ふ様に成つて居るので在います。

前にもお話致した通り解剖學とは身體の構造を知る學問であり、生理學は身體中の機關の活動を說いたものでありまんから、之を一寸お話爲た位では勿論詳細には理解は出來ますまいと思ひますけれども先づ此構造を知るには體を切て見るのが一番了解し易いと思ひますが然う云ふ事は諸嬢に觀せる場合も無いので在いますから、是から諸嬢が多少解剖に就いて御覽に成る機會は什麽云ふ場合に在るかと云ふに、唯家庭で働く時てあります。例へば鳥の料理を爲さる、時に、少し注意して自身で切て御覽になつたならば、其構造は分るものて在います。勿論鳥と人とは其構造が違つては居りますけれとも、全く異つて居る樣な事は在いませぬ。

割烹實習

女子職業學校割烹科教員 井上善兵衛講述
岡野をりえ筆記

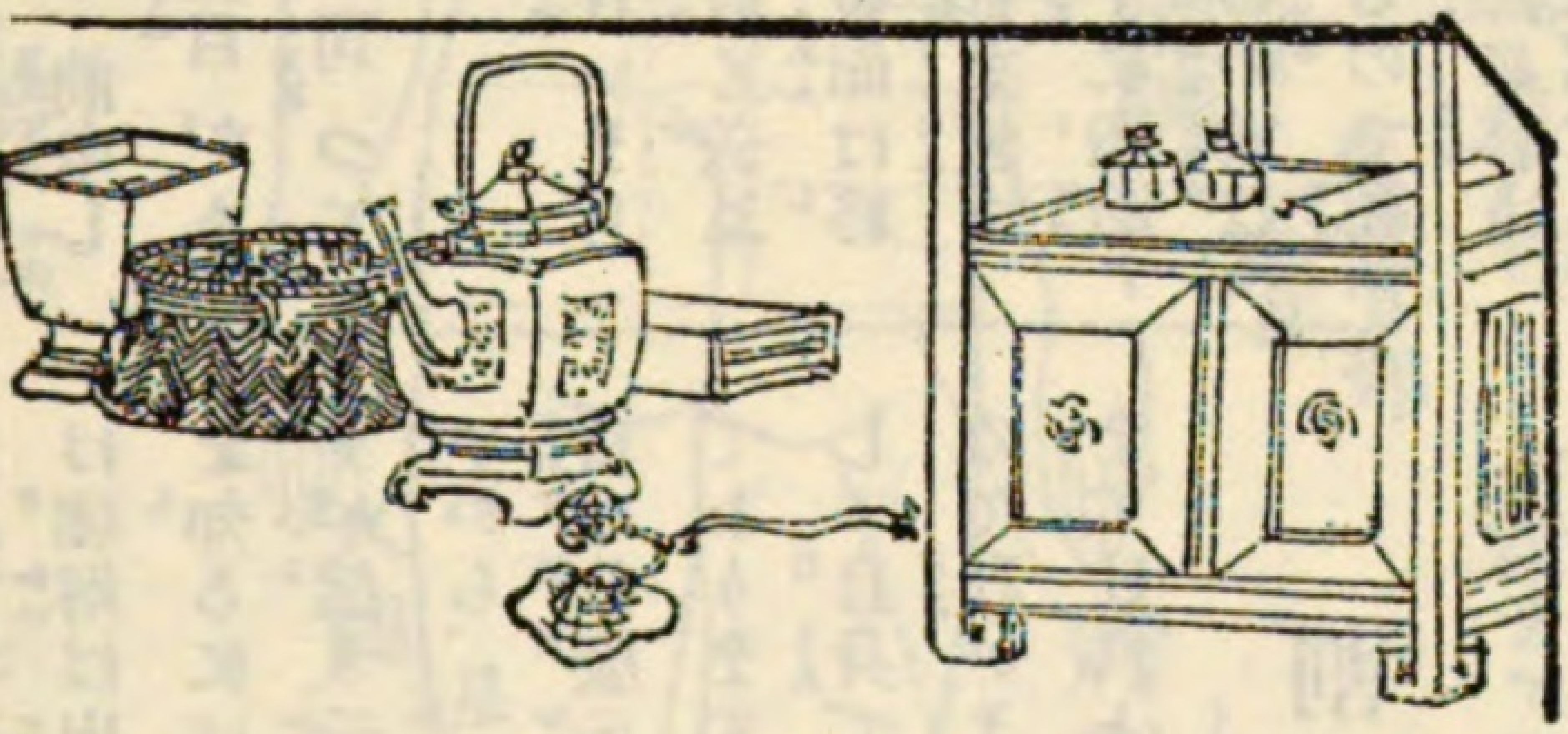
▲メンチボール

和洋折衷でござゐます。まづ牛肉をいつもの通り叩き、豚（牛肉一斤につき豚半斤の割合）は茹でてこれも

前牛肉と共にたゝき、鹽一握を加へて、よく摺り、これも肉汁少量と味淋醤油各少量を加へ、その一つまみを燒て肉味を試食し、風味よろしければ、肉は團子にまるめ、これをフライ鍋に「ヘット」をひきた中へころがし、兩面狐色になるまで燒く。この肉團子は大根など煮た時に加へて煮てもよく、又「シチウ」の材料に用ゐてもよく、また大形饅頭位にまるめ、これはかりソースをかけて食してもよろしい。

▲葛素麵

葛素麵は製法が種々わります、錬加減が頗るむづかしい、試みていつもうまくゆかぬ勝ちであるが、一番容易に出來るのは、まづ久助葛を椀二杯ばかり、これへ布海苔を煮て同量の椀で一杯加へてよく錬る、椀の糸尻へ指の這入るほどの穴を明け其中へ錬つた葛を入れ、穴より垂下るやうにして置く』前以て別に鍋に湯を煮立て、鍋より一尺程上へ椀をあげて、そろ〱穴から葛を垂下すると自由に長く引ける』鍋の側へは鉢に水を湛へたのを置いて、一方鍋の葛の湯出つて浮上つたのをすくひ上げてこの水の中へとる。夫から二三度水を取替へ、水嚢の底へでもあけて置き、客に侑める時、水に冷し、砂糖なり、蜜なり、かければよろしい、これが簡易の製法であります▲又一方は葛の三分一ばかりを半錬にして、あとの三分の二のなかへ混交し、これもよくこねて、手で捧って上から落して見れば、糸の樣につながります、もしそれが鍋まで切れずにつゞきましたら、それでズン〱と引いてよろしい。然しこれは葛の足の加減が餘程むづかしい、布海苔も椀も用ゐず、ほんの手加減一つでうまくゆくのです。



▲道明寺卷

道明寺椀二杯につき、あく引砂糖の熱いのを四杯と鹽少量を入れ、杓子でよく搔き回し、一寸火へかけ、卸し

て鍋の蓋をして五分ばかり置き、掻きまはして又蓋をして置くと柔らかになる、それを板の上に濡布巾を敷き、鍋の道命寺をこれへとつて太さ一寸位に巻き、布巾をとつて小口から厚さ五分位に切る、これは精進の口取りに用ふ。又これに青きな粉をつけると、一寸茶菓子にもなる。

▲玉子の肉詰

水から玉子を鍋へ入れ、煮立つまで度々掻き回はす、こうするのは丁度眞中へ黄身を据へるためです。大概煮立ましてから十五分間程て一個出して皮をむいて試みると、黄身までよく湯が通つて居たら、据りをよくするため兩端を少し切り、眞中から二ッに切る、中の黄身を抜き出し、この黄身は裏漉にかける、又別に牛肉をたゝき擂鉢で擂り、又玉葱を細かにきざみ、ベタなりヘットなりでいため、これをまへの擂牛肉のなかへ入れ、鹽と胡椒で味をつけ、この擂肉を白味の半輪の中へ少し山になるほど詰め、この肉の上へまへの裏漉にかけた黄身を充分にふりかけて、テンピの中へ入れて燒く。もしテンピのない時は、蒸籠へ入れて蒸してもよろしい。出來あがつたらこればかり皿へつけるとも、又は口取の前盛りにしてもよろしい。

▲栗の福目煮

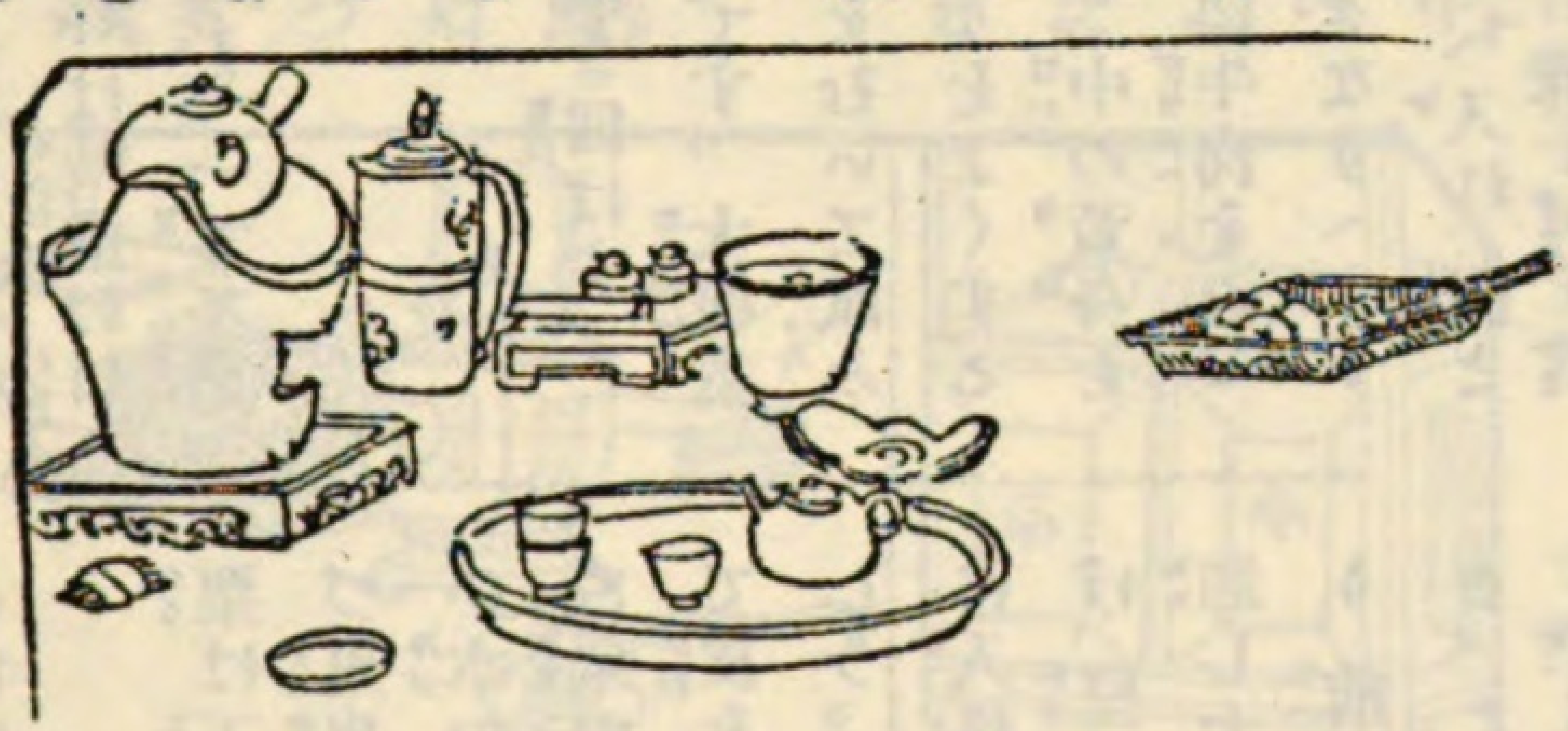
栗は丁度時節ものであります。福目をつくるには、まづ鬼皮を庖丁でむき、澁皮を薄刃で奇麗にとり、水で洗ひ水から直に鍋へ入れて煮る(東京では日本橋へゆくと栗の皮のむいたのがあり、わざ〳〵指さきをいためて皮をむくまでもない)。鍋の水は栗のかぶる程がよろしう。燒明礬(栗一升につき親指大のもの一個)も同時に入れる。夫より大概十五分間位も立ちて金杓子であげ、堅いか弱かを試み、もし弱らかになつたら其儘鍋を卸し十分位むらして置く、『又別に鍋にあく引砂糖を作り、前の栗の湯をこぼし、これへあく引砂糖を入れて煮る。これもなるたけ汁の多い方がよろしい。鹽五匁程を入れ、十分ほど經て、白味淋なら一合五勺入れる、もし赤味淋なら五勺でよろしい、これでやはらかになるまで煮あげ、卸してそのまゝその汁へふくませて置

き、つかふ時は汁から出して盛る、

▲夜時の青隱元

青隱元を二つにへぎ、種をとり、細引いて、少しの間鹽にからんで置く、それから鍋へ湯をよく煮立て、前の細引いた隱元を水で洗ひ、堅くしぼつて湯の中へ入れ、さつと茹でます。此時火はなるべくつよい方がよろしい、生ゆでのまゝ、わけて冷るまで團扇であふぐ、さめたら別の鍋へ生酒少量、鹽少量と砂糖を入れ、一寸その汁を煮つめ、其中へ入れてざつとかきまはし、直に笊へとり、あとの汁をよく煮つめその上にかけてさます、こうすれば色が青くあがり、拜見がよろしい。ほんの付け合せのもので、これをまへの福目栗のうへにばら／＼とふりまくと美事である、又栗と栗との間にはさんでとろけぬやうにするのもよろしい。

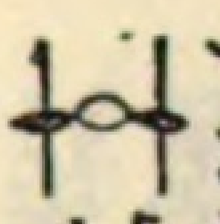
▲蓮根の引茶金團



蓮根の皮をむき、亂切なり、又しのはすにして水へはなす、別に鍋へ湯を煮立て、其中へこれを入れて湯煮をする、その時酢三勺程加へる、これは色を白くあげるためです、湯煮をした一旦笊へあげ、鍋へ入れあく引砂糖をかぶるほど入れ、鹽十匁程加へ、蓮根に味のつくまで煮る、夫より味淋一合程入れて煮る、』別に鍋に薩摩芋三百目を湯煮とし裏漉にかけ、これを蓮の中へ入れて、十分程鍋かへしをしながら煮る、それより引茶三錢（大蓮根三本につき）を湯でどろ／＼に解き、これを入れて又十分ほど煉る丁度澹色の引茶キントンが出來る、栗がないとき口取りにつかつてよろしい。

▲椀種（火とり鯊、鳥團子、皮茄子）

▲火取鯊は鯊を三枚に卸し、一寸鹽をふり、串にさします、串にさすには、右串は皮に面してさしたら、そこで身をひとつねぢッて左の串をさす、



上圖の如くてある、これを燒きくづさないための

注意です、身の方から焼きはじめて、一寸焦げ目がついたる裏をかへす、その時串をひねッて身ばなれたやうにまはして置く。こうしないと串が焼きついて身のはなれがはるい。これに限らず何魚を焼くときも串をまはすのも忘れてはいけません。焼けたら椀に盛る、尤も一寸煮汁であたゝめて盛ッてもよろしい。▲鳥團子は鳥をたゝき、擂鉢に入れて鹽を加へて擂る、擂れたら味淋少量を加へて味をつけ、裏漉にかけて、それを團子の大粒にまるめ、板の上へ並べて置く、別に鍋へ二杯煮汁へ鹽少量を加へ、その中へ鳥の團子を入れる(入るときは團子の上から板へ水へかけて、金串で拂へば團子は鍋へすべりて落ちて板へくつゝく事なし)。鍋へ入れて煮て浮上る度に掬ひあげて椀へ盛りこむまでは、汁へつけて置き若汁かひへたら、汁と共に一寸あたゝめ、鳥をすくッて盛りこむ▲皮茄子は茄子の黒皮を極うすくむき、四ッ割にして、中の心を庖刀ですくつてとる、すると皮と心との丁度間のところ丈のこる、これを水へつけて置く。鍋へ湯を煮立て、酢を少し落し、その煮立たなかへ、まへの水へとつた茄子を入れ、つよい火で湯のとほるまで茹で。叉水へとつて置、これを煮汁と鹽と酒とでさつと味を加へ、盛るまではその汁の中へひたして置く。▲さてこの三種揃つたとき、鱉三切れ、鳥團子二個、茄子三片ぐらゐの割に椀へ盛り、別のよい煮汁をタップリ盛つて侑める、汁は鹽と醤油で風味をつける、この汁加減は舌の鑑賞力にまかすのですが一滴の醤油が多くッても直ぐ風味がちがふ、むつかしいものです。

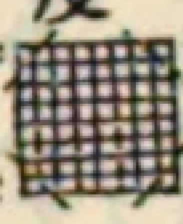
▲青柚干

青柚干は白味噌を擂り、椀一杯に付、米粉一杯、白玉一杯半、葛粉一杯、砂糖一杯の割合で練る、柚子の皮の青き部分を卸金にて卸す、但し青味のつくほど柚子ばかり擂り入れゝば苦味がつきすぎるゆへ「よせ菜」といふものを混和する、よせ菜は小松菜でもほうれん草でも葉ばかり摘み、鹽ひとつかみを入れ生のまゝよく擂り、擂れあかつた時に、適度に水を入れ水嚢でこす、こした汁は鍋へ入れ、火にかけて煮立てると擂菜は上へ浮き

あがるゆへ、そのうきあがつたのを搾(布巾を敷く)へあげると、湯はきれて青味ばかり布巾へ殘る、これをしぼりて卸し柚子とまぜ、上記のものと捏ね合はす、練りあがつたとき大きな饅頭ほどにつくね、蒸籠へ入れ二十五分間ほど蒸す、蒸しあがつたときは、あついまゝ擂鉢へ入れよく搗く、その時玉子の黄身ばかり二個搗きまぜ、これを板の上へ竹の皮をのせし上へとり、厚五分巾一寸五分位にのして、竹の皮ごと再び蒸籠へ入れ二十分間程蒸す、蒸せたら凡そ羊羹ほどに切り、口取前盛又は茶菓子に用ゐる。

〔注意〕「よせ菜」はすべて青味をつけるに用ゐ、木の芽合などにも木の芽の走りにて少ないときは、よせ菜へ古山椒の實をすりこみ代用する。

▲菊豆腐

菊豆腐を作るには、生の豆腐を四角に切り、四すみをとつてのち、賽の目に庖丁を入れる、形は丁度とす、但し厚さ一寸とすれば、六分庖丁を入れ、四分下をのこす、直に水の中へとる、』別に鍋へ煮出し五合位に鹽五勺、醬油五勺位を加へ、これへまへの豆腐を入れ火へかける、下からクツ／＼煮揚るを度に直に卸す、』又別に預め汁を作り、置き椀の中へ海苔を布き、これへまへの菊豆腐をのせ、その上へは青柚の皮を丸くへぎたのを載せ、菊の心のやうに見せ、まへの汁をこれへかけてあたゝかきところを侑める。

▲肉饅頭

是は「ハッシ」(原名)といふのです、先づ馬鈴薯を湯煮をする(鹽少々を加へて)、これを裏漉にかける、それへバタ食匙一杯を加へ捏ねて置く。』別に牛肉を敲き、鍋へ入れ味淋四勺、醬油七勺、肉汁三勺(以上肉一斤半につきての割合)を入れ、火にかけ狐色になるを度に卸し、放冷して、侑める人數丈に分けて置き』又まへの馬鈴薯を同樣わけて置き』さて椀の蓋へ米利堅粉を敷き、その中へ馬鈴薯の一分をとり、さらに肉の一分を右薯の中へ入れて包み、饅頭の如くにまるめ、板の上にも米利堅粉をふり、これへ饅頭をのせ、雞卵の黄身を刷毛にて塗り、そのうへに麵麭粉をふりかけ、テンパンの中へ入

れ、テンピにかけて焼く、パン粉の狐色になつたを度に皿へとりて侑める。

▲玉葱の甘煮

玉葱を二ッ割に切り、油にていため、肉汁なり、鰹魚汁なりを入れ、味淋、砂糖、醤油少許を入れ、弱らかになるまで煮る、煮あがつたとき鉢へ盛り、鳥そぼろをかけるか、又は附合せてもよし、適宜に侑める、

鳥ソボには鳥を細かに敲き、これも煮汁又は肉汁を入れ、味淋、醤油少許を加へ、煮立てぬまへより肉を入れかきまはし、火へかけ狐色になゆるを度に卸すこれが鳥ソボにて、金杓子にて掬ひ、まへを玉葱の取合はせる。

▲肉天プラ

これは牛肉を初めに大片にきり、塩と胡椒をふりてテンピにて蒸し焼きにする、焼けたとき取出しさまして、うすく刺身の様にきつて置く。』別に胡蘿蔔を短冊に、三ッ葉一寸位にきつて置く。』別に丼に米利堅粉に鶏卵（五合位のときは鶏卵白身七個）を入れ、堅いときは水を加へて伸し、どろ／＼にして、さてまへの肉とニンヂンと三ッ葉を椀の蓋へとり、これへ右米利堅粉を金杓子一杯入れ、かきまはし、フライパンヘットを溶解し煮立つた中へ入れて揚げる。別に殘つた黄身で米利堅粉五勺をとき、同様揚るときは、これは黄色になり、まへの白色と相並べて黄色二種となり、盛りあげて見榮よし。これは洋醤にて侑める。

▲魚のそばむし

鯛でも鰆でも比目魚でも、長二寸位の切身にして、その身の厚いところは庖丁を入れ切りひらき、これを醤油一杯へ生酒一杯を加へたなかへ漬け置き、そこで又竹の皮を魚よりはやゝ大きく切り、この皮の上へまへの魚の切身を載せ、蒸籠へ入れ、沸騰の湯の上へ載せ蒸す、火の通つたとき卸して蕎麥（特に蕎麥屋へ注文し茶蕎麥、又は細打蕎麥にすればよい、並のでもよろし）の盛一つの半分を魚の上へ載せて、再び蕎麥のあたゝまるまで蒸す、客へ侑めるのは竹の皮を除き皿へ盛り、揉み海苔と晒葱を添へ、別に蕎麥汁をつくりかけて、煖か

きところを侑める。

〔注意〕▲もみ海苔は二枚かさね兩面よりよくあぶり、それを乾いた布巾のなかへいれ揉む、▲晒葱は白いところだけ端から細かにきざみ、布巾へつゝみ、チベリのとれるまで水にて洗ッて皿へあける。▲蕎麥汁の製方は煮汁二杯に醬油一杯、味淋一杯を加へ、別に又鰹節をかき入れて煮詰める。それにてよろしい。

室内裝飾

近藤嘉三

◎裝飾と氣候

室内の裝飾は四季の移り變りに由つて樣々に變化しなくてはならぬ。春夏秋冬いつも〳〵同じ樣な裝飾では決して神心慰樂の目的を達せらるゝものではない、春は春らしく秋は秋らしくするのが肝要である、然しそれは夏は暑そうな飾を爲よ冬は寒そうな飾りを爲よと申すのでは無い。外國の狀況に應じて心の趣く所を趁ふのであつて、夏は涼しそうに冬は暖かそうにするのである、一寸見ると天地間のもの冬寒そうに夏暑そうに成る樣に思はるゝが、決して然樣ではない、冬枯れ果てた野邊の草原には葭でも薄でも何れもその根本はまつ青に芽ぐんで居る、又夏に成ればどんな木草でも葉末まで一盃に水氣を含むで涼しそうな水分は天地の間に充ち〳〵て居る、それで天地間の森羅萬象何れも時候とは反對の狀勢を以て活動して居る、人間の心が夏に爲つて涼しいことを好み、冬に爲つて暖かいのを好むのも皆この天則に漏れぬのである、その心に適ふ樣に爲るのが室内裝飾の上では最も大切な注意で屋外では光線の直射で眼の眩みそうな土用の日盛りでも、床の間に水鳥か何かの淡然とした懸物でも掛けて銀製の水盤に河骨に唐葦でも挿み坐敷の境には簾位を垂れて籐椅子の一二脚も併べて居て御覧なさい、その涼しそうな樣子は夏なんぞ無い世界へでも參つた樣である。又北風のヒユー〳〵と吹き荒んで耳や頰の打切れる樣な寒中でも床の間に書でも畫でも敷厚りとした表裝の

幅を掛けて寒牡丹の一輪か二輪を黒ずんだ銅瓶に挿むで坐敷中一はいに花絨氈を敷き詰め金屏風でも立て麗はしく裝飾をすれば、それは又寒さも何も忘れて仕舞て少しく睡く爲る位である。それは皆裝飾の器物調度の色や形や時候に應じて濃淡を斟酌するからの事てある、寒い時に白い色や、暑い時に黒い色のものを配合してはどうしても人の心に叶ふものでは無い、芭蕉が

金屏の松の古びや冬籠り

と申す發句たつた十七字であるが、ようこそ云ひ盡した、眞に室內裝飾上の金言である、金屏風、老松の畫、如何にも冬籠の老翁が火桶を擁して暖かそうに誹諧の玄旨を樂んで居る樣が目に見る、それが若し銀屏風に竹の畫でも描てあつたるとすればどうであろふか、夏なればとも角、ぞつとして風でも引きそうである。

◉風土の關係

それて形なり色なりの配合が時候と大なる關係を持つて居ることは只今申す通りてあるが、それ計りで無く風土とも關係を持ち場合とも關係を持つ、器物と器物との關係の大切なる事は勿論である即ち九州の端や、琉球邊では器物に就て云へば團扇も裝飾の一つであれば籐椅子も裝飾上の立物となる、盆栽の如きも、蘭科植物の花や棕櫚竹のつめた物なども大切である、芭蕉も椰子樹も土地相應のもの必要する又青森や北海道あたりでは同し敷物でも窓掛でも色合の濃ひ地の厚ひ織物が好く熊の皮の椅子掛も、飾暖爐も裝飾の一つとして用ひねばならぬ場合に就ては婚禮には婚禮らしき調度を要する可成色も形も麗はしひ芽出度きものが好ひ、餞別や離別の席上には織物を掛くにも花を一瓶挿むにも似合はしひものを撰ばねばならぬと云ふ樣なものてある。

日本では時々座敷の掛物も屏風も取り代ふれば棚や飾机の類まで取代ふるがこれは氣候の變化の多い國であるから自然にその感化が人心に影響して變化の必要を見るのであるそれは我國計りては無ひ以太利でも何所でも島國では時候の變化が多ひからどうしてもそうたるのである又變化せねばならぬのであろふ。

◉淡雅なる裝飾と濃艶なる裝飾

概して申さば歐州風の裝飾は濃厚的で日本風の裝飾は清素で淡然りとして居る、それは隨分眞の書院飾などは中々艶麗で西洋流の濃厚的にも負けぬ位である、が先づ日本風の裝飾の特長は清素淡雅なる方に優れて居、歐風のは濃妍艶美なるが長所である、これは必竟前章に述べたる樣な風土氣候の關係もその原因の一であろふか。又其外にも當時の文物や宗敎なぞも原因となるので日本でも王朝時代の裝飾は優美で艶麗で、そして氣品も非常に高ひ、鎌倉時代はどうかと申せば簡古で清趣で一寸申すならば澁ひ方である、それは全くその時代の文物宗敎政治などの關係の爲めに一種の變化の來たのであるが鎌倉時代の如きは尤も宗敎上の感化を受けた事が多ひので所謂禪林の清規なるものが居室裝飾の上にまで侵入して來たのてある。

そこでは裝飾は淡雅な方が面白ひか濃厚なのが好ひかと申すに濃厚なものは濃厚なる所に風情があり淡雅なるものは淡雅なる所に趣味があつて、それ〳〵に面白味を具へて居る、譬て云ふなれば牡丹や海棠は花の形も色も奇麗で派手やかであるが、その派手で奇麗な所が彼れの見所で又寒菊や梅の樣なものなどは淡然りとして清らかなる所に云ふにも云へぬ氣品の高ひ所がある、それてその妙趣はそのもの〳〵に就て味はねばならぬ、御厨子棚や黑棚を置いて文庫や手箱や香道具の樣な麗はしひ調度を飾つて、狩野家か土佐の畫幅を掛けて、琵琶など迄飾つた御殿風も面白ひ丁度朝日に匂山櫻かなとでも申したい樣な風情、それから消息か短册を更紗表裝に竹軸と云ふ澁ひ仕立にして煤竹の手籠に寒牡丹一輪、傍への春日卓の上には一二卷の經卷でも載せてあると云ふ極々侘びしひ隱士山を出るとても申しそうな裝飾も又中々面白ひ、して見れば何れが好ひの何れが惡ひのと申すことは出來ない、が日本風の特長は何れかと云へば清素淡雅な方に優つて居る樣に思はるゝ、

◉應接間の裝飾

巴里や倫敦の流行社會では追々日本風の器物を以て居

室を装飾することが行はれて、昨年の三月佛國のヘケテンサ、イラ宴會の節には山中商會や加藤庄藏などの出品に係る日本器物計りで宴會室を装飾し茶の湯や花挿や能樂なとまでして皇族貴族紳士を招待したと申すことであるが、今試に日本器物を多く加味して應接所を装飾して見よう。

此の應接の間、方四間西洋風の建築にして二方窓一方は壁一方は他の室に通ずる扉を有す。

窓は外面に本邦風の翠簾を懸け内面に生絹に散り紅葉を織り出してたるを懸け左右に黄金色の釣を眞紅の紐にて結びて飾る敷物は絹織境段通の紺青に紅黄の紅葉を染め出したるを敷く壁は空色純子に櫻花の織出したるを以て張る。

一方の壁に沿ひて御厨子棚及び黒棚を飾り、香道具文房具を配列し、一方の壁に沿ひては朱檀製長方形高卓を置きて、上に盆栽(菊)と盆石を桂盆に打て飾る、中央に圓卓を置きて錦の卓袱を掛け上に煙草の具を飾る、椅子數脚黒塗花紅葉の散し模様の蒔繪あるものを位置よく配置す、壁上には土佐か狩野五幅一對又は三幅一對の書を展す、

女子生涯の發程

英國ケンブリッヂ女子師範學校長　エリサベス、ヒユース

私も三十年前は、諸子のやうに學校生徒で御座いました。三十年と云ふと實に永い年月でありますが、併し私は此年月を、決して今も忘れては居りません。昔の事を思ひ出しまして、學校生徒の時分に、何う云ふ事を考へて、何う云ふ事を感じて居つたかは、今日能く明かに思ひ出す事が出來ます。此三十年の年月の、間私は實に困難の事業に當りまして、其事の爲めに、學校の生徒と一所に住んで居た時もありました。

私が嘗て風の無い波の立ちません日に、港の邊へ行つて、二隻の船が互に往來する所を見た事があります。其内一隻の船は港を去らんとして居りまする、又一隻の船は港へ這入て來る所で御座いました。今行かうとする船は、新しい船で、新奇に造られて未だ航海を經て

居りません故に、ペンキも新しく、帆も新しく、何所も清潔で、少しも汚點の無い新しい船で御座いました。一方の沖の方から、港へ這入つて來る船は、幾度も航海を致しましたから、波や風やに遇つて、其爲にペンキも剝げて仕舞ひ、帆は彼方此所に綴接かしてあつて、甲板の元の板は存してゐない樣な船でありました。此時私は一方の船即ち古い船が、新しい船に注意を與へてやつて呉れる事が出來れば宜しいと思ひました。

扨て私も永い年月の間、世の中に暮して、人の生涯の荒波け兎に角經て來て居りますから、いさゝか荒波の如何は存じて居ります。然るに諸子は皆妙齡のお方で御座いまして、人生の荒波に馴れて御出にならず、かた〳〵經驗もお持ちでない。私の眼から見ると、御經驗の無いお方：：即ち社會の風波に遇つて居らん御方としか見へません。其のお方が少の中に、人生の波の烈い社會に出なければならぬので御座いますから、其處で私は今假へに引きました一の『古い船』として、諸子に、：：即ち之から新らしい社界に出て行かうと云ふ所のお方に向つて、お話を致す積で御座います。

(其一)人世は幸福と愉快を以て滿さる

まづこゝに私の心づきました第一の點は皆樣が歡ばしく愉快にこの世の中を過されん事で御座います。人生は私共が待ち設うけたよりは、遙に不思議で又趣味の多いものであります、薔薇を見た人は、誰しも其の花の美麗しい事を感じますけれ共、其刺のあるのは心得て置かなければならぬ。人の此の世ノ中を渡るにも、困難と云ふものは常に之れに伴ふので御座います、嫌な事が必ずあるので御座います。學校に居ります時、私が熱心に考へました事は、人の生涯と云ふものは、どう云ふものであらふか、此先き勉强をして學校を出たら、果して愉快に暮せるか、或は不幸であるかといふ事でありまして、此點に付いては諸先輩方にも尋ね、又己れ自らも考へた事か御座いました。或る人は、人生は實に困難と悲哀とで滿ちて居て夏の中天に懸つて居る太陽が、人を蒸し殺す樣に苦しいものだと云ひ。又ある人は、人生と云ふものは、然ら困難なものでは無

い段々世の中に出て、年を取つて來るに從つて、幸福に成るものである。と斯う云ふ説を採る者もありますが、私の考へには、人の生涯と云ふものは、歡ばしいものである、樂しいものであると云ふ方が或は有益で且つは論理に近いかと思はれます。私は學校に居つた時分に、人の生涯と云ふものはどうしても不思議なもので、人生は有益なものである、有益で無くては成らんと云ふ説を考へて、そうして其方向に向つて勉強をする事に致しましたから、今日年を取る樣に成りましても、人生は矢張り幸福と愉快が滿ちて居ります。扨て諸孃方は小供の時に學問をした其學問が、後に至つて何の利益があるかと云ふお疑ひも御ざいませう、併し如何なる學問でも、學んでさへおけば、夫れを用ふる所の機會はいくらも出てまいります。年を取つてからは、何程學びたいと思つても、最早學ぶ機會が無く、學校に居る時は學問を爲すは實に好時期で御座います。其時は爲めになるまいと思ふ事も、後に成つて非常な役に立つ事が御座いましやう、されば、學校に居る時は、諸子が世に立つ準備の時で御座いますから、此時間には、必ず學問に熱中せられ、專心誠意之れを學習せられん事を希望するので御座います。

(其二)生涯の撰擇に重きを置くべし

次に諸子は、一に自個の撰擇と云ふ事に重きを置いて、自分は他のものとは別に成つて、他人は兎に角く自分は自分と一つ見識を定めて其れが好い事ならば、何所までも自分の生涯を有益にさせやう、富まさせやうと云ふ決心をもつてかゝらんと、折角の學問が何の役にも立たぬ事になつて仕舞ひます、之を喩へてみると、愚かな人が金錢を澤山もつて居つて、それを銀行に預けておいたが、さて其中に、急に貧乏に成つて、金錢を要したけれ共、預けて置いた金員を出す事を知らないで、只困苦て居つたと云ふ咄と少しも違いません。皆樣か有益な學問を習つて居て、之れを用ひないのは夫と同じで御座います。夫れ故に力を用ひ、學問を用ひて、人生か如何なるものであるかと云ふ事を考へて貰はなければなりませぬ。而うして夫れを心に堅く定めて進み

行けば、道は自ら開けるもので御座います。私が十七か十八歳の時、私の兄が大學校に入つて學問をして居りました。其頃英吉利の諸大學校は、婦人の入學を拒絶して居りましたけれ共、私は兄が歸つて來た時分に、どうぞ私も大學校に入つて學問を仕たいと考へましたが、入れ益いといふ以上は仕立がなく、其中に段々年も寄つて、彼是私が三十才の時に、許すと云ふ事に成つて、漸く私は入學致しました之れと申すも必竟決心を堅めて時節の來るとを待つて居つたからて。諸子に致しても行つて見ると云ふ心は何所までも持つて御出になれば好時期は必ず參ります。其れとも若し諸子方が私の云ふ事をお信じなさらんなら、試驗して見て下さい。人生は果して己れの思ふ樣に成るかならんか試して下さい。私は再三再四試みて苦心して居るもので御座います。私の願ひはとうか皆樣が、己の生涯は、己れの欲するが如くにする、と云ふ事のお悟りを頂きたいので御座いまして、又偏に夫れをお勸めするので御座います。

（其三）修學時代練習肝要なり

私共人間は、意志を强固くし、賢く且つ又善人にならねばなりません、さてさうするには、決して一朝一夕に出來るものでは御座いません、即ち急速には參りません。極く徐かに成長させて、發達させて、而して一生懸命に成つて、絕えず其事に心掛けて居つたならば、如何な難い事でも、遂には其目的を達する事が出來ませう。

私が學校に居る時に、其の先生は作文を書かせたり、文法を敎へたり、なか〳〵嚴重にして呉れましたが私は其時分心窃かに、此の敎師はあまり賢くない敎師だと思つた位で御座いました。がこれは大きに誤りで御坐いました。譬へて申さば私が曾つて諸威の國へ行きまして、或る海岸に立つて居りますと、沖は波が非常に劇しく荒れて居りますけれども、入江の方では僅かに小船が立つて居る、其入江で、或る親が小供に船を操つる事を敎へて居りました。所が其親が頗る嚴格でありまして、操つり方が少しても違うと幾度も幾度もやりなほしさして、終には殆ど怒る樣な聲をして、敎へて

居ります。て私は其時、小供の漕ぎ方が、自分の考へにはどうしても至極よいやうに思はれましたから、其父に向つて、何故さう云ふ風に小供を窘めるか、小供の漕ぎ方は惡くは無さゝうに見えるかと申すと、其父が答へますのに、沖を御覽なさい波が高う御座います、只今は小さな波であるからこれで宜しいが、後日に荒海へ出てからこれでは迚もいけません、船を操る事を知らなければ、遂に輕忽しい男に成つて、完全な漕手となられませんから、夫れで此通り嚴重にするのでありますと申しました。私は此話を聞いて實に感心しました。學校で皆樣がなさつて居る事は、此の話と同一で御座います。小さな作文、文法、歷史も、夫れは非常に嚴重に、非常に正確に、一點一畫たりとも、過ちの無い樣に敎えて置かないと皆樣が世の中の風波におあいになつたときに、果して如何な結果が參りませうか。人生と云ふものは、風波の無いもので御座いませぬ故に、夫れに適應して行かうと云ふのには、矢張り、小さな內に、學校で勉强して、熱心に習つた所のものを活用しなければなりませぬ、と申しても、之れが一朝一夕で善い功果を見るといふてはなく、段々と行つて行つて行りぬいて、遂ひに其目的を達するので御座います。

（其四）理想を高尙優美にすべし

私が嘗て瑞西に遊んだ時、或朝早く、未明に旅宿を出で、高いアルプス山脈の山を登つた事が御座いました。大勢仲間が出來ましたので、朝の二時に、提灯を點けて、案內者を雇つて出ましたが、何分にも肌を劈く寒さで、而して未だ二時の事でありますから、暖かく寐んで居つのたで中々睡むたう御座いましたのみならず、道が非常に滑つて、實に步き惡くう御座いました。ので、斯う云ふ寒い時に、眠い目をして、滑る、危險を犯して、何の爲めに成る事であらふ。何の益があらふ。とまわ斯う云ふ事を疑ひながら、登つて行きますと、二三時間經ちます內に、東の方から太陽が出て來たと見えて、雪のある山の頂上に其光りが移りはじめました。夫の輝つた光りと云ふものが實に奇麗で、又た如何にも美麗な景色でありましたから、最う私共の心付浮き立つ樣

で、疲勞たのも忘れて。前の方に〳〵と進んで行きましたし、夫れから又た、時々山の頂きが見えなく成ると、早く見える所へ行かふと思つて、駈る樣にして行つた事も御座います。此山の絶頂は、抑々私共の所謂「アイデアル」でありまして、極美、極致の理想で御座います。之れと同じ事で、若し理想と云ふものを、私共が目的として進むならば、非常に面白味を以つて、世の中を過ごす事が出來やうと思ひます。私共は智識や力量や並に機會を竪しこく應用して、明白な理想と云ふ物を、自分の目前に見付けなければならぬ。其理想の爲めに、時間氣力を、費やしましても、決して損は無いので御座います、皆樣は今こう學校で勉强して御出になるけれ共、いまに成長した婦人となつて。世の中に出る其時には、如何なる人物如何なる婦人と成つて、社界の爲め、人の爲め、有益な事業をしやうか、と考へを付けなければなりませぬ、私は特に斯ふ云ふものが理想であると云ふ事は申しません。此等は皆己れの着目する點に依つて異ります。併しながら一つ申して置きたる事は、皆樣が貴く氣高い所の氣品を備へて居る、昔からの名高い、英雄、豪傑、烈女、節婦の事柄を御讀みになる時に、夫れを皆樣の肖像として、夫れを皆樣の目的として、夫れよりも上になりたいと云ふことをお心掛になる事が必要であらふと思ひます。夫れよりも上に出やうと云ふ考へを以て居れば、自から善い方に向ふ事は疑も無いので御座います。皆樣が新しい理想と云ふものゝ觀念を得られん事で御座います。どう云ふものが極めて貴く、高尙なる婦人であるか、どう云ふものが氣高い氣品を備へた婦人であるかと云ふ事は、先程も申しましたが、之に附隨する、何が理想であるかと云ふ一點に就ては、私は多年の經驗上之が婦人の理想であると、指示する事は致しません。と云ふのは、生徒が、理想的婦人と云ふものはどう云ふものだと云ふ事を自分で書く事が出來、又考へる事が出來るからでありまして自分が出來る事を、人が行つて呉れては、何時迄も發達する事が出來ず、人は腦を使へば使ふ程、自然に發達するもので御座いますから、皆樣も御自身で理想を造

つて御覽なさい。他人から聽いたのでは役に立ちません。私が山の絶頂を見た時の理想は、私の心中に非常に深く感受しましたけれ共、外の人の感じは、或ひは私のものとは別であつたで御座いませう。のみならず、日本でも英吉利でも、世が變遷を經て行きます毎に、婦人の生涯は殊に大に變遷するので御座います。皆樣はお若し、私は年老て居りますから、天然の法則から申しますと、私の方が早く世を去る。其中に皆樣は婦人と成つて社界にお出に成る。されば今日之が私の理想であると申しても、其時になつて、社界が變つて居るならば、其理想も、從つて異つたものでなければなりますまい。いづれに致しても、其新社界に適應する人と成るのには、今日から決めておいたもの丈けでは不可ません。即ち段々時と共に變遷して行かなければならぬ。で、夫れ故にあなた方も、御自身で其理想をお定めに成つて、其新しい狀態に應ずる樣にお考へに成らん事を希望致します。

（其五）時間の活用と事務的習慣

此社界が複雜に成るに從つて婦人の取るべき事業も多く成り、婦人の生涯も實に面白味多く利益あるものになるといふ一事で御座います。夫れに付いて敢て澤山な事は申しませんが、斯う云ふ趣味の多い世に當つて、一番愼しむべき事は、時間を無益に費やす事です。時間の空費程恐ろしいものは無く、幼年の時より事務的習慣を養成して置かないと、後になつて、甚しく不利益を來すのは、免かれない事實で御座いましやう。英吉利には一般に次の諺が御座いまして「女の兒は男の兒よりも時間を餘分に費やし女は男よりも餘計に時間に費す」と云つて居る。之れは誰でも承知して居る點て御座いまして、西洋と東洋と比べてみると、歐米諸國では時間を無益にしませんが、東洋の方では兎角時間を空しく費す風が行はれて居ります。其内一つ除外例とも認むべきは日本國で御座いまして、殊に近頃は非常に勉强する國に成りました。私が此國へ來てから、方々の學校に參つて觀ますのに、何の級に往つても、皆樣が孜々汲々として勉强して御出になる、要するに此

弊害を全然取り除けて仕舞うのにはどうしても、學校の中からして、其習慣を養成しなければなりませぬ、即ち事務的習慣を餘計に付けなければなりませぬ。英國の諸學校では非常に此點に重きをおきまして、嚴重に時間を守る事を要求致しますが、之れは實に善い事でありまして、凡て事務的に事をするのは、第一番目に思考を立て、其次に計畫を立てゝ時を見て直ぐに始めるのが事務的習慣と申すので御座います。斯う云ふ習慣に養成された人は、後日社界に出ましても、此習慣が第二の天性に成つて居りますから、容易に且つ迅速に凡ての事を處する事が出來ます。私共の國では、昔はなか／＼時間を徒費したので御座いますが、祖母の時よりは阿母の時、阿母の時よりは私共の時と、事務的精神が段々と天下に行はるゝ樣に成つたので御座います。又私共の國の諺に、

「自身に時間を費すよりも人の時間を無益に費すのは一番惡るい」と申しますが、之れ亦眞で御座います。英吉利の皇室は、恐れ多くも、固く此の事を守られて居りまして、亡くなられました女皇なども然うで御座いました。英吉利は上流の人程時間を貴びます。從つてある婦人が、一人の人を永い間待たしておいたなどゝ云ふ事があると、非難の聲は直ぐに其婦人の上に參りまして、社界も亦夫れを許しません。私の父は或る裁判所の判事で御座いまして或時證人を招び出しました。が其證人が今日は證人として行くのであるから少しは後れてもかまはんと云つて、五分後れて參りました、すると、判事が其人に向つて、貴君は十一時間遲れて來たと云つた、所が證人は否爾うではありません單た五分だと云つて辯じました。けれ共判事は重ねて其れならば、控室に入つて、其處に居る所の人を御覽なさい、而して其人數に五分で乘けて見るとあなたは、確に十一時間遲れて居ると申して、遂ひに調べは先に來た方から調べられて、其人は十一時間待せられたと云ふ事であります。で私は、東洋が西洋よりも時間を守る事に嚴重だと云ふ事を云はれる樣にしたいと願ふので御座います。

修身

女徳

野中千代子

寛容

古き語に、萬事寛に從へば其福自ら厚しと申すことが御在ます。寛とは、せはしからず急ならず、心ひろくゆたかにして人の過をゆるすことを申します。かやうの人には自然と福わつく。急にしてせはしくしき人は自然と福がすくなふ御在ます。成程おきてひろき器にはさいはいがわり、心ゆるやかになだらかなる人にはさいはい長きためしが多いやうで御在ます。家をおさむるに四の敎が御在まして、一には家業を勤めて生業をおさむ、二には儉約にして財用の不足ないやうにすること、三にはつゝしみてわが身をたもつこと、四には恕にして人を愛すること。是は王凝が申した言葉で御在まして、恕はわが心にて人の心をおしはかりて人のこのむことはほどこし、きらふことはほどこさずといふことなんで、すべて家をおさむる人はみなこの四つを守ることは是非必要で御在ます。人の人たる道はこれ程のことで御在ますから、たとひわが心にかなはぬことがありても、顏色をはげしくし、言葉をあしくして怒りのゝしるやうでは、人はかならず恨みそむきて終にはそれが禍のもとゐとなりますから、これはきつと自らいましめねばなりませぬ。つまりおろかだと人をうらみ易う御在ます。其故に史記にも。知あれば輕しく人をうらみずと御在ますが。まことに適切なる言葉で。知ある人は人のわが心にかなはざることがありてと、是には或は理由があるならんと思ひて人を咎むるやうなことは致しませぬ。或は又人のしわざの道にそむける場合も、其人が生れ付ておろかなるゆへと思ひてこれをゆるします。之れをたとへて申せば丁度赤兒の井戸の中に入らんとするやうなもの

でわるからで御在ます。又人の生れ付が俗に云ふ偏くつであれば、その行が正しくまゐりません、智者は之に對しましてその偏くつなる病のむしろあはれむべきとをして決して怒りませぬ、家の主となるほどの人は此の心得がなうてはかなひません。親戚家人などに對してわが心にかなはざることをうらみいかりて堪忍せねば決して家道は和睦いたしませぬ、故にこれをかんべんして心をやはらかにもてばおのづから其色が外にあらはれますし、従てもし又内にいかりがあれば均しく色其が外にあらはれますから、つゝしみてもつゝしまねばなりませぬ。

開けゆく聖代のありがたさは婦女子とても志さへあれば學問の出來ぬ世の中では御在ませぬから、昔とちがひ人倫の道を知らぬなどゝ申すことは許さぬほどの時世となつたのはまことに有がたいことといはねばなりませぬ。全たい學問のみちは人倫の道をおこなひ人をあはれみめぐむのがつとめて御在まして、身をおさむるをもつて根本といたして御在ます。身がおさまらねば人倫のみちは行はれませぬ、天下國家の法なくしておさまらぬと同しことで御在ます、身をおさむる道は易に申してある通り善を見ては則ち遷り過あれば則ち改むるを要といたしまして、わが身にかへりみて人をせめぬやう勤めねばなりませぬ。遷るとは鳥の枝から枝へうつるとおなじて、人の善いことを見てもうつらず、自身の過をもあらためないのは一向道に志なき人で御在ます。又た傳に、人聖人にあらず誰か過なけん過つてよく改むる善これより大なるはなし、又論語にも、過ちては則ち改むるに憚ることなかれ、又尙書に、過を改むるに吝ならずと御在ます、やぶさかとはおしむことを申すので、過あらばおしまずして速に改めねばなりませぬ、學問の道は外でけ御在ませぬ、只過をしりてよく改め善にうつることをむねと致すので御在ます。世の人此のことを常に心にかけてつとめねばなりませぬ、さて過を改むるにはまづ自分の過を知るといふことが大切で御在ます、人の過は知りやすいが自分の過は知りがたいものです、それ

は人を見るには私がありませぬ故に明かです、わが身には私して過惡を知りませぬ、わが身に過があつても知らないのは愚です、知りて改めないのは惡いことで、其つみは決して淺くはありませぬまことに深いつみで御在ます。いかなる明鏡とても其うらをてらしませぬ、いかなる智惠ある人とても自分の身を知ることくらふ御在ます、ですから人はまづ自分の身をかへりみて其の過を知るのが大切です、其うへ道ある人にまじはりて其のいさめをきゝ、過をあらためて善にうつることを心がけねばなりませぬ。昔の賢人ともいはるゝ人は、人がその過を告きかすれば喜んでをられたものです、人はわづかなる酒肴又はくだものなどの贈物をうけてさへもめでよろこばぬものは御在ませぬ、まして過をつげ善い言をすゝめて苦いかほをするものが御在ませうや、これほど大なるめぐみはあるまいと存じます。過をきくことをきらひ、いさめをいふ人にむかつて怒るのは不善の至りて、わが身に過がないと思ふは、是より愚なことは御在ますまい、何故と申せば前にも申す通り古人の言に、人聖人にあらず誰か過なからん過ちてよく改むるは善これより大なるはなしとあります、凡人の惡人の多き中にもいさめをいふ人をにくみきらひ、自分の過をあらためないのほど大なる惡事は御在ませぬ。わが過なきことをいひたてゝさからひあらそひますれば、再び告げきかしてくれる人は御在ませぬ、ですから人がわが過を告げてくれたとき、そのいふことがみなあつたらなゞと思ふてもよくうけいれねばいけませぬ。

およそ家の主婦として家をおさむる人はいふも更なり、なべて女子はまづ父母によくつかふるを第一のつとめとし、夫につかへ子女をおしゑみちびくことが肝要で御在まして、其次に下部をつかふに心を用ひて禮法を正しくせねばなりませぬ、くるしめしゑたげては無論なりませぬ。奴僕はならはしいやしくて義理にうつりがたいものです、ともに愚にして道をさとしがたいものですから、道理でもつて其過を一々たゞさうといたせばうらみそむき不順にして家道が和らかに

睦まじくなりがたう御在ます。ですから只つねに家法をたゞしくいたして、禮をもつて相たいしますれば自然とひがことが少なからふと存じます、もし惡性なる下部があつて不忠なことをいたしたときは、打たゝきせめはたるやうなことをするは、申すまでもなく良家にあらまじきことで御在ますから、さやうなときは事なくして早くおひやるにしくことは御在ませぬ。

權勢ある家の賓客をつかさどる奴婢などは、かならず主人の權勢にほこりて無禮にしてお客様をあなどるやうなことをいたすもので御在ますから、主人から時々心をつけて無禮を戒めねばなりませぬ、其の奴婢にまかせおくやうなこととては主人の不行屆で御在ます、奴婢の無禮なのはむしろせむるにはたりませぬ、人は只主人をそしりますから、主人たるものが是を知らでかなひませうや。

なべて利口にして才力するどに、世になれて小事にかしこき者に、大體にくらくしてよき智惠なく、愚な者があり。又辯才なく才力つたなき者に、かへつて其心明らかにして大體にかしこき者が御在ます。人にまじはり人をつかふ人は、人を使用するに外の貌のうるはしきと、言葉のかしこきとにまよふてはなりませぬ、其心の内をよく察せねばなりませぬ。外が明らかであれば内がくらく、外くらければ内が明らかでおりますから、外はたらきて内がおろかな人があり外がくらくて内が明らかな人が御在ます。たとへば水と火のやうなもので、水は外がくらくて物をてらす光はありませんが、内は見えすぎて明らかです、火は外は明らかてよく物をてらしますが、その内はくらくして見えすぎませぬ。人の内外のかはりあるも之と同じ理で御在ますから、必らず其貌によりて人を見あやまりてはなりませぬ。

奴婢などのいひかいないものは、ならはしあしくてちゑなく、心かだましく、其上ものいふことがまことにさがないもので御在まして、わが心にあはぬ事があればみだりに其主にそしりきかせて、それをかへつて忠義とおもつておりますやうなあんばいですから、主婦や

家のものがもし智惠なくして、それを信じてはかならずうらみが出來やすう御在ます。もし奴婢すぐれてかたましく、口がましくてあしきものならば、前にも申した通り早くおひやるにしくことは御在ませぬ、かやうの者は必ず家道をみだし、人の中をもいひ妨ぐるものでまことにおそるべきもので御在ます。なべて賤き者をつかふには我おもふにかなはぬことのみ多いものと覺悟せねばなりませぬ、それを一々いかりのりてやまぬときには、せはしく腹立つこと多くて、家の内が靜かにはおさまりませぬ、あしき時は時々いひをしえてあやまりをたゞして腹立てゝはなりませぬ、少しのあやまちはこらえて腹立てず、心の内にはあはれみ深くして、外には行義かた〳〵いましめて、おこたらぬやうにつかはねばなりませぬ、へるかせにいたせば必ず行義みだれおこたりがちにて　禮義をそむきとがをおかすやうになるもので御在ますから、氣をつけた上にも氣をつけねばなりませぬ。もし誠實に忠義にはたらくものがおつておたへめぐむべきことがあらば、財をおしむではなりませぬ、勿論わが氣に入りたりとて、忠なきものにみだに財物をあたふることは亂をまねく基でありますから、いふまでもなく、してはならぬことで御在ます。兎に角人にまじはり、人につかへ、人をつかふにも、即ちこの世の中に人として立てゆくには、この寬容といふことは常に缺くべからざる大切なことゝ存じます。

直大主人

わきいつる邪心打やふり
生れながらの道を行へ
ちはやふる神に仕ふる心にて
世の交りもなすべかりけり

禮法

女子の作法

禮法講習師範
實踐女學校講師　田島秀子

茶の飲み樣

抹茶は流儀に因りてそれ〴〵違ひが御座います故、此處には極めて普通なるを申ます、先づ右の拇指を自分の前に、殘り四指を揃へて向うへ茶碗の右側に當て、左の手にて底を受けて持ち出で、左の手をつき、右の手のみにて拇指を右の縁に、殘り四指を平にして、底を受け、客の前菓子より右におき。又服紗にて出だすには服紗を四つに折り、折り目の方を我が右にして服紗のまゝ前の如く持ち出て兩手に持ちたるまゝ客の前へ据ゑ、若し茶碗のみを客の取りし時は、服紗は客の左の方へおき、又客が手にて受取りたる時は服紗の有無に關らず兩手を茶碗の兩側に掛けたるまゝ出します。次に喫し樣は先づ茶碗を右の手にて、前の如く持ちて取り上げ、左の掌にのせ、右の手にて順に取り廻し、一寸いたゞき、三口半は飲終り、其の呑口を右の拇指のうちにてそと拭ひ、指は懷紙にて拭き、兩手にて茶碗を持ち、股の上に肘をのみ少し躰を伏て、其の表うらを見、二順程取り廻して元の所へおき、又畧す時は茶碗は見ずして前の如くおきます、紗服ごと出されたる時は、服紗共に受取り下におき、又は其の儘持ちて前の如く喫し、終り、茶碗を兩手にておきながら、左の手に服紗のみを取り、二つに折たるを別に茶碗の左側におくので御座います

菓物の薦めやう

次は果物等を人の前に出だすには畧しては盆の上、正しきは前に申た足打八寸に紙を敷きてのせ、梨柿桃、の類は成るべく皮を客の前にて剝き、少皿に盛り、楊枝を添へて盆の上（此の時は紙を敷かずに出す）畧せば前の如くして客の前へ出だしても宜し、其の外果物の種類

に因りて皮の剝ぎ方切り方等種々の違ひが御座います、例へは眞桑瓜は皮を竪に剝ぎ、五分許りに輪切りにし、能き程に皿に盛り、梨は皮を剝ぎ横に削ぐやうに、又は輪切りにして出だし、柿は同じく皮を剝き、二つに割り、心を取り、それに十文字又は井文字の切目を入れて前の如く器に盛り、楊枝をそへて出だし、其の他いろ〳〵ありますが此處には畧す

麵類の出し方

次は麵類之れは膳の上左の向うへ汁、右の向うに藥味をおき、麵は椀に盛り、箸は杉箸を添へ、冬は溫め夏は冷して出だし、換を參らする時は別の椀に盛り、汁も別の猪口に入れ、盆にのせて持ち出て、例の如く座し、一膝進み、兩手にて空椀を取りて下におき、盆の上なるを其のあとに兩手にて据え、次に空猪口を取りて盆にのせ、新らしきを取りて元の所へおき、一膝退きて持ち來り、又食するには右の手にて椀の蓋を取り、左の手にて一寸あしらひ、右側におき、右の手にて箸を取り、左の手にてあしらひ、更に藥味を取り、宜き程に汁の中へ入れ、元の所へおき、汁を取り上げ、椀の中の麵を少しつ〳〵すくひて食し、若し麵餘り長しと思ふ時は椀の中にて挾み切り、又汁も藥味も椀の中へ入れて椀を持ちても食します、その食し終りたる時は箸を懷紙にて能く拭ひ、盆の中或は膳の内へ納めおき若し膳の上に汁のち落つる事あらば食し終りたる時に懷紙にてそと拭ひおく事

進物に就ての作法

次は進物に就て只普通行はるゝ事を少し御話いたしませう品物の極めて小さき物は奉書紙一枚を二つに折り、それに物品を入れ、左より右に合はせ右を上にして包み上下の端をうらに折り、又少し大きな品は紙二枚を重ねて包み最も大なるは四枚にて包み其の上大なる物は檀紙でも包みますが、大抵は奉書で宜し物に因り兩端の表はれたるも宜し水引は白を我が左に赤を右にし兩わなに結びさうして水引を品に掛けたる後は兩手にて能く筋の並を直し成るべく手早く結ばなければわろし、手緩くすると夏などは其の内にも色がちり、見苦

しくなります、結び終らば其の兩端は能き程に切り揃へおき又婚儀の折は返すと云ふ事を忌みて結び切り吊喪の時も同じく結び切りて御座います、婚儀の時先きをくる〳〵と巻くは只飾の心で致すだけの事次は熨斗蚫之れは前にも申た通り昔の食物故死器を出だす時に用ひ進物品に添へる事は無きを近き頃より凶事の外は皆熨斗を用ふる事となり　又熨斗は長きを添ふるが本儀なれど今は包み熨斗乃ち紙で折りたる兩端へ少し斗り熨斗を挾みたるをそふるは略式ではあるが、大抵はそれで宜し、進物の表書は中央に品物の名を畧し「松の葉」又は「粗品」などゝ書きますが、此の粗品は謙遜の詞であれど人に因り又所に因りて注意しなければいけません、右の肩の所へ小さく「進呈」又は「呈上」とかき先方の名と自分の名とは別に細き紙にかきて挾むのなれど畧せば先きの名を包紙に書き、我が名は名刺をそへても又名刺のみを挾み、先方の名はかゝずとも何れでも宜し、又進物品を使ひの者に持たせやりたる時、其の使ひの者は成るべく玄關にて風呂敷を取り除け掛服紗を爲替へて出だし服紗なき時は品物のみ出だし　決してわら〳〵敷き木綿の風呂敷のまゝ出だすはわろし、併し封印したる物は其の儘で差支へなし、受取人は風呂敷ごと出だされし時は次の間にて風呂敷を取り(但し前の如く封印したるは其儘主人に出だす)て主人の前に出だす凡て進物を使ひの者又自分が持ち行く時も盆にのせて先方へ出だすが本儀なれど若し略してのせぬ時は其の由を一寸取次人に斷はるも宜し受取人は例へ盆にのせずして出だされたる物にても主人に見する時は勝手元の盆にのせて出だす、又進物を先方に出だす時は成るべく取次人に主人に參らする由を申て出だす方が宜し若し客より主人の前へ進物品を出だされたる時は主人は一禮して後下婢を呼びそと持ちて次の間へ退かせるので御座います又進物品を箱に入れたる時其表がきは蓋の板目に竪にかき決して横にかいてはいけません、箱樽に入れたる物の表書は一箱一樽とするよりも中の品數乃ち何個何枚又は數のみ記し又算へにくき物は强ひて書くにも及ばず次は招待を受けたる

心得を御話致します凡て食事の招待を受けたる時速かに廻答の手紙を出だすのが必要で若し止むを得ずそれを謝絶しなければならぬ時は尚更早くし、又一度受狀を出だした上はいかにしても差操り難き程の差支への起りしにあらずば、成るべく出會するが宜し不時に事の出來て最早當日となりて斷はらなければならぬ時は、近所なれば使ひを出だし、又遠方なれば取りあへず電報にて云ひやり後に手紙を送るが宜し會食の時迄に其の斷はりが届かぬ時は主人に對し大に失禮で御座います

賓客の進退作法

次は賓客の進退擧止に就きて他の招待を受けそれに應じて往きたる時は先づその禮を手短かに述べ客室に入りし時は、一同に挨拶をして、後主婦の設けられたる席へ導く時その席が餘り上坐の時は一應は辭退しそれでも强ひて主婦の導く時は、其の席につき餘り執念く辭して彼れ之れ手間取るは誠に失禮で御座います、席につく時は一坐の客に一寸謝して就き又は褥は大抵の所

で出だしますが、貴人の御方の前では側へ褥を玉はりても辭して決して登つてはいけません然し强ひて仰らるゝ時に丁寧に一禮して半ば許り敷き眞中へは坐しませんがそれも相客のありたる時に又斟酌しなければなりません、又饗應の席では成るべく厠に行く事のなき様注意しなければならぬ事ながら、若しやむを得ず行く時には、そと人に知れぬ様立ちて行きます、招待に應じて行く時は、その定めの時間より早きも晩きもわろし、然し今迄の習慣として大凡そ卅分位は後るゝ方がよろし。



史傳

徐世賓皇后

文學士 中内蝶二

下

夫婦の交情は愛を本とす。しかも、其間に正しき道をたもちて、互に相尊び、相敬ふところなかるべからず。たゞ痴情のためにのみ親むものは、かのたはれ男とうかれ女との戀と異なることなく、永久の和合はとても望み難し。拿破崙と徐世賓との間は、夫婦として最も良き模範を世に示せるものといふ可きか。

徐世賓ひとたび拿破崙に嫁ぎてより、心をつくして、ひたすらに夫を敬ひしかば、拿破崙もまた之を愛すること深く、ユーゼーヌとオルトンスの二人の連れ子をさへ、わが實の子の如く慈しみしほどに、交情日に密にして、膠漆よりも濃かなりき。これが媒介の勞を執りし、バラーが滿足はいかばかりぞや。

當時國内の亂は既に平ぎしも、外敵四方より寇せむとするもの多かりしかば、拿破崙は三軍に將として兵馬の間にありしが、妻を愛する心は暫しも失せず、徐世賓の許に我身の安否を報じやらざる時とては一日もなく、硝煙天に漲り、彈丸雨の如く飛ぶ中に立ちながら、なほ隙をぬすみて文を認めき。其交情の如何にこまやかなりしかは、この一事によりても知ることを得べし。

遮莫、拿破崙は、婦女の愛にひかされて、軍事を忽せにするものにあらず、進むでは國外の兇敵を破り、退いては國内の暴徒を鎭め、數多の人に尊ばれて、監督となり、執政官となり。千八百〇四年十二月二日遂に佛蘭西皇帝の位に登りぬ。まことに絶世の英雄といふべし。

拿破崙既に萬乘の皇位にのぼりしかば、徐世賓は思ひもかけず皇后の寶冠を戴き、ユーゼーヌは伊太利代王に封ぜられ、オルトンスは和蘭國王の皇后となりぬ。

人間の光榮これに過ぐるものやあるべき。

かくて徐世賓は、春暖き神の御園に遊へる心地して、我身の幸を喜びしが、それも一時、花開きて風雨の怨みあり、禍津日の嫉妬の毒矢は、はやくも此方に向けられて、徐世賓は貴とき玉座を降らざるを得ざるに至りぬ。

徐世賓は、もとより富貴を望まず、また榮華をねがはざる身なり。夫の爲めに、わが頭に戴ける寶冠を擲たむは、弊履を棄つるよりもなほ易し。されば、今皇后の玉座を降ればとて、徐世賓の身に取りては、さまで不幸とは思はねども、悲しいかな、傷ましいかな、徐世賓は、比翼連理とまで契りける、たゞ一人の夫と離れざるを得ざるに至りぬ。貞操の德高き徐世賓に、この上の不幸やあるべき。

さるにても、拿破崙は、美貌といひ、德淑といひ、世にならぶものなき、この最愛の妻を、いかなれば遽に離別するに至りしぞ。

おもへば、世に大望の盛なる人ほど恐ろしきはなし。これが爲めには、家を棄て、父母を棄て、妻子をも棄つるに至る。あはれ徐世賓は、拿破崙が大望の犧牲に供へられたるなり。

拿破崙が徐世賓を愛する情は、日に增し深くこそなりゆきたれ、初めに比べて、少しも減じたるにはあらねど、如何にせむ、佛蘭西の國の法度として、皇帝の位は其嫡流に讓らざるべからざるに、不幸にして、徐世賓との間に子あらざりしかば、在廷の臣僚より一般の國民に至るまで、何れも第二の結婚によりて、皇統を求めよと促してやまず。拿破崙これが爲めに、やゝ心動きたるに、今一つの大難事は、身今皇帝として普魯士、墺地利、露西亞の三强國を足下に蹂躙けて、歐羅巴の覇權を掌の中に握りてありと雖も、もと布衣より起りて、帝王の家に生れたるにあらねば、ともすれば、他國の王の爲めに輕むぜらるゝの風なき能はず。拿破崙、日夜これを憂ひて、遂に强國の中にて最も門閥の聞こえある墺地利家と婚を結び、以て諸王の侮辱を免れむと決心するに至りぬ。さりとは餘りに薄情き所業なれど、風

波荒き政海に乗り出でゝ、絶代の偉業を成就せむとす
るものゝ爲めには、まことに止むを得ざることにして、
拿破崙が胸の中は、はり裂けむばかりに苦しかりしな
るべし。
さすがに、拿破崙は徐世賓の身の上を憐れと思ひて、
幾度かこの事を云ひ出でむとしては躊躇ひしが、いつ
までも、さてあるべきにあらざれば、遂に心を鬼にし
て、かくと徐世賓に打ち出でてけり。
老を偕にし、穴を同うせむと誓ひたる二人が間に、
斯かる厄難の起らむことは、夢にも思ひかけざりし徐
世賓は、夫の言葉を聞くや否や、驚きのあまりに氣絶し
たりしが、やう／＼にして息ふきかへし、騒ぐ心を押し
静めつゝ、怨めしげに夫の顔を熟々とうち眺めて、今ま
では、さる無情き御方と、つゆばかりも存じ侍らざりし
怨めしさよ。貴き皇后の玉座など、もとより希ふ所に
あらねば、この寳冠を人に讓れとのたまはゞ、いつにて
も返しまつらむ。されど、妻の權利を奪ひたまはむと
は……と云ひもあへず、またよゝと泣き伏してけり。

拿破崙は、そのいぢらしき狀を見るにつけ、憐れさ愈ま
さりて、見捨てがたくは思へども、勃々たる野心の炎
は、愛情の涙にうち勝ちて、斷然として其決心を實行す
ることゝなりぬ。いかでか知らむ、徐世賓との離別は、
拿破崙が生涯の幸を失ふに至りしことを。
既にして、徐世賓が宮殿を出づべき時は來りぬ。あは
れ昨日まで樂しき春を夢みしチユーレリーの宮殿、今
立ち去りては、また何時かは見みゆべきと、思へば後髪
ひかるゝ心地して、心轟ち、胸の塞り、しを／＼と歩み
出づる姿の傷ましきに、送り出でたる宮人等も涙にく
れて慰むべき言葉も知らず、かたみに目と目を見交は
すのみ。徐世賓は、迎の馬車に乗りこむや否や、こらえ
／＼し溜め涙一度に迸りて、思はずも、わッとばかり
に泣き仆れぬ。嗟、鳳離鸞別、歡會一たびやぶれて、
遂に逢ふべき時なかりけり。
間もなく、拿破崙と墺地利公主マリア、ルイザとの
結婚は、前代未聞の壯麗なる式を以て行はれぬ。巴里の
市民萬歳をことほぎて、皇統永久に盡きざれと祈り狂

ひけむも、花ひと時の浮世の盛、玉樓の春短うして、榮華の夢忽ち覺むべき時來りしぞ是非もなき。

オーステリッツの朝風に、二十餘萬の同盟軍を、秋の木の葉の如く散らしけむ蓋世の英雄も、傾く運命如何ともしがたく、一たび莫斯哥の雪に凍え、再びオースタアローの戰に敗れ、巴里の城に白旗を揚げしより、遂に帝位を廢せられて、太西洋の中なる離小島セントヘレナに流謫の身とはなりけり。

輕薄なる佛蘭西の國民は、きのふまで神の如く敬ひしに引きかへて、今流謫の身となりしを見ては、忽ち去つて顧るものなく、百年の苦樂を契りしルイザ皇后さへ、恩愛の絆を斷ちて、共に配所に行くことを拒みぬ。かゝる薄情き人々のみ多かる中に、徐世賓が良人を念ふ心は毫もかはらず、大望の犧牲となりて振り棄てられしを、露ばかりも怨みとはせて、雨につけ、風につけて、たゞ拿破崙が身の上をのみ案じ煩ひつゝありしが、今流謫の身と零落れぬる由を聞くよりも、身も世もあられず嘆き悲み、共に謫所に隨はむとまで思ひ詰めしかど、新皇后の思はくのほどを慮りて、暫しさしひかへ、屢ば書を送りて、その不幸なる境遇をさま〲に慰めしかば、拿破崙は、徐世賓が貞操を感ずること深く、今のはかなき身の上を、かばかり親しく言ひよる心のほどを思ひやれば、一時の榮華に心迷ひて、つれなく離別を迫りたる我心こそ、なか〱に恥かしけれど、厚き情を書き認めて、後悔の意をあらはしけり。

徐世賓は、日夜拿破崙が艱難辛苦を想ひやりつゝ、ひそかに新皇后が樣子を探りけるに、今は全く節操を棄てゝ良人が身の上を憐れむ狀の少しも見えざりしかば、空しく坐してその艱苦を觀るに忍びず、愈よ心を決してエルバ島に赴き、拿破崙の左右に侍りて薪水の勞をつくさばやと、其旨を申し送りて、許可の報知のかへり來む日を、今日か翌日かと待ち暮らしけるに、禍津日の手は、なほ二人を苦しめむとにや、徐世賓を病魔の腕に托してけり。

徐世賓は、最早死期の近きたることを知り、ユーゼーヌとオルトンスと二人の子女を枕邊に招き、後の事な

ど言ひ遺しつゝ、拿破崙の肖像を笑ましげに打ち眺め、『あゝエルバの島よ、拿破崙よ』といふを此世の名殘として、眠るが如く息引き取りぬ。時に千八百十四年五月二十日、拿破崙がエルバ島に到着してより、僅に四週間の後なりけり。（をはり）

静御前（下）

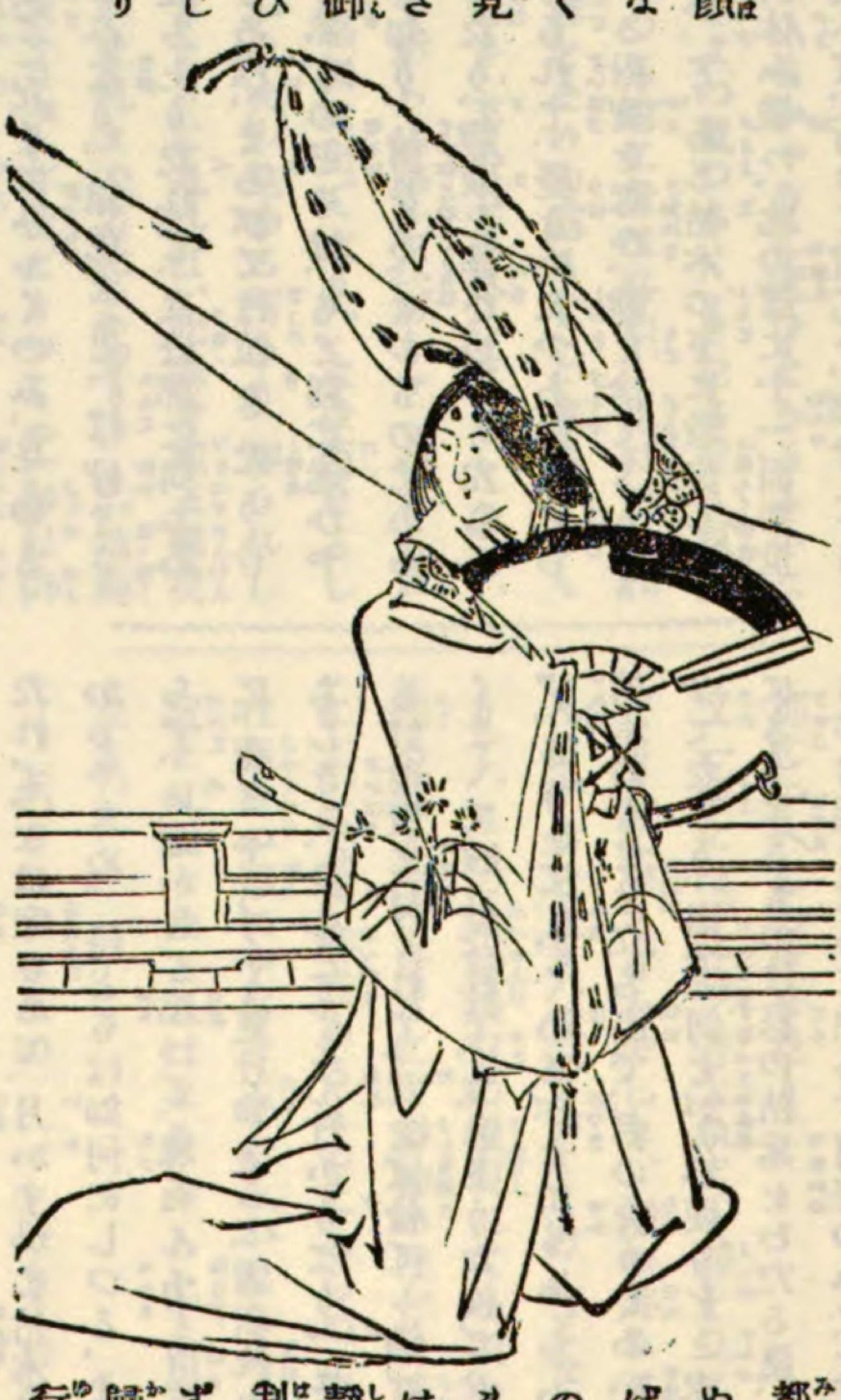
鹽井福子

ますらをと思へる義經も、げに静には別れがたくて、吉野までも具したれど、うき世のわらしは此處にもとひ來て、身を入るゝに處なく、山僧の攻むる處となり、是非なく静を都にかへす事となりぬ。静は、何處迄もしたひ行かん、君に別れ奉りてまた住むべき方も覺えずとて、鎧の袖にすがりてさめ〴〵となげきければ、鬼神をもひしがん義經も、なさけにはもろき眞の英雄、もろともに鎧の袖をしぼりて、しばしは物も覺えず泣きけるが、とてもかくても女を具すべき旅ならじと思ひ、きつと涙を拂ひ、静が手を執りて木蔭に座をしめ、さて云ふやう、年來なさけ深く、御身の誠をつくされし事、何時の世にかは忘れん、人目を忍びて、此處まで具し來りしも是れがためなるぞかし。よく〳〵聞けば、此の山は役の行者のふみそめられし菩提の峰なれば、精進潔齋せでは叶ふまじき峰なるを、我が身のなさけに引かれて、是れまで具したるも思へばゆゝしきとなり。之よりは深山幽谷道も殊にけはし、女を具しては足手にかかりて、すゝみもおそかるべく、中々に汝が誠の害ともなりぬべし。義經が武運つきずば、再び都に上ぼりて、またや昔の月花をもろともにながめん、しばしが程を忍びてもまたれよと泣く〳〵云ひければ、静は聞きも入れず、妾、女子なれども、君がためには、火にも水にも身をなげつべく日來思ひ居り候を、ひとり都にかへれとはあまりにつらき御言の葉、草むす屍、水つく屍、何處までも御伴許させ玉へ、よしや、誠足手にかゝりなば、もとより君に捧げし吾が玉の緒、をしむべき命ならず、此のまゝ此處に君が手にかけて何處へもものし玉

へ、御身の手にかゝりて死なんこそこよなき望なれと て、聞き入るべうもあらねば、義經も離別の情にたへかねて、むせびて互みに、物も覺えぬを、辨慶義經をはげまし、且つねんごろに靜を戒めける。判官涙を抑へ、懷より鏡をとり出し、これこそ我れ朝夕に顏をうつしたるものなれ、今より後のわけくれは義經と思ひても見よかしとて渡せば、さては如何ありても、御伴は叶はぬにや、再び見奉ることも叶はじと泪ながらに受けとりて

見るとてもうれしくもなしますかゞみ
　こひしき人のかげをとめねば

ふしまろびて泣きけるに、義經、更に枕を取り出し、身



をはなさで是れを見よとて

いそげとも行きもやられず草枕
　しづかになれし心ならひに

とよみて渡し、財寶あまたを與へ、雜色五人をそへて、都には送りかへしぬ。

げに死別より生別のつらさ、判官おもひ切り玉ふ時は、靜思ひ切らず、靜思ひ切るときは判官思ひ切り玉はず、行きもやらず、歸へりては行き、行きては歸り、峰に上ぼり、谷に下り行き玉ふほどに、姿の見ゆるまで靜はるゞゝと見送り、今や姿も見えぬほどにへだてば、山びこの響くほど

にぞおめきぬ。
今は之れまでと思へど、靜は起ちも去らず、起ちてはながめ、ながめてはふしまろび、まろびてはながめたれど、聞ゆるは、己れが聲のこだまにひゞくのみ、見ゆるは、我身を離れぬ面影のみなり。雜色どもにはげまされて、是非もなく〳〵立ち上りたれど、なほ都に向ふ心もなく、立ち上りてはまろび、まろびては泣きたりける。さるほどに具したる、ものどもは、もと利に迷ひやすき雜色、もとより義を知り、情をたーもつものにあらず、今は判官も遠く行きたり、靜殿を伴ひかへりたらんには、鎌倉殿の侍に縛められて、憂きめにやあはんずらん、かの判官がたび玉へる財寶を奪ひ、靜を捨てゝ人知れぬ里におちばやと思ひ、と、ある枯木の下に敷皮しきて、是處にてしばらく御休み候へ、此の麓に十一面觀世音立たせ玉ひ、別當も候へば、行きて宿乞ひ、御身をもいたはり、さて、都に送りまゐらせんとて、靜をすかしおきて、やな逃げ失せぬ。靜は戀ひしき人をしたふより、外の心もなく、なげきに前後も知らざりしけり。時たま〳〵霜月の半ば、ふる里の名にしおひて、雪は峯をも尾をもふり埋みたり。夕べになるまゝに、流石寒氣身にしみて、仰ぎて見れば日はくれぬ。雪はふりやみたれど、なほ空さえて、月かすかに枯木にとまりて寒くかゞやきぬ。侍どもは如何にしつる、まてども〳〵來らず、いぶかしく思へど、尋ねん力もなく〳〵まつ程に、夜もやう〳〵更けゆきて、雪折れの松の音のみ打ちしきり、身もこゞえんばかりなり。さては、かの男どもは財寶に目くれて、我をば捨てゝ逃げしなりと心づくまゝに腹立たれて、立ち上りたれどせんすべを知らず、さりとて、かくあるべきにもあらねば、やう〳〵枯木のもとを立ち出で、月の光りをあかしに、足にまかせてたどり、出で、何をがな、便りをと求めつれども、耳にさへぎるものは杉の枯葉をわたる風、眼にさへぎるものは梢まばらに照らす月影のみにて、そゞろかなしく、覺えず聲を立てつれば、木魂にひゞきて、谷の底に聞えぬ。もしは我を問ふにかと、なく〳〵下りて見れば、白雪ふり埋みて、人の跡もなし、又や悲しく聲立て

つれば、そこともなく山彥の答へつるに、耳そばだつれば、雪の下行く細谷川の氷にむせぶ聲のかすかに聞ゆるのみなり。なく〳〵また峯にかへり上ぼりて、人やあると見れども我があゆみたる跡より外は、雪ふみ分けし人もなし、戀しき人もかやうに迷ひをらるゝかなど、思へばいよ〳〵うきよの嵐つらく、きたる笠も風にとられぬ。はきたるくつも雪に奪はれぬ、足はやぶれて血しほ流れ、峯の白雪をそめぬ處もなし、裾はつらゝに閉ぢられ、袖は涙に氷り、手かゞみ息つきて、こけつ、まろびつ、其夜はよもすがら山路をたどりて、あくる日の夕つ方、やう〳〵大路には出でたり。なほ西をさしてたどるほどに、かすかに火の見ゆる所あり、靜うれしく思ひて、やがてたどりよりて見れば、此處ぞ藏王權現にて、燈爐の火のかすかに見えたるにてありけり。地極に佛とはかゝる時の心なるべし、たどりつくや、靜は御前にひれふして、判官殿の身の恙なく、己れも安穩に都に歸へりつかん事を祈りけるに、居ならびたる衆徒等其さまのいたくやつれ、あまりにあやしき躰なるに、執行の御坊に告げゝれば、坊、靜をいたはり、且つ具さに子細を問ひければ、靜是非なく判官が妾靜なるよしを申したり。老僧、判官がおちたるさま、靜が事のもと末をなほくはしく問ひ正して、いたはりなぐさめ、都にかへしのぼせたり。

又一書には、此時、若大衆ども靜を見て年若き美人のひとりして登るぞあやしき、靜の拜み了りて石段を下らんとするを止め、其の名をとはんとせしに、老僧出て來りて、こは、靈驗無双の權現にてわたらせ玉へば、御法樂あれと强ひけるに、靜初のほどは近きほとりのものにて、させる藝能あるものにあらぬよし答へけれど、神は正直の頭にやどり玉ふを、かくし終らんも恐れあり、我を見知りたる人はよもあらじと思ひて、立ちて舞ひたり。

ありのすさみの　にくきだに
ありきのあとは　戀ひしきに
ありてはなれし　おもかげを
いつの世にかは　忘るべき

別のことに　かなしきは
親のわかれ　子のわかれ
すぐれてげに　かなしきは
夫妻の別れなりけり

と歌ひもあへず、衣うちかづきて伏しゝづみけるに、一老僧、靜を知るものありて、ろけんして、判官の行衛をせめとはれけるとあり。とにもかくにもあはれの事にて、神佛に仕ふるものは、己が身にかへて、たゞ人を救ふべきが、法りの道にもあるべきを、俗僧、眞の道心なし、鎌倉をはゞかり、うき世の人に交りて、うき人をいためなやますぞ憎くしとも憎し。

さるほどに靜は山僧に送られて、都に歸へりのぼりけるが、此の事かくれなく都の中に聞え、折りふし、執權北條時政京都守護職の役にて、六波羅にありけるが、直ちに人をして此の事を鎌倉に告げやりしに、賴朝、靜を鎌倉に下すべきよし命じて、文治二年二月十四日、母磯禪師もろともに關東武士に護送せられて、翌三月一日、鎌倉につき、安達新三郎淸經に預けられぬ。賴朝は如何にもして義經が行末を知らばやと思ひ、筑後權守俊兼、民部丞盛時を以て、仔細を尋ねられけれども遂にありかを知らぬよし、なく〳〵答ふるのみ、折りふし、靜みごもりぬ。賴朝そを聞くや、用捨なく、かれも仇の末なればとて、梶原平三景時を召して、此處に其の腹をさき、子を取りて捨よと令しけり。嗚呼何たる殘忍の心ぞ、血脈の弟を追ひ、まだ腹なる子をも取りて捨てんとす、かばかり情を知らぬ武士のはてこそすさまじけれ。靜は母にとりつきて伏し、母は靜が手をとりて聲をも惜まず泣きにけり。流石のまさ子も堪へかねて淚おとせば、武き武士どもゝたゞ呆然たるばかりなり、流石景時忍び得でや、仰せあまりに無情に候、分娩の後にともかくもなしたまへ、其れまでは某に預けたまはれとあるに、賴朝其の言に從ひ、梶原に預けけるを、靜、梶原の名を聞くだに胸つぶるゝ心地す、其の人に預けらるゝと聞くや、え堪へず、懷劍とり出でゝ、自殺せんとしたるを、工藤左衛門祐經、走り來りて、其の手をひきとめ、事のよしを賴朝につげて、堀藤次親家にあづけたり。

あはれ、靜の心や如何なりけん、思ひやるだにあはれなり。

あはれ政子は何者ぞ、賢婦ならば、少しく人の心察しても見よかし、あかぬ夫に別れ、身は預かりの身、ましてはらなる子さへ、いつかうき目を見ん末、思へばひまなき思ひ、さけんばかりの靜のむねならんを。思ひやりあるこそ女子が特性と聞くものを、如何に烈女とて、政子、靜が舞の上手なるよしかくれなければとて、かゝるなげきの中に、夫にすゝめて、そが舞を見ばやと思ふ心、あはれ鬼なるか、蛇なるか、烈女、政子が如き烈女、ならんには、死すとも我れは願はじ。

夫も夫たり、如何に殘忍酷薄の徒なりとて、何處まで情なきぞ、政子が請ふまゝに、靜をめして舞はしむ。靜や、靜や、如何にくやしかりけん。ほろ〱とこぼるゝ涙をおさへて、妾もと賤しき流れのものなれば、もとより自からを惜しみて辭むには侍らねど、一度伊豫殿の後房にあてられぬるを、いかで今稠人の中にさる耻かしき事をして、夫を耻かしめんやとて、病と稱へて至らず、しかるに、靜は舞の名人、たま〱かまくらに參るれり、京師のかへらんも程近きに、一度も其手ぶり見ざるは殘念なりとて、政子なほしきりに見まくほつして、再三頼朝にすゝめければ、遂に、頼朝、政子と鶴が岡の祠に詣でゝ、靜をめして舞はしめぬ。靜申すやう、妾、今日は伊豫殿に別れ奉りし折りの事を思ひ出でゝ、いとゞ悲しみに堪えず、いかで歌舞など心に入り申すべきとて固く辭みけれども、頼朝なほ聞かざるに、是非なく立つて舞ひにけり。工藤祐經鼓を打ち、畠山重忠銅拍子をならす。

日本一の舞の名人、今日鶴が岡にて舞ひぬるよし、鎌倉中の人に聞き及びて、老幼男女の見物人、雲霞をなしたり。靜はやがて道場に上りてさすがにまづ君が代を謡ひたりしは、かくてもなほ君と兄とを祝してなるべし。人々たゞめでたく聞く程に、靜は舞の袂をかへ、水干の袖をはづし、白き袴ふみしだき、丈けたる髮をたからかにゆひあげて扇うかかざし、

よしの山みねのしらゆきふみ分けて

入りにし人のあとぞ戀しき

と吟じ出て舞ひすまして、更に別曲を歌ひ、また

しづやしづしづのをだまきくりかへし

むかしを今になすよしもがな

とふり上げし聲は涙ににじみ、ふやうの眼にこぼるゝ涙は、げに袖の玉とつゝみて舞ひすますや、まろびなきたりしと、見る人涙にむせはぬはなかりけり。頼朝は之を聞きてよろこばず、今日社前にて舞を奏す、よろしく關東萬歳と稱すべきを、返りて叛人を慕ひて、離別の曲を歌ふとは何事ぞとて、氣色いと惡しう見えけるを、政子、なだめ申やう、君むかし流人たるの日、妾ひそかに君と終身の約を結びぬ。その頃、妾が父、時の勢を憚かりて、君と妾との通路をたちける時、妾、君の戀しさにえ堪へず、暗夜ひそかにぬけ出て、雨をおかして君の所に走り行きぬ。その後、君義旗を石橋山にあぐるに及び、妾はひとり伊豆山に留まりて、君が存亡を知らず、實に晝夜をわがず思ひあこがれ侍りけるが、いま、靜の豫州を慕ふも同じ切なる心にこそ。豫州の恩を忘れて慕はざるは、もとより貞女の操にあらず、情内に動きて、外に顯はるゝものなり。公昔をおぼさば、よろしく憐れみゆるし玉へと云ひけるに、頼朝言葉なく衣を簾外に出して纏頭にあてゝやみぬ。

工藤祐經、梶原景茂等、靜の僑舍につきてさかもりす。靜の母、磯の禪師もまた酒宴の席に列りて、興をば助けぬ。靜、日來の物思ひに顔色もあしく、姿もやつれたれど、さすがに都の名花、色も香も世になくめでたさに、景茂心惑ひて、醉ひに乘じてたはぶれ云ひよるに、さてもくやしき事を云はるゝかな、かりそめにも、豫州は鎌倉殿の御連枝、妾は即ち其の侍妾、御身は鎌倉の家人にはあらずや、伊豫殿、もし、昔のまゝにおはさむには、卿等は妾を見ることもならぬを、如何なればさやうなるけがらはしき事を云はるゝぞとて、きつと形を正して云ひおとしければ、景茂いたく愧ぢて、頭をえ上げざりしぞ心地よき。而して、義經をして、順境たらしめば、高尚優雅たゞ可憐の良女にてありけんを。

まもなく靜、玉の如き男の子を生みおとしたり。なさけ

知らぬ頼朝は、一滴の血もなし、涙もなし、遂に安達清經に命じて、由井の濱に捨てさせけるに、靜泣きさけびて、爭ひ與へざりしを、清經強ひて奪ひ去りて、いとをしや遂に由井がはまのもくづとはなしにけり。のち、物をかづけて靜を京師にかへしけり。かくて靜はわたら花の盛りの黒髪剃りおとし、姿を替へ、嵯峨野の奥深き天龍寺のふもとに草の庵をしつらへ、禪師もろともに行ひすませど、心の思ひははれもせず憂さつもりて、次の年の秋のくれ、木の葉と共に散りはてにけり。今日、信濃武藏などに、靜の墓と稱するものありて、中田の古寺に靜の舞衣とたゝへて古き衣ををさめ、靜は義經の跡をしたひて、東國に下りて死せりと云ふ說もあれど、これらはみな靜の德を慕ふあまりのつくりごとにや。

（完）

女流名書事蹟

耕靄女史

近衛帝皇后

皇后藤氏御諱は多子、右大臣公能公の御息女にして、始め左大臣頼長公子として養はる、聰慧にして書を善し、音律に曉く箏琵琶に巧みにまし〳〵、容姿の優れ給ひしことは世に傳ふる處なり建仁元年十二月崩御せらる、

後堀河帝皇后

皇后藤氏御諱は竴子關白道家公の御息女にして後に藻壁門院と號せらる四條帝の御母后なり天性圖書を好ませられ曾て源氏物語の故事を書き給ふとぞ天福元年九月崩御せらる

後光嚴帝皇后

四辻大納言兼綱卿の御息女にして後圓融院の御母后なり崇賢門院と號せらる幕臣齋宮家藏の枕の草紙は后の書かせ給ひしものにして其詞書は後光嚴帝の御宸翰な

りと寛文十二年正月幕府御臺所へ献上せしといふ探幽齋之を縮寫せしもの狩野洞白の家に藏せりといふ

延長公主

醍醐帝第四の公主勤子内親王と稱せらる、天慶元年藤原師輔に配せらる、天資柔德にして淑姿花の如く常に書畵の墨戲を以て幽閑の御慰みとし給ひ遂に一點蠅を爲すの妙に至り給ふまた書法にも巧にましく〱て書畵共に高妙におはしけるとなん。

式子内親王

後白河帝の第二の皇女にして平治元年賀茂の齋院にト定し給ひ萱齋院また大炊御門宮と稱せらる後薙髮して承知法と號し給ふ和歌を善し又天性丹靑を好せられ頗る巧にましませしとぞ。

蘭溪

後奈良天皇の皇姊にして好て畫圖を作らせ給ふ、筆力柔軟にして設色粗なりしといふ。

梅宮

後水尾院の皇女なり、早年釋門に入給ひ佛事の餘暇繪畫をなし給へり御所を菜名寺邊に營なまれしとぞ。

光子内親王

後水尾天皇第十一の皇女にして林丘寺尼宮法親王御名を天瑤尼また照山と號せらる、延寶八年御落飾御年四十七書法を狩野安信に學はれ多く觀音の像を書き給ふ筆力温雅なり享保十二年十月薨去せらる御年九十四。

理豐尼

後西院天皇第十九の皇女にして寶鏡寺尼宮法親王御名を理豐尼德巖と號せらる書を狩野周信に學はれて其技を能せらる延享二年五月薨去せられ御年七十有四。

博山尼王

桃園帝の御養女にして閑院直仁親王の御息女なり、八十宮と稱せられ、寶曆二年林丘寺御相續同十二年入寺得度寛政九年十二月薨去せらる御年四十有八又音羽御所と稱せられ御畫を成されしと云ふ。

是より以下は臣民の婦女にして繪畫を能くせし人の事蹟を揭けん

文苑

和歌

臺灣神社詠進

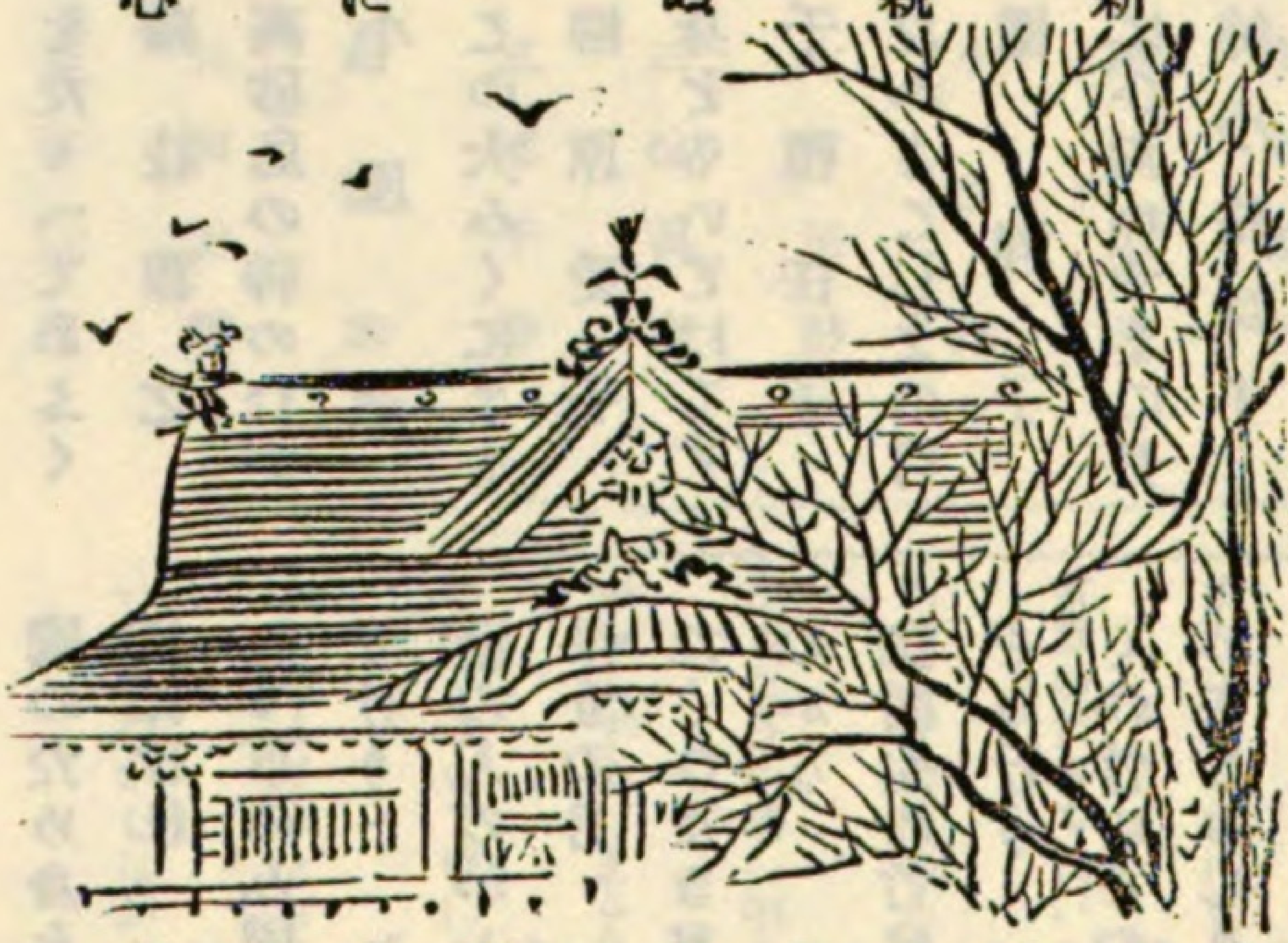
にきみたま天かけりして高砂の島の新國千代まもりませ　東久世通禧

そひえ立つ新高山の峯よりも高きは親王みさをなるらむ　久我建通

高砂の島を御國と成してけりかへらぬ身とはなりたまへとも　鍋島直大

新高の山の草木も御園生の竹の葉風にうちなひきけり　渡邊千秋

御靈はも島にとまりて島人のあらき心をしつめますらむ　黒川眞頼



おきつしま嵐の中におれしかなあはれ御園の竹のひと本　本居豊穎

白川のなみ〳〵ならぬ名をあけて後の世遠くあふく君かな　津輕承昭

おいさをは幾千代までも新高の山の高ねのくちせさるらむ　松浦詮

宮はしら高砂島にたちそひえかみの御いつもかゝやきにけり　壬生基修

大まへにひくみしめ繩打はへてのとかなる世の島風そふく　長岡護美

をのかみの君か御影もみゆるかなにひたか山のあきのよの月　渡邊清

いつきまつる神のいさをは新高の山より高くあふかるゝかな　大谷光尊

まつろはぬあたをきためて高砂の高きいさをゝ立ましにけり　梅溪通治

尊かる身をさへ捨て高砂のたかきいさを〳〵たてし君かな　水野忠敬

わたなみをしつめたまひしみいくさをたゝへてあふく高砂の島　藤枝雅之

たれもみな袖をぬらしてしのふかな高砂島の神のむかしを　小原適

いつかるゝ神のみたまはとこしへにこの大みくにまもりますらん　柳原愛子

しゝ草をかりはらはんといたつきの身をもいとはてすすみましけむ　千種任子

ものゝふの道のかゝみとあふくらんたかさこしまの弓はりの月　園祥子

むらくものかゝりし世をも忍ふかなにひたかやまの月のひかりに　姉小路眞子

みはた手のかせになひきし草も木もふしてやあふく神のみいつを　小池道子

みつるきのひかりとゝもにかゝやくはこのみやしろのみいつなりけり　藪兼子

しら河のなかれをひきて道もなき高砂島はひらけそめけむ　北島糸子

國のため身をすてまししゝ君なれはうへこそ神といつかれにけれ　津守好子

しゝ草のみ國の風になひきしも君かいさをによりてなりけり　吉田鉦子

世の人のかゝみといまはあふきけりにひたか山のゆみはりの月　平田三枝

たくひなき君かいさをにくらふれは新高山もたかからぬかな　吉田愛

御園生の竹はいよ／＼たかさこの島にもふかく根さしそめけり　宮地嚴夫

くれ竹のそのゝいさをゝ根さしにてゆるかすなりぬたかさこのしま　坂正臣

たかさこの島もとゝろにひゝくなりきみかたけひしよろつよの聲　萩原嚴雄

たかさこのしまのいはねのとこしへにかゝやく神のみいつをそおもふ　植松經有

まししゝよのいさをのみかはたまちはふけふのめくみもたかさこのかみ　中村秋香

時雨（竹柏會兼題）

散そめし楢をわたるこがらめの
　つばさ寒けくふるしぐれかな　伯爵 東久世通禧

もみぢ葉の濃き方より山めぐり
　冬さそひくるはつしぐれなか　伯爵 松浦詮

賤の男が稲かりつみて休らへば
　ひとむら時雨ふりそゝぐなり　伯爵 津輕承昭

笠もたていでし山路のむら時雨
　あまやどりする家だにもなし　子爵 水野忠敬

いくたびか時雨の雲のめぐりきて
　くろゝも早しふゆのやまざと　子爵 諏訪忠元

ちりつもる枯葉の上の村しぐれ
　おときく程はなき世なりけり　小出粲

山賤がかへるたもとも濡にけり
　たかれの雲やしぐれなるらむ　木村正辭

昨日までまだ虫のねも聞えつる
　窓おとづれてゆく時雨かな　三輪義方

ふる程をしばしさけんと立寄りし
　この松かげもしぐれもるなり　三浦千春

赤らみて残れる背戸の柿の實と
　共にこぼるゝむらしぐれかな　相澤求

歸らんとする友とゞめ語りつゝ
　時雨もけふはうれしかりけり　矢田香園

まち〳〵し數寄屋の軒のぬれ柏　赤堀信成

　けさ打さやぎしぐれふるなり

かげぼしの大根ぬらして蘘荷の
　軒端すぎゆくよこしぐれかな　塙忠雄

賤の男が殘しゝ柴のうへに
　しぐれふるなり山かげのみち　山崎房吉

窓たゝく夜すの時雨に夢さめて
　音きくのみもそではぬれけり　大野泰

ともだちが爐開きすとの使きぬ
　ゆき 時雨いまどにかたらん　澤式

山門のいらかにとまる家ばとの
　聲もしぐれて日はくれむとす　横山碩

古里のたらちねいかにいますらむ
　みやこの空もしぐれそめけり　關谷祐之

あらゝぎのほのかに見ゆる森陰に
　つきはしづみて時雨ふるなり　土田道一

友もなき山鳩一羽そらにたちて
　ひろき大野にしぐれふるなり　樹谷淳孝

牛みえずあげまき見えず冬枯の
　まきのひろ野の時雨ふるなり　吉敷要

心地よきいでゆに入りく村時雨
　すぎゆく山をひをりみるかな　新井幸太郎

かしらよりあとゞにぬれて紅葉見の
　かへるさ寒きよこしぐれかな　彌富濱雄

一里牛むかしながらの松ばらに
　馬子の歌きえて時雨さびしも　笠原幡多雄

ひかけまちて衣ほす妹が袖の上に
　早ふりかゝるむらしぐれかな　山田露助

ならしの〻演習をへて歸るさの
　兵士さむからし時雨ふりきぬ　井上公二

もみぢ葉をゐろりにたきて翁どち
　時雨ふる夜のさむけさかたる　新井千洒

天そゝるゆづ岩がれの紅葉ちりて
　山おろし寒く時雨ふるなり　鹽川廣

夜半の戸をうつは落葉と思ひしに
　昨日はかはる時雨なりけり　龜山新一

居酒屋の軒の荷馬のたてがみに
　木の葉みだれて時雨ふるなり　松浦裏次

袖がさをかざしてゆかん村時雨
　ふりみふらずみ定めなければ　増山三雪子

はら〳〵と落つる木實の窓を打ちて
　ゆふべさびしくふる時雨かな　板倉止子

昨日かも時雨にそめしもみぢ葉は
　けふの時雨に色あせにけり　板倉藤子

もみぢ葉か手毎にもたる男女
　しぐれにいこふ掛茶屋の店　池田愛子

我背子がかへさの道をむらしぐれ
　いたくなふりそ笠も持まさぬ　中村文子

初時雨かゝるもうれし松が枝に
　まつはる蔦もうすもみぢして　清水錦子

都なる子らにおくると時雨ふる
　夜半もや母のきぬ縫はすらん　村山元子

はたごやの行燈ちかく遠く見えて
　ふるき驛路しぐれ降いでぬ　有賀晴子

蜜柑いりし籠を背おひて伊豆少女
　くだる山路にしくれふるなり　佐藤朝惠子

琵琶法師暇申してまかんずる
　おばしま寒きさ夜しくれ哉　佐々木信綱

文　章

夜半の埋火

（女學世界第六號のつゞき）

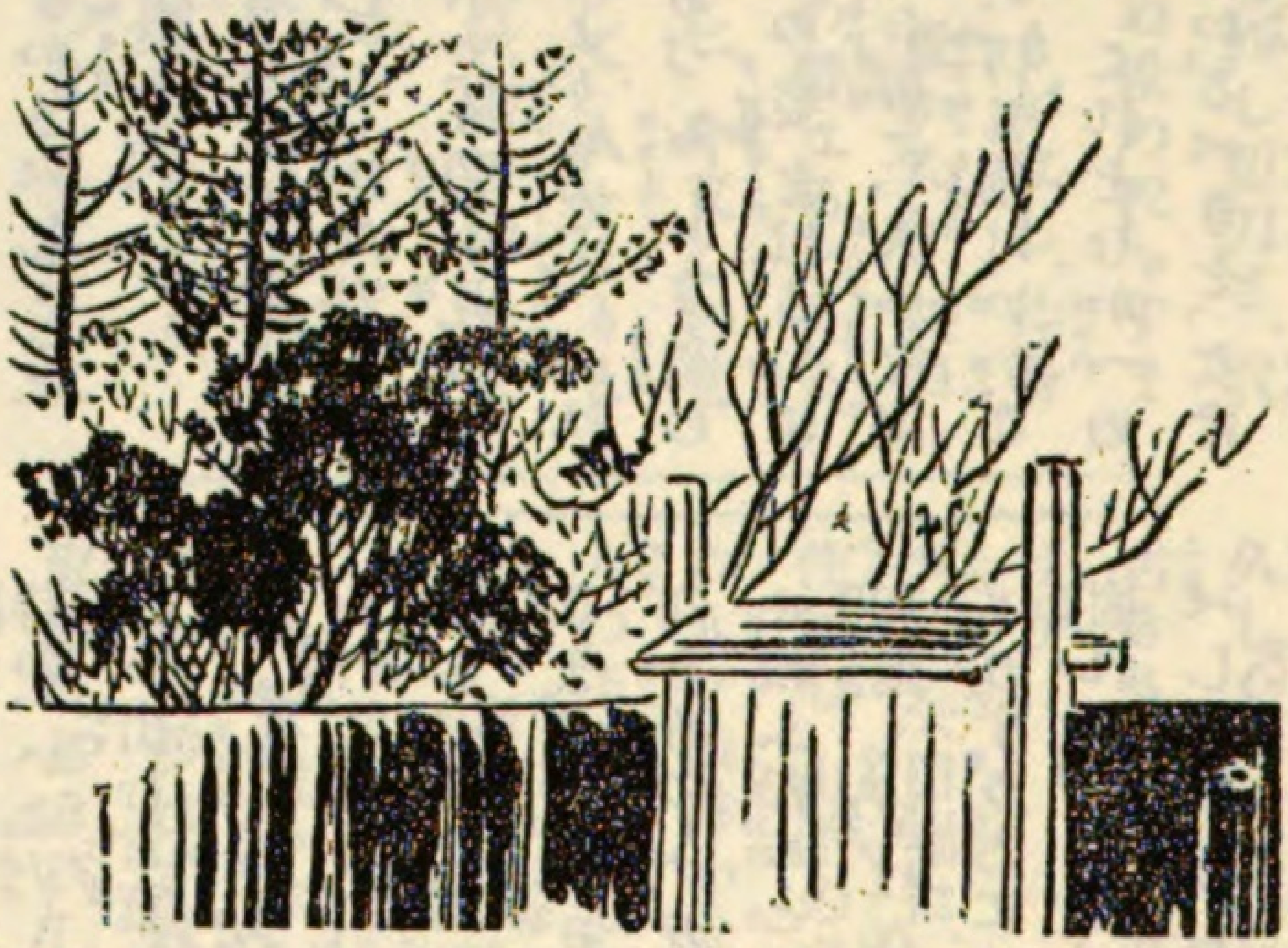
三宅花圃女史

梅田のさみたれ

あづさゆみ、はるの習ひと遠近の、野山の草のゆぐむやうに機熟し時至りぬるはおのつから志からしむる所にて人の力の今更に詮術なきがごとく一日〳〵と世の有樣も花散り、青葉しげるにつけて、錦旗東下もちかきにありといへば、江戸八百八町の老若 男女右徃左徃に走せちがひ、一日も蹈てたへて他藩の士にこの土地を蹈ませまじといきぐむほどに、とても一度は血を見ずし

てはおさまりがたくおほゆれば、まづ老母、嫂、幼兒二人、予の妻、息子一人、を千住在竹塚村梅田の里へ立退かしぬ。

これより先、彼海軍引渡しの前にいと可笑しき物語こそありたれ、予の住居、山下の家に朝とく肩の錦きれいかめしく、装ひたる一小隊の兵を率ひて、中牟田倉之助と名乗り、予に面會を乞にき、取次し僕は、うちおどろきて、こは容易ならぬ筋なめり、とにかく逢見ば、事そむつかしかるべき、裏口よりいづ方にも立退き給へ、とそゝのかせば、又一人の、否々、官軍にうしろを見せん事、三河武士の流れをくみし御身の、耻や此上なからむ兎角は逢ての後の沙汰ぞかし、かまへてわろびれぬさまに、家のうちもとりつくろはむなど騒げく、それより、我意を得たり、ひそかにせよ、無禮なるぞ、と容易に中牟田を請じ入るれは、



各々予の上をあやぶみ、唐紙のかけにピストルを擬するあり、刀をぬきけはむるもあり、茶を持て出たるは、あまりに、心をもみた、怖氣やつきけむ、膝かしら定まらず、一歩々々とあゆみ近付ごとに、茶をふりこぼし、客の前に至たる頃は、はや一滴も殘さゞりしとぞ、のちの笑ひ艸にいひはやせど其時は如何なる用事ならん、と予もこゝろならず應接するに、中牟田は近きに、海軍引渡し事あるべきにより、其前打合せ置たしといふに、予は目付の職にはあれど、各其司とる所、それ〴〵差ありて、今與かり志らずとこたふるに、再度はとひきく術なくてや、其儘に立歸りぬ、かく官軍と見れば、早我々に害を加へむものと怖ろゝ頃なれば、肩の錦片、猩々めきたるかぶり物、みな胸わろくおぼえ、いとにくきものにおもひぬるなり、とおくして世はなほあれにあるべき空合なるに、梅田

村の住居は、都に程近し、おぼつかなくもおもふ折、幸手なる眞中泰助(忠直)は先考石庵先生の塾に在りしものとて、事ある時は、いざかなりとかねて通じつるをたのみて、そこに引移らせむ力心やすかるべしとて、暇なき暇を求めて、馬にて梅田村へと赴きぬ、かなたには田舍人のまめ〳〵しく、日ごと〳〵にうどんそばなど、もてなしくるゝも心くるしくてひたすらにとくおさまりなん江戸の空をのみ待いたり望み見るほどに、日頃はふれど、いまだに、何のたよりもなく、つれ〴〵佗る時しもあれ幼兒の耳とくもめづらしき馬の蹄の音は駄馬にあらじとかけ出て、予の姿をはるかに見つ、おぢ上よ、父上よ、とよろこび合圖に、人々立出て、こはいかにして、家の方はいかに、扨其物はいかならむ江戸のさまなりなどとはるゝも、これをむかへぬべきたよりならは、さだめてうれしかるべきを、なほこゝもとおやふげなれば、程遠く立退くべしといひさとすべき心つよさを、恨めしくも、かなしくも、思ふらむと兄の子二人、我子一人、年老にし母に、嫂、わか妻、右に左に並居させて、かく心細き事をしもいかでかかたり聞えむ、と不覺の涙もこぼるゝをとはしらで、この人々はわれを迎ひの爲かと斗り、たのもしげなる面持の、いよ〳〵あはれに、涙もさしぐまれてしばしはいひ出む言葉もなし、とはいへ、かくてたゆたふ時ならねば、かいつまみ、江戸のさまを物かたりて、とかく幸手一行て、こそいひ聞せめ、こは當座の用意にもと、とりならべたる小判と、さもうらめしげに、人々見やりつゝ、なまじひに、見えさせねばこそたのみもかけざれ、おさなきもの丶、父上よ、叔父よ、といふに、また〳〵迎へさせ給ふためとのみ、おもひたのめしはかなさよ、なほ程遠く、立はなれぬべき路用とならばこなたはいまだもうすうとにはあらず、御身の上こそ、心もとなけれ、亂れし世には、いとゞなくてかなはぬはこれのみなるべし、枝かつらを給へなどいひつゝ、さめ〳〵と打なく、嫂は氣雄々しけれども、さすがに、外にたよりなけれは、音にたてゝ、この末、よそにさすらへて、いかならん目を見んとするなど、いひ合ふ、あはれなることかぎ

りなし、中にもこゝろにかゝる、かつは予が宗家の嗣としおろそかならず、思ひ聞ゆる、亡兄の子朔郎が性從順にしていといたいけに、生たらたる、側についゐたるをよび近づけ、なき兄の物好しく拵へられし短刀と、我腰よりぬきて、其手にわたし、翌日しれぬ世のたゞすまゐ、これと一生の別れになりなんもはかりがなし、片身とにはわらぬこの短刀、今日此子に傳へ置かんが、後日の便宜ぞ、とそれとなき覺悟も、亂世の習なるを見る事、きく事、悲しきかず〳〵をくりかへし、今又この短刀を取出しに、いよ〳〵涙もさしそひて、人々よりとのみうち泣きつゝ立わかれしを今思へば、實に床上よりに喝采とうくべき愁嘆場の一幕なりし、

さてはなしかはり、てかの海軍引渡の後、大久保此家にて、麻上下を脫棄丹波屋にてしたりか腹もはりたり、山下の家は、はや家族退きてあらず、このまゝにそこに立かへらんか官軍の彼是と面倒なることもあらん、と早職を辭したる身なれば心やすく牛込身付外より船にのり馬を馬丁供の者共と立かへらせて、本所當場に別莊の料として、購ひ置ける地所に、予の佛國にありて留守中、其一部分を分けて、矢田堀が建たるまゝにて、世の中騷がしくなりしに、疊も建具もあらざりしを、家に久しくつかひし老僕のその至りにあるをよびて、俄に古きものかひもとめさせ漸くこゝに起臥すべくなりにけり、

其後、矢田堀は、蠣殼町の本宅に歸りて、我一人こゝに住居し、山下の家は、上野の直下にあるにより、彰義隊の人々澁澤小太郎(榮一の養子)などをはじめ、多くの人の下宿のごとくなりて、予も往來せり、海軍の方は、一度、房州館山まで落行し榎本を追て、勝かの地に赴き、とかくの末、朝迄にて榎本の主家に忠なるを嘉みをられ、軍艦の半を德川家にあづけられんとて、榎本もさのみは爭はず艦隊を率ひ品川に錨を卸しぬ、陸上この取締りもきびしくて往來するものなど、譏察を受ることもあれ、水路までは行とゞかず、番場も大川の傍になるよう、舟揖の便をかりて、しば〳〵こゝに往通ひす、固より前將軍の面諭を守る予なれば、敢て此輩と煽動

すにはあらねど、またその雄ゝしき士氣はたのもしくおもふところあり、人ゝの爲には及ぶたけの力をかしたることありき、

猶も彰義隊の上野にありて、宮を保護し、徳川氏の家廟を守制するも、互ひの意氣衝突して、遂に反賊と見なされ、官軍追討あるべしと聞しかば、いかにもして、これと沮まばや、と平岡庄七（悲の文）と共に、さみだれかきくらす大雨中とかけまはり、あだ骨を放つるも、予が愚を誇るやうなれど、また可笑しき物語なしとにはあらすとて、一息にかはりつゝけ賜ひぬるに、其折から血氣のさまなつかしく、今の頭に霜みゆる、幾年なみもかきかぞへられ、まづ一ト休みをさせたまひぬとゐきらひまゐらせつ、

花ならぬ花

すみれ女

我が信濃の國は、蕎麥の產を以て名あり、稲刈る頃、ひとしう刈り取られて、やがてましろなる粉となるを其の花ざかりの頃は、畑一面に白うして、雪かともあやまたれ、あるは有明の月に、春の花をおもひて、而かも彼にまさるやさしさよ近頃山住になれし身の、この花いとこのむやうなりぬ、歌なからめや、句なからめや今つたなきをしるし見ばやとて

うつゝなき夢がたりにも似たる哉
　さぎりの奥の秋蕎麥の花

ほこり多きみやこの人の秘めて見ん
　つゆよりしろき花の秋そば

其いろのあまりにしろし蕎麥の花
　そが唇にべにすこし給へ

有明の月にみどころ多かりき
　花ならぬ花のいとしろくして

くれなゐの襷をかけて鎌もちて
　乙女ほゝゑむ秋そばのもと

鎌もちて蕎麥刈る里の乙女子に
　秋のあはれをとひますな君

うらみ多きうきよの秋に唯ひとり
　十四の乙女花にほゝゑむ

里人が野をゆく姿いそかしや
　こゝに花ありこゝにつゆあり

もとより惡詩、かのうつくしき花の福音を傳ふる能はず、遺憾この上なけれ共、いさゝかまゐるべともならば花の幸なり、この筆の幸なり、

學藝

日本名蹟雜話

文學士 喜田貞吉

大和めぐり（つゞき）

生駒、葛城、宇智の地方、

（關西鐵道本線及南和鐵道方面）

奈良市及び、舊平城京の遺址のほとりの名蹟は、ほゞ見終りたれば、之より關西鐵道の便を借りて、奈良より西南、郡山、法隆寺、龍田の方面の名蹟を觀察せん。

奈良より西南、大阪に通ずる鐵道は、もと大阪鐵道會社の線路なりしが、先年關西鐵道會社と合併の事ありて、今は關西鐵道の、名古屋、大阪間の本線となれるなり。

汽車奈良驛を出でゝ十分、約三哩にして郡山驛あり。

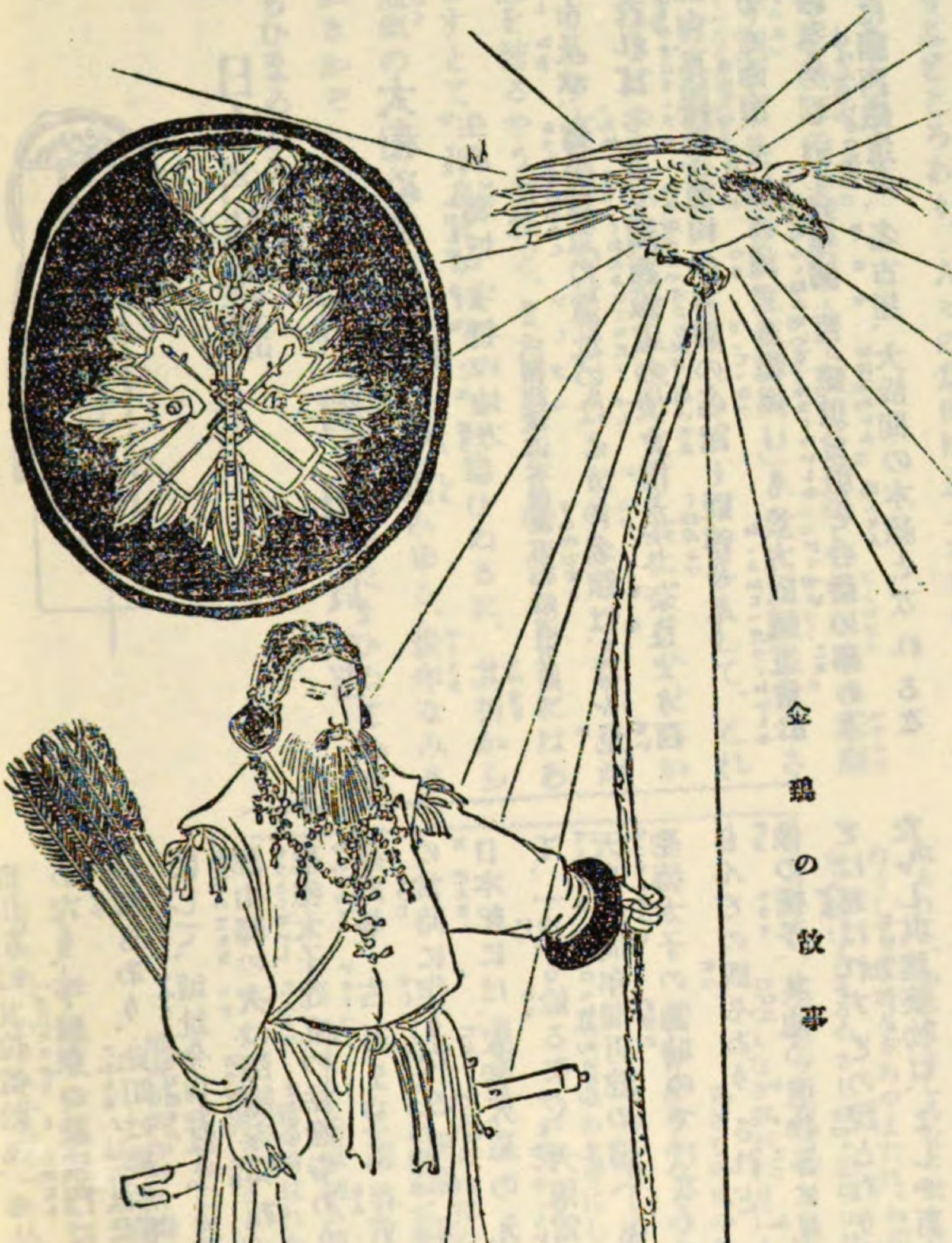
郡山町は其位置恰も、もとの平城京の敷地の西南隅にあたり、平城京の羅城門は、郡山町の東方に其址ありとの說もあり、此町は維新前まで、柳澤氏十五萬石の城下にして、城址今尙存す。

郡山驛の次は法隆寺驛あり。停車場を西北に離れて、聖德太子建立の法隆寺あり。金堂、講堂、五重塔、東院夢殿等、古のまゝに存す。寺に聖德太子の遺物、太子の當時に作りたる佛像、其他古物を傳ふる甚多し。

日本紀には、天智天皇の九年四月、法隆寺に火災ありて、一尾も餘るなく、大雨雷震ありしよし記るし、元明天皇が同年間再建の傳へもあり、かた〲今の建築は聖德太子の當時のではなくて、奈良朝に出來しものならんとの說もあり、されど、一方には、金堂內の壁畫、佛像の樣子、其他の遺物等に見るも、一度火災ありしものとは思はれず、との說とありてまた一定せざるが如し。たゞし其建築物は、よしや再建にもせよ、其形式はむかしのまゝならんといふ。

法隆寺はもと斑鳩寺といふ、聖德太子の宮室のありし

所、次で寺を建つ。寺の東方に富緒川あり、斑鳩の富小川といふ、



金鵄の故事

いかるがの富の小川の絶えばこそ
　我がおほぎみの御名わすらえめ

とは、此川に事よせて、太子をことほぎし歌なり。富小川一に鳥見川といふ、上流に鳥見莊あり近年改稱して富緒村といふ、富緒川の名に取りたるべけれど、鳥見といふ方古名なり。太古神武天皇の東征し給ふや、河内國日下の地より、生駒山を越えて直ちに大和に入らんとし給ふ。山に孔舍衙坂あり、山を越ゆれば直ちにこの鳥見の地なり。鳥見に長髓彦あり、天神の裔なる饒速日命を奉じて、威を近郷に振ふ。天の大和に入り給ふや、先づ第一着に、この鳥見の地を平ぐるを目的とせられしが如し。長髓彦即ち兵を出して孔舍衙坂に皇軍を迎へ戰へり。此役皇軍利あらず、皇兄五瀨命は、賊の矢にあたりて、遂に薨去し給ひぬ。天皇其急に破るべからざるを察し給ひ 道を轉じて紀伊より大和の南部に入り、盡く其道筋の從はざるものを討ち平らげ、最後に東方より再び長髓彦征伐の軍を進め給へり。此役には、天皇さきに長髓彦の爲に皇兄を失ひしを痛く憤り給ひ、必勝を期し、軍歌を作つて士氣を鼓舞し給へり、其歌の一に曰く、

　瑞々し、久米の子等が、垣本に、
　植えし 薑 口ひゞく、
　　我は忘れず、打ちてし止まん。

而も長髓彦の軍強くして 皇軍容易に勝つ能はざりき。たま〳〵金色の靈鵄あり、來つて、天皇の執り給へる弓の弭に止まれり。其鵄光りかゞやきて、電光の如く、賊軍仰ぎ見る能はず、皇軍遂に大勝を占め給ひ 大和平野の地こゝに平ぎて、帝國萬々歳の基を定め給へり。それより此地を鵄邑といふ、後に訛りて鳥見といふに至れり。明治二十二年、今上天皇この大瑞を思召され、金鵄勳章の制を定めて、陸海軍人の武勳を顯影するの法を設け給ひぬ。今日名譽ある軍人の胸に輝くもの、實に二千五百餘年前に、此地における激戰の故事より起れるものなり。

法隆寺の西方に龍田村あり、龍田川この所を流る。古來紅葉の名所なり、

千早ぶる神代も聞かす龍田川
　からくれなゐに水くゝるとは

神なびの山を過ぎ行き秋なれば
　立田川にそ幣は手向くる

龍田に片桐且元の古蹟あり、且元もと豐臣秀吉につかへ、嘗て賤ヶ嶽に於ては、七本槍名譽の一人なりき。後攝津茨城に於て一萬二千石を領す、關が原役後、更に龍田二萬八千石に封ぜられ、大阪役後遂に自殺して終れるは、世の知る所なり。

龍田の西南三鄕村字立野に、風の神龍田神社あり、官幣大社に列す。萬葉に

我が往きは、七日は過ぎし龍田彦
　ゆめこのはなを風に散らすな

とある、これなり。

立野に龍田の關址あり、天武天皇八年、龍田の關を置きし事、國史に見ゆ。

龍田の西方、信貴山あり、松永久秀嘗て城を築いてこゝに居る。山に朝護國孫子寺あり、毘沙門天の像を安置す。毘沙門天一に多門天といふ、久秀毘沙門堂の上に櫓を築き、多門櫓と稱す。城に多門ある、こゝに始まるといふ。

法隆寺驛の次は王子驛なり、大和川を隔てゝ、立野の東南にあたる。關西鐵道こゝに支線を出だし、高田・畝傍を經て櫻井に至る。高田よりは、更に南和鐵道の分岐して五條に至れるあり。

王子に古への片岡の地、孝靈天皇の片丘馬坂陵あり、顯宗天皇の丘傍盤坏丘南陵、武烈天皇の傍丘盤坏丘北陵など、皆またこの南方にあり。

王子は達磨寺あり、寺に筒井順慶の建てたる松永久秀の墓あり、むかし聖德太子この地に散歩して、飢者を見る、名を問へども答へず、即ち衣と食とを與へて去る、後に之を見せしむるに、飢者已に死せり、太子大に之を憐れみ、厚く葬らしむ。數日にして、太子使をつかはして之を見せしむるに、墓は其まゝにして、中空しく、太子の與へたる衣は疊んで棺上にあり　時人之を異しむ云云と、日本紀に見ゆ。後世この飢者を以て達磨大

師に陪會し、遂にこゝに達磨寺あるに至れるなり。

王子より、關西鐵道櫻井線に乘りかへ、南すれば、下田驛を經て高田驛を達す。安寧天皇の浮穴の宮址と稱する所、此ほとりにあり、この邊の地、今は浮穴村と稱す、宮名に取れるなり。

高田より西方、當麻村あり、むかし垂仁天皇の時、此地の人當麻蹶速强人を以て聞ゆ、天皇即ち野見宿禰を出雲より召して。之と力を角せしむ。之れ本朝相撲の始めなり、といふ。宿禰功を以て蹶速が地を賜はる、因てこゝに腰折田といふあり、宿禰が蹶速の腰を折りたるを傳ふるなり。

村に當麻寺あり、禪林寺と稱す、觀音の像を安ずる曼陀羅堂あり俗に右大臣藤原豐成の女中將姫が、蓮莖の糸を以て織りたりと稱する曼陀羅を藏す。中將姫の事蹟、正史の尋ぬべきなし、蓋しお伽斷雲雀山より出てしものなり。

鐵道櫻井線は、高田より東して、畝傍をすぎ、櫻井に終る。此邊古蹟甚多し。更に後に至りて說くべし。

高田より南、南和鐵道あり、新庄、御所、掖上葛、北宇智を經て、五條に至り、こゝに紀和鐵道に連絡して、紀伊に通ず。

新庄の東、同村字北花内に、飯豐天皇の埴口丘陵あり、飯豐天皇は、顯宗、仁賢二帝の御姉なり、一說に御妹ともあり。清寧天皇崩じて嗣なし、億計、弘計の二王相讓つて皇位、空し、飯豐天皇即ち忍海角刺宮にありて朝政をきゝ、自ら忍海飯豐青尊と稱す。宮址は、御陵地より南方なる、忍海村大字忍海にありといふ。時當歌人歌うて曰く、

大和邊に、見か欲しものは忍海の　この高城なるつぬさしのみや

御所の邊には、綏靖天皇の葛城の高丘宮、孝明天皇の掖上の池心の宮、孝安天皇の室の秋津島の宮の遺址と稱する地あり。今、掖上村、秋津村等の名あり。又、孝明天皇の掖上博多山上陵、孝安天皇の玉手丘上陵、日本武尊の白鳥陵などもあり白鳥陵は、伊勢の能褒野にも、この葛城の秋津にも河内の古市にもあり。尊の靈

白鳥となり、飛んで大和、河內に至れるより、各地に其陵あるなりといふ。

御所の邊尙遺蹟に富む。武內宿禰墓は、所御の南室にありとの說あり、宿禰もと宇智郡の人、故に「內のあそ」と呼ばる、宇智は葛城の隣郡なり、子孫此地方に蕃殖して、葛城氏巨勢氏大に顯はる巨勢また此地方の地名なり。蘇我氏また此地方にあり、蝦夷豪奢にして、祖廟を葛城の高宮に立て、八佾の舞を成し、又今來に大陵小陵を起し、擧國の民をして其役に從はしめ、以て蝦夷、入鹿父子の墓とす。父子誅に伏するや、許されて墓に葬るとあり。これ等の遺蹟皆此地方に求むべし。

此西方、河內境に葛城山あり、南の方金剛山に連なる。金剛山の事は河內の條下に述ぶべし。葛城山に岩橋と稱する巨巖あり、むかし役行者此山にありて修行し、常に吉野郡の金峯山に通ふが爲に、こゝに橋を作らんとせしものなりとの俗說あり。行者は其名を小角といふ、よく鬼神を役し、水を汲み薪を取らしむ、若し命を用ひざるなれば、即ち呪を以て縛す。後世修驗道と稱し、深山幽谷を跋渉して道を修する、所謂山伏は、皆この役行者を祖とせるものなり。

御所の次は葛驛なり、吉野に遊ばんには「こゝより下車して、吉野河畔の下市に出づるを順路とす。

葛の次は北宇智、次は五條にて、南和鐵道終る。五條は吉野川の畔にあり、紀伊より伊勢に通ずる要路にあたる。この東方、宇智村字小島に榮山寺あり、藤原氏南家の祖武智麿の建立にして、寺北に其墓あり。

其東方に阿太村あり、こゝは古へ阿陀大野と云ひし所にして、萬葉に、

　眞葛原、名引く秋風吹く每に
　　あたの大野のはぎの花散る

とある之なり。神武天皇の大和に入り給ふや、吉野川に梁を以て漁りするものあり、直ちに天皇に隨從す、之れ阿太養鵜部が祖なりとある、また此地の事にして、こゝには太古已に鵜を以て魚を取る漁者のありし事も知らるゝなり。

五條の西南、坂合部村字大野より、古へ內の大野とて、帝

王の遊獵などありし地なり、之も萬葉に、

たまきはる内の大野に馬並めて
あさ踏ますらし、その草深け野

とあるところなり。

之にて大和平野の西部は終る。次回には、畝傍、初瀬、多武峰、吉野地方を述ぶべし

太陽の話（つゞき）

女子高等師範教諭　岡田光子

◎前の事をとりつまんで見ると下の如くです。

一、太陽の表面には一面に光つた斑點がある。

二、太陽の表面にはまた、大小種々の黒點がある。しかも其れが絶えず形をかへつゝある。

三、太陽全躰は、非常な高熱の氣躰で圍まれてゐる。

之等の事が知れると其れを基礎にして太陽の本躰は如何なるものだか、理屈をつけて考へて見たくなりませう。古から人々の考へついた事に依つて見ると、まづかの太陽表面の光つて見ゆる部分は、固躰でなくて、一種雲のやうなモヤ／＼した性質のものであらうと云ふ事です。而して、かの黒點はそのモヤ／＼した光つてるものゝ切れ目、窪みで、薄黒かつたり暗黒だつたりするのは、その凹所の淺い深いで相違ので、甚しく凹むだ處は、固より暗黒に見える道理であると。そうすれば、成る程あの黒點が消えたり形がかはつたりするのも、尤で、一躰の表面がモヤ／＼した雲のやうなものであれば、其れが始終動きまはつてこゝに凹所が出來るかと思へば、直に塞がるし、左樣かと思うと、亦他所に凹所が出來るといふやうな工合になるから。

其れから、その光つてゐる雲見たやうな物は、我々が雲といへば水の分子から出來てゐるのであるが、之は勿論そうでなく、種々の金屬例へばソヂユーム、鐵、マグ子シユーム、銅、亞鉛などの分子から出來てゐるのであらうといふ事です。一寸吾々周圍のものについて考へては、金屬の分子から出來てゐる雲ナンテ妙ですが

考へて見れば分ります。氷に熱を加ふれば勿論溶けて水になります。鐵のやうな金屬でも、熱を加へればヤハリ熔けます。但しその熱の度は非常に高い。氷が華氏の三十二度でとければ、鐵は華氏の二千度の熱でなければとけません。此の次に、その水に熱を加へれば水の蒸氣になるも同樣に鐵だとても、更に熱を與へればやはり鐵の蒸氣に化するわけです。しかし之にはマーどれほどの熱が入用であるか、人間の力では勘定のできぬ事ですがその位の熱度が即ち太陽表面の熱度なのですから、金屬でも何でも溶けてゐる道理ではありませんか。そのまた外面に浮んでゐる太陽の大雲は前の金屬の氣躰に化したものでも一層高熱なのであります。

そこで太陽の表面の事はそうとして、内部はどんなであろう。吾地球の如き冷たい固躰であろうか。それとも中までまだ固まらないものであろうか。昔ウヰリアム、ハーシエルという天文學者は、太陽は中心に冷たい黑い固躰が有つて、その周圍に今申した雲がとりまいて居ると考へて、あの黑點はその雲の切れ目で、その中央の暗黑部は即ち太陽自身の躰が見えるのだと申しましたが、この説は種々の點に不都合があるので、破れてしまひ、今では太陽の内部はまだ固まらないものであろうといふ事になつてゐます。

◎吾太陽が地球に及ぼす影響の大きな事は、すでに前號にもザット述べた通りて吾地球を照らし吾地球を暖める、大切な光と熱との源でありますが。それのみならずも一つ太陽の我等に對すを恩惠の一として、必らず記すことを忘れてならない事があります。これは即ち太陽の化學的の力とも申すべきて、之が著しい働をします、かの植物を御覽なさい。蒼々と繁茂してゐるのは何の爲てあるか。固より水もなくてはならず、養分もなくてはならないが日光の力大に與りて力あるので、かの熱帶地方の植物が、丈も高く枝葉生ひ茂つて、日の目も通さぬほどになつてゐるのや、春になつてソロ〳〵日が長く日あたりがよくなつて來ると、草木がめつきり生長するのが何よりの證據です。此の日

光がさらば植物の爲に如何やうな事をするか。いうまでもなく炭酸を分解して植物に入用な炭素を與へるので日光でなくては炭酸の分解をするものがないから、日光をうけなけ植物は、つまり植物たる炭素を得る道がないのです。實に太陽は植物界の維持者であると申して宜しい。だから吾々は野邊に青々してゐる春草を見るにつけ、山上に亭々たる松柏を仰ぐにつけ、太陽の勢力がそれらの中にどれほど籠つてゐるかを考へねばなりません。

そこで、モ一歩進んで考へてみるに、吾々は働くために食物を取ります。或は肉を食べる、或は穀物を食べると申しますが、よく思へば何れの食物も皆直接關接に植物界から來るので、即ち吾々は日光の力の籠つてゐるものを食べるのです。それらの食物が吾々の躰内に入れば、太陽の力も移つて吾々の躰に入ります。だから吾々がその食物によつて力を得て働けば、その力は自分のもの丶やうで實は遠く〳〵太陽から受けたものです。つまり人のする仕業は皆太陽の力だといふことになつてしまひます。

それからあの石炭は御存じの通り昔の植物です。幾千年以前に日々月々それらを照らしそれらを育てた太陽の力は、その中に依然として存してゐます。て、今それを掘り出して焚けば、中に籠つてゐた太陽の力が出ます。その力によつて水は蒸氣になります。その蒸氣は機關車を運轉させて、百里の道もまたゝく間、千里の波濤も夢の間にゆかせ、又糸を紡ぎ、布を織り、紙を製し器物を造るその器械を運轉させます。して見ると、世の中の力を要する事業もやはり關接に太陽がしてゐるといはねばなりません。

◎現在の太陽の有様はかくの通りでありますが、行末は如何でせう。ヤハリ今の有様で永久に續くでありませうか。之は疑ひもなく大問題であります。凡人は食物なしで働けないし、火も油の供給がなくては燃えない道理で、太陽だとてもこの理に外れるわけはありません。吾地球のうける熱の分量の二十億萬倍も宇宙に向うて放射してゐる太陽は、如何なる供給をうけてゐ

ろでせう。それとも亦全く日夜熱を放つばかりで、少しも外からの助けはないのでせうか。何れとも今の處てははつきり分つて居りません。

人によつては、太陽の熱は流星の觸擊によつて供給されてゐるのだと申します。なぜかゝる說か出たかといふに、たとへば流星が非常の速度で飛んで來る時に、他の運動してゐる躰に衝突するもの、又は地球の大氣の中に入つて之とこされ合ふなどいふ時には高度の熱を發するものであるから、太陽の表面に之等の流星がぶつかつて、それで太陽は熱を保つてゆくのだといふのです。

なるほど日々時々太陽の面に向うて落つる流星の數は無數でありませうから、多少の熱はきつと之が爲に供給されませう。しかし之で以て太陽全躰の熱を供給しやうといふのはむづかしい。何故ならば然するには、地球ほどの大きさの流星が、百年ごとに太陽と衝突しなれけばならない勘定になるのだそうで、左樣の事は他の點から推して到底信じられない事だそうですから。

然らば第二の場合、即ち全く他からの供給はないものでせうか。もしさうとすれば、太陽はいつの世にか光も失せ、熱も絶えて冷たい暗黑な大塊となり了る時が來なければならないわけで、その時は從うて、吾地球も破滅の時でありませう。しかし人の歷史あつて以來、その光その熱は如何に減じたか分らないが人間としては、少しも減つたという感じは起らないのであります。して見れば、まだこれから先幾萬年かの間は、まだ〱我々を照らすに足るだけの光熱は十分にあるのでありませう。

まづ之が我々が日々親しめる太陽のごく大畧の御話であります。日蝕の事だけのこりましたが、之はあまり長くなりますからこの次にまはす事にしました。

(完)

養生訓のはなし（前號のつゞき）

醫科大學 石原笠軒

科學の發達に乏しき當時の事でありまするからして、養生と云つても、此八卷に掲げられたる範圍を超すことが出來ず、日光の働きとか、空氣の衞生上に於ける價値とか、土地の性質とか、飲料水の事とか、云ふ樣な大切の點があまり論じてないのは決して無理ではなく、今日科學を修めたる人の頭腦でもッて一々是等の缺點を指摘するのは穩當ではないでしやう、けれども、事實は事實であッて、古來人々が實驗したる事實が今日吾々が實驗する事實と差異せぬ事が澤山あります、養生訓を讀んで見ますと、成程、能くもかくまで注意の至ッたものであるかと思ふ事が多いのです、殊に説明はしてないとも、今日吾人が科學的に實驗する事實と符合するのを發見致します、けれども、往々説明のしてある所があッてこれを見ますと、如何にも荒唐無稽の點があるのです、總論に於ては、養生の術の基礎となるべき理想を説ける所があります、即ち、養生の術を説明したのであッて、是は、此書に限らず、凡て當時の醫書に於ても同樣の趣向をもッてゐるので御座ります、先づ、根本的理想は如何なる處から起ッてゐるかと申すに、決して今日の如く物理學や化學や、地質學や、動植物學、生理學、解剖學なんど云ふやうな所から來たわけでなく、儒學より源を發したる理想であります、これで以て、凡ての顯象の説明を試みたのであります、何ぜ、昔時の醫學が儒學の影響を蒙ッたかと云ふことは、此處には申上げませんけれども、我邦の文化は、漢土に受けたので、醫學も雄略天皇の朝に、三韓を經て彼土のが入りしを初とし推古天皇の時唐の醫學入り、保平以前室町氏の末に宋の醫學入り、其後李朱金元の醫學が起ッたと云ふ顯梅でありますから、自然にそうなるわけであります、それでは、どんなふうに説明してあるかと云ふに、先づ、人の養生を務めざるべからざる所以を説いて曰く、人身は父母を本とし、天地を初めとし、天地父母のめぐみをうけて生出し、又た養はれたる我身

なれば、わが私の物にあらず、天地のみたまもの、父母の殘せる身なれば、つゝしんでよく養ひて、そこなひやぶらず、天年を長くたもつべし、等をはじめとし或は人の體を害ふは慾を恣にするになり故に慾を愼まざるべからずと云ひ或は陰陽を以て說き、或は水火に歸する等、要するに根本的理想を儒學に置くや明なり、其他、或は腎は五臟の本なりなど云ふの類は、當時の事とて誠に奇とするに及ばぬ事であります、

私が、養生訓を讀みて、敎訓を受けたのは、精神上の影響でありまして、智識上の所得は少ないのであります、今日の醫學上にも精神と身體との關係、精神の狀態と疾病との關係が說いてはありますし、殊に疾病に對して精神療法とでも申さふか、患者の精神を導きて、治療の助けとなる樣に致す事が說いてあります、けれども、吾々は、日本に生れまして日本の道德觀念が養成せられて居るのですから、やはり道德に關することになれば、日本的に說明して貰ふ方が早く胸に落ちるのです、處て、養生訓では、精神を安靜に、和樂に導く樣に、丁寧親切に說いてあつて、それが、殊に、日本風の道德觀念に關係して說いてあります、それで平常これを讀みて精神が安靜、和樂にする工夫をすれば、病氣の時には、大いに助となる事と感じて居ります

それから、また、總論の內に元氣と云ふことを說いてあります、此元氣と云ふ事は、仲々、面白味のある語であつて、今日のことばで說明すれば、凡て、人間が衞生の規則を守り衞生的に身躰を取扱ふ時は、即ち、眞の健康を得べく、從つて、身躰のはたらきと、精神のはたらきとが活潑で、はき〳〵してゐて、つまり生活現象が完全であるのです、元氣と云ふ事は畢竟するに、人間の總生活顯象が健康完全であると云ふ事を抽象的に言ひ表はしたものでありましやうと存じます、

要するに總論は本書の骨子があつて、凡て儒學の觀念を以て養生を敎へ說いてあるのが特色です、此點が吾々が服膺して最も益ある所でありまする、けれども、其間には澤山非科學的の事があるのですから、それは前以て承知してゐて、それまで信用してはなりません

右て本書の大躰上の事を御話致しました、次に卷之三以下に關して短簡に御話致します、是は本書の各論とも云ふべきもので、おもに實地的の方であります、依て、

四　各　說

として、極々特色のある所を述べましよう、卷の三四飲食の編に於て說いて曰く、元氣は生命の本にして飲食は生命の養なりと、是れ本編の眼目なり、然れども前に說くが如く、元氣は身體の總生活顯象の抽象的表示なれば、即ち生命其物と同義なり、故に飲食は即ち生命の養にして、また元氣の養たらざるべからず、其ほか、五臟の本は腎にして、後には、脾胃を以て本とし、飲食物は、脾胃先づ是を受けて消化し其精液を臟腑に送るなり、故に養生の道は、先づ脾胃を調ふるに在り、これ人身第一の保養なりと、是は、消化の生理を說明するに相當すれども消化は胃腸の司る所にして脾臟はこれに與らず、今まこれを批難する、恐くは酷に過ぎんかな、總じて、昔の人は、人身の衞生上、飲食を以て最も大切の事とせり、口は萬病の本なりなど云へり、然り、飲食は愼まざるべからずと雖も、獨り衞生上に、最重要の位置を占むるものとは云ふこと能はず、また、他にも、餘多大切の事あり、兎も角も、古人は、飲食を以て衞生上に最重要の關係ありとしたるは皆一なり、

此ほかには、大に吾々の參考となるべき實地的の事項が列擧してあります、一々、詳しくは申しません、其内一ツ御話致さんに、衰病虛弱の人は、常に魚鳥の肉を味よくして食せよとあります、古は、あまり肉食が流行ませんのに、實際に滋養のあることを知りて、これを賞揚し、衰病虛弱の人に勸められたのでありまする、なんと、感歎すべき事ではありませんか、飲水の事に就きて、曰く、天よりすぐに下る雨水は、性よし、毒なし、器にうけて、藥と茶を煎ずるによし、雪水は、尤よし、屋漏水、大毒あり、たまり水は、のむべからず、たまり水の、地をもり來る水も、のむべからず、井のあたりに汚濁のたまり水わらしむべからず、地をもり通りて、井に

入る甚いむべし、とあります、一點批難を打つべき處がありません、

同食の禁忌と云ふ事を說いてあります、これは、今日でも、世俗で深く信じられてゐる事ですから一言致しましよう、乃ち食ひ合せと云ふ事です、譬へば、猪肉と蕎麥、とか梅に牛肉などを同時に食するなどてす、ちよいと考へば、胃腸の內で、何か、是等の物より、化合物が生じて、有毒の物質となり、爲めに害を釀すかのやうに思はれます、しかし、此處に書いてあることは直接に當てにならぬ事が多くて、強ち信ずるに足りません、有毒の物質を化成するなどと思はるゝものはないのです、けれども、消化のよくないものを同時に數多く食すれば、自然、胃腸を害するのは當然です、此點で說明した方がよからうと存じます、油濃き物と醱酵し易きものと同時に食すれば、兩方共に胃腸に害あるからして、害が二倍集まるわけてす、まあそんな所でしよう、

飲茶の編なども、ちよいと面白きふしがあります、煙草の歷史も確かなものでしよう、一覽あれ、

卷之五にも面白い所があります、居住、導引、按摩、洗浴などに就き申上げ度いのですけれども、長くなるから、略して後日に讓りましよう、

卷之六は、私が、常に好んで讀む所であります、即ち愼病と擇醫てす、此處には、今日から見れば、殊の外、おかしい事も多くあり、ますけれども、又、甚だ面白い點も多いのです、愼病の內で、神怪奇異なる事、たとひ、目前に見るとも、必、鬼神の所爲とは云ひがたし、人に心病あり(精神病なり)、眼病あり、此の病あれば、實になき物、目に見ゆる事多し(幻覺なり)、信じてまよふべからずと、嗚呼、明治の今日にても、世俗には、隨分迷信行はれ、八卦や、占や、水天宮樣や、天理樣の流行すること、何ぞそれ甚しきや、古の賢人は鬼神を語らず、三百年の以前にありて、尙ほ、此言を以て世人に敎ふ、今日の世俗豈に赧顏に堪ゆべけんや、擇醫の編には、吾人が服膺すべき條多し、醫は仁術なりと說の條の如き、又、醫は極めて高尙神聖の業なり、此心を以てすべしと敎ふ、げに、古人聖人不レ立ニ朝廷一、必隱ニ於醫卜之間一、と

云ひ、又、不爲二良相一則爲二良醫一の慨は、古の君子醫の有せし精神なりき、此心は今日も變らざれ、獨逸のウーホルヒロウ先生などの樣なる御方は、よい手本で御座ります、

卷之七用藥の編は讀む必要の無いものと認めます、卷之八養老の編は、一讀を要す、鍼灸に至りては、古來、病氣の治療上に、非常に重きを置いたものであります、現に今日も鍼醫なるものが隨分澤山にあります、殊に盲目などの不具者がこれを行へ、充分に患者の模樣を視診することも出來ず、消毒も何も無く、誠に險呑の事であります、かゝるものは、何故にやはり許してあるでしようか、灸治も、効もあります害も多し、是等の條は讀む必要はありません、

以上で先づザッと本書の大躰を御話致したつもりで御座ります、粗漏の點もありましよう、けれども平素感じてるふし〴〵を記るしましたれば其邊の處は御容赦を願ふのであります、本書は隨分色々とあります、廣く行はれた證據です、先年版行せられたのでは、東京女學館の西田先生が編纂校訂になりました益軒十訓と云ふ書は、活版の誤植も少く、尙ほ、本書のほかに五常訓、大和俗訓、和俗童子訓、初學訓文訓武訓、家道訓、樂訓君子訓を合んで居りますから、序にこれを御勸め中して置きます　（完）

日用食品道しるべ

高木とし子

◉獸肉と鳥肉

我國は從來穀食國民にして歐米の如く肉類を常食とする國民にあらざるを以て、一般に之を需用とする分量は極めて僅少なりしも人文の開明、衛生思想の進步と共に務めて其需用區域を廣めつゝあるを以て今聊か其効用及び成分の大略を述べん。

肉類を滋養食品とするの利益は其の多量の含窒素物を有するが上に、尙多量の脂肪、及び重要の無機鹽を含有し、調理容易にして且、消化し易きにあり。其成分は素

より同一躰の動物と雖も、部分の異なるに從て著しき差違あり(譬へは牛のロースと唱へて脊骨の左右鞍下の處にある肉は他の部分に比すれば遙かに美味にして多量の滋養分を含めるがごとし)且又牝牡、年齡、飼養法如何も亦大に其異同を生ずるものなり、即ち脂肪の含量愈ゝ多ければ、水分益ゝ減少して、他の諸成分の比例に於て變化を生ずるを常とす、若し含窒素物即ち蛋白質の如き成肉材料を要する時は瘦肉を取るべし、之に反して寒國の勞役に從事する人の如き、發温發力の料を要するものは肥肉を擇むを利益ありす、又牛肉及び羊肉に就て其肉質を撰むには其色鮮麗にして淡紅を帶び均齊にして强靭の組織あるを良しとす、之に反し濕潤粘着し且つ暗黑色を帶ぶるものゝ、肉は不良なりとす、鳥肉殊に野禽の肉は殆んど脂肪を缺如するを以て、一の特徴とす、若し多量の脂肪を存する時は中は、其味甚美ならず穀類若くは他の植物を以て飼養せる鳥の肉も、肉食鳥の肉に比すれは香味美ならずと云ふ。其の成分左の如し、

	蛋白質	脂肪	無窒素有機物	灰	水
△牝牛肉	二〇	七	〇	一	七〇
△豚肉	二四	三七	〇	〇	四七
△仝瘠肉	二〇	七	〇	一	七二
△馬肉	二四	〇	〇	一	七三
△鷄肉	一八	九	一	〇	七〇
△鴨	二二	三	二	一	七一

◉澱粉　(麪類)

粉類中穀粉、又單に粉といふは小麥の粉を云ふ、小麥粉は其碎粉篩過等の精粗に由りて、分子の大小は勿論成分にも異同を生ず、今之を理解せんと欲せば麥粒の搆造を知らざるべからず、小麥は種子と被膜より成れる子實にして其中心は白色半透明なる粉質を以て充滿せる巨大の細胞相集まり此部は殆んど全く澱粉より、成る、此澱粉塊の外部には含窒素物即ち成肉質吾人の身躰を組織する内となるものを含有する黃色の物質を以て充滿する方形細胞の一列あり、又其外部には加里燐酸鹽の如き多量の鑛物質を含有する六層の薄皮あり、此薄皮は吾人營養上價値なきものなるを以て碎粉の際豫め之を除去す、以上三部の比例に從て粉の優劣

成分の異同をも生ずるものにして最頁粉には木纖維、鑛物質、纖維素少なく、麥糠には多量の粉の木、纖維、鑛物質の他に脂肪を含有す、不消化物たる木纖維は麥糠に於ては六分の一の多數を占むれども、最良粉に在ては僅かに百分一に上らざるべしといふ。即ち麥粉は純粹なる營養食品なりと知るべし（即ち小麥の成分は蛋白質十一、と澱粉六十八と水十四とより成立つものを通例とす）

澱粉は植物界に汎く存在する處の一成分にして、吾人の食物中、發溫、發力の源質（即ち躰溫と力體との元動力となる者なり）多くは粒狀をなし、水に不溶性の含水炭素にして、糖化し得べき性質を有す、坊間販賣する處の澱粉は常に多量の水分及び痕跡の含窒素物鑛物質を含有するものと知るべし

麵類は▲饂飩、素麵、▲片栗麵、▲葛麵の類あり麥粉、山慈姑、或は葛粉を以て製す

麩は小麥粉を以て製す、生麩、燒麩の別あり。

腐皮（湯葉）は豆腐製造の際釜中の面に浮き凝固して濕紙の如き者を晒乾して製す以上三種の成分を舉れば左の如し

	蛋白質	脂肪	無窒素物	灰	水
△饂飩	四	〇	二五	〇	六八
△素麵	二	〇	壹七	〇	七九
△生麩	一三	〇	一四	〇	七一
△腐皮	五一	一五	六	二	二二

◉砂糖、蜜、飴の類

砂糖は日本在來の製產にあらず往時我國民は、只干歲櫐、熟柿、或は飴を用ひて僅かに甘味を覺へ以て砂糖の代用をなしたるのみ、砂糖の字を古記に見るに、孝謙天皇の御宇天平勝寶五年唐の揚州の僧鑑眞來朝の時持ち來りたるものと云ひ傳へ東大寺、献物帳に蔗糖二斤拾兩三分とあるを初めとす、又製法の本邦に傳はりたるは慶長年間、大隅國大島の人、直川某琉球へ航行の際、颶風に遇ふて支那へ漂着し、同地製糖の法を習ひ密く蔗苗を携へ、島に歸り、大和濱方、西濱原に栽へ、黑糖を製す、是れ本邦糖產の嚆矢なりと、明治廿一年本邦に輸入せる砂糖の價格は六百九十五萬五千二百八十六圓

なりしが、十餘年の今頃に至つては其三倍以上に至れり、砂糖は主として甘蔗及び甜菜より製する化學上含水炭素の一類にして、精製品は透明なる結晶若しくは白色の粉末をなし、或は製造の精粗によりて黄褐、黒色の砂糖あり、其性質に從ひて氷糖、白糖、黒糖の別を生ず、近年頃に蘆粟糖を製するものあり、又北海道紋鼈地方に於ては甜菜を栽培して、砂糖を製す、精製砂糖は佳良の甘味を具へ、幾んど全く水に溶解す、然れども粗製品は其色倍々濃深にして、味惡しく酸性愈強くして蔗糖の含量を減少す、蜂蜜は其名稱の如く蜜蜂が花の糖嚢より採集し來れる物にして春秋二季に製したる良品とす其精品は帶黄濃稠の結晶樣躰にして佳良の甘味を具へ幾んど水に全く溶解す、

飴は粳米(糯米、大麥、小麥、粟、玉蜀黍、薏苡仁)を取り蒸して之に麥蘖子を加へ糖化せしめたる製品として歐米に所謂麥芽越幾斯と稱するものとは別物なり、飴に壹番貳番晒、水、硬飴等の種類あり其成分は主として麥芽糖糊精の如き溶解性の含水炭素より成りて、消化し易きが故に小兒産婦に與へて妙なり、其成分左の如し、

△糯米製膠飴水分（一五）　含窒素物　（一）　麥芽糖（五〇）

◉菓子▲砂糖漬▲麵麭類

次に吾人の嗜好食品として菓子のことを述べん、

本邦古來嗜好的食物として菓子類あり、菓子を調製する原料は種々ありと雖も、其主なるものは赤小豆、穀粉、砂糖、澱粉、飴、瓊脂の類なれば、其本成分は蔗糖と他の含水炭素にして、甘味強く、稀には患者、及び回復患者の食用に供すべきものあれども、多くは平素嗜好の食品なり、今出品中最も多數の種類を擧ぐれば、打物(裝飾菓子多し)羊羹、カステラ、▲求肥、▲煎餅、▲干菓子、▲落雁、▲飴類、▲麥粉菓子、▲蒸菓子、及び▲ボンボン、▲ビスケット、▲デセルトの如き西洋菓子あり、

菓子店が菓子を調製するには元より新鮮純良の原質を使用すべきは勿論、可及的虚飾を省き若し彩色をなすも注意して色素の種類分量を擇み、無害の品を用ゆべし、但し本邦の菓子は西洋菓子の如く芳香を附するもの少く概して砂糖の分量多く甘味に過ぐるか如し、

砂糖漬は果實、香辛料、菌蕈、海草類を砂糖に漬けたものにして久く貯藏に堪へ、▲薑▲山葵、▲天門冬、▲橙、▲蜜柑、▲佛手柑、▲松茸、▲松露、▲海苔、▲昆布、▲猶等の砂糖漬あり。

麵麭は穀粉に水を加へて粉泥となし、酸泥或は醱酵母(若しくは炭酸を以て醱酵せしめ、二百度乃至二百五十度の熱を與へて燒きたるものにして、皮と心より成り、其割合は皮は約そ全躰の二割より四割、心は五割より七割なりとす、麵麭は常に小麥粉を以て製すれども、又大麥粉、燕麥粉を用ゆる事あり、其需用の目的に從て普通麵麭、兵粮麵麭、患者麵麭等の種類あり。

內國麵麭の小麥粉にて製する麵麭と外國產の小麥にて製する麵麭に其色味に大なる差等ある事は皆人の知れる所なり、即ち乙は白色鬆疎にして、其味美なりと雖も、甲は之に反して色黑く粘性多く、且其味の劣れるのみならず、其質も亦緻密にして氣孔多からず、俗に日本粉は油多しと云へり、油量は內外產共に差異あることなし、所謂油とは全く植物粘質を誤認せることを徵するに足るべし(今甲乙二種の麵麭に良否ある原因をして果して小麥粉中植物粘質多少に在りとすれば蓋し日本麵麭の改良は先づ第一製粉の際に於て務めて之を除去すること最も緊要なるべし抑も此物粘質なるものは麥粒中主として皮肉若しくは皮下近接の處に含有せるを以て吾邦從前製粉の方法を改良し可及的所謂麥糖の混入を防くときは縱ひ製粉の量は減するとも之より製したる麵麭は其色味必ず外國產を用ゆるものに讓らざるに至らんとは或る醫學博士の說なり)

麵麭の成分は水分(三十七)含窒素物(六)　糖分、糊精、護謨其他無窒素越幾斯物(五十三)よりなる

盆石のしをり（承前）

武田櫻桃

波の種類、

盆石は前記するが如く、初傳、中奧、皆傳等の階級あれども、其初傳に至るまで、なほ屢く波の打ち樣を稽古

せざるべからず。波には左の數種あり。

四季波
- 快晴　（七五三）　四季に通ず
- 汐干　三月四月の候
- 夕立波　五　月
- 雨波　六七月の候
- 大風波　八　月の候
- 雪の波　十一十二月の候

以上の外尚左の數種あり。

『漣波』『搔波』『打ち込み』『流れ』『待汐』『秋初汐』

『雄波』『雌波』

波の打ち樣に稍熟達せば、乃ち初傳勝景に入るを得べし、右の中最も打たるゝは快晴の波にして、『春の快晴』『夏の快晴』『秋の快晴』『冬の快晴』皆然り、之を七五三の波と云ふ、左圖を參照ずべし。

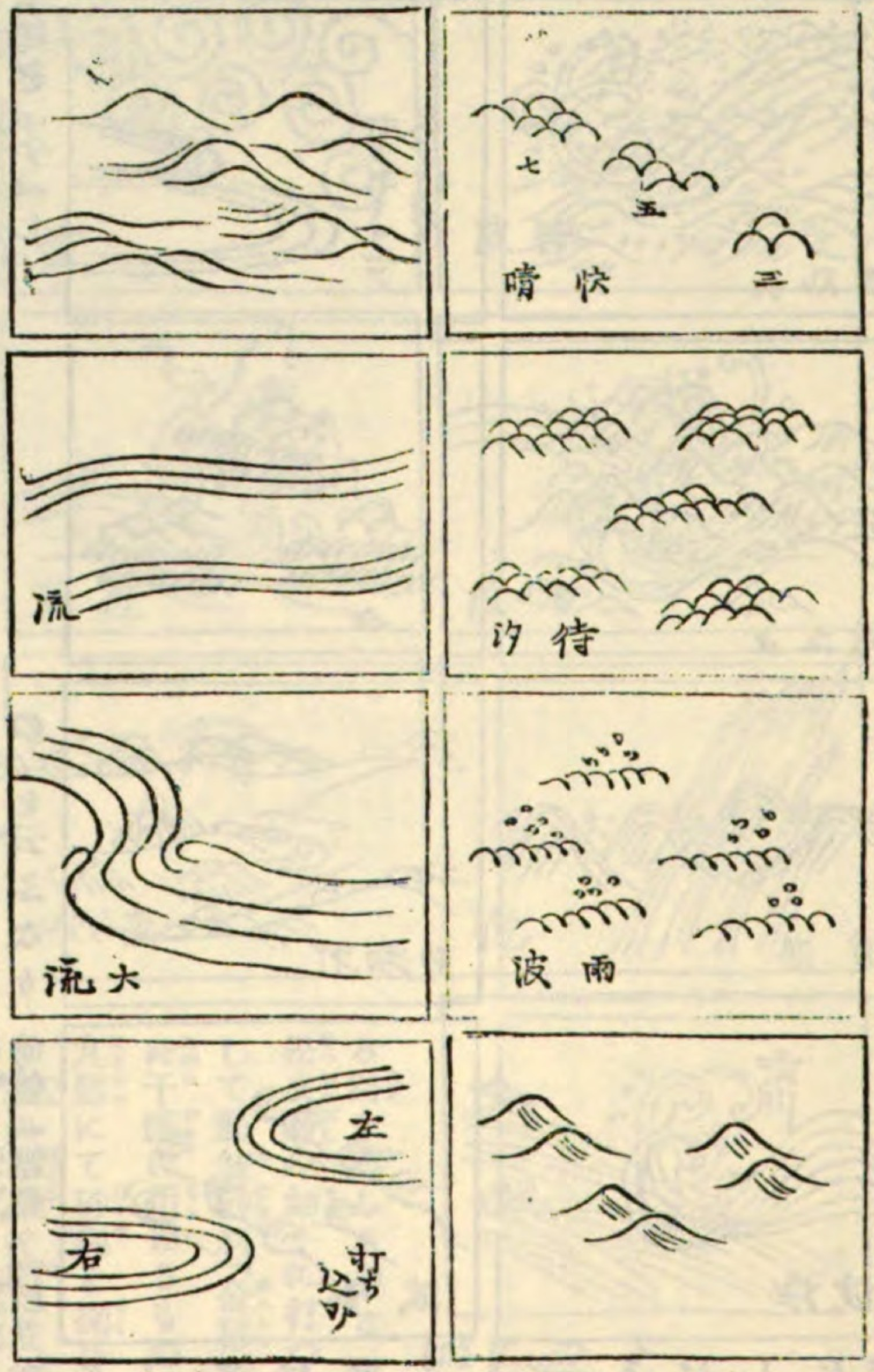
夕立波は、『漣波』『搔波』『雨波』を悉く取りまぜたるものにして、『大風の波』には之に『高汐を交へたるものなり。

さて『漣波』は波の少しく立ちたる時の形容なれば、盆も稍活氣を帶び來るなり、漣波の打ちやうは、かくの如く打つなり、砂を細きより太きに上し、更らに細きに落すべし、『搔波』は圖の如くす、匙にても羽根にてもなし得べきなり、波のうねりとも云ふべきものにして、いづくの場所にも用ゐらるゝと雖も海に限るべし、『流れ』は河流を型りたるものなれば、匙の先に砂を掬ひて輕く曲線を描けば可なり、流れにはまた大流れと稱するがありて、こは流の最も大なる邊を示したるものなり。

『打ち込み』は波の岸邊に寄せて、屈曲せるものを云ふ名稱にして、波の岸邊に打込めば爾稱するならん、此『打ち込み』は一盆中に二個所あるは止を得ざるも、二つ重ねては決して打たざる事なり必らず互ひちがひに打たざるべからず、挿花に枝の重なり合ふを嫌ふが如し、此他に『高汐』『待汐』『秋初汐』等の名稱あり、『高汐は多く大風の形容に用ゐ、『待汐』『秋初汐』等は平和なる意を寓せり、此中『秋初汐』は七五三を過ぎ搔波に移るものにして、『雪波』は搔波の稍變じたるものなり、『泡』は適宜なる邊に丸匙にて砂を振り落すべし、多く

は景の裏たるべし、表にては醜し、小さきものは『漣汐』『高汐』『瀧』『瀧川』等に用ゆれともこは玉匙を以てする『泡』なり、『高汐』は漣波の大なるものにして狂瀾怒濤を型る、風によつて立つ波にあらず、汐の高きなり、此區別を心得べし。

『雄波』『雌波』は匙にては打たず、多く羽根にて掻くなり、羽根は朱鷺に限り不規則なる切目を入れ、右より左へ逆巻くが雄波にして左より右に逆巻くが雌波と知るべし。雌波と雄波が左右より寄せ來たるを合の波と稱し『蓬萊』等に多く打つ、極めて豪壯なるものなり。



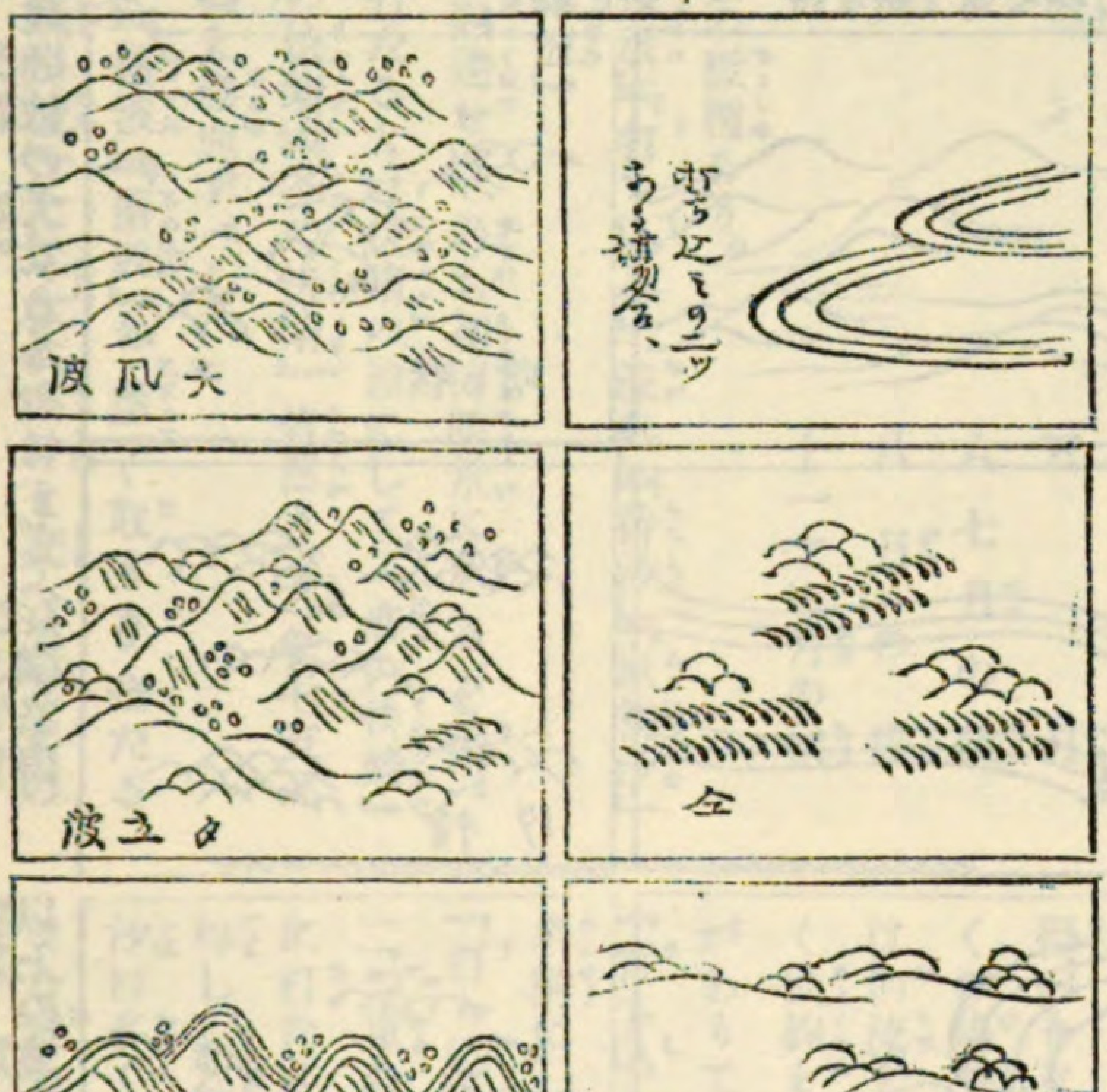
◉瀧及雲の打方

以上の波を大方會得しなば、大概の盆は打ち得べし、只岩の置きやうに注意し、餘り不自然に陥らざるやう注意するまでの事なるが、こゝに尚『瀧川』『瀧』及『雲』の打ちやうあり、『瀧川』は瀧の淵をなして谷川を流るゝ景色なれば、そもまた雄蝶と仝樣の羽根を使ひて、巧みて瀧川の模樣を示すなり、『雲』は雲匙にても羽根にても描き得

べしと雖も盆の位置を見はからひて程好く打たざれば折角打たる雲の打たざるに勝る事あり、左に『瀧』『瀧川』『雲』の打ち樣をしめすべし。

月に黒と白とあるは、即ち盆景の模樣によれり、春の朧月、雨前の月等は黒の月を要し、仲秋の月夏の月等は白の月を用ゆ、月は型なれば深く謂ふの要なし。

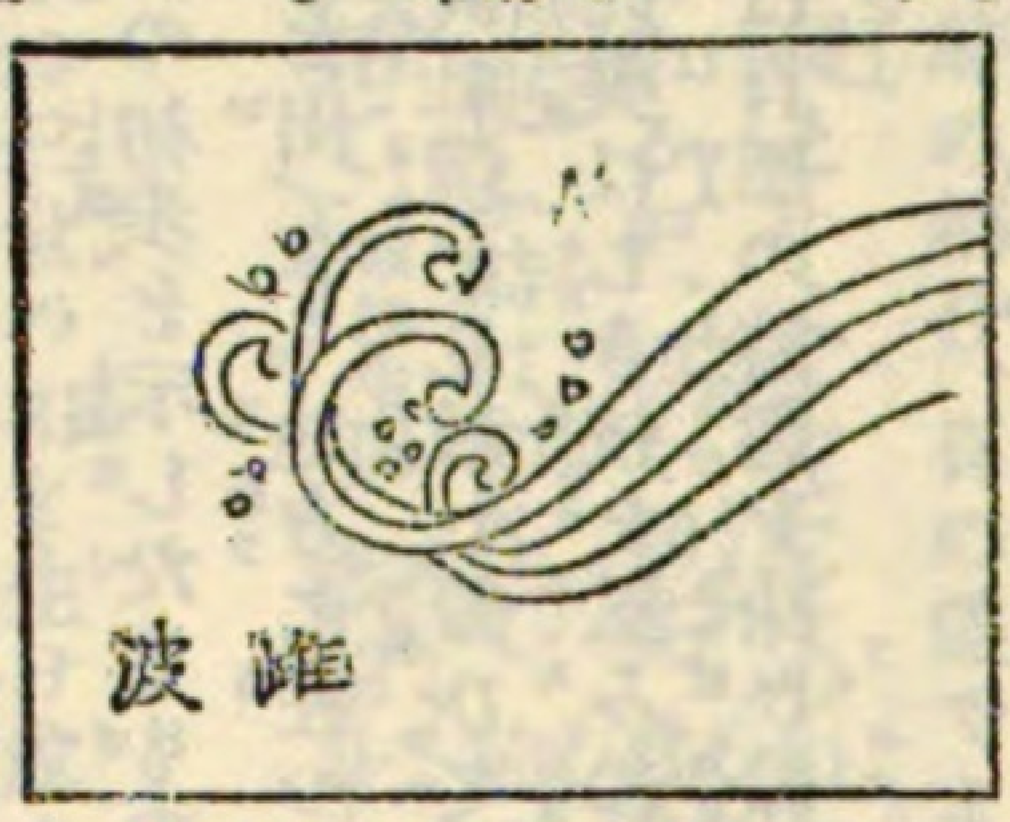
◉五節句及冠婚葬祭の盆

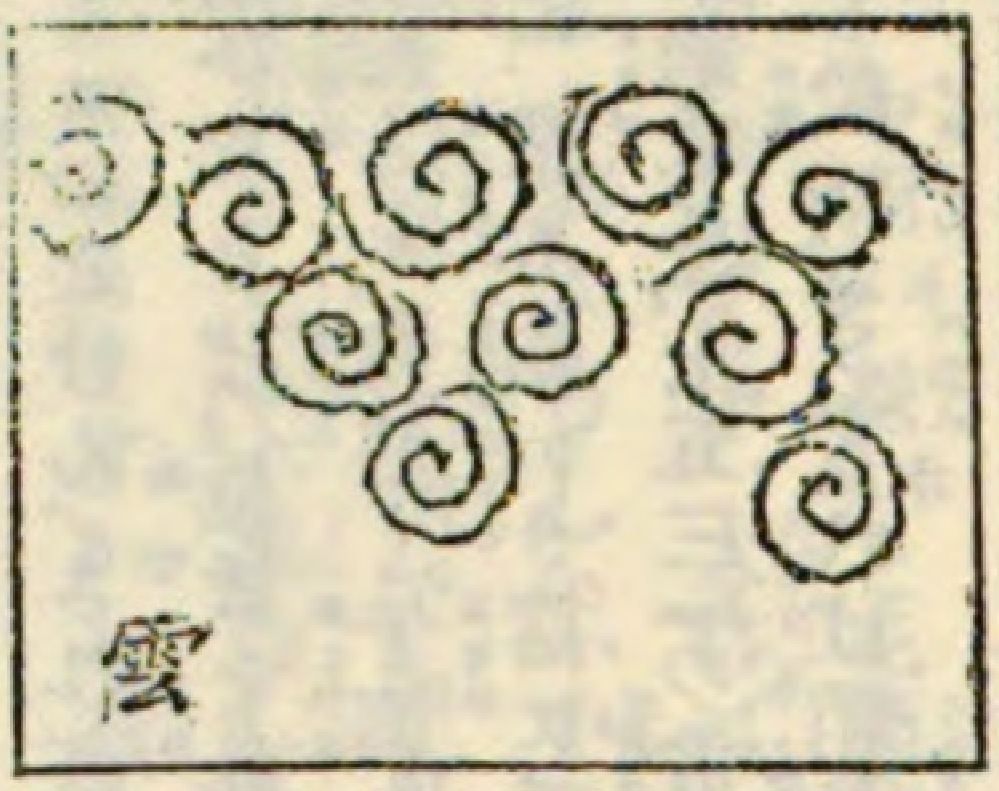


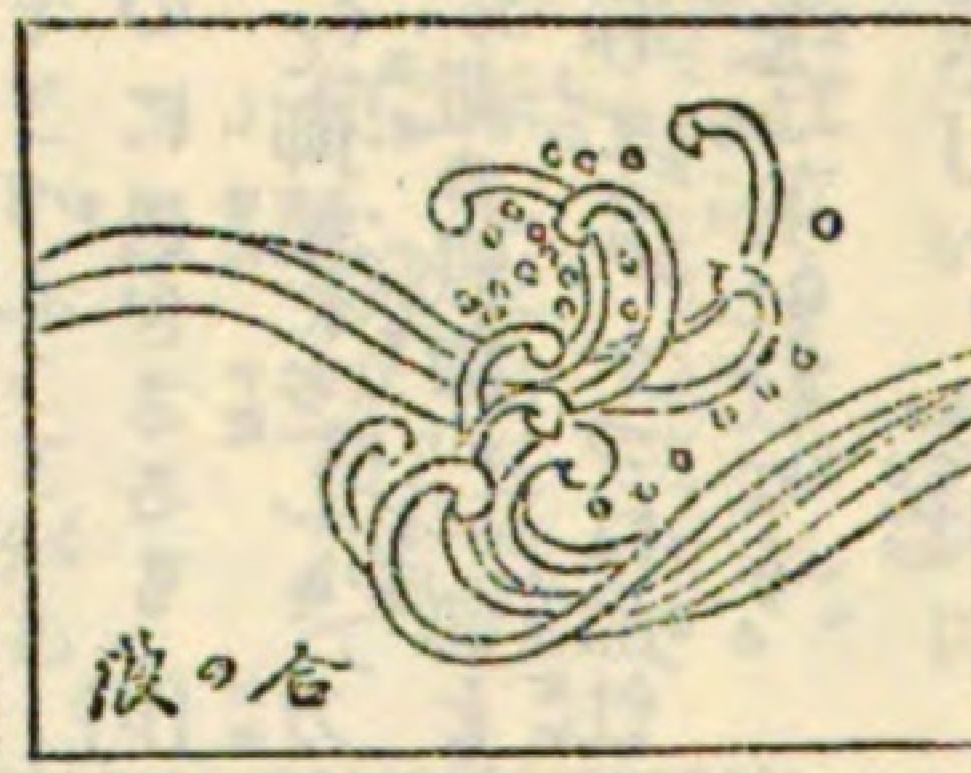
『波』『霞』『雲』『瀧』は以上の圖にて略其一般を察し給ふべし、爰に五節句の盆と云ふものあり、五節句の盆とは即ち一月、三月、五月、七夕、九月の盆にして、其時折の盆を云ふなり、此他、『婚禮』、『旅立』、『手向』の盆あり。

『婚禮』の盆は正式は白木の島臺は蓬萊山を打つを常とすれども、未だ未熟なる者は萬代山と云ふを打つなり、『旅立』『手向』は嬉しき心哀しき心を現はすを本意とす、『初傳より皆傳に至るまで、凡て山水なるが、此中には四季の富士六玉川等、隨分口傳もの多し

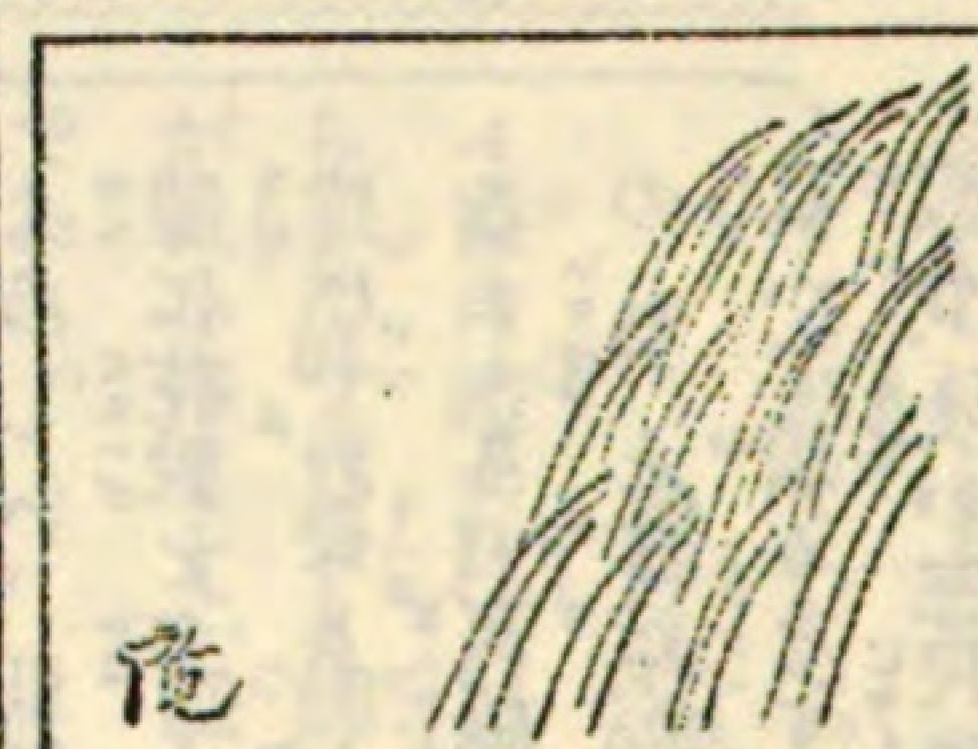
那智砂利瑪瑙石及五色石盆石は一種の寫眞にして、また一種の繪畫たるは云ふまでもなし、されば匙を使ふも、羽根を使ふも、凡て繪筆を把りたる心せざれば、波に力なく、盆石とはならざるべし、多少畫心ある者が割合に堪能なるを以ても知るべきなり、さて那智砂利は主に干潟に用ゆれども、瑪瑙石及五色石は岩の根締めに使ふなり、『白』もまた然り、景の模樣によりては干潟に『金砂』『茶砂』を用ゆるも可なり、石は普通二十五錢より壹圓に至るを常とすれども、强ち購めたる石には限らず、路に遺ち居る石にても、振能く、据りよければ、いかでか盆石とならざらん、要は岩と見え山と見ゆれば盆石の主意は立つなり。

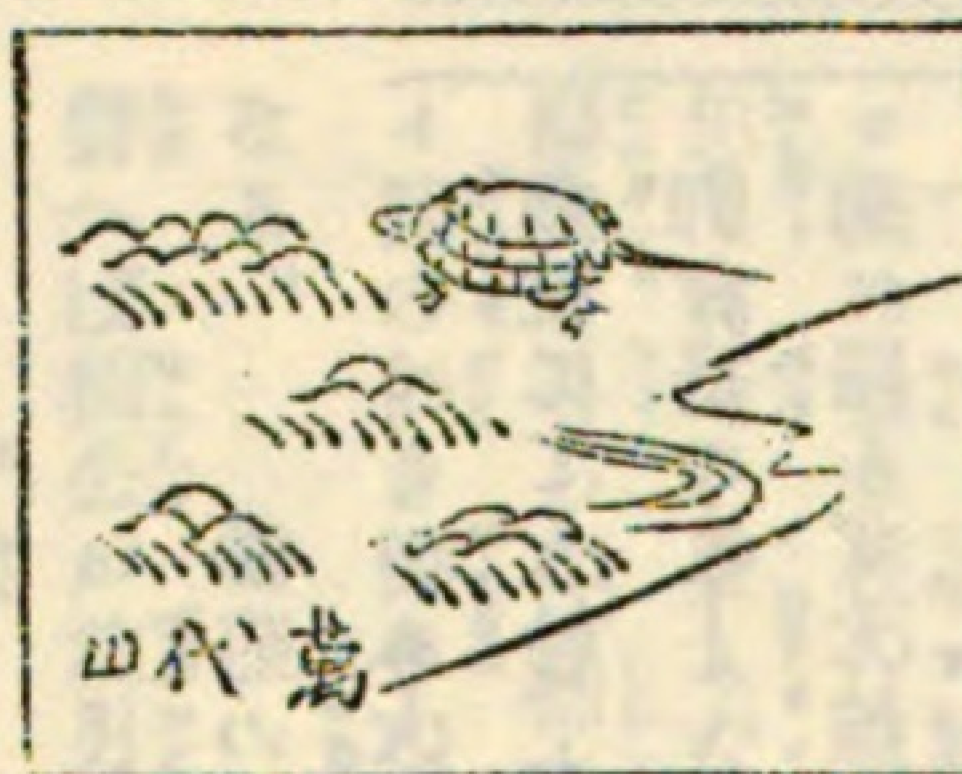














◎干潟の打方及出來上り

さて少しく干潟の事を説かんに、干潟は字の如く潮の去りたる跡を謂ふものなれば、參差して松皮菱の如くに打つを常とす、而して那智砂利『金砂』『茶砂』は凡て此干潟に用ゆるものにして、始め丸匙にて砂利を掬ひ、干潟たるべき邊に程好く撒きて、之を羽根にて均らすなり、其區劃は成るべきだけ際立て、直線たるべきを要す、殊に白き波と相映じて美しきは、『金砂』

『茶砂』よりも寧ろ那智砂利の黑きが引立ちて見ゆるが如し、况んや石の根締に瑪瑙石を用ゆるが如き、干潟は那智砂利に若くものなけん、されば先づ盆石を試みんとせば、盆に對ひたらば、位置を見はからひて石を置き、瑪瑙石を根締とし、程好く干潟を均したらば、波を打つべき個處に、最も細かき篩にて『卯の花』を薄く振り、快晴ならば適宜に『七五三』の波を打ち、夕立ならば夕立の波を打ち給へ、さすれば稍盆石の形は爲し得らるべきなり。

以上は只盆石の初歩を示したるものに過ぎざるも、作法大方は此埒を出でず、地方に在つて師範に乏しき方々よ、幸に其杜撰を見赦し給ひて、近き景勝の一部を探り、慰みに此美はしき技を試み給ひてよ、一つは品性を養ひ、一つは自然の詩趣を味ひ給ふべければなり。

（完）

◉正誤　前號に『揚巻派』と記せるは凡て『遠山流』の誤り、また打込みを羽根にて打つと記せるは匙にて打つの誤りなれはこゝに正す

生花速成

自然古流家元　梶野智水

◉菊の生方

▲大輪

前號にて大輪、七体の生方を説明して置たから、大概は御會得のことゝ思ふ。

菊に限らず大輪のものは、餘り花數を多く遣はぬ方が、よろしい。世間にて花を多く遣ふを能事と心得て、無闇に花數を多くつかふ者がありますが是は甚だ心得違ひであらふ、大輪のものは花數を澤山遣て美麗にするよりも。萬綠叢中紅一點といふ趣きに生けた方が花の勢と雅致が有て而も凛として自ら奥といふものを具へて居ります。

假令、丈が三尺以上有ても、十三か十五も花を使へば充分である、若し間の抜けて居る憂ひがあつた時は花を切り落して、葉斗りの枝を添ゆれば宜しい。尤も花は陰陽と使ひ分けるので、是れは菊に限らず、千草萬木

皆同じことです。先づ花數十五使ふとすれば、七五三の差別といつて、陽中（陽開）七、陽中陰（開滿）五、陰中陽（苔）三、と斯いふ割に使ふが規則である、けれども草木は自然の生物であるから其時の都合、有の儘でよろしい。それに就て今一ツ初盛殘といふことを心得ねばなりません。

初盛殘とは何であるか、曰く初花、盛花、殘花、の三ツである、即ち苔斗り使ふ時は初花て、前に示した七五三の割に使ふ時は盛花て（或は中開斗り）滿開斗り使ふ時は殘花てある。

又一瓶に過現未の三世の和を生け成すといふことがある、これは滿開過去、中開現在、苔未來と三通使ふことをいふので、其種類の如何に拘はらず、大躰は一瓶の内に過現未の和を具備せしめるがよろしい、中にも蓮、椿の如き、萬年青、葉蘭の如きは最も必用である。

偖て菊の大輪は丈高くして、屈曲した枝が多くて素直な枝が少ないものでありますから若し狂ひ曲た枝に出會た時は、變躰の生方にするのである、變躰とは、上の枝の狂ひ降りて下の枝の缺けたる所を補ふものと、下の枝の競ひ昇りて上の枝の缺けたる所を補ふものと、二種に分ちます

昇て補ふものを昇躰といひ、降て補ふものを降躰といふ。これを昇降の二傳といつて（假令名稱は違ても）他家に於て秘傳とする所である。

▲降躰（孝降て踵を補ふ）

イ圖は踵の枝あれども充分に發育せず短少であるから、花躰の姿を調ふることが出來ない。そこで孝の枝が狂ひ降りて、踵の枝の缺けたる所を補ふといふ變躰である。

ロ圖の如き枝の有た時に、正則なる花躰に生けやうと思て百考を費した所で如何も仕樣がありません、即ち廢物であらふ、然るに是を利用して孝の枝に使ふ時は、イ圖の如き働きのある、面白き、雅致を備へた、花躰となる。

譬へば楠公が泣男を使用して、戰爭に勝利を得たといふことを記憶して居りますが。戰爭に泣男を使ふといへば如何にも不思議である、然るにそれを巧に利用す

るが即ち楠公の妙智であります。
夫れと是れとは話しかわれども、廢物を利用する點に於ては同じことであります。

ロ圖の如き仕樣の無い枝を利用して面白き働き有て、自然の雅致を具へたる花躰とするが生花家の技倆である、とはいひながら、變躰が面白ひ、變躰に雅致があると云て、素直な枝にまで無暗に癖をつけて、振りを造り、強て變躰とするのは甚だ良くありません、無理に枝を作ることは生花家の最も耻づる所である。

ツマリ變躰の生け方は困難の枝に出會た時、それを自由に取扱ふための心得であります、ダカラ變躰は好ですることではありません、夢にも自然といふことを忘れてはならぬ。



であります。

△中輪の生方　中輪は大輪と違ひて、花數多く使ひて少くとも十五輪以上用ひねばならぬ。十五輪のときは信の枝に三輪、あと六枝には二輪づゝ具へるのである。此割を以て、二十五輪或は三十七輪等と挿して、大輪よりは花やかに生るが中輪の出生で又その生け方

●小輪の生方

小輪は莖一本にて、澤山に花を持て居まして、房花のやうに成て居るから、丈競べは自然逃るゝことは出來無い、けれども出生なれば敢て差問ありません、而已ならず丈競べが惡いと云て花を切り落してスカスときは出生に背て却て自然の美を損するに至ります。

之れに依て小菊を生ける時は、多く段生といふに生るのである。

段生といふは、枝を一本づゝ分たないで、花と葉で以て段々が出來て而して花躰が組み立られて來るものをいふのであります。枝數は幾本でも宜しい。



小菊、段生の圖

大概右の圖のやうな生け方にするのである、然れどもこれは一例を示した而已であるから、詳しきことは、その物の出生を考へて、花葉の粗きものは粗く生け、密なるものは密に生けるがよい、即ち實物の出生のまゝが何よりの手本であります。

◉草木の養ひ方（又水ともいふ）

▲大概

草木養ひ方即ち水揚法の大概とは、眞走行の三ッである。

眞の養ひとは、夏期六七八乃至三ヶ月間に施す養ひを眞の養と名けます、即ち朝夕切り取りたる草木を、一時間餘り其儘日蔭に横たえて置いて、それより沸湯にて根の所一寸斗り煮るのである、其時間は凡そ十九分間位でよろしい。是れが眞の養ひ法であります。

行の養とは、春期、三四五、秋期九十十一の六ヶ月間

に養ふので、即ち草木の根の所一寸ほど火にて炭になるほど燒くのである、是れを行の養ひといひます。

右眞行ともに、煮るなり、燒くなり、したならば直に冷水に深く入れて三時間餘り浸け置て、それから取り出して生けるのでございます。

走の養とは冬期十二一二の三ヶ月間に施す養ひで有て是は伐取りたる草木を其儘冷水へ入れて三時間斗り浸けおくのです、これが走の養ひである。

ソコで、菊の水揚は何するかといふに、秋菊は行の養ひ夏菊は眞の養ひてよろしい。

◉草木陰陽の差別一覽

	草木全體	時	花	表裏	葉	枝	色	出生
陰	幹枝	殘	盛り過たる滿開 堅き蕾	裏	枯葉	後の枝	青黄白	水
陰陽	葉	初	蕾、滿開	表裏	若芽	横の枝	絞り	野
陽	花	盛	中開	表	盛葉	前の枝	赤紫	山

	數	性質	姿振
陰	偶數、二四等	草	降る物
陰陽	二種使ふ時 木五本草三本等の例	竹	横に出る物
陽	奇數、一、三等	木	昇る物

陰陽の差別は、ザッと右の通りである、此陰陽の差別は何につけても必用であるから、よく／＼記憶して置て貰ひたい。

念のために少し註を加へて、おきましやう先づ姿、振とある所で、降るものといふは、木にては枝垂柳の如きもので、又花にては茶の花の如く下を向て咲くもの、是等は皆陰に屬するものであります。次に横に出る物といふは、枝なれば横に向て出つるもの、花なれば横に向て咲くもので、斯いう風のものは陰陽兩義に通するのである。又昇る物とは、すべて上に向て發生するもので、これは陽に屬します。譬へば爰に梅の枝一本有て其枝に上を向た花と、横を向た花と、下を向た花と斯う三ッあれば、これにて陰、陽、陽陰、の三氣を表して居ります。表裏といふ所で、裏とあるは枝、花、葉の裏で、表とあるは矢張表であります、ソコで表は陽、裏は陰である、表裏といふは一日して表と裏と見ゆるのを指したので、水仙ノ葉のやうに捻れて出生したるものは、裏と表と

一見して視ゆるものです、如此ものは陰陽両義に通します。此例を以て他は推知わらんことを望む。

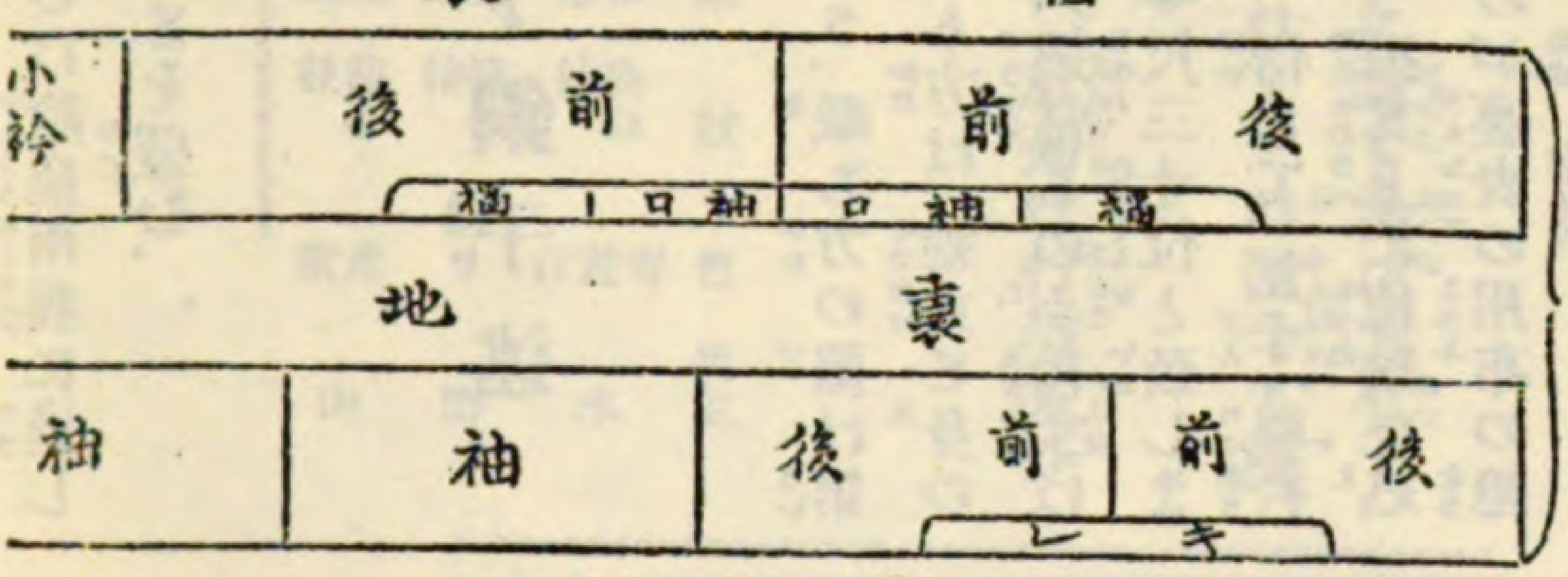
裁縫科

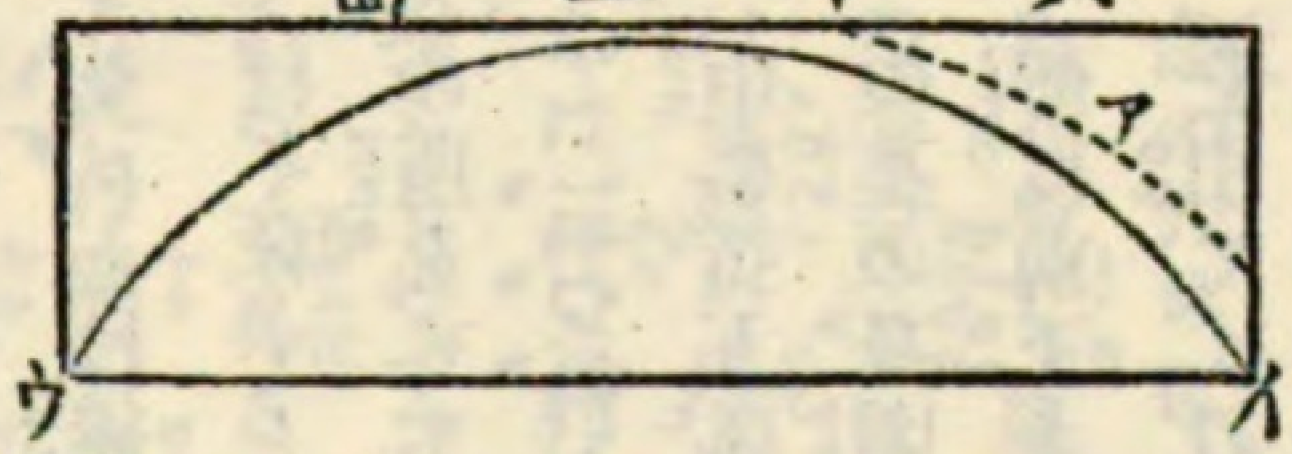
女子職業學校教員 金子銅子述

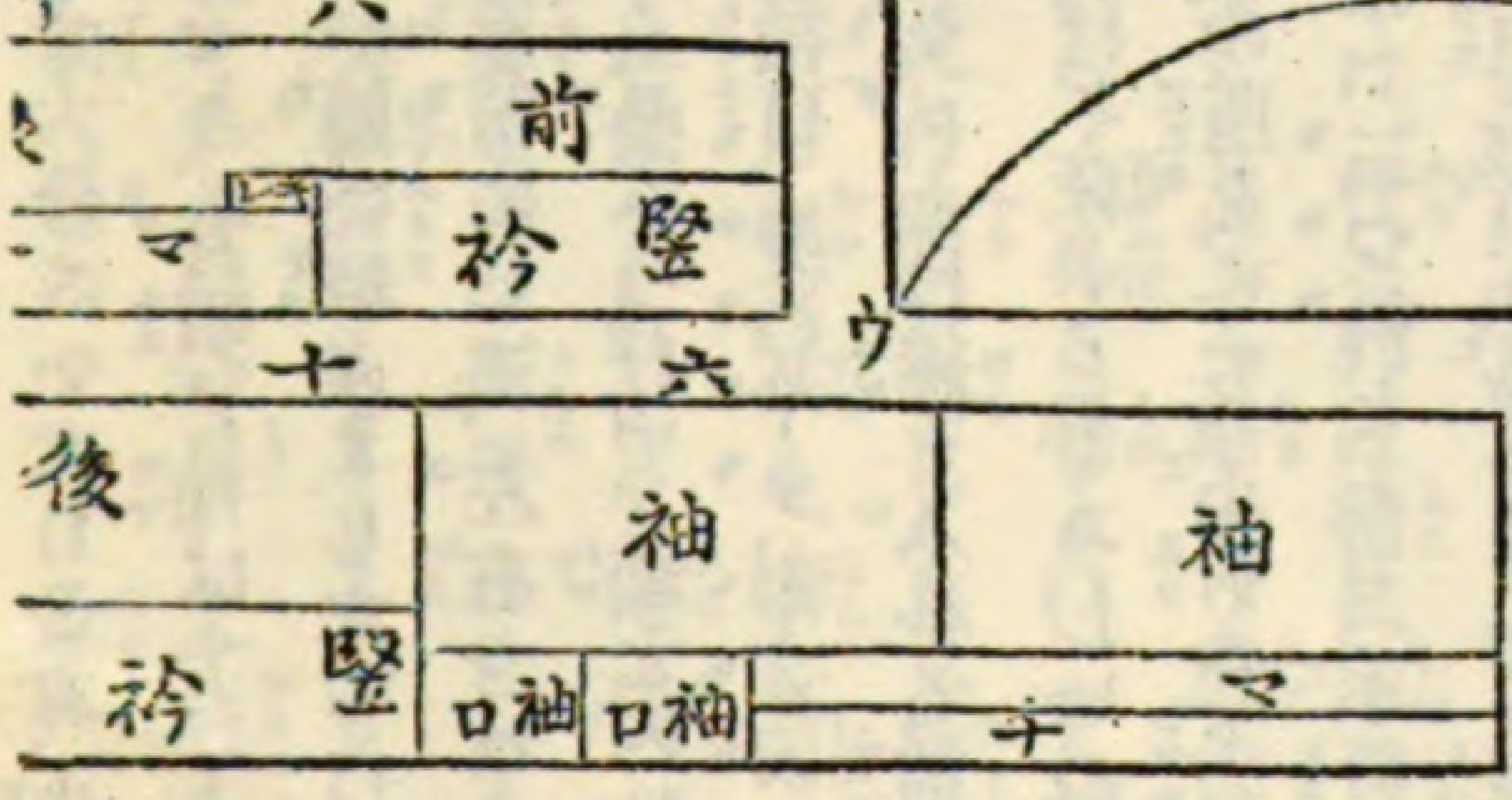
被布

先つ大人物から御話しを致しませう、裁ち方の圖は第六十貳圖の通りにいたしまして、積り方は、袖丈と身の丈とを加へて八倍し、それに小衿丈(通常この小衿丈は衽下りの二倍と致しますから大概一尺三寸位と致します。)を加へ又これに前身頃の丈を二倍して、九寸(竪衿の下りの二倍)を減じたものを加へ猶其上に總縫ひ込み丈け一尺五寸をも加へて得たものが裏表の用布の總尺でありますから此内より表の用布丈を減ますれば、「裏の用布が出るのでござります、標のつけかたは、身頃と袖は羽織と同様でありります、竪衿は竪に巾を二つ折りに致しまして、第六十三圖の通りに(ア)四寸一分(イ)三寸六分といたします、縫ひ方は、先つ綿入れより中上ませう、身頃と袖はやはり羽織と同様でございます、これが縫ひ終りましたらは、次には竪衿をとりまして衿を手前にして、左右つけまして、上も下も縫ひまして、よく疊みつけて、綿を入れます、綿が入れ終りましたらは袖口、身のヤツ、ヤツクチをくけます(ヤツクチと身のヤツとは綿を入れる前に縫ひ終りましたものなれば今はくけずとよろしいのでございます。)次に竪衿のつけの所をとぢ、小衿の下竪衿との間を躾にておさへまして、三つ衿をとぢ(小衿の下と竪衿との間は縫ひ込みを中に折り込みまして躾をかけるのでございます。)竪衿の裏の身頃につく所をくけます、竪衿の下即ち裾口の所は前下りの縫ひ込みが裏に入て居る丈に竪衿裏の切を引てくけ上げます前に竪衿下を縫ふ折りに御注意申すのでありましたがつい申殘しましたからこゝで御斷りをいたして置ます、上の方はクヌキ合せにいたします、また上下とも縫ひ込みのかへりは裏にかへします)次に竪衿と小衿との間をくけます、(これは竪衿の裏を

くけます前にいたしても宜しくありますが仕立る人の都合によりまして、いつれに致してもよいのでござります。)次には小衿縫ひ方でございます、小衿の心は二枚入れるのでありますが先つ最初に一枚をとりまして、二つに折り第六十四圖の(ア)より(イ)までと(ウ)より(エ)までとを六寸といたし(イ)より(ウ)までと(ア)より(エ)までとの巾を四寸三分といたします、次に(エ)(オ)の間と(エ)(カ)の間を三寸といたし、(エ)を山にして(オ)(カ)の間を丸く圖の通りに標をつけます、(即ち點線の通りに)かやうにいたしますと、(オ)(ア)の間が眞直になりますからこれは手加減でよろしくいたします、つまり(カ)よりなぞへに(ア)の所まで工合のよろしい様に丸みをつけるのでありまず、其外

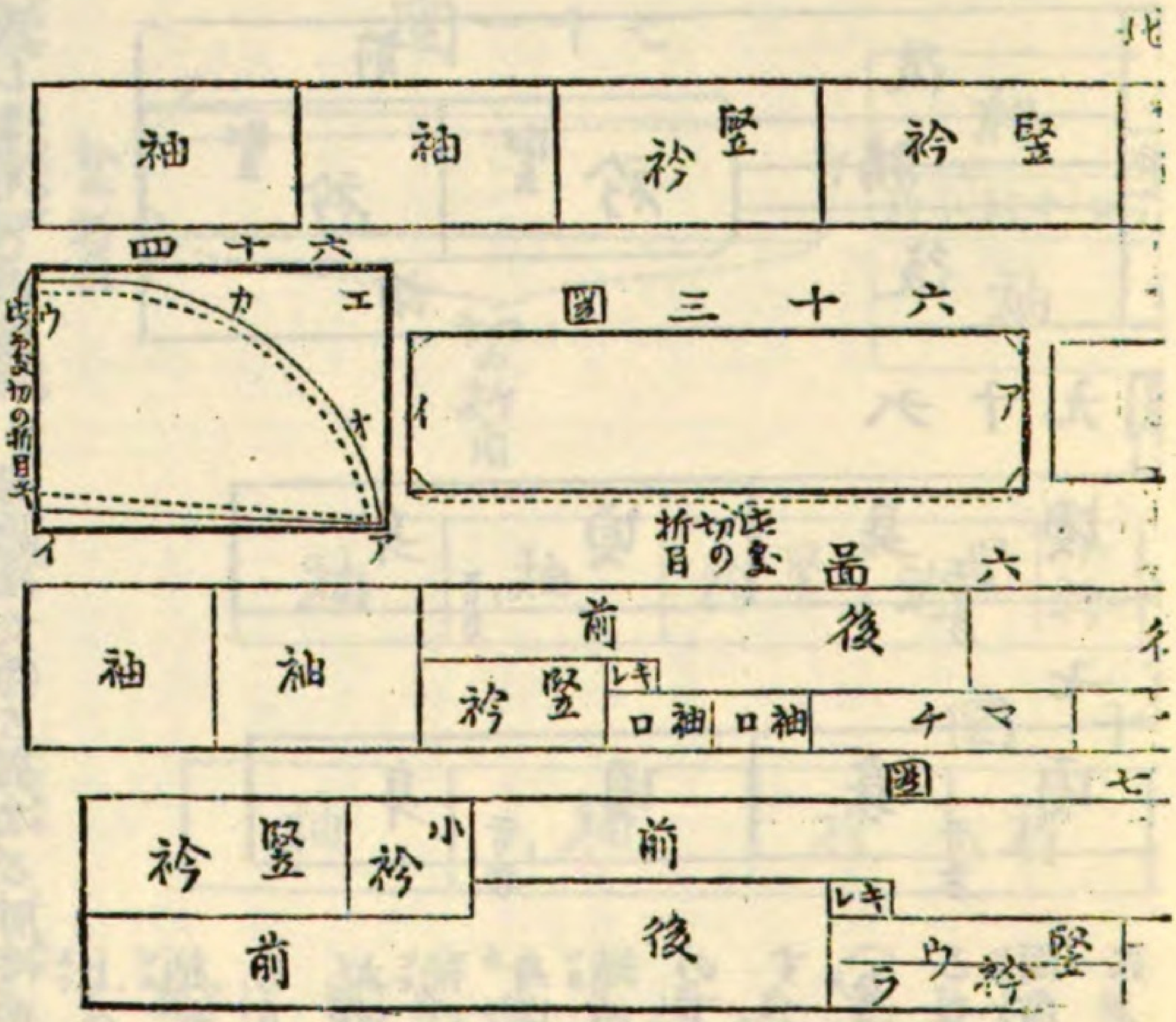






圖を縫ひしろ丈のこして、圖中の實線の通りに切り取ります、下に(イ)より五分上の所(キ)より(ア)の角まで標をつけ置きまして、また其外圖をきりとります、次に一枚の心をとりまして、此度は、前の心よりも周圍殘らず縫込みだけせまくきりとります、つまり第六十四圖の點線の所を切るのでございます、それより此二枚をよくかさねてとぢつけ小〇の切をとりまして、縫ひ上りまして、表になる方の切裏に廣き心の方をつけてとぢ、表の切を二つに折りまして、山と衿先き第六十五圖の(ウ)(イ)の兩方に針をうちまして出來上り小衿の表になる方を心の標の通りに裏を一分通り引きて、せまくなる様に致しまして、待針にてよく

とめおき、一針ぬきに細に縫ひます、殘らず縫ひ終りましたらは、縫ひ目より一分ばかりはなして、第六十五圖の(ア)の所に小針に丸みの所だけ縫ひまして、其さきにヒダをとります、このヒダは袖の丸みの通りになるべく平にとりまして、縫ひ込みの折をつけ(品物によりますとこヽに少々綿を入れるともあります、)引かへして、躾をかけます、(この躾は小衿先きの所第六十五圖の(イ)(ウ)の所一寸位は面の切だけにかけあとは裏表ともにかけます、)次に身頃を取りまして、裏の背の方に小衿の表になる方即ち心のある方をあて、山と山とに待針をうちてとめ、端より端まで針目を極細かに付けます、(縫ひ終りと縫ひはじめは、縫ひ込みを淺くつけます、)衿

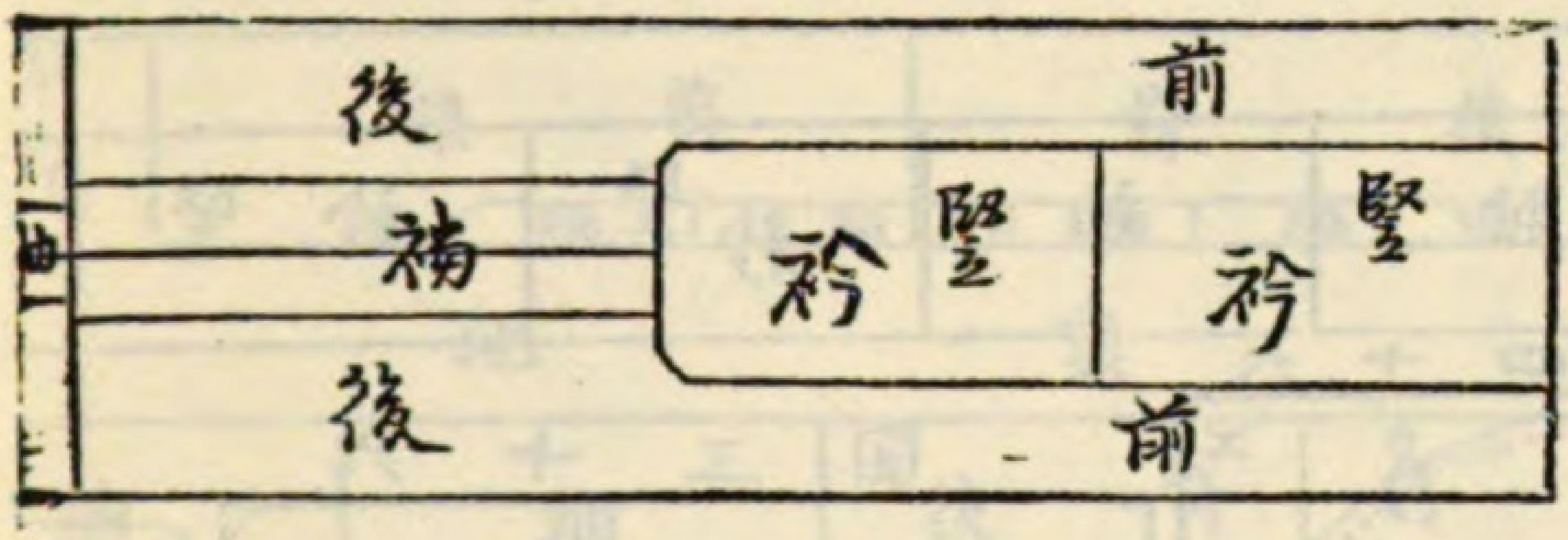


先の縫ひ込みは左右とも裏の方にクヽミまして、細かくけます、次に背、左右前襠一尺一二寸位とぢます、終りに飾り紐をつけ出來上りと致しますのでございます。

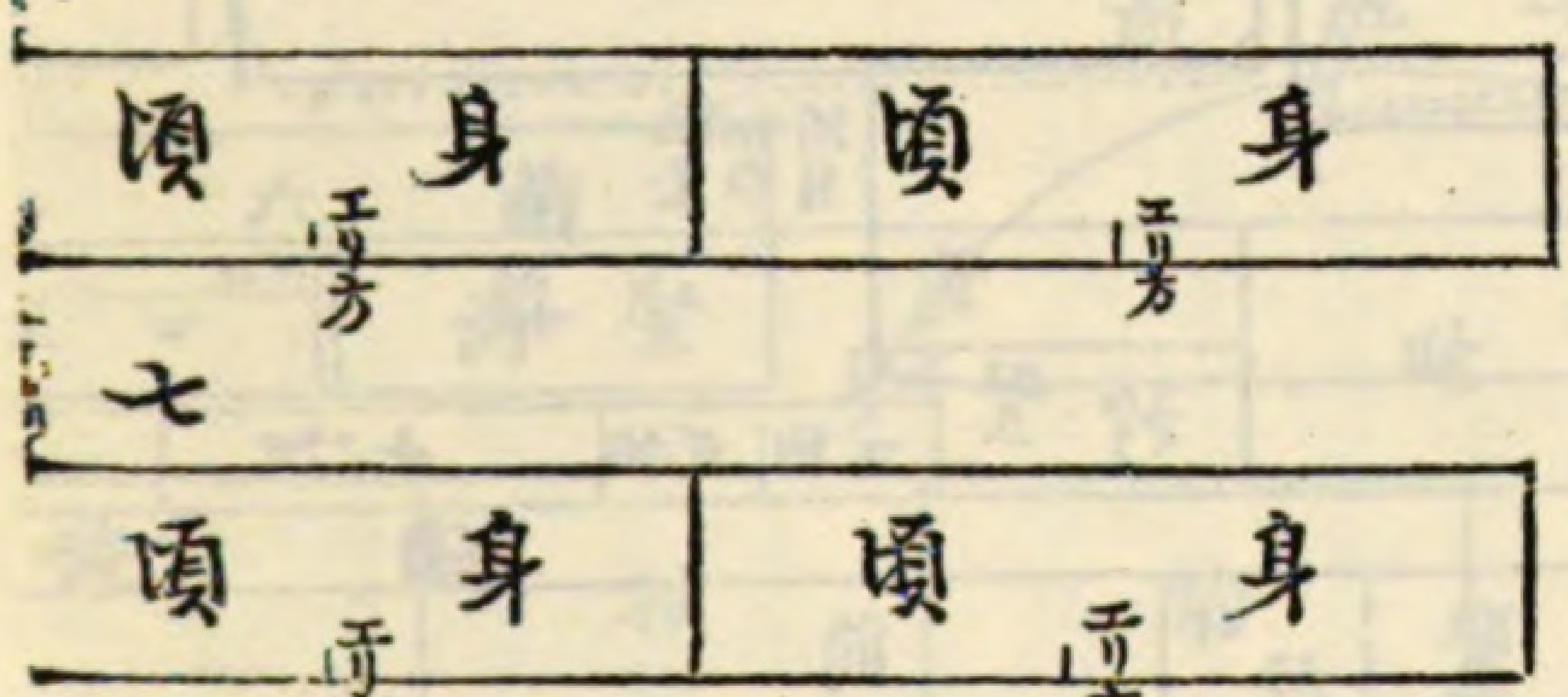
次は小供物の裁ち方の二三を御話し致しませう、第六十六圖は並巾ものにて四ッ身被布の裁ち方でございます、大人物と違ひますから大略の寸法を申上て置ませう、袖丈一尺六寸位後巾七寸五分前巾五寸六分襠巾二寸竪衿四寸四分竪衿丈は前身頃より三寸短きもの衿肩一寸八九分位袖口一尺一寸と致します、この積り方は袖丈の四倍に身の丈の四倍(身の丈は裏にかへるものを見つもるのでございます、)を加へて用布丈を得ます、又第六十七圖は

一尺二寸巾（中巾もの）にての四ッ身裁ち方でございます、袖丈は矢張一尺六寸位とし用布を一丈五尺位のものと見積りての裁ち方でございます、それ故袖丈の四倍を一丈五尺より減じまして、又其殘りより六寸（ア）を減じ三つに除して身の丈即ち後丈と、致します、この後丈に六寸の二分の一、三寸を加へて前丈と致します、竪衿丈は前身頃の丈より三寸位短きものとなります、小衿丈一尺位次に御話し致しますは大巾もの先つメリンスの類につきての裁ち方でありまして第六十八圖の通りにいたします、積り方は袖丈の二倍に身の丈は四倍及び前下りとを加へ裏地丈を減しましたものを表用布丈といたします、此裁ち方につきまして大かたの寸法を申しますれば袖巾八寸五分後巾八寸前巾六寸位の見つもりでございます、標付け方は大人ものと同樣たゞ寸法が異るはかりでありまず縫ひ方も女物と同樣、小供物は先つこれたけに致しませう。

六十八圖



六十九圖

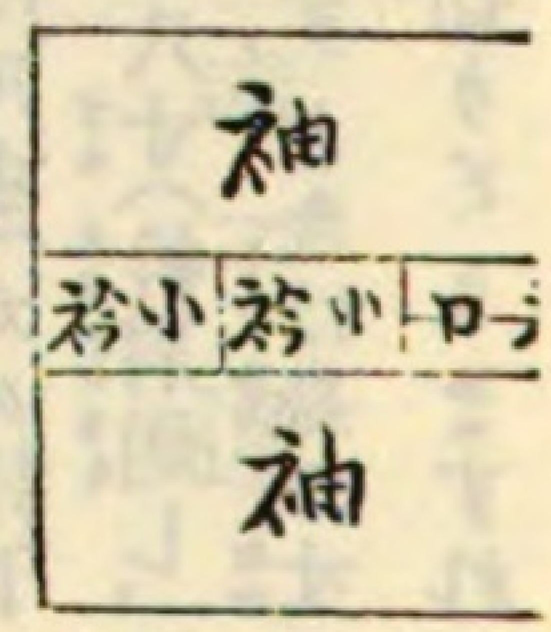


男物は女物と異なる所は袖が殘らすつくたけで別に申上るほどの事もありません、品柄によりますと袷に仕立るとがあります、標付け方は別に差異がありませんから申しません、袖は袷羽織の通りに縫ひまして身頃も後襠を付けるまでは袷羽織の樣に縫ひ前巾をとぢて小衿の下立衿の上との間をくけます、次に竪衿にて身頃をくるみ（身頃にて竪衿をくるみてつけるもありますが縫込みの返りが面白くありませんしかし其都合によりましてはいつれにても

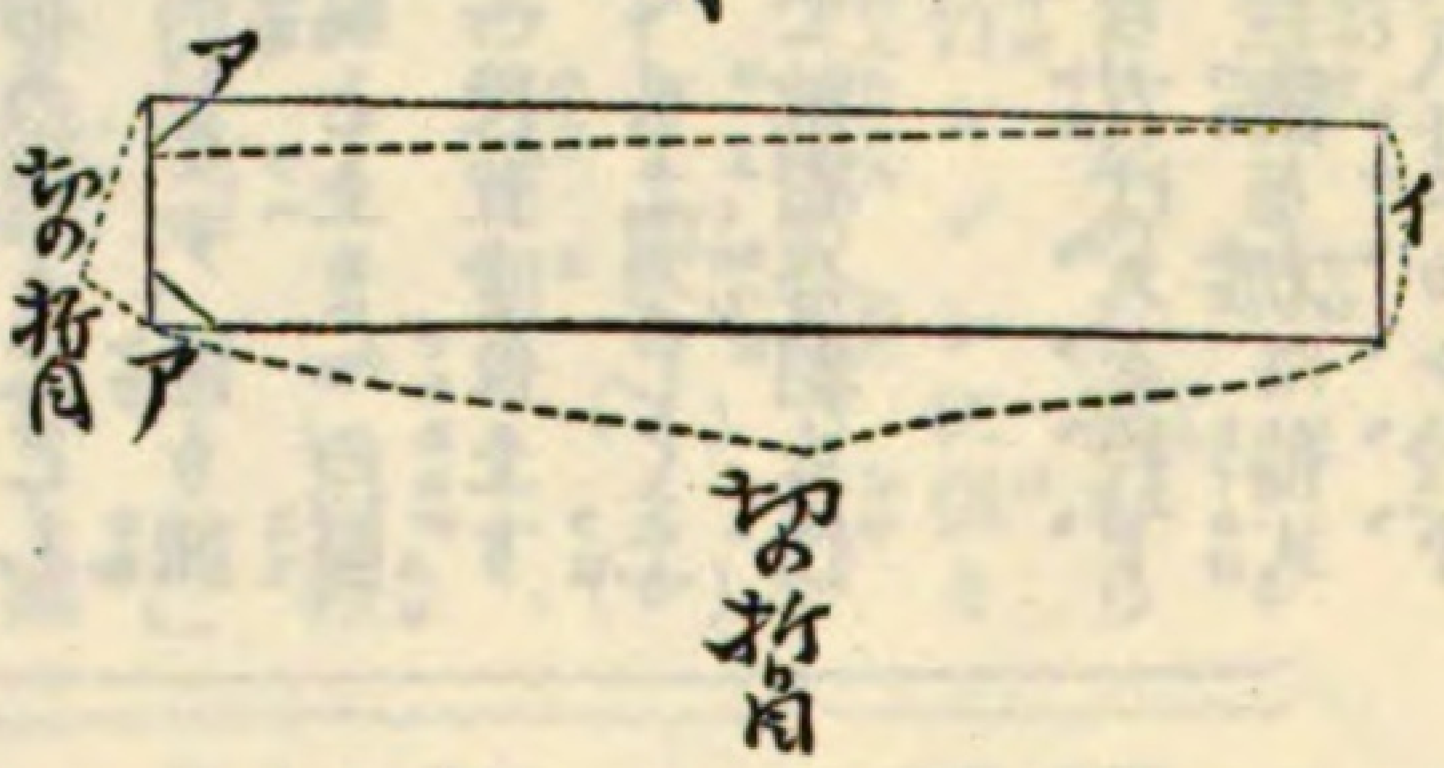
いのであります。)て縫ひまして竪衿下を縫ひ縫ひ込みを裏に縫ひかへし引かへしまして竪衿の上をくけます、次に前襠を入れ身のヤツを縫ひ袖を付け引かへして小衿をつけ飾り紐をつけて仕上けますのでございます、女の袷被布もありますが御話し致さないでもおわかりでありませうからこれで被布はやめることゝ致しませう。

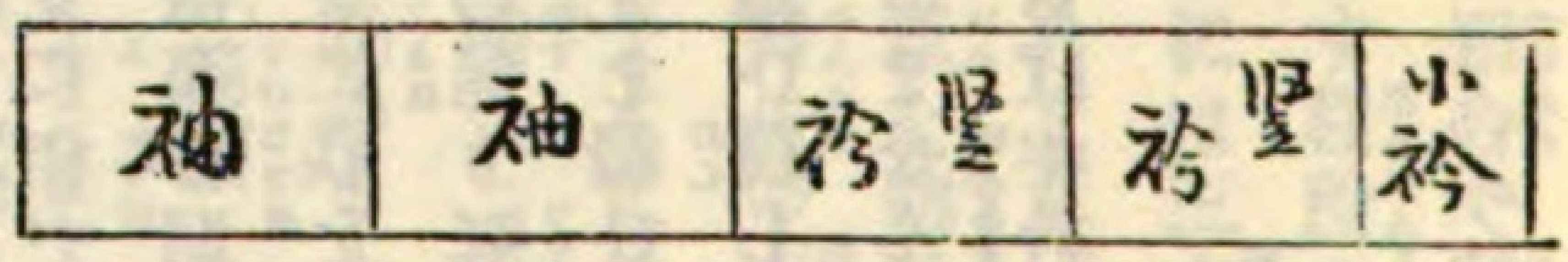
女合羽

合羽も亦種々ありますが先づ被布合羽、並合羽の二種といたします、當時流行いたしますのは被布合羽の方でございますから被布合羽の方から其話しを致しませう、裁ち方は第六十九圖の通りで積り方は身の丈の六倍より八寸を減しまして其尺數を袖丈の四倍したもの

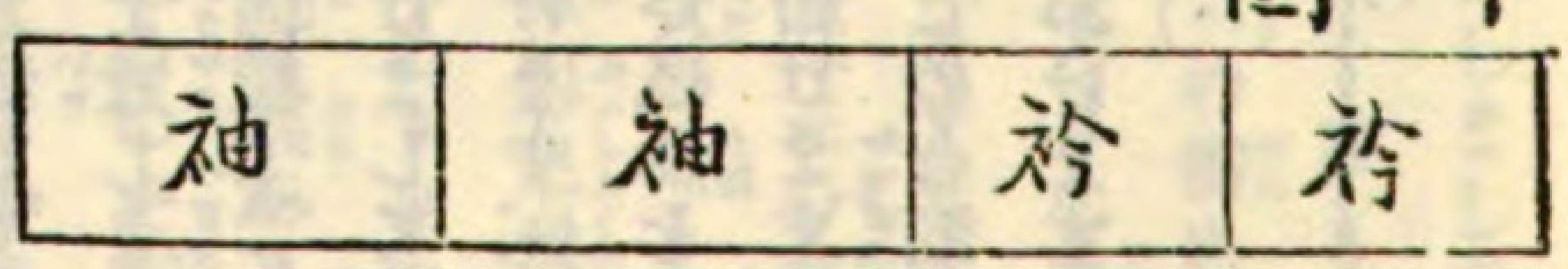


七十一図





十図



に加へ一尺三寸(これは小衿丈であります。)をまた加へ用布丈を得ます、此裁ち方は前をかゝずに背かへしの出來る樣にしてありますが都合によりますと前を缺きて小衿と袖口とを取るともあります、又は小衿を天鵞絨の樣な違ひました切にするともあります、標付け方は羽織と同樣でアゲのあるときは男物の樣に標をつけます、縫ひ方は袖は單衣羽織の通り身頃は單衣の通りに背を縫ひまして肩當も同樣に縫ひつけ竪衿と小衿の間を被布の樣に躾にてとめ置き、前身頃の裾ガケの所に躾をかけてとめ、(前身頃の切の前をかゝねものは、巾より一分廣くして折をつけて衽下りあたりより下だけは身頃にとぢつけます。)竪衿で身頃をくるみてつけ竪衿の下を縫ひまして縫ひ込

みを裏に縫ひかへして引かへし、堅衿の上は縫ひ込みを裏にくるみてくけます、左右ともこの樣にして次に脇を縫ひ、單衣の脇の縫ひ込みの樣にとぢまして裾がけと致します、次に袖をつけ縫ひ込みをとぢ(袖の縫ひ込みは身頃の方にかへします)肩當にてふせてくけます、次に身のやつをくけます、小衿は被布の通りにこしらへまして其つけ方も被布同樣でございます、餘り紐は上の方は被布の樣にいたし下は右の脇と上まへの堅衿の所につけます、(この寸法は裾より一尺五寸位上りました處)下まへは打紐にても絎紐にてもよろしく上まへの堅衿と左の脇とにつけますこれて被布合羽も仕立上りました。次は

並合羽裁ち方は第七十圖の通り(此裁ち方はカケ衿下に別の切を用ゆる裁ち方でございます、積り方は袖丈の四倍を總川布丈より減しまして、二尺八寸(カケ衿下の別の切の寸法)を加へそのうちより八寸(衿肩廻し、衿先の縫ひ込み)を減し六にて除ります ときは身の丈を得ます、總尺より身の丈と袖丈とを切りとりますれば殘が衿でございます、これを圖の通りに二つに切りまして、別の切を繼ぎます、繼ぎめは兩開きに致します、標のつけ方は袖と身頃は女單衣物と同樣、衿は半巾に二つに折り又山の所より長さを二つに折りまして下に置きまして第七十一圖の通りに山べラ(ア)巾の標(イ)四寸一分位相ツマの高さ位の所に三寸六分位、山の所にて二寸七分位と致して標をつけ、又羽織の衿の通りに所々に相べラを致します、縫ひ方は袖及身頃、背縫ひまで被布合羽と同樣、次に後巾、肩巾、前巾を當り、前の裾カケに躾をかけまして衿にて前身頃をくるみて羽織の衿の通りにつけます、(三つ衿は裏を縫ひのこします、)衿先を縫ひ縫ひ込みを裏に綴ぢつけて引かへし三つ衿の縫ひ殘しを絎けます其他は被布合羽に異なる所はございません、(この合羽には飾り紐なし)縫ひ終りましたらば半衿をかけます。

造花科

春蘭造り方

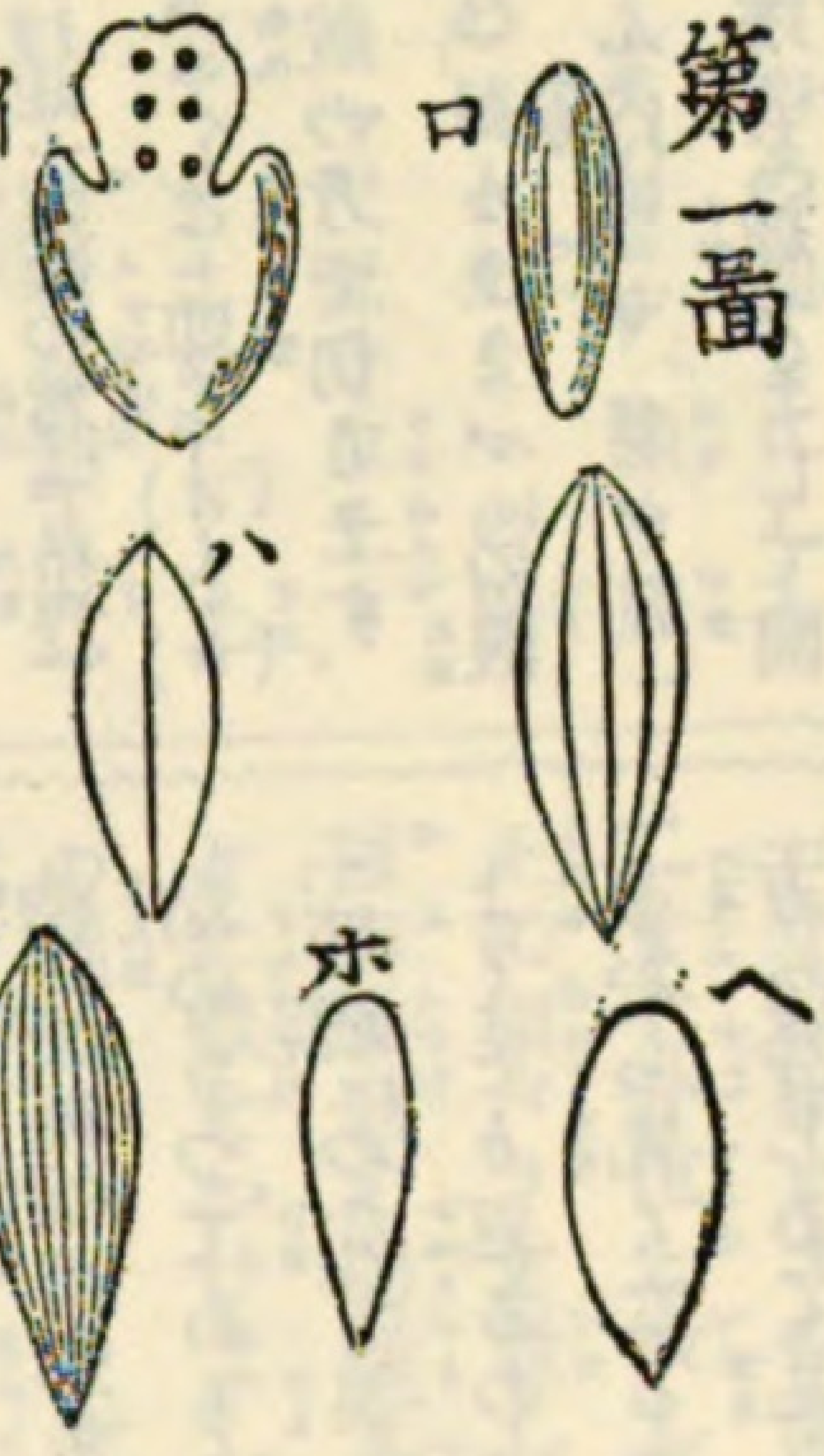
女子職業學校教員　三好幸子述

春蘭の花を造りますには、先づ白の天鵞絨を竹シンシで張りまして姫糊をうすめに解かしましたのを裏から刷毛でしき置きます、又別に絖を矢張竹シンシに張り晒膠を裏からしいて乾かします、此二種の布で第一圖のやうな形の瓣を裁つので御座りまして即ち(イ)と(ロ)との瓣は天鵞絨で、(ハ)と(ニ)との瓣は絖の方で切ります、そして(イ)の瓣は極淡く解かしました「ヲウラミン」の液で丸染を致しまして、全く乾きません内に「マゼンタ」を濃く解かし之れに少し「ビヲレツト」を加へまして圖に御座ります通り其兩端をそめ又其上部に點を打ちます、(ロ)の瓣は「ヲウラミン」に少し「グリーン」をまぜました液で極淡く青色に染め尙(イ)の瓣を染ました液で縁をとります、(ハ)と(ニ)の瓣は初め水に浸けまして次に「ヲウラミン」三分、「グリーン」四分、「マゼンタ」三分位の割合で解かしました液で先の方を濃く元の方になります程段々淡くなりますやう彩色致します、尙又(ニ)の瓣には三本、(ハ)の瓣には一本の線を「マゼンタ」で引き置きます、かやうに染めました瓣へ極細い針金に淡い青紙を細く捲きまして二寸位に切りましたものを裏から瓣先の方を二三分殘して付けます又此各瓣に鏝をあてますには、次の通りに致します即ち(イ)の瓣には「小の瓣鏝」で兩端の彩色致しました所を表からあて、上の方の點のうつてあります部分の縁を指先で少し延ばし、又「筋鏝」の先で裏から點の所をつく樣に致しますれば程よくそり返るので御座ります、(ロ)の瓣は「小の瓣鏝」で裏から丸くなるやうあて、(ハ)の瓣は「中の瓣鏝」を表の方へ少しあて丸みをもたせ、(ニ)の瓣は矢張「中の瓣鏝」で先の一寸そり返るやうあてます、

右のやうに鏝をあてまして後組立てます、其仕方は開きの花には、先づ(イ)(ロ)の瓣一枚つゝとり、(イ)の瓣の表に(ハ)の瓣の裏をむけ、かま糸で括りつけ又(ハ)の瓣二枚を(イ)の瓣の兩端へ付け、其間に(ニ)の瓣三枚をつけます、半

開きの花も、開きと同じやうに致しますが只各瓣共皆形を少々縮めまして、(ニ)の瓣にもそり返しをつけませず、瓣の内部に計し丸みを持たせます、
蕾は針金に綿をまきまして第一圖の(ホ)の位の形に造ります、又竹紙を(ヘ)のやうな形に切りまして夫れを三枚組み合せ、(ハ)(ニ)の花瓣と同じ色の淡目の液を其先の方から元の所へ段々と淡く彩色致します。
花と蕾が出來上りましたら其軸に綿をまきつけ少し太めに致しまして淡い青色の紙で上卷をして置きます、又別に雁皮紙又は薄美濃紙を第一圖(ト)の形にきり極淡い「ブローン」の液で丸染めを致しまして尚其上に少し濃い「ブローン」の液で線を引きます、夫が乾きましたら「三筋の鏝」で内部からをしあて造りましたものが即ち花の下に御座ります苞で御座りまして、開と半開きには五六枚、蕾には三四枚程互ひ違ひに付けるので御座ります。

第一圖



葉は寒冷紗を白の儘姫糊をしき、「グリーン」「チウラミン」「マセンダ」を濃く合せました液で葉の先になります所は極濃く中程を少し淡く元の所は極々淡く三段に段々とぼかします、長さは八寸、六寸、四寸位の三通りに致しまして、巾は三分から四分位に致します、そして眞中に縦に青紙をまきました針金を入れて糊で二枚付け合せ尚「筋鏝」で數本の縦筋をひきました上、兩端を指先で持ち力を入れて伸ばし、後臘をしきます(此葉は長う御座ります故筆の先へ臘をつけてしきます)
かく出來上りました上、長い葉を內へ入れ短い葉を外へ出し、長短取交せ凡五六本一纏めに致しまして針金で括り、白い紙をまきつけ、鉢の大さに應じて適宜に植付けるので御座ります。

福壽草の造り方

今度は時節のものでも御座ります故福壽草の造り方を申し上げます、此花は絹か寒冷紗か又は紕を使ひますが先づ紕が一番光澤がありまして實物によく似て出來ます、此紕で作りますには白の儘のものを竹シンシに張りまして裏から晒膠を少し濃くしき乾かしましたものを第二圖のやうに二通り布目の縦になりますやうにして切り置きます、偖又此瓣を染めますには最初(ア)の瓣をとり「ヲウラミン」の液につけ、取り出し、次に其下の所を「グリーン」と「ヲウラミン」とを淡く合せました液で模糊しまして毛布の上にのせ乾かします、又(イ)の瓣は「グリーン」「ヲウラミン」「マゼンタ」の三色を合せました染液の中へ浸けまして尚外に「カシドラパル」三分、「ビチレット」七分の割合で解しました液で上



の方を彩色致します、夫れから又「ブローン」を淡くとかしまして夫を小の面相筆に含ませ(ア)の瓣に極細く筋をかき、又(イ)の瓣へは「カシドラパル」の染液で前と同じ書方に致します。

右のやうに染上り乾かしましたものに鏝をあてますには「二筋の瓣鏝」をやきまして、表から瓣の中央を上から下へ、兩側も同樣あてます、開きの瓣は殊に平たく又筋目のたちますやう致すので御座ります。次に蕊を作りますが雌蕊は細い針金に綿を淡糊で堅め付まして(丁度小菊の蕾を造りました時のやうに致して小菊よりは餘程小さく致すので御座ります)夫れを花瓣を染殘りました「グリーン」「ヲウラミン」の液で染め乾かしました上、全躰に糊をつけ之れへけし粒をつけ置くので御座ります

雄蕊は白のすが絲で作りますが初め一寸水に浸け堅く絞りまして後「グリーン」「チウラミン」の極淡い液に明礬少々を入ましたもの丶中へ入れて染め乾かします、(即第二圖の(ウ)は雌蕊、(エ)は雄蕊で御座ります)夫れから此(ウ)の周圍に糊をつけて、片よりませぬやう以前のすが糸をならべ、かま糸で堅く括りまして其結び目から開きには三分、半開きには夫れより短かい長さに切りまして尚上を丸く切りそろえ其先へ濃い「チウラミン」で染め乾かしました米の粉をつけ之れで蕊が出來上ります。

かく花瓣と蕊が出來上りました上は之を組立ます、先づ蕊をとり夫れへ(ア)の瓣を蕊よりも少し上へ出しまして五枚つ丶三度つけ、次に(イ)の瓣を片よりませぬやう十枚實物に倣らひまして付けるので御座ります、又半開きは瓣に丸みを付けて(ア)の瓣十枚、(イ)の瓣七枚程をつけます。

蕾に細い針金を淡糊で第二圖の(オ)のやうな形に綿をまき乾かしまして、(ア)の瓣を成べく丸く裏から鏝をあて上の所に綿の見へませぬやう三枚程つけ、次に(イ)瓣は少々夫れよりも下けて元の所のかくれますやう四五枚付けて造るので御座ります、

袴即苞の作り方は花と同樣絖を第二圖の(カ)(キ)の影に切り置きまして最初水に一寸浸け表から「グリーン」「チウラミン」「マゼンタ」の三色を合せました液で先の方から中程迄を染め、次に「チヤコー」の淡い液を筆に付け前の青色の所を一寸染め、尚「カシドラバル」の濃い汁を筆に含ませまして下の方を黒くぼかすのでありますが、其色合は中々筆には顯はされるものでありませぬ故、天然のものを寫生致すのが肝要で御座ります。之れが皆染上りましたら「二筋鏝」を裏から縦に丸くなるやうにあてます。

葉は寒冷紗を普通の葉色より少々さえました色にそめ第二圖の(ク)(ケ)のやうな形に切りまして、裏から青紙をまきました細い針金を付け、表から筋をとり、尚筋鏝を使ひまして、表へ圖のやうに筋を引き後指で縦に二つに折りまして夫れを少々そらせます、そして臘をしき

まして後纏めにかゝります、先づ(チ)の葉の柄を青紙で一分程まきまして又同じチの葉を此左右へ付け、次は其所より二分位下りまして、(ク)の葉を其左右へまとめ込みます、かやらに五枚纏めましたものを三つ、(ク)の葉の三枚纏めを四つ程造りまして凡そ小さな一鉢に使ます

第二番



之れから一鉢に植ゑます纏め方を御話致します、花の莖には何れも鐵の針金を入れまして青紙で下巻を致します、尚開きには花の許から凡二寸、半開は一寸七分、蕾は一寸五分位の下に綿を細くまき下げまして其下に圖に御座りますやう綿を澤山まいておきます、皆出來上りましたら先開きをとり青紙で三分程まき其下へ以前の三枚纏めの葉を付け、又少し下げて五枚のものを二つまとめ込みます、半開きには三枚纏めと五枚纏めのものを一つづゝ、蕾には三枚の分を一つ(或は蕾には葉を付けないのも宜しう御座ります)皆々綿の玉の所まで青紙でまき終りましたら此の玉の上を「カシドラパル」の液で染めました紙でまきます、次に以前の袴の(カ)をとりまして此玉の所へ一枚つけ、尚(カ)を夫れより少し下げて二枚都合三枚を三方につけます次に(キ)を初めは少し上げ、次は玉の隠れますやう向ひ合せに致しまして尚袴の兩側に糊をつけて莖の見へませぬやうに付けるので御座ります、半開には(カ)(キ)各二枚宛四枚或は五枚位、蕾には(カ)を二枚(キ)を一枚開きと同じに莖を圍んで付けます。

かく纏まりましたら、ボール紙を鉢に合せてきりまし

て、夫れに小さな穴を植付べき數程明けまして之れに出來上りのものを差し込み其下を皆一所に堅く括りつけて鉢に入れ其上に砂など盛りまして福壽草の一鉢が出來上ります。

（編輯者申す）此の造花科は、之れを連載すれば尙一ヶ年を費すも盡さゞるべき見込、然るに過去一年間において、其通俗的のものは講述したれば、此に一先づ一段落を告げ、來春よりは、本科の代りに編物科の講述を以てせんとす。

泰西養生訓

近着の家庭雜誌に日用の養生戒十條なるもの載せあり、時節柄心得の爲めともなればとおもひ茲に其の大要を抄錄す

第一條　胃腸に差支なきもの三度の食事をするには成るべく不足なきやう遠慮なく食ふがよし、されど三度の食事の外、決して間食すべからず、

第二條　精神は常に快活なるを要す、假令一朝不幸不運に遭遇するとあるも、過度に無益の悲嘆に沈むべからず、斯の如きは最も心身を傷ふものなり、不養生は悲嘆より甚だしきものはなし、

第三條　過度の勞働をなしたる後、又は之を爲さんとする前にありては決して粗嚼の食を嚥下すべからず、又多重の刺激物香料類を用ゆる勿れ、是等は胃部を害ふ最初の斧なり、

第四條　一週間の內六日は每朝よく其の體軀を拭ひて自ら其の身を清潔にし、每七日に一回は、妻子を始め婢僕、家人に至るまで悉く沐浴せしむべし、（何となれば、人體一週間を經れば、每日の發汗の爲め、體內の細胞毛管より浸出し、汚穢物皮膚に附着し、往々恐るべき「ベクテリア」の其中に發生する事あり）上帝は人類に此の身躰清潔法を行はしめんが爲め多量の水を賜ひぬ、而かも其價は極めて廉價なり、

第五條　パンは能く燒けたるを撰み、飯は能く蒸れたるを食すべし、（凡て半燒、半煮の食物は著るしく胃に害毒を與ふるものと知るべし）

第六條　朝は太陽と共に起くべし、日に一回は必らず額上に發汗するほどの勞働を爲すべし、而して夜は更けざる中に臥床に入るべし、この如くして規則正しけ

れば、身體羸弱の人も遂には健康無病の人となるべし、
第七條　温袍は其の身を保つの具にあらず、人間保身の第一術は唯運動と適度の飲食にあり、
第八條　清潔なる空氣は滋養の食物と同一の價値あり(便室並に寢室は、時に前後の戶を開きて空氣の流通を自在にすべし、且つ寢具は常に乾燥せしむべし、
第九條　如何なる珍味も飢よりは不味なり(飢たる時は食を撰まず、珍膳に向つて食味を求めんよりは寧ろ其の胃腑を空虛にして食ふに如す)
第十條　何人も記憶せよ、注意せよ、又認識せよ、人生幸福の第一は健康にあり。

畫法解

野口小蘋

◎南天を畫くには前になりたる葉よりかきはしめ枝を作り幹を畫き實を後にす葉の墨色濃淡を分ちて作るべし

◎老松をゑがくには上よりたれたる枝を作り幹を畫き葉を作るなり松は幹に鱗の如きものありこれを龍鱗といふ龍鱗は渴筆を以て作るべし點苔は最終にすべし

◎山水寒江獨釣圖此書を作るには枯蘆よりゑかきはしめ沙地をゑかき次に舟及ひ人物を作る前景成りてのち遠山を畫くかたよろし

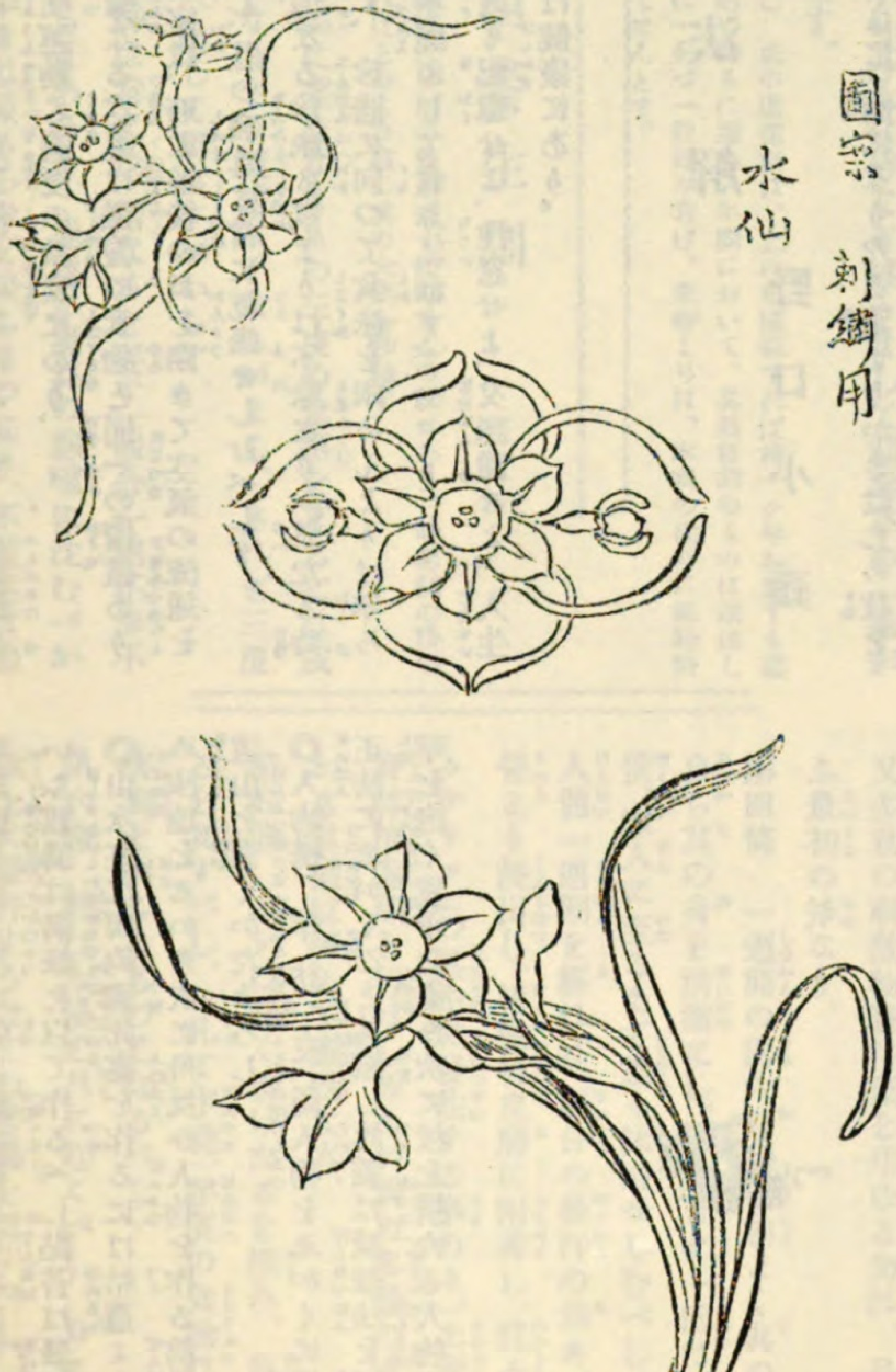
◎人物携レ琴訪レ友圖人物をゑかくに描法數多あり正法にゑかくこと甚難し此圖は減筆法を以て作るなり琴を抱く童子を書き次に杖を携たる人物を作るなり



武村耕靄女史（一二）

圖案　刺繍用

水仙





武村耕靄女史

習字法心得

小野鵞堂

手本の撰び方に付て一言致しましやう、人にすき嫌ひありて一樣に出來ぬは勿論でありますが、文字には癖の目立つと目立たぬがある、初學者には兎角此癖のみが感染し安いから、成るべく、癖の目立たぬを撰ぶが宜しいと私は思ふ、それは癖の目立たぬ書風によつて習ひ置く時は、他日何れの書風をも研究取捨する事が出來ますが、非常に目立つ癖ある書風といふものは、感染する事が早く、隨て直に老成して見ゆる樣に成りますから、他日に至てもなか〳〵他人の書を味はふなどいふ事は出來ませぬ、尤も其目立つ癖を好んで、他に少しも望みがないならば、それはそれてよいのですが、書といふものは上手に限りないもので、手が上れば上る程上手になりたい希望を生じて來る、此塲合に至り大に差支があらうかと考へます、私は常に申して居る事ですが、師を求るは其道を聞き其方角を覺ゆる迄の事で、其以上は自分から廣く研究するが肝要であります、勿論一旦結びし師弟の關係といふものは、生涯離るべきものではありませぬが、其學藝は生涯師の範圍内に拘束せらるべきものでない、むしろ師の望みとしても、水より氷を出すやうに致すたいのが、道理であろうと思ひます、それ故初めは廣く融通のつくやうな書風を撰ぶが宜いと申すのです、

この癖といふ事について、能く人が彼れの書は癖があるとかないとかいふ事を申しますが、癖のない書といふものは決してありませぬ、癖といふのが即ち書風なので、誰氏の書風といへば即其人の癖なのであります、たゞ其癖に目立つと目立たぬのがあるのは、譬へば人の面貌とか居動とかのやうなものでありましやうか、口を曲ぐる肩を張るなどは一局部の癖、躰の短長肉の肥瘠などは全躰の癖なり、無くて七癖とか申す通り人毎に就て數へたらば隨分多かるべし、去りながら短長肥瘠中間を得て居動温雅、風采自ら備はるものなきにあらず、これが癖の目立たぬ人なりとせば、書の手本を撰ぶにも亦此邊の道理を考へ合はせたいのであります。

講義

百人一首講義（十二）

文學士　大町桂月

九十四、參議雅經

みよし野の山の秋風さよふけて、故里さむく衣うつ也。

○み吉野の「み」は、唯添へたる言葉也。筑波山を「をつくばの山」といふに同じ。かゝる言葉は、古來の慣用あり。濫用すべからず。○さ夜更けてのさも唯添へたる語也。單に夜といふも同じ。○故里には、もと都のありし地、わが生れし本地、ちよと住まひし地の三通りの意あり。こゝの故里は、故都の意也。○一首の意は、吉野山下、夜既に更けて、秋風蕭々、故墟凄涼、遙に寒砧の聲を聞くと也。○凄涼の氣、紙上に溢る。佳作也。

九十五、前大僧正慈圓

おほけなくうき世の民に蓋ふかな、わが立つ杣にすみぞめの袖。

○おほけなくは、大膽にも、身分不相應にもの意也。○わが立つ杣は、延暦寺の開祖傳教大師が、比叡山に寺を建てむとて、杣を入し時、「阿耨多羅三藐三菩提の佛等、わが立つ杣に冥加あらせ給へ」と、云ひしより出でたり。わが立つ杣は、「いで立ちて叡山に入る我杣人」の義也。杣は木を伐る人也。比叡山に杣を入れるとての言葉故、こゝに取りて、比叡山の事に用ゐたり。「わが立つ杣に」は「比叡山に」の意也。○すみぞめの袖、僧の衣也。僧の衣は墨き故也。住み初めに言ひかけたり。○一首の意は、われは何等の法徳もなけれども、叡山にのぼり、延暦寺の座主となりて、嗚呼がましくも墨染の法衣を萬民の上に蓋ひ、即ち

萬民の爲めに法佛を護持する身とはなりたる也と也。○たゞこれ天臺座主となりたる時の、自から卑下しける挨拶の詞也。歌と云ふべきものに非ず。

九十六、入道前太政大臣

花さそふあらしの庭の雪ならで、ふりゆくものは我身なりけり。

○ふりゆくは、古り行く也、雪の降るに言ひかけたり。○暴風一朝吹き來りて花を誘へば、さしもに爛熳とさきこぼれたる花も、繽紛として散りて、雪の降るが如し。誠に果敢なきものかな。されど、果敢なきものは、その花の雪のみならで、わが身もはや年故りて見る影もなき身の上となりしと也。雪ならでは、「雪にあらずして、雪の如く云々」の意也。○調やゝ輕佻、意も淺薄也。たゞひと通りの歌也。わざ〳〵擇び出すべき歌に非ず。

九十七、權中納言定家

來ぬ人をまつほの浦のゆふなぎに燒くや藻鹽の身も焦れつゝ。

○まつほの浦、松帆の浦にて、地名也。待つに言ひかけたり。○ゆふなぎは夕和にて、晚方風なぎて波靜かなるをいふ。○藻鹽は、海藻より採る鹽也。○燒くやのやは、口合ひのやにて、意味なし。○「まつほの浦の夕なぎに燒く藻鹽」は、發語は待つに言ひかけ、下は、焦るゝと云はむ爲めの序也。○戀人を待てど來らず、じれつたくて〳〵この身は燒けこがるゝやうなりと也。○たゞ待つ戀の切なるを歌へるのみにて、さまでの感興も情味もなし。

九十八、從二位家隆

風そよぐならの小川のゆふぐれは、みそぎぞ夏のしるしなりける。

○そよぐは、そよ〳〵と靜かに吹く也。○楢の小川、地名也。○みそぎは、身そゝぎ也。むかし、六月三十日に、身を淸滌にせむとて、水にかゝることありき。

○楢の小川の邊、日はくれて涼風そよ〳〵、晝のあつさは何處へやら、涼しさの餘りに夏としも覺えず、はや秋になりたるかと思ひけるに、ふと見れば、みそぎするものあり。さては、まだ夏なりと心付けりと也。○一言も涼しと云はずして、涼意紙表に溢る。手腕の非凡なるものと云ふべし。

九十九、後鳥羽院

人も愛し人も恨めし味氣なく世を思ふ故
に物を思ふ身は。

○人も愛し人も恨めしは、人が可愛らしく思はれたり、また憎らしく思はれたりする の意也。○味氣なく、無益に、徒らに、詮なく也。○如何に力をつくし、心をこがしても、天下はわが思ふまゝにならず、まことに無益な、詮ないことゝは知りながら、なほ國を憂ひ、民を憂ひ、即ち世を思ふ故に、從つて物を思ひ、即ち心配事が常に絶えずして悶ゆるこの身、かばかり世の爲めを思ふ故、世の爲めになる人は可愛く思はれ、君國をよそに私のみ圖る人は憎らしく思はるゝよと也。○後鳥羽天皇が、北條氏の專横を憤り給ひ、皇威を恢復せむとおぼし給へる御心中、おしはかられて、痛切なる歌也。

百、順德院

もゝしきやふるき軒端のしのぶにもなほ
餘りある昔なりけり。

○もゝしきやは宮の枕詞にて、宮といふ代りにも用ゐる。こゝは枕詞よりうつりて、宮の意に代用せられたる也。○しのぶ、草の名也。忍ぶに言ひかけたり。○宮殿零落、軒かたぶきて、しのぶ徒らに生ひ茂れり。榮華一瞥、皇威日に衰ふ、止んぬる哉。今の皇居の頽廢を見るにつけても、忍ばるゝは、昔也。されど、忍ぶになほ餘りあり。いくら追懷しても、追懷し切れぬほど、なつかしき昔哉。○今昔榮枯の懸隔甚しきを歎かれたる御歌にして、悲哀の意、言外に躍動す。

（完）

漢文評釋

文學士　久保天隨

山内一豐妻　大槻磐溪

山内猪右衛門一豐。始竢仕織田氏也。適有東國人來販名馬者。安土諸將士皆驚其神駿。然爲價高之故。不能購也。販者將牽馬徒還。

これは、元の土州侯、今の華族山内家の先祖であつた山内猪右衛門一豐の妻の、平生心掛の善かつた話で、常山紀談巻之上に出て居る『山内一豐馬を買はれし事』といふ短文を漢譯したものである。

（字解）竢仕、君を擇んで仕ふること○適、たまたまと訓すべし○販、鬻と同じ、賣ふこと○安土は信長居城の在るところ、安土諸將士とあるは、織田氏諸將士といふと同じ○神駿　馬の姿勢すぐれたること。

（原文）山内土佐守一豐、そのはじめ、織田家に仕へたりけり。東國第一の駿馬なりとて、安土に牽き來てあきなふ者あり。織田家の士、これを見るに、誠に無雙の駿足なれど、價あまりに貴しとて、求むべき人なく、いたづらに牽いて歸らむとす。

（評論）原文『東國第一の駿馬なりとて安土に牽き來てあきなふ者あり』とあるを譯して、有東國人來販名馬と爲て終まつたのは、簡單ではあるが、馬その者に就いては、甚だ價値を下げた樣な傾きがある。そこで、譯文では驚其神駿の四字を下し、前後呼應して相救ひ、つとめて原文の意を傳へやうとした跡が見える。しかし、未だしと言ひたい樣な氣がしないでもない。

一豐見之不勝流涎。歸家獨自歎曰。痛哉貧也。我當事君之初。獲此名馬以見主君者。不唯一豐一人之榮。抑亦織田氏之榮矣。其妻聞之就問價。曰。黄金十兩矣。

（字解）流涎、物の欲しき時、口中より涎自ら出づるを

いふ○痛哉は心苦しといふことにて、自ら堪へざるさま○事君の事は仕と同じ○見主君の下なる者の字は「ならば」と訓すべし○就は或事に關係し、次いで起る事に接應する辭。必ずしも「其人に就いて」といふに非ず、「そこで」といふ義、「すなはち」と訓すべし。

《原文》一豐、其比は猪右衛門といひしが、此馬望に堪へかねたれども、如何にも叶ふべからざれば、家に歸り、身貧き程、口惜き事はなし。一豐奉公の初に、あつはれ、かゝる馬に乘りて、家形の前に打出べき物をと、ひとりごとしければ、妻つくづくと聞いて、其價はいかばかりにてか候と問ふに、黄金十兩とこそいひつれと答ふ。

《評論》原文こゝに始めて「其比は猪右衛門といひしが云々」の注釋的字句を挿入したれども、譯文は早く前に繰り上げて置いたものだから、直に本文に移つたのである。文脈の違ふ爲に、かく成つたのは、仕方が無いけれども、公平に言ふと、原文の方が趣ある樣に思はれる。又、譯文に不唯一豐一人之榮抑亦織田氏之榮也とあるのは、譯者が自ら造らへた文句で、原文には關係ない。しかし、是は尊題法の爲であることは、後になつて自ら分かる。

妻曰。夫君必欲㆑獲㆑之。妾能辨焉。乃取㆓金於鏡奩㆒。致㆓之一豐前㆒。一豐且喜且恨曰。比來窮困之極。或恐㆓及㆑卿顛覆㆒。而卿絶不㆑言㆑有㆑金。何卿之忍耶。

《字解》夫君は夫を呼ぶ辭、我が脊の君といふに同じ○辨は金を支拂ふ樣に取り計らふとのこと○鏡奩は鏡を入れ置く箱○且喜且恨、喜びつゝも恨めしく思ふこと○比來な近頃○及卿は與卿といふに同じ○顛覆、生計立たずして家の破產することと○絶は「絶えて」と訓すべし、「決して」といふに同じ○何卿之忍耶、どうして御身は善く堪らへて居たかといふこと、原文に「心強く」といつたのは、即ち是れである。

《原文》妻聞きて、さほどに思ひ給はむには、其馬求め給へ、其料をばまゐらすべしとて、鏡の奩の底より取り出して、一豐の前にさし置きたり。一豐大におどろき、此年ごろ身貧しくて、苦しき事のみ多かりしに、此金ありとも知らせたまはず、心強くも包み給ひけむ、今此馬得べしとは思ひもよらざりきと、且は悦び且は恨む。

《評論》原文「且は悦び且は恨む」の句、終にあるを、譯文は移して初に置き、その代りに「大に驚き」といふ字を省いて終まつた。こゝも、簡潔ではあるが、矢張り意義上に於て、十分でない。

妻曰。夫君言亦有理。顧昔妾之來嫁也。妾父自納之鏡底。戒曰。汝勿以夫家貧故費此金。必也有關夫君一大事。然後用之。妾聞近日京師有簡馬之擧。今夫君而獲此馬。是一生之榮。而所謂大事無乃此耶。是以敢爾。一豐泣而謝曰。卿之惠也。嶽翁之恩也。遂購其馬。

《字解》夫君言亦有理、亦の字を重く視るべし、それもそうであるがと云ふ意にて、以下己の意を述ぶ○顧は「憶ひ見れば」といふ義○簡馬立擧、馬揃ひの儀式○無乃此耶「乃ち此なること無からむや」と訓讀すべく、此こそ例の一大事と思はれ候ふといふ義○嶽翁は妻の父、舅氏といふに同じ。

《原文》妻仰の旨ことわりにてこそ候へ、さりながらこれは妾この御家に參りし時、父此かゞみの下に入れ給ひて、あなかしこ、世の常の事にゆめ〳〵用ふべからず、汝が夫の一大事とあらむ時にまゐらせよと戒めたまひき。家の貧しきも、世の常なれば、堪へ忍びても過ぎぬべし。誠に今度京にて馬揃あるべしと承はれば、此事天下の見物なり、君が又つかへの始なり、よい馬召して見參せさせ申さむと存候ふてこそ奉れといふ。一豐悦ぶこと限なし、頓て其馬求めてけり。

《評論》原文は、委曲周匝、語をなす縷々として、如何

にも賢婦人の口から出た者であると思はるゝに反して、譯文は餘りに直截簡古で、しとやかなる趣を缺いて居る樣である。「世の常の事にゆめ〳〵用ふべからず」といひ、「家の貧しきも世の常なれば」といひ、その間、決して唐突の弊がない。然るに譯文は、「汝勿以夫家貧故費此金」とある。原文には、馬揃の下に「この事天下の見物なり、君も又つかへの始なり」とあつて、自然の對句が面白く出來て居る上に、出仕の始といふことが、一篇を貫いて居るに反し、譯文は餘りにくど過ぎると思つたものか、之を省いて、所謂一大事無乃此耶と斷言して終まつて、絕えて餘情ながい。それのみならず、是以致爾などいふのは、鹿瓜らしくして、角張つて居る。一豐泣而謝曰以下の入れ言も、一應尤に聞ゆるが、泣かせた割合には、その精神が生動しない樣であつて、卿之惠也、嶽翁之恩也も、しつこい樣に聞こえる。原文はどうかといふに「一豐悅ぶこと限なく」とあるばかりであるが、一に之を讀者の想像に任かせた處、却つて無限の情緒が籠つて居る。文は必ずしも精密を貴ばない、唯だ我が意を讀者に傳へて誤なければ、それで善いので、あまりに細工し過ぎると、肝心の精神が消えて終まう。こゝが、呼吸もので、六つかしいのである。

無幾簡馬之期至矣。一豐乃騎而入京。風骨峻爽。奮鬣一嘶。信長望見大驚曰。猪右何所獲此乘乎。一豐具告其故。信長嘆曰。我家多士。而不能購一馬。洵爲上國之耻。汝落魄歸於我。乃能爲此非常之擧。以一洒我耻。武夫用心。不當如此耶。一豐釋褐五百石。於是增爲千石。業以見任用。

《字解》風骨峻爽は、馬の骨格逞しきを形容したる辭〇振鬣一嘶は、馬の生氣凜然たる樣を寫したもので、漢文の長處は此樣な處にある〇猪右は一豐の本名、猪右衛門の略〇此乘このやうな乘馬といふこと〇具は備細にといふこと〇多士は家來の數の多いこと〇洵は「信」「誠」など同じく、其上意味やゝ强し〇上國

は王畿地方一帶を指す、上方といふと大差なし〇落魄、おちぶれて居ること〇歸於我、我が許に來て仕へるといふこと〇洒は「そゝぐ」〇武夫用心、武士のたしなみ〇釋褐、始めて君に仕ふること、旅せし衣を脱いで禮服を着けるといふことより轉ぜしなり〇業は「既に」と訓ずること普通なれど、こゝにても「追々に」といふ義にて、古人其例なきに非ず。

●●〔原文〕程なく京にて馬揃わりし時、打乘て出てしかば、信長大におどろき、あつはれ馬やとて、事の由聞き玉ひ、東國第一の馬、遙かにわが方にひきて來りしを、空しく歸へさむは、口をしき事ぞとよ、年比、山内は久しく浪人してありしと聞く、家も貧しからむに、求め得たるは、信長が家の耻をすゝぎたる上、弓矢とる身のたしなみ、是に過ぎたる事やあると感じて、是より次第に用ひられしとぞ。

●●〔評論〕信長の驚きたる樣を寫すに、原文は「天晴れ馬や」といひ、其下「事の由聞き玉ひ」と付けたのは、頗る手際であるが、譯文は何所獲此乘乎と謂つたものだから、馬その者に重きを置いた樣が見えないで、之を獲た理由を尋ねたことに成つて終まつた。原文は常に影寫法を以てしたものだから、朧の中に少からぬ妙があるけれど、譯文では、常に手が屆き過ぎて居る。我家多士、不能購一馬、洵爲上國之耻といふのも、亦た同じく、前に東國一の駿馬といふのを入れなかつたものだから、篇中を通じて馬の價値が分らない。その下、原文には「信長が家の耻をすゝぎたる上、弓矢とる身のたしなみ」といつて、二つの事をならべてあるのに、譯文では以一洒我耻、武夫用心不當如此耶といつて、接續したものだから、一つ事となつて終まつた。いづれも微細な事ではあるが、語氣の輕重、はるかに異なる所があることは、爭はれない。釋褐五百石、於是增爲千石といふのは、譯者が他書を參考して插入し、以て原文の闕を補つたものであろう。

寧靜子曰。後來石賊之反。夫人齋藤氏。鬻書爲笄料。馳使告一豐。一豐得之。不解而獻焉。異日獲廿四萬石之大封。職此之由。山内

氏何外家之福之多耶。

《字解》寧静子は前に屢ば云つた通り、磐溪の別號○石賊は石田三成○擘は裂くこと○笠糾の糾は紐○職は元と訓すべし○外家は妻の家。

《評論》これは譯者が論賛として付けたものであつて、原文には無い。この事のあつた後、はるかに年を經、石田三成兵を起して徳川氏を謀らうとした時、一豐の夫人齋藤氏は、手紙を裂いて笠の紐となし、人に分らぬ樣にして、使を馳せ、家康に從つて東國に居つた一豐に知らした。處で、一豐は自分で見らぬ中に、之を解かずして先づ家康に見せたものだから、大に信用を得、かの二十四萬石の大封を得たのも、本はといへば專ら之が爲てあるとのこと。山内氏、外家の爲に幸を得たこと、彼といひ、此といひ、實に限りも無いことで、それに就けても夫人の賢明が思ひ知られるばかり、まことに千古の龜鑑てあるとの意。

土佐日記講義（十二）

文學士　鹽井雨江

九日。こゝろもとなきに、明けぬから、舟を引きつゝ上れども、川の水なければ、ゐざりにのみぞゐざる。此の間に、和田の泊りのあがれの所といふ所あり。米魚など乞へば贈りつ。

○こゝろもとなきに。都へ心の急ぐまゝ、待ち遠く思ひて、夜の明かぬ中から、出船したりとなり。○ゐざり。前にも言へり。膝行にて、舟の進みの遲き故に形容して言へるなり。○あがれの所。別れの所といふに同じ。あとわとは通ふなり。なほ我れをあれともいふ如し。此處より旅人の行き別るゝといふ意にて名づけし所の名ならむ。或は、何にか古事ありて、かく言ひ來たりしものならむ。

かくて、舟ひき上るに、渚の院といふ所を

見つゝ行く。その處、昔を思ひやりて見れば。面白かりける所なり。後なる岡には、松の木どもあり。中の庭には、梅花咲けり。こゝに、人々のいはく、これ、昔名高くきこえたる所なり。惟喬のみこの御ともに、在原業平の中將の、世の中に絶えて櫻の咲かざれば、春の心は長閑からましといふ歌よめる所なりけり。今、興ある人、所に似たる歌よめり。

千代へたる松にはあれど、古の
聲の寒さは、かけらざりけり。

また、ある人のよめる、

君戀ひて世をふるやどの梅の花、
昔の香にぞ、なほ匂ひける。

といひてぞ、都の近づくを喜びつゝ上る。

○渚の院。御殿の名なり。河內國交野郡渚村にありたり。惟喬親王、御狩の折り〳〵、こゝを御休息所とせられし所なり。○その處云々。惟喬親王の此處に遊びたまひし時の御事などを思ひやりながら、見れば、此處は誠に面白く思はるゝ所なりとなり。○後なる岡。院の後にある小高き岡なり。○中の庭。院の邸內の庭なり。○人々。舟中の人々なり。○惟喬のみこの御ともに。惟喬親王の御供せてといふ事なり。惟喬親王は、文德天皇の第一の皇子なり。おん母は紀靜子と申し奉る。第一の皇子におはしたれど、藤原氏の所生におはせざるを以て、意を得給はず、攝津の水無瀨に閑居して、詩歌風月を友とせられ、後遂に叡山の麓なる小野の里に世をすてたまへり。水無瀨におはしける頃、をり〳〵交野あたりに狩りに出でたまひける時、業平朝臣、一日、そのお供をして、此の渚の院にて、次の歌をよみたるなり。小野に隱遁せられてよりも、業平朝臣は、をり〳〵其の幽棲を訪ひて慰め奉れり。彼の「忘れては夢かとぞ

思ふ思ひきや、雪ふみわけて君を見むとは」といへる朝臣の歌は、此の幽棲を初めて訪ひ奉れる時の吟なり。業平朝臣は有名なる六歌仙の一人なり。阿保親王の第五子にて、藤原氏の專橫なる世を、面白からず思ひて、世外の風月に詠歌を友としてくらしたる人なり。○世の中に云々。此の歌は、古今集、伊勢物語には、第三の句を「なかりせば」とせり。いづれにても、其の意は變る事なし。世の中に櫻の花が全く咲く事が無かつたならば、此の春の日に、わが心は靜にゆるやかならむを、花故に物思ひをしますといふ事にて、櫻花をめづる心よりよめるなり。○今興ある人。昔の惟喬親王の當時の事など思ひやりて、今、面白くおぼえたる人といふ事にて、これは、貫之自身の事なるべし。○所に似たる歌。其の場所に、よくつりあひたる歌をよみたりとなり。○歌の意は、松は千代を經て老ひたれど、其の松風の寒く身にしむさまは、昔にかはらないよといふ事にて、上の句の松は、渚の院の後の岡なる松をさし、さて、その松風は變はらないといひて、院は昔にかはり荒れはてたるよしを、言外にひゞかせたるなり。○君戀ひての歌の意は、君を戀ひつゝ、多くの年を經る院の邸内の梅花は、其の君のありたる昔の如くやはり、今日もかをりて居るといふ事にて、君とは惟喬親王をさし、宿の梅の花とは、前文にいひたる中の庭に咲きたる梅花をいへるにて、さて、梅花の香が昔にかはらずといひて、其の院は昔にかはり荒れたるを思ひやり、また、親王のなつかしきよしをも、言外にこめていへるなり。

かく上る人々の中に、京より下りし時に、皆人、子どもなかりき。いたれりし國にてぞ、子生めるものどもありあへる。皆人、舟の泊まる所に、子を抱きつゝ、下り上りす。これを見て、昔の子の母、悲しきに堪へずして、

なかりしもありつゝ歸る人の子を、
ありしもなくて來るが悲しさ。

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きて、いかゞあらん。かうやうの事、歌このむとて、あるにしもあらざるべし。もろこしも此所も、思ふことに堪へぬ時の業とか。今宵、宇土野といふところに泊まる。

○かく上る人々の中に云々。かく都へ歸り行く人々の中には、初めに都より土佐の國へ下りし時には、子供は無かりしを、土佐の任國に居る間に、子どもを生みたる人も、同船の人の中に居合はせたりとなり。ありあへるとは、共に居る意なり。○皆人、舟の泊まる所に、云々。同船の人々が、舟の泊まりたる所にて、子どもを抱きながら、舟へ往復するとなり。○これを見て云々。其の子どもを抱きたる人々を見て、亡くなりたる子の母、即ち、貫之の妻が、悲しみに堪へずして、左の歌をよみたりとなり。○歌の意は、子どもの無かつた人々も、任國に居る間に、子どもが出來て、今は子どもをつれて都へかへるに、我れはもとはありし子を、その國にて亡くしてかく歸る悲しさよといふにて、其の意は、前の文章にて明かなり。○父云々。亡き女兒を悲しむ此の妻の歌をきゝて、其の亡兒の父なる人も、さぞ哀れに身にしみておぼゆる事ならむとなり。父とは、實は貫之自身なり。此の歌をきくに誠に悲しく哀れにおぼえたりとなり。○かうやうの云々。かゝる歌を詠むことは、歌を好むからとて詠むものにはあらざらむ。支那にても我が國にても、かく、歌は感情の動きて堪へざる時は詠むものなりとか、實にさもあるべしとなり。○宇土野。攝津國島上郡なり。今は鵜殿と書くといふ。

十日。障ることありて上らず。

○十日の日は、故障ありて、なほ宇土野に滯在したりとなり。

十一日。雨いさゝか降りて止みぬ。かく

て、さし上るに、東の方に、山のよこをれるを見て、人に問へば、八幡の宮といふ。これをきゝて、喜びて人々をがみ奉る。山崎の橋見ゆ。うれしきこと限りなし。

○十一日は、朝少し雨がふりたるが、やがて雨はやみたり。さて、雨がやみて、また船を出だして川をさかのぼりたりとなり。○山のよこをれる。山の横はるといふに同じ。○八幡宮。山城の久世郡にある石清水八幡宮なり。既に山城に入り、都もいよ〳〵近くなりたる故に、人々が大に喜びて、八幡宮にむかひて拜禮したりとなり。○山崎の橋。同じく乙訓郡にあり。○うれしきことと。都のいよ〳〵近くなりたる故に、大に嬉れしとなり。

こゝに、相應寺のほとりに、しばし舟をとゞめて、とかく定むることあり。此の寺の岸のほとりに、柳多くあり。ある人、此の柳の影の川の、底にうつれるを見てよめる歌、

さゞれなみ寄する文をば、青柳の
　かげの糸して織るかとぞ見る。

○和應寺。同じく乙訓郡にあり。○とかく定むることあり。いろ〳〵と整ふることありといふ事にて、即ち、都へ歸り入るにつけて、いろ〳〵と用意する事ありとなり。○歌の意は、此の川の細に立つ波の文は、川の岸なる青柳の糸で織るかと思はるゝ、といふとにて、川の波の細に立つ有樣を、織物の文にたとへ、さて、岸の柳の糸にて織るかと思はるゝといへるなり。さゞれ波はさゞら波にも同じく、さゞなみといふに同じ。細に立つ波をいへるなり。

十二日。山崎に泊まり。

十三日。なほ山崎に。

○なほ山崎にとは、十三日もやはり山崎に泊り居るとなり。前の十二日の條の筆によりて、泊まれりといふ詞を略したるなり。

十四日。雨ふる。今日、車、京へ取りにやる。

○十四日も、山崎になほ泊まり居るなり。此の日は雨ふりたりとなり。さて、此處よりは、舟を出でて、車にのりて、都へ行くなり。其の車を、都へ取りにやりたりとなり。昔の旅の不便これにても知るべし。

十五日。今日、車もて來たれり。舟のむづかしさに、舟より人の家に移る。此の人家よろこべるやうにて、あるじしたり。此の主人の、また饗應のよきを見るに、うたておもほゆ。いろ〳〵にかへりごとす。家の人の出で入り、にくげならずゐややかなり。

○今日、車云々。昨日都へ取りにやりたる車を、今日此處へもち來たれるなり。○舟のむづかしさに、云々。舟中の狹く厭く、むさぐるしき故に、今日舟を出でゝ、他人の家に移り宿りたりとなり。○此の人家云々。貫之等の移り宿りたる家にて貫之等のとまりたるを、甚だ嬉しげにて、丁寧にもてなし饗應したりとなり。○此の主人の、云々。此の主人のよき上に、また饗應のよきを見るに、甚だ分にすぎておぼえたりとなり。主人のよきとは、貫之等を歡び迎へたる主人の人物のよきをいへるなり。饗應のよきとは、もてなしの丁寧なるを言へるなり。○かへりごとす。返禮したりとなり。主人の志のうれしきにつけて、いろ〳〵と厚く返禮したるなり。○家の人の出で入り。此の家の人の立居振舞を言へるなり。○にくげならず云々。不骨なる憎げなる樣子なく恭しく禮義正しとなり。

十六日。今日の夕つ方、京へ上るついでに見れば、山崎のたななる小櫃の繪も、まがりのほらの形も、變はらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞいふなる。

○山崎のたな。たなとは物を賣る店なり。山崎の商店なり。○小櫃の繪。兒童の玩弄物にとて。繪をかきたる小さき櫃を、山崎の商店にて賣り居るなり。

其の小櫃の繪は、昔の如しとなり。○まがりのほらの形。まがりとは、勾餅を略して言へるにて、菓子の名なり。ほらは法螺貝にて、其の菓子の形が法螺貝の形に成り居るなり。其の菓子の形も、昔の如しとなり。○賣る人の心をぞ知らぬ云々。山崎の商店にて賣り居る菓子の形と、小櫃の繪とは昔に變はらざれど、それを賣る人の心は、どうだか、わからないといふ事にて、世の人心は變はり易くあてにならぬものなるよしを、窃に諷刺したるなり。

かくて、京へ行くに、島坂にて、人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、來る時ぞ、人はとかくありける。これにもそれにも、かへりごとす。

○島坂にて、云々。島坂といふ所にて、人が貫之を迎へて饗應したるなり。○必ずしも、云々。それほどに饗應するといふ事は、必ず世に無からむとおぼゆる行ひなりといふ事にて、人の饗應せる勞を謝したる詞なり。○立ちて行きし時より、云々。都を出立して田舍へ赴かんとせる時は、送る人も少く、人々は兎角冷淡なりしが、今、都へ歸る時には、迎ふる人も多く出迎へや饗應やどうのかうのと、いろ／＼親切氣に、人々がもてなすといふ事にて、世間の人情の輕薄なるを諷刺したるなり。寸鐵人を殺すとは、かゝる詞をやいふべからむ。○これにもそれにも云々。其の出で迎へて饗應などしてくれたる人々へ、皆其の返禮を爲したりとなり。

夜になして、京には入らむと思へば、急ぎしもせぬほどに、月出でぬ。桂川月のあかきにぞわたる。人々のいはく、この川、飛鳥川にもあらねば、淵瀬、更にかはらざりけりと言ひて、ある人のよめる歌、

ひさかたの月に生ひたる桂川、
底なる影も變はらざりけり。

又ある人のいへる、

天雲のはるかなりつる桂川、

袖をひててぞわたりぬるかな。

又、ある人のよめる、

桂川わが心にもかよわねど、

同じ深さに流るべらなり。

都のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて來れば、所々も見えず。京に入り立ちて、うれし。

〇夜になして、云々。旅の裝ひ姿の見苦しくやつれてあれば、人目につかぬやうに、夜になりて都へ入らむと思ふ故に、急ぎもせず、ゆる〳〵して居る間に、月も出でたりとなり。〇桂川云々。明にてりわたる月下に桂川を渡りたりとなり。〇人々のいはく、云々。人々のいふやう、此の桂川は、飛鳥川にはあらざる故に、年月經たれど、淵瀨は昔のまゝにて、更に變はりたる所なしなどいひて、さて、其の中の一人が、左の歌をよみたりとなり、飛鳥川は大和國にありて、彼の有名なる歌に「世の中は何にか常なる。飛鳥川、昨日の淵ぞ今日は瀨になる。」などいふ如く、昔より淵瀨の變はりやすきよしに、多くよめり。それによりて、今かく言へるなり。〇歌の意は、桂川は淵瀨の變はらざるのみならず、水底の月影も昔に變はらないよと言ふ事にで、其の餘情に、「都の人の心はいかに」といふ意をこめたり。「ひさかたの月に生ひたる」の二句は、桂川と言はむ序に用ひたるなり。月の中に桂樹ありといふ古きはなしによりて、かく桂の序につかひたるなり。而して、今や月夜の桂川なれば、その風景にも緣ありて面白く用ひたる序なり。ひさかたは、月の枕詞なり。〇天雲の歌の意は、遠く遙に思ひながめたる都の桂川を、今日は我が袖を浸すばかりに、まのあたり其の水を渡るワイ。あはれうれしやと言へるなり。天雲のは遙の枕詞なり。袖をひててとは、我が袖を、其の水に浸してといふ事にて、

其の川を、やがてまのあたりに渡る意にて、遥に思ひし都も近くなりて、その川をやがて渡るこゝろにて言へるなり。「天雲の遥かなりける」の詞、面白し。○桂川の歌の意は、桂川は、我がよろこぶ心には似ざるものなれど、我が都にかへりつきしを深く喜ぶ我がうれしさと同じ深さに流るゝやうに見ゆるをいへるなり。畢竟、都へ歸りつきたるをよろこべる心なり。○京に入り立ちて、云々。いよ〳〵都の中に入りたるに、甚だうれしく思ふとなり。

家に到りて、門に入るに、月あかければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりも勝りて、いふがひなくぞ、こぼれ破れたる。家をあづけつる人の心も、荒れたるなりけり。

○家に到りて、云々。都の我が家に到り着きて、其の門を入れば、折りから月の明にてりわたる夜なれば、邸内の有様は、甚だ明に見ゆとなり。○聞きしよりも、云々。我が屋敷の荒れたる様が、兼ねて人つてに聞き居りたるよりも一層甚しく、詞にもかゝらぬ程に、此處彼處頽れもし破れもして、甚しく荒れ居るなり。○家をあづけつる人、云々。都の家を預けて置きたる隣人の心も不親切になつてしまつたのであつた、それ故に、屋敷もかく甚しく荒れたるなりと、其の不親切なるを恨みたるなり。「人の心も荒れたるなりけり」の詞、甚だ妙なり。面白し。

中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預れるなり。さればたりごとに、物もたえず得させたり。今宵かゝる事と、聲高にものも言はせず。いとつらく見ゆれど、心ざしはせんとす。

○中垣こそあれ、云々。貫之の家と、其の家を預けおきたる人の家とは、隣りづからにて、其の間に中垣はあれど、全く一家の様なれば、其の隣人の自から預からむと所望して、貫之の家をあづかれるなり。此方より強て頼みて預けたるにあらずとなり。○されば、

云々。斯く家を預りくれたる故に、其の好意にむくいん爲めに、都へついでのある度毎に、其の隣人の許へ、常に贈物をしたり。さるに、かゝる家の仕末なりとは、いと不親切なりと恨みたるなり。○今宵かゝること、云々。貫之の家の者どもが、此の荒れたる家の有樣に、隣人の不親切をいと、腹立しく思ひて、かゝる有樣とは何事ぞと頻りに不平を言へど、此の年來、さすがに我が家を預けたる義理もあれば、其の不平を制して、今夜は高聲にさう不平を人々に言はせずとなり。○いとつらく、云々。甚だ隣人の不親切の憎くゝ思はるれど、此方は、我が家を預けおきたる勞に對して返禮はせんと思ふなりとなり。○隣人の自から預りたるかひもなく、家を荒るゝに、まかせたる不親切、實に腹立たしくおぼゆるは、道理なれど、されど、此のあたりの文、貫之のいひざまも、いといやしげにきたなげなり。たより毎に贈物を數多やりたりなどの言は、いやらしく聞くにくし。言はずもがなの心地す。

さて、池めいて窪まりて、水つける所あり。ほとりに松もありき。五とせ六とせのうちに、千とせをや過ぎにけん、片枝は無くなりけり。今生ひたるぞ混れる。大方皆あれにたれば、あはれとぞ人々いふ。

○池めいて、云々。池らしく地面の低くなりて、やゝ水のたまりたる所ありとなり。これは、もとは池なりしを、荒れはてたれば、岸もくづれ、水草も生ひて、昔の姿も見えぬ故に、かく「池めいて、云々。」と言へるなり。いと面白き筆といふべし。これを、池もくづれうづまり、水草も生ひて、いと荒れはてゝ、昔の池のさまもなしなどいはんには、文章は平凡にして何の妙味も無くなるべし。文章家の味ひて學ぶべき筆づかひにこそ。○ほとりに云々。其の池の岸に松樹もありたり。されど、僅に五年六年許りの留守の間に、松は千年も經たのであらうか、昔の姿は無くなりて、片枝は全く無くつてしまつた。また、此の頃

生ひたる小松もまじつて居るといふ事なり。畢竟、樹木の手入れなどもせず、且つは、濫りに伐りなどもして荒れはてたるさまを、恨みをふくみて書けるなり。此のあたりの文、すべて、面白し。「千年をやすぎにけん片枝はなくなりにけり」などの筆も、殊に面白し。○大かた、云々。家も庭も、すべて屋敷は荒れはてれる故に、其のわり様を見て、人々が皆哀しむとなり。

思ひいでぬとなく思ひ戀ひしきが中に、この家にて生れし女兒の、諸共に歸らねば、いかがは悲しき。船人も皆子抱きての、しる。かゝる中に、なほ悲しみに堪へずして、密に知れる人と言へりける歌、

生れしもかへらぬものを、わが宿に

こまつのあるを見るが悲しさ。

とぞ言へる。なほ飽かずやあらん、またかくなん

見し人を、まつの千歳に見ましかば、

遠く悲しき別れせましや。

忘れがたく、くちをしきこと多かれど、えつくさず。とまれかくまれ疾くやりてん。

○思ひいでぬことなく、云々。昔の事の總べて思ひいでられて、甚だ戀ひしく思はるゝが中にも、殊に、此の家にれ生れたる女子の、土佐の國にて死にて、今諸共に歸り來ざる故に、それが非常に悲しいといふ事なり。○船人。同船し來たりたる人々なり。土佐より舟を同うして都に歸り來たれる人々が、皆子どもを抱きて、喜ばしげにて語り騒ぐとなり。○かゝるうちに、云々。かゝる間に、人々の子どもを抱くさまなど見るに、一層亡き女兒の事の悲しくてたまらず、密に我が悲みを知れる人に左の歌の語りきかせたりとなり。我が悲みを知れる人とは、即ち、貫之の妻なり。○歌の意は、此の家にて生れたる女兒の、今や既に死に失せて、今日此の家に歸り來たらぬに、昔は

此の宿に無かりし小松の、今日は生ひ出でゝ在るを見るにつけて、誠に其の亡兒の思ひいでられて悲しいといふ事なり。人々の子どもを抱きて喜び語りあふを見て羨やましく、亡き我が子の思はるゝより、宿の小松の上につけて亡兒の思はれて悲しと詠みたるなり。前に「今生ひたるも混れり」と言ひたるは、此の小松に承應するなり。○なほ飽かずやあらん。かく歌ひ悲みても、なほ悲しき心の滿足せられずやありけん、また左の如き歌をよみたりとなり。○歌の意は、亡き女兒を、此の小松の千年の如くに、末長く見るを得んには、再びあひ難しといふかゝる悲しき死別は爲すべきか爲すべきにあらず。さるを亡兒のいとはかなくて、かゝる再びあひがたき別れを爲したりとなり。見し人をば、亡き女兒の事をいへるなり。「遠く悲しき別れ」とは二度とはあはれぬ死別をいへるなり。○えつくさず。言ひつくす能はずといふ事なり。○とまれかくまれ、云々。ともあれかくもあれ、かゝるつまらぬ文は、人に見すべきものにあらねば、早く破りすてむといふ事にて、貫之自身、謙遜して言へるなり。

此の土佐日記を、ある人は、貫之が世の輕薄なる人情を諷刺せん意にて書けりといひ、ある人は、亡兒の悲しさに堪へずして、その悲哀を言はん爲めに書けるなりといひ、いろ／＼の説を立つる人あれど、さる格別ある意趣ありて書けるにはあらざるべし。畢竟は、旅路の思ひ、亡兒の悲しく、人情の輕薄、家の荒れたるさまなど、いろ／＼貫之の心に感ぜる事ありて、それ等を言はん爲めに、且つ、當時漢文の流行する世の中に、國風をあげん考へにて、かく假名文字にて書き立てたるものなるべし。

此の日記の妙趣は、其の文章の輕妙洒落なると、且つ妙に人情を穿ちたる所にあり。また、當時の世の中の交通の不便なるさま、世間の人情などの見えておもしろきなり。此の日記の歌は、見どころなし。僅に一二首のみ。

（大尾）

小説

新嫁

つばくろ女史

上

「秋さん一寸此方へお來て」と、母上に呼ばれたのは、丁度妾が學校から歸つて、小緣先で弟と蝶を弄して居た……午後四時頃でした。氣の故か、何だか今日は、平生の氣輕な優しい、母上の言葉としては、重くろしく嚴そかに聞こえ。何となく恁麼、位牌の前でお小言でも頂戴する時のやうに、氣遣はしく胸が悸々して。擧ぐる足さへ重たいやうに思はれました。然しまた、相濟まぬやうな、氣の毒のやうな氣もするので、何が何やら分らず、母上に引つ添ふて茶の間に入つたのです。チラリ後を見ると、弟は那麼事とも氣付かず、蝶でも見付かつでしよ。豆畑の方へ飛んで行つたやうでした。

火鉢の前へ坐られた母上は、嫣然り笑つて、「マア此方へお寄り」と、多分妾の顏色が何樣か變つてでも居たのてしやうで。妾は少て落付て、ズッと前に進ると、又た母上は以前のやうな儼然とした顏色になつて。「卿も巳う今年は十五、其も早生れて有るから、同歳の中でも其の存念がなくてはならぬのだが。阿父さんは夙くお亡くなりなさつたし、私にも早く安堵させる氣はあるだらうな。」何如にも壯重で、生れてから初めて、妾は母上から恁麼な改たまつた言葉を聞くのてす。で甚麼いふ意味で有るか、些つとも分からぬが、然し今は那麼とを聞て居る暇はないから「ハア、其はもう。」「さうか其で宜敷い」と、先づ滿足といふやうな色を動して、「で外でも無いが、彼の角さんね、……角さんの阿父さんから、此間もお談しが有つて、是非秋を自家の嫁にと恁うお言だし。其から富永のお祖母さんからも、每日のやうに急て來るし。何なら私も今少し敎訓てから、と

思つたけれども、外々では無し、舅親と言つても元來叔父さんだしするから。其に阿父さんの在世の内から御約束も有つたやうに思つて居るから。」

恁麼有らうとは、豫て覺悟を定めて居たのです。角さんといふのは今歲二十一歲で、師範學校を出て今までは隣村の小學校の敎師をして居る人、妾とは從兄妹の間です。其の阿父さんは、妾の阿父さんの弟で。西と東の隅に離れて居るが、矢張り同じ村に住んで居て、正月、盆、五節句は固より、何かといへば十丁も離れて居ぬ所だから、兩方の家は始中終至いたり來たりする、親類の中でも箸打折たやうな親類です。鎮守のお祭などには、妾がまだ踵懸けをした麻裏を穿いて 三身の著紐を着て居る自分から、引摺らるゝやうにして、角さんに連れられて詣つて、神鏡に二人の姿が映つたのを、「那れは」と聞て笑はれたこともあるのです。其はもう實に兄妹で出來やうのない睦ましい間で、生長つたならば適夫婦であらうと、此は會ふ人々の言葉で。双方の兩親も「七ッ目で 相性も可し」所謂許嫁とは、恁樣なものなれば間違いこの無い處でしや。であるから追々脊丈伸びるに從つて、手鞠のお友達や學校の朋輩が、羨むと言つてい自惚のやうだが、兎に角妾と角さんとを誘き合はせて置て、種々に冷罵したり揶揄つたり、其は〱稚ながらも、面から火の出るやうな こと許りでした。

恁麼なつて來ると妙なもので、今まで兄さんよりも懷しかつた角さんが、急に慊になつて來るのです。「居なければ可い、何處かに行つて了へば」可いと思つたのです。此が七八歲の時の考へで、其から此の考が次第に成長して、十歲となり十二歲となると――尤も此の時分は、角さんは師範學校に行つて、村には居ないのですが――自分達は世の中から酷遇られる爲めに、從弟同士て生れて來たのではあるまいかと思はれて、寧そ死で了いたくなるのです。其から後の願は、「角さんが何時までも〱師範學校へ居て、此の村には終生歸つて來なければ可いに」と、一心に敢果ないとを頼にして居たのです。其から今日となつても、其の考は度を高め

こそすれ、一日も胸中から去つたとはないのです。然れに情ないではあるまいか、此の宛が見事に外れて、此の春加之も一月計り前に、角さんは歸つて來たのです。で此頃はもう、何かに後から追蒐られて居るやうで、毎日學校の裁縫を了つて歸つて來ると、「今日は角さん處から何とか言つて來はしまいか、今に母上の口から何とか其樣なとか出はしまいか」と、日々安い心はないのです。其に今の母上の言葉ですもの、マア驚かないでは居られないじや有りませんか。
でもう、大盤石で厭されたやうな心地がして、俯向た切り、默つて膝の上に頭を押付けて居ると。何かはなしに眶が暖になつて、涕が流れて來るのです。「何だね卿は小供のやうに、憐なの。」でも未だ言葉が出ないのです。「其ては卿何だか——卿達は那樣に親しかつたしするし阿父さんがたも那樣お心だつたしするから——私一人で突つ張つて居るやうで、困るじやないかね。加之マア能つくお聞き、角さんのお家は阿父さんの方だらう、私の親類に嫁を欲がる家も大分有るのだから、今那樣な恁樣なで、角さんの方を茬苒して返答しなかつた日にや、叔父さんだつて富永の祖母さんだつて、何とかお思いなさるのは見えてるとぢや無いかね。些つたお私の義理も考へて呉れなくちや困るよ」。成る程聞て見れば那麼義理もある、世の中といふものは充分糾紛たものだと、今日初めて覺つたのです。
其の日は種々に、母上の教訓を受た計りで、妾には尚且過般の妄想が主となつて居るから。何とも遂に返答は爲得なかつたのですが。三日經ち七日經ちする内には、母上の言葉が段々道理らしくなつて行くと同時に、今までの考へが餘り子供らしく成つて來て、何だかズッと初の角さんに遇ふやうな氣がして、一人で顔の紅うなる時も有たのです。

中

到頭那樣とで押し着けられて、妾は角さんのお嫁になつて了つたのですが。お嫁なんぞに二度となるものじや有りません、もう何處に行つても恥かしいと計り、ヤア到頭豫言通りになつたの、從兄妹同士は宜いものだ

の、鐵漿の着け振りが何樣だの、紅い手柄が甚麽だのと、先般の手鞠友達學校朋輩の酷待方と同一轍です。で妾は舅や姑の供をして、寺詣や墓參はしたことは有りますが、良人と一緒に宮詣や芝居見物をしたとは一度も無かつたのです。其りや矢張り何ですもの、會には——舅姑も勸めたともあり——良人の後に跟いて、夕涼にでも行きたいとも有りますさ。で早く小見のても出來て、二人で歩行ても人が何とも言はない時が來れは可いにと、思つた事は度々です。

僥倖なことには妾は、世に言ふ姑嫁の間ではなく、元が叔父姪の間でも有り、氣心が知れて居るからでも有りましやうけれとも、兩親が極く善い人達で、氣の至らぬ處は何ても歴々と言つて呉れて、親切に差圖をして根に持たない方で有つたから、「箸の上け下けに甚麽」とかいふ、氣無味淺猿しい間ではなかつたのです。が其ても矢張り此の家で生れたもので無いと思ふと、つい朝少し寐過したり舅の口に適はない惣菜でも拵へたり、した時はもう辛い〳〵思をしますし、また少し氣分が惡いのを我慢して、一事を爲して居るのに、また「此を」と出されたりする時なんぞは、矢張り實母さんの所に居た方が可かつたと、思ふとも隨分ありました。

で此れは眞に馬鹿氣た談ですが。妾は麥の御飯が大嫌てした、何樣いふものか此を食べると、虫が咬つて、マア妾には合はぬものとして、自家に居た時は、假令何かて此の御飯を焚くとが有つても、母上が必す別に白い御飯を取つて置いて食べさせたのです。處が妾が嫁に行つてから十五日目計り經つてからです、舅か言ふには「今日は良い山芋を手に入つたから、とろゝを拵へたが可からう」といふのです。其で妾は實家に居た時と同じ氣で、何の氣はなしに只の御飯の積りで米を炊して居ると、姑が傍から「麥は何樣した」といふてしやう。て吃驚して居るのに「とろゝて云ふものは、麥の御飯に極つて居る、只の御飯じや食べられたものではない」と拵うてしや。仕方がないから言はるゝ通りに、麥飯を焚いて萬事濟ふと「サアお食べ」有躰の處が妾は一生涯麥飯は食はすで濟むのだと思つて居たのです。「卿一緒

に御食が可いよ」と又た勸められる、もう〳〵妾や現在毒の菓子でも强いられるやうに思はれて、泣きたくなつて來たのです。其内に「卿嫌いか麥とろは消化が可くつて可い」。と何にも知らぬ舅が、他意のない言葉です。で妾は死だ氣になつて一口含むと、もう胸が一杯になつて甚麽しても咽喉を下らぬのです。切葉詰つて目を白黑にして居ると、夫が「何だ其の態は、麥飯が食べられないやうでは家が立たぬ。」此は決して妾を叱る積りで言ふたのではありません、其りや好く知つて居ます、兩親の手前態と恁う强いことを言つたのです。けれど其時は甚麽してもさうと諦めるとが出來ないのです。嫁といふもの丶辛いとは此樣なとかと眞個に泣きました――心で許りてなく實際目も潤んだのでしや。すると早く見て取つた姑は氣の毒さうに、「卿餘程慊だと見えるね、顏の色が無んだもの。そんなら其と早く言へは可いのに」と初めて推量して呉れました。其から舅も笑い出すし夫も連れて笑ふ。兎も角妾の我慢が却つて其の場の愛嬌となりましたが實際妾は生たり死たりの目を見たのです。其から妾は一層氣を取り直して、强て麥飯を試みて今では却つて好むやうになたのです。其他にも、夜中便所に行くのが恐くつて命懸――決して大層過た談ではありません――で行つたり蕃椒を噛んて眠を制したり、マア種々の事が有るものです。

下

初めは普通の順序から、東西分らぬ幼女として可愛がつて呉れる男――殆んと男と言ふの必要もない――に懐つき。次いで他愛もないとから、小娘として男といふものを厭て。最後に世の義理から、思ひ設けぬ愛情を知り初めたのです。珍らしいのやら嬉しいのやら、假令舅姑に對する心配が有るにしても、今までは母や弟より外に、賴とするべきものは無いと思つたのに。母にも弟にも打ち明けられぬ事、分け與へられぬ事、までも容易に明し好んで捧けたい、或物を見出すやうになつて來たのです。多分此は人が嫁になつてから、人に知られぬ心配をせねばならぬと同事に、其の執酬として受け娯まる丶、天賦の賜であらうと思ふのです。で殆んと一

年の間は、只だ春霞の間に蝴蝶でも追つて、ひた驅りに驅り狂ふ、とでもいふやうな鹽梅に、もう何かはなしに恍惚として思はず知らず日を暮したのです。恁樣自分の周圍さへ見るの暇が無い位いだもの、何で遠い山川が目に入りましやう。何の事はない眼の前にグルリと幕を引き廻したやうなものでしたが。一年計りも經つと、薄紙を剝くやうに霞が段々除れて氣に入らぬ家も見へ不滿足な人も通る、騙されたやうな氣もするし、猶少し可いものが欲しかつたと、不滿足がでるのは無理てしやうか。

第一に妾は餘り早く嫁になり過ぎた、今少し待つたならば今少し可い家に嫁入るとが出來たであらうと、心から惜まれたのです。といふて別段妾は多くの人に冊づかれ、馬車に乘らうの絹夜具に埋まらうのと、そんな大それた事を巧らむのではありませんが。何しろ終世を共にする良人が、頭の支へた小學校の敎員ですもの。行末は明々白地知れて居る一生涯を、此儘で過すので有るかと思ふと、世の中が寔に情けなく味氣なくなるのです。で有るから度々夫に那麼言つて、せめて頭の支ない一足宛でも上らるゝやうな仕事は無いかと諫めて見たのです。然し妾の夫と言ふのは、極く溫和な內氣な方で、例之ば道を步くにも、馬が馳つて來たならば、其の前を突き切るには十分間か有つて、危險は萬々ないと思つても、マア急かずともと緩々搆へて、其の馬を遣り過して追々と步を進めるといつたやうな性質です。妾はまた何方かと言へば、渡船が出懸つて居たならば、飛び乘つてゞも行かうと思ふ方ですもの。何樣考へても夫が意氣地がないやうに思はれて撈かしいとてす。尤も是には源因がある事です、年嵩で妾のお友達の春さんといふのが、銀行の重役に嫁いて大阪に出張し。夏さんといふのが東京に居る學士の家に歸いだから。自分では其を露妬みはせぬけれど、何物かには追立てられて居るからに相違はないのです。で妾は惡い事とは思ひながら、何か事あれがし、事が起つて其れを口實として實家に歸れるやうな埓になれば可いぞ。恐ろしい不貞腐な了簡を起したのです、其が二年間ばか

り。
が此の不穏千萬な了穏が、何時の間にか名殘りなく取り除けられたとです。其は今に不審でならないのですが。別に滿足な事が出來たといふではないけれども、年月の步につれ、子が出來、家事に手を出すやうになると、忘れて居る間に、家大事、子大事といふ事が一杯で、もう外の事を思ふ暇がなくなつたのです。（了）

お伽はなし

狐と熊と餅

黑田湖山

むかし／＼、ある處に、おぢいさんと、お婆さんと、一人の子供がありました。

ある朝のことです、おばあさんは、まん圓な一つの餅を燒かうとして、是れを火鉢の上の鐵網へかけました。が、自分たちは用があつて、凝乎と、其の餅を見まもつて居ることができませんでしたので、其處に遊んで居た子供を呼びまして、「是れ坊！ 私たちはね、是れから裏の畠へ行つて來るから、歸つて來るまで、其のお餅の番をして居ておくれ、可いかい！」と斯う言つて、おぢいさんとお婆さんは、裏の畑へ參りました。

子供は、はじめのうち、凝乎と、能く番をして居りましたが、少し飽いて來ましたので、餅の番をせずに、繪本を見て居りましたが、暫らくして、俄にバタンといふ音がしますので、吃驚して火ばちの上を見ますと、こは如何に！ 今まで火鉢の上にあつた餅は、獨りでに飛びあがつて、火鉢の橫へ落ちた拍子に、ゴロ／＼と轉つて、何處までもと轉つて行くのでした。

「おやッ！」と言つて、子供は急いで手をのばし、餅を拾ひ取らうとしましたが、もう追つきません、餅は早くも此の部屋をころがり出ました。そして、どん／＼戶口の方へと轉つて行きます。子供は、いよ／＼驚きまして、戶口の方へ飛んで行き、逸早く戶を閉てやうとしましたが、餅の方が一あし先で、コロ／＼と土間の落ちたかと思ふと、直ぐに出口の敷居を越えて、尙ほドン／＼

轉つて行きました。

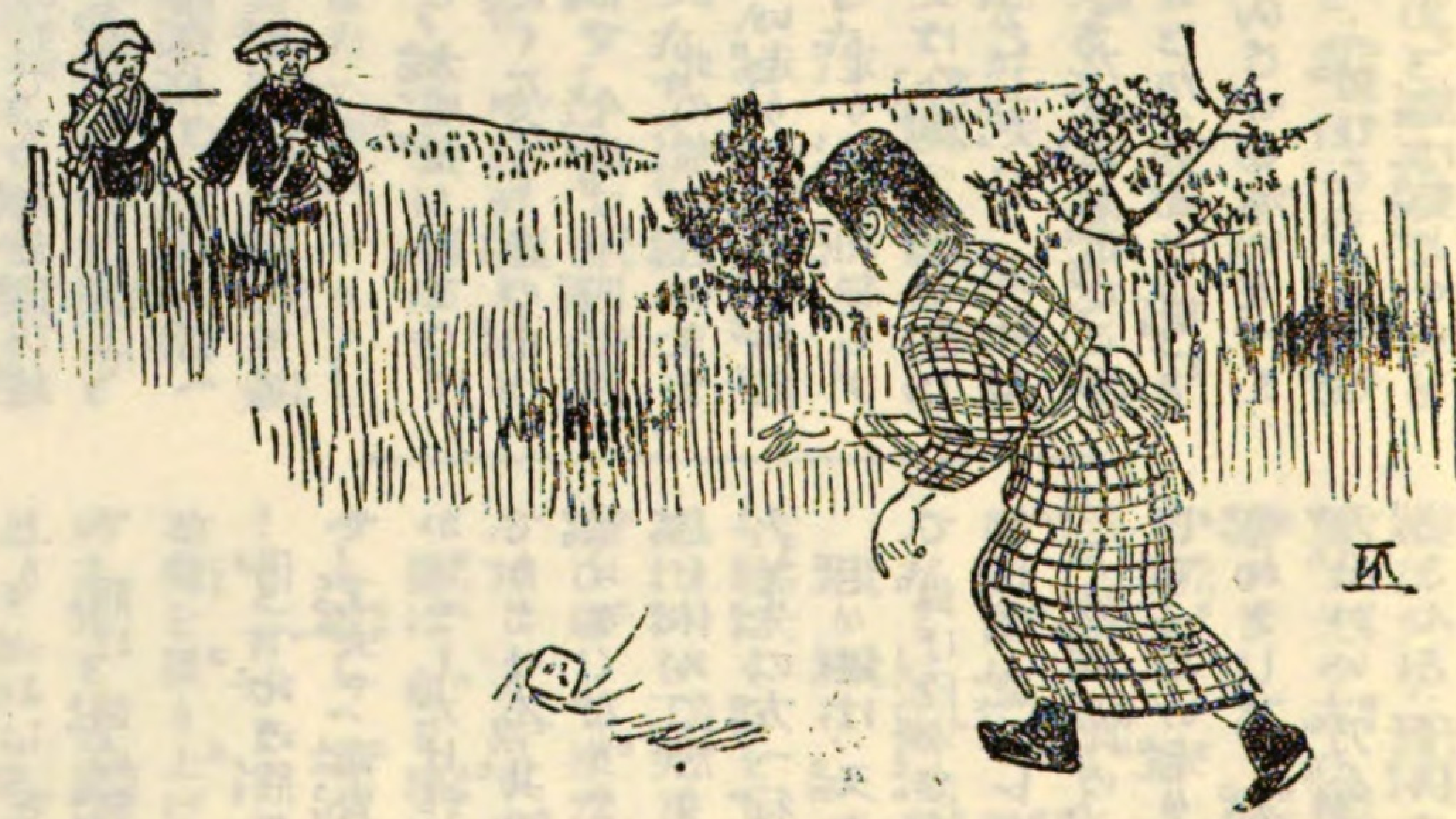
子供は跣足で馳けおり、一生懸命になつて其の後を追かけましたが、餅の轉りやうが早いので、なか〳〵追つくことができません。そして、其のうちに、おぢいさんや、お婆さんが仕事をして居ります畠の側へ參りましたので、子供は大きな聲で、「おぢいさあん、お婆さあん、お餅が馳け出したよう！」と叫び〳〵、尙ほ餅のあとを追かけました。

畠で、仕事をして居りました、おぢいさんお婆さんは、子供の聲に驚いて、子供の馳けつて來る方を見ますと、彼の餅が、子供に追つかれまいとして、ドン〳〵轉がつて行きますので、「おや、これは大變！」と言つて、兩人とも鍬をすてゝ、子供と一所に、スウ〳〵言ひながな、其の後を追馳けました。が、餅はなか〳〵止りません、垣をくゞり橋を越え、何時か廣い道へ出て、尙ほます〳〵轉つて行きます。おぢいさんとお婆さんと子供は、一生懸命になつて馳りましたが、何うしても掴むことができません。

そして、追つかけ追つかけ參りますうちに、段々呼吸が苦してなつて、もう迚も走れないといふやうになりましたから、三人は、道傍に倒れかゝつて、息をやすめやうとしました。三人が休んで居ります間に、餅はズン〳〵先へ行つて、此の三人の足では、迚も追つかれ無い處へ行つてしまひました。

走り餅は、段々參りますと、切りに仕事をして居ります一人の工夫に出逢ひました。走り餅が、此の工夫に近づきました。時工夫は餅を見まして、「おい走り餅、君何處へ行んだ？」と斯う尋ねました。走り餅は、和かはらす轉りながら、「うむ僕かい、僕は今馳つくらをして、おぢいさんと、お婆さんと、子供とを追ひ越して來たんだ。そして、また君を追ひこしてしまはうと思ふんだ！」と申しました。すると、工夫は、「えッ、僕を追ひこす？　吃度追ひこせるかい？」と言ひます。て、走り餅は、「追ひこすとも、追ひこすとも！」と言ひました。「よし、それぢや追ひこして見ろ！」と斯う言つて、工夫は餅の後について、一生懸命になつて走りまし

た。
工夫も、彼のおぢいさんや、お婆さんや、子供が走つたやうに、根のつゞく限り追かけましたけれども、何うしても餅を追ひ越すとはできません、其のうちに呼吸が苦しくなつて、一歩も動けなくなりましたので、工夫は到頭道傍へ倒れて、息を休めて居りましたが、其の間に、餅はずん／＼先の方へ行つてしまひました。
走り餅は、工夫を追ひ越して、段々參りますと、今度は、一人の商賣人に出逢ひました。走り餅が、此の商賣人に近づきました時、商賣人は此の餅を見まして、「おい走り餅！お前何處へ行くんだ？」と斯う尋ねました。走り餅は、相變らず



轉りながら、「うむ乃公かい、僕は今馳つくらをして、おぢいさんと、お婆さんと、子供と、工夫とを追ひ越して來たんだ。そして、またお前を追ひこしてしまはうと思うんだ！」と申しました。すると、商賣人は、「えツ、わたしを追ひこす？屹度追ひ越せるかい？」と言ひます。で、走り餅は、「追ひこすとも、追ひこすとも！」と言ひました。「よし、それぢや追ひこして見ろ！」と斯う言つて、商賣人は、餅の後について、一生懸命になつて走りました。
偖て、此の商賣人も、彼のおぢいさんや、お婆さんや、小供や、工夫が走つたやうに、根のつゞ

く限り追かけましたけれども、何うしても、餅を追ひ越すことはできません、其のうちに呼吸が苦しくなつて、一歩も動けなくなりましたので、商賣人は、到頭道傍へ倒れて、息を休めて居りましたが、其の間に餅はズン〳〵先の方へ行つてしまひました。

走り餅は、また商賣人を追ひ越し、大威張りになつて尙ほ段々參りますと、道は次第に細くなつて、森の中へ入つて參りましたが、其の森の入口で、今度は一匹の熊に出逢ひました。そして、走り餅が、此の熊に近づきましたとき、熊は餅を見まして、「おい走り餅！お前何處へ行くんだ？」と斯う尋ねました。走り餅は相變らず轉がりながら、「うむ乃公かい、乃公は今馳つくらをして、おぢいさんと、お婆さんと、子供と工夫と、商賣人とを追ひ越して來たんだ、そして、またお前を追ひこしてしまはうと思うんだ！」と申しました。すると、熊は、「えッ、乃公を追ひこす？　屹度追ひこせるかい？」と言ひます。で、走り餅は、例の如く、「追ひこすとも、追ひこすとも！」と言ひました。すると、熊は勢よく立ち上り、「よし、それぢや追ひ越して見ろ！」と斯う言つて、熊は、餅の後について、一生懸命になつて走りました。

偖て、此の熊も、彼のおぢいさんや、お婆さんや、小供や、工夫や、商賣人が走つたやうに、根のつゞく限り追かけましたけれども、何うしても、餅を追ひ越すことはできません、其のうちに、呼吸が苦しくなつて、一步も動けなくなりましたので、熊は、到頭路ばたへ倒れて、息を休めて居りましたが、其の間に、此の走り餅はズン〳〵先の方へ行つてしまひました

走り餅は、又もや熊を追ひ越し、彌よ大威張になつて、尙ほ段々參りますると、今度は、ギョロ〳〵眼を光らした恐ろしい一匹の狼に出逢ひました。そして、走り餅が、此の狼に近づきました時、狼は餅を見まして、「おい走り餅！　お前何處へ行くんだ？」と斯う尋ねました。走り餅は、相變らず轉りながら、「うむ乃公かい、乃公は今馳つくらをして、おぢいさんと、お婆さんと、子供と、工夫と、商賣人と、熊とを追ひ越して

來たんだ。そして、またお前を追ひこしてしまはうと思うんだ！」と申しました。すると、狼は、「えッ、乃公を追ひこす？ 屹度追ひこせるかい？」と言ひます。で、走り餅は例のごとく、「追ひこすとも、追ひこすとも！と言ひました。すると、狼は大きな口を開いて、今にも此の餅を食べてしまはうとしながら、「よし、それぢや追ひこして見ろ！」と斯う言つて、狼は餅の後について、一生懸命になつて走りました。

偖て此の狼も、彼のおぢいさんや、お婆さんや小供や、工夫や、商賣人や、熊が走つたやうに、根のつゞく限り追ひかけましたけれども、何うしても、餅を追ひ越すことはできません。其のうちに、呼吸が苦しくなつて、もう何うすることもできなくなりましたので、流石の狼も弱りまして、到頭路はたへ倒れ、フウ〳〵言つて息を休めて居りましたが、其の間に、此の走り餅は、ズン〳〵先の方へ行つてしひました。

走り餅は、斯ういふ風に、逢ふもの逢ふものと馳つくらをしては、いつも勝ちますので、段々すゝんで參りますにつけ、段々と大威張になりまして、尙ほ其の道を、彌よ先の方へ轉つて參りますと、今度は、一匹の狐に出逢ひました。狐は、松の木の下で、樂々と横になつて、居睡をして居りました。走り餅は、此の狐を見まして、「おーい、狐さん！」と聲をかけました。すると狐は一寸眼を開いて、「誰だ？ うむ走り餅さんか、何處へ行くんだ？」と斯う尋ねました。

走り餅は、コロ〳〵轉りつゝ、「うむ乃公かい、乃公は今馳つくらをして、おぢいさんと、お婆さんと、子供と、それから工夫と、それから商賣人と、それから熊と狼を追ひ越して來たんだ！ 是れから、お前さんを追ひ越すんだ！」と斯う申しました。

狐は、眼を閉いだまゝで、「えッ、何うしたつて？ もつと近くへ寄つて來なければ、一寸も聞ゑやしないよ！」と言ひますので、走り餅は、少し狐の方へ寄り、大きな聲を張り上げて、「乃公はね、今馳つくらをして、おぢいさんと、お婆さんと、子供と、それから工夫と商賣人と、それから熊と狼を追ひ起して來たんだ。そして

是れからお前さんを追ひ起すんだ！」と申しました。
狐は、尚ほ睡さうな眼を開いて、「えッ、何うしたつて？　も少し近く寄つて來てくれなければ、一寸も聞えやしないよ！　もちつと此方へ來て言つとくれ！」と斯う言ひ、身を少し前の方へ曲げ、片手を耳の後へあて、更に尋ねました。て、走り餅は、また狐の方へ寄りながら、前よりは一層大きな聲をあげ、「乃公はね、今馳つくらをして、おぢいさんと、お婆さんと、子供と、それから工夫と商賣人と、それから熊と狼とを追ひ越して來たんだ！　そして、是れからお前さんを追ひ越すんだ！」と申しました。
「さうか。屹度追ひこせるかい、屹度追ひこせるかい？」と言ふが早いか、狐は其の手を延ばし、餅を摑んで、直ぐ口の中へ入れてしまひましたとさ。
（をはり）

雜録

露西亞の音樂

在莫斯科府
法學士　森山吐虹

最後に、露西亞の女子と題して一寸お話したなかにも、露國人は男女を問はず、音樂好な國民であると申上たが、今は「露西亞の音樂」に就て、少しく述べ樣と思ふ、乍併、根が餘りみやびた漢でないから、平家の公達の樣に、腰の玉笛に傾く武運の、月影を悲む的の閑日月もなく、我輩生れ落て茲に二十六歳、未だ嘗て管絃のさすらひに、一身を打込で、神田の書生サンの樣に、月絃と首引した事がなく、勿論一曲學び了て、法界節をわめき立てゝ、芋の端に換ゆるべき必要もなかつたのである、要するに我輩は音樂の道には至て暗く、尺八を火吹竹以上の役目に遣ふ技量もないが、鬼神も涙を流し、蟒尾蛇も喉頭を鳴らすと、いふのは音樂の妙であるから、我輩とて

も拜聽する事は大好であつた」これ即ち、我輩が素人たるに拘らず、尚ほ音樂に就て、一寸見聞した事を、書きしるすわけである」

露西亞で音樂界中興の、祖とも云ふべきは『グリンカー』であつて、其音樂界に於ける地位は、恰も露國詩壇に於ける「プーシキン」の如きものである、此人は百年前に、既に古人となつたが、其作つた樂譜なんどは、獨佛語に譯されて、譜と歌とは並び稱せられて居る、其最著名なるは『ジーズニー、ザー、ツアリア』とて、一寸其標題を日譯し難いが、英譯すれば『ライフ、アフター、インペロル』であつて、文字を離れて意味を掻い摘めば、露西亞皇帝を暗殺せんと企てたる、輩に就ての詩であつて、毎歳『ベリショク、テアトル』(大劇場にて玉座の設けもあり)の舞臺開には、必ず此オペラを演ずる常例である、其大躰を申せばコウである、昔し露帝がまだ、莫斯科に都せる時分、一群の波蘭人が、露帝弑逆の陰謀を以て、遥々乘込で來たが、ドーモ途がよく解らないものであるから、其邊の露西亞人に問た、すると此者は頗る、愛國心に富だものである上に、また中々怜悧であるから、早速波蘭人の陰謀を觀破し、竊に人を馳せて、莫斯科朝廷に密告すると同時に、自分は何喰はぬ顔して、嚮導となつて百里の深林に誘た、勿論今日と雖、露西亞は森深い國であるのに、況んや當時に於ておやであるから、之等の刺客は、一土民に謀られて遂に、八幡の八幡不知とも云ふべき、「迷ひの路」に陷た、日は經て食物は盡きんとするに及で、始めて露西亞の勤王家は、自分の計略を語り明し、笑ふて亂刃の下に斃れ、續々刺客も悉く、餓死したといふ話である」



次には「アントン、ルビンステン」と云ふ人で、十年程前に死だが、之は中々ピヤノの名人であつて、其芳名遠く西歐諸國にも、鳴り響たそうである」

また三年前に死だ「チヤイコーフスキー」と云ふ人もピアノの名人であつたが、彼は寧ろ樂譜を作るに、巧なる人として、佛伊諸國でもてはやされた相である、其就中「シンフオニー」と「オペラ」は有名なものであつたが、「プーシキン」の詩中より得たる、「エブゲニーア子ーギン」の一曲は、第一等の作として「オペラ」中より卓出して居たそうである」

現今有名なるは、「リームスキー、コルサコフ」であらうと思はれる、ピアノを彈ては露國音樂界に、其敵手を見ないとの事」

今では露西亞の純粹なる「スラーブ」人でも、西歐の樂器を以て、獨伊に一歩を讓らないと力氣んで居るが、其以前は露西亞に於ける、音樂師の有名なりしものは、殆ど猶太人と獨逸人であつて、此西歐音樂も他のものと洞しく、近年露西亞に於て長足の進歩をしたのである、故に個人には、中々上手なものがあつても、音樂學校の制度上、未だ西歐に比すべきものはない、爲めに露國の音樂學校卒業生は、修業の爲に伯林巴里、及伊太利に行くものが多い、唱歌及舞踏をやりたいものは伊太利に、音樂專修のものは、伯林又は巴里に遊ぶといふ、傾向になつて居る」

茲に話の順序として、勢音樂學校の事を述る、必要に迫られたと思ふ、露國の官立音樂學校のある場所は、彼得堡、莫斯科、キトエフ、ワルシヤフ、ケルシングフオルスクの五ヶ所であつて、當然男女混合の學校である、修學年限は九年で、重なる課目は音樂であるが、其他諸般の普通學を、教授するのである、月謝は隨分高く、一年二百圓以上も要するから、餘り貧民の子女は校門をくゞらない、其他各地に私立の、音樂學校は澤山あつて、中には貴族皇族の、保護によつて成立せるものもある」

露國の上流中流では、女子と云ふ女子は、必ずピアノを彈く位の、表藝（隱し藝に非ず）がなければ、人中に顏出

しの出來ぬのは、中々米國などの比でない、寧ろ獨佛に比して、優るとも劣る事はない、乍併此ピアノ（ローヤル）の如きは、高價であつて到底、貧乏人には買ふ事も出來ないもので、貧民は貧民相應の樂器を以て、樂んで居る、彼のベラライカ（三味線に類したるもの露國固有の樂器）チットル、乃至ガルモニアは、ローヤル（ピアノ）スクリブカ（ヴワイオリン）が中流及貴族社會に歡迎せられる如くに、下民社會に缺く可からざる、樂み道具となつて居る、所謂ニチエウオ（英語のナッシング）主義なる露人は、無事な民である、多數の人民は、王樣と坊さんとは難有いものであるといふの外、難有いと云ふ事も知らなければ、錢がない時と酒の呑めない時の外、悲しいといふ事も解せず、髯から面のほの見ゆる亭主と、頰冠から顏がはみ出す的の女房とが、嬉々として樹の下に寐轉んで、ガルモニアでも鳴らし、怪訝な聲して歌でもうなつて居るのを見ては、我輩の如き滿腔の功名心に、身を燃やす男でも、「清風徐ろに袖に入るといふ感がする

嘗て獨逸の士官社會に「コーセット」をやつて、腹を細して、交際社會にもてさせ樣とした、馬鹿ものがあつたと同じく、露國の士官の若手はピアノを學で、內心大に企つるところある輩もある、元來露西亞の士官はニヤクて居つて、ドーモ役に立ち相にもない、乍併兵士は勇猛である、何となれば此愚民は、猛獸と相去る事遠からぬものであつて、理窟の解らない丈それ丈、命令を一途に奉ずる、其上血を見て悅ぶといふ風であるから、勇猛なるのは無理もないが、偖士官は文字が少しはわかる、こゝに於てか懦弱となつて、幸にも猛獸の範圍を脫するのである

少し話が異なるが、元來伊太利人は聲の、いゝと云ふところから唱歌の本場として、天下に誇つて居たが、近年露國に不思議の名人が顯れた、其人の名は「シヤラヤーピン」と云て、本年漸く二十五六歲の若者であるが、先頃伊太利に乘込て、向ふ所敵なきの大名を博し、今や世界第一の月桂冠を戴かんとしつゝある、多分此秋は米國に行く筈で、相談も纒た相であるから、其價値は益々

發揮するであらうと思ふ」

素人で喋舌ると、段々アラが出る虞があるから、此邊で止めて、次號には何か他のお話を、しやようと考て居る

附言　目下露西亞では、大低な樂器は製造し得る樣になつて居るが、まだ／＼上等の品は西歐及合衆國の、輸入を仰がなければならない、殊に「シユテンウエー」のピアノ（米國製）は、天下無比であつて、それなどゝ比較する時は、脚下にも寄りつけるものでない

瓜生岩女（承前）

文學士　常盤大定

◎錦衣歸鄉

其後岩女は多くの人々の贊助を得たる中にも、殊に土方伯、三島子、河野、原等の諸夫人、後藤新平氏などの贊助を得て、益々事業の計畫を爲しけるが、老後故鄕はさすが慕はしとて、三十年の冬頃に歸鄕の途に就きしが、此歸鄕は實に錦衣歸鄕の最後なりけり。

岩女は奉佛の志厚きものから、偶々福島町の端なる御山の靈場に詣でけるが、こゝに山寺あり、むかしの靈場も、今はいつの頃よりか無住となり、非常に荒れまさりてければ、岩女はこゝに立ちつくして、只管世の變遷を喞ちける折、偶々近鄕の老若こゝに來り合せ、四方八方の話の末、湯殿山より轉座ましませる閻浮提金の神躰は、十五六年前遠に失せ、其後寺僧も姿を隱しぬ、此寺僧の振舞こそ怪しけれとの話を爲しけるが、岩女は忽ち起ちあがりさま、云ふやう、老の身の偶々參りてかかる物語をきくは、是神佛の告げ玉ふ所なるべし、いかで之に答へんすべもがなと、寺僧を求めんとて仙臺地方に向ひ、師走の極月をも苦とせず、諸村隈なく尋ね廻り、とある近在にて其志を達し遂にめぐりあひてしかば、赤心を凝して諭す所あり、寺僧はかねての懺悔心をいやましに增して、我身最後の善知識なりとて、岩女を伏し拜まぬばかりに、感涙にむせびつ、それより相伴ひて御山に至り、寺僧は再び寺に入りき、其後岩女はまた寺僧にあひ、三十三ヶ所西國巡禮を勸め、且つ告げていふやう、出羽の湯殿山は名高き靈山なり、弘法大師

むかし此山を開かんとて、七度まで登り賜ひしかど、常に風雨に障へられ、登る能はず、其度毎に麓に下りて、修行に心を碎き玉ひ、最後に登山の節は、何事もなく、山の七八分まで至られしが、いたく飢を覺え、とある瀧の下にて晝餉をものし、又上られけるが、身躰、俄に疲勞を覺えければ、不思議に覺し、再び瀧の下に至り見玉ふに、晝餉の時、折取りて箸とせる笹枝の、流れもせず、沈みもせで、輪を畫きつゝ繞り居るあり、大師之を取りあげ見られけるに、箸の割れ目に飯の一粒挾まりて殘りぬ、大師思はく、佛祖が、一粒米の重き事須彌山の如しと敎へ玉ふの意これありけりとて、いたく悔ひたまひ、瀧壺に向ひ、懺悔の梵字を書き了りて、又上り玉ふに、身は甚だ輕くして、忽ち嶺に達しけるとかや、斯の如き談は三十三所一として存せざるなかるべし、名山舊蹟を訪ひ、古の高僧碩徳が苦行の跡を尋ね、辛酸の名殘を求めなば、一は自身を戒むるの術となり、一は他に示すの媒となりぬべし、とく廻禮の途に出で玉はずやとて、切に之を勸めけるが、僧は一議にも及ばて、直に之を諾して、笠笈などを調ひ、別れを惜み〳〵立ち出でけり、これげに生別死別をかねしものにて、翌年僧まだ還らずして、岩女はなき人の數に入りてき、岩女の一擧にて靈場は古にかへり、僧は菩提に入れり、其熱情の人を動かせし事、概ね斯の如かりしなり、

◉最　後

苦寒の折、淅瀝たる北風を凌ぎつゝ、長く旅寢の數を重ねし事とて、福島に還りしと共に、三十一年一月より岩女はゆくりなくも、心臟病にかゝり、復起つべうも見えずなりしかば、其恩を蒙りしもの、また其德を慕へるもの、近鄉近在より、絕えず病床に訪ひ至り、とりわきて諸方の慈善會、或は貴顯より珍菓妙藥など贈り來れるもの甚だ多かりしも、岩女は一つも家に止めず、悉く之を貧しきものに施し、己が、病苦を忘れて、口にするものとては唯貧民救濟の事のみなりしとぞ、

岩女は深く佛法に歸依せる事とて、月に六回の齋はまだ嘗て怠る事なかりき、齋とは、之を行ふ當日、朝餐を爲さずして、飯菜は之を貧者に施し、茶湯の類は之を

川に流して一切衆生に施す事なり、岩女は一己の爲に有情無情に施す此行を廢し難しとて、病中と雖固く之を守り、遂に諸種の勸告を斥けて顧みざりき、

醫師は又肉食を勸めしかども、岩女は唯耳を濱されし如くに覺え、不興の面色にて之を斥け、如何に勸むるとも、遂に之を用ゐず、亦牛乳を勸むるものありしも之すら聽かざりしが、遙に東都の貴顯より之を勸めていふやう、伸びんとするものは先づ屈す、老婆にして萬一の變あらば、現時の婦女の淑德を如何、釋尊も尼連禪師に浴して後乳糜を取り、遂に正覺を成就せるに非ずや、物に輕重あり、國の爲に自重すべし、身を養ふは牛乳を以て最とす若かず牛乳を採りて以て身を養はんには、若し聽かずんば、親しく其地に至りて勸めん云云、岩女は其情の厚きに感じ、僅に之を用ゐしも、然れども、一日唯一回のみ之を取れり、

就床始んど百日に亘り、身躰の疲勞日に增ししも、應對談話生平に異らず、障屏を隔てゝ之を聽く時は、病蓐に在るものゝ如くならず、最後の日に至る迄斯の如くなりしなり

病いよ／＼篤きに至り、畏くも　皇后陛下の御聞に達し、御内意を以て、御菓子を下し賜はりければ、岩女は病軀を起し、遙に九拜して、聖恩のかくまでに優渥なるに感泣し、流るゝ涙とゞめ難かりき、その月十九日遂に復起たざるに至れり、時に六十九歲なりき、岩女はゆくりなくも死する二日前に中り、一首の歌を詠じけるが、是やがて辭世とはなりにけり、

老の身のながゝらざりし命をも、
たすけたまへる慈悲のふかさは

病床に在る甚だ長かりしが、遂に遺言の家事に亘るものなく、又諸方より受けたる物品の夥多なるに關らず、死後一品もなかりしとかや、

岩女既になき數に入れり、福島町長樂寺に葬る、此日天大に雨らせしも、親と疎とを問はず、敵と味方とをいはず、遠近より集り來りて柩に從ひ、僧侶の列に加はるもの八十餘名、福島にありては實に空前の事なりけり、

◉持論及び遺業

岩女が持論として生平他に語れるもの二條あり、(一)一國の强弱は人心の統一に關す、人心の統一を圖るは宗敎の力に過ぐるものなし、西洋諸國は甚だこゝに注目すと聞けども、本邦未だこゝに着眼せざるは遺憾之に過るなし、征淸の役に中り、門徒宗一たび號令せば、報國恤兵の爲に貲財を投ずるもの雲の如し、是多年其敎義によりて人心を統一せしに由る、佛敎我邦に傳はりて以來、殆んど國敎の觀あり、益々之を奬勵して今後の人心を統一せしめば、初めて能く富國の實を擧ぐるを得べし云云、(二)人口の繁殖より相延て外國米の輸入を仰ぐ、年を追て盛ならんとす、今にして之を豫防せずんば、由々敷大事に至らん、外國移住民を奬勵するは、この弊を防ぐに、最も便益ある一法なり云云、

此二條は是岩女が遂行を希望せし持論なりしも、素と是不容易の大問題の事とて、空しく遺志として記すべきに至れり、猶一個の遺業の傳ふべきものあり、

盤梯山の一面に千歳嘗て斧鉞の入らざる深林あり、樹木鬱々として天を蔽ひ、晝猶暗きまでに繁茂し、其間樹木の朽ちて仆るゝもの、老て朽んとするもの、交々相接するに至るとか、岩女は一身を搭して育兒の業に盡せりと雖、有限の資を以て無限の窮乏に應ずるを得ず、時に廢物の利用によりて資料を得し所少きに非りしも、猶其意の一部分をだにも充すを得ず、苦慮の結果、彼梯盤山の一面に思を寄せ、廢物利用の妙はこゝに存せりとて、伐木の百年計書を爲せり、其計書とは何ぞ、彼大森林を百分して、其一分を一年の伐木區域とし、順次伐木して百年に至り、初て其全部を伐採するにあり、而して此比に至らば百年前に伐木せし最初の區域は、早くも亭々として空を突くに至るべきを以て、此大森林は實に是無限の寶藏なるべく、之によりて得たる利益を悉く慈善の資となさば、其効果實に料るべからざるものありて存すべきなり、且つ伐木輸送の際には、非常の人夫を要すべきを以て、附近の旅店、酒舖、其他窮民の職を得るもの頗る多かるべし、されば岩女の此大計書は、積極消極二方面に於て救民の利ありしなり、

岩女は有志者に計り、其筋に乞ひて、拂下げの榮を得てけれは、人をして實地に就きて之を探撿せしめしに、聞しにまさる大森林なりければ、到底一二人の能く之を爲し得べきに非ずとて、會社組織とし以て、木材を支那に輸出せんまでの計畫調ひしに、不幸岩女一たび瞑して、遂に此計畫は畫餠に歸しぬ、岩女が廢物利用の大計畫の中絶せしは、獨り岩女の不幸のみならず、實に世の爲に不幸なりしなり、

◉風丰擧止

岩女の傳中猶洩れたるものあり、岩女日常の風丰擧止是なり、序文中に於て少しく之を記せしも、猶其性行を反映せしむるに足るものあれば之を摘記することゝせん、

◎風采　脊低く、髮黑く、鼻隆く、眼涼しく、兩頰の上常に一種慈愛の微波を湛ふ、夫と別れて以來、脂粉を施さゞる事幾十年、髮は藁を以て之を結び、常に粗服を着け、都市にあると、郷村にあるとを問はず、高貴の前と、乞食の中とを撰ぶことなかりき、

◎性質　若かりし頃には氣象頗る激しかりしも、慈善に身を投じて以後、厚く佛敎を信じ、之によりて喜怒色に現はれざるに至り、一たび之に接するものをして、南風懷を拂ふの感に堪へず、長く忘るゝ能はざらしめたり、辯舌爽かにして淀む事なく、而して語句皆肺肝より出でしを以て、能く人を動かし、能く衆を化するの異力ありき、

◎躰力　頗る屈強にして、曾て病に犯されし事なし、夙夜遂に空手にして光陰を徒消することなく、朝は必ず、未明に起きて垢離を取り、神佛を拜するを常とせり、墮胎一洗の爲、東奔西走せし時の如き、東京以北の地を跋渉し盡し、往々艱を犯し、難に接するも、能く之に堪ふるを得たり、飲食は多く自ら之を調ひ、他に至りて饗せらるゝ折、たとひ食前方丈の美味あるも一菜より以上を取りし事なく、一飯一菜如何に粗なるも、愉々として之を嘗むるを常とせり、

◎同情　人往々にして衣服を與ふることあれども、寡婦の身に益なきものなりとて、之を他に施すを常と

せり、其曾て郷に在りし時、冬期家を出るに中り、偶々窮を見れば先づ其羽織を脱し、又貧者に遇ひて一枚を脱し、一枚又一枚斯くて歸宅の際には全く別衣を着くること珍らしからざりしが、是蓋し他より與へられたるものなりきといふ。日常來訪者あれば、何人と雖必ず茶菓を出し、又食を饗し、心地すぐれずとて打ち臥せる時の如きも、人の訪ふあれば、我を忘れて之を饗するを常とし、又乞食の徒の至るあれば、必ず食を與へ或は衣服を施し、通行の際乞ふものあれば、必ず錢を與へ、若し少き時は甘諸の類を求めて之に施せり、此他書生の訪ふあれば、或は手製の歯磨粉を與へ、又は木履の古びたるを見れば、好きものを取りて之を換へしめ、又薬を求むるものあれば、種々奔走周旋し、止を得ずして歸國するものあれば、新調の衣を供して、錦衣を故郷に飾るの意に非れども、垢衣を着けて耻を取るべからざる旨を諭し、其他近隣に困せる寡婦などのある時は、種々の手工など敎ふる等自他平等其擧止悉く他に對する同情の念より湧出せざるはなかりき、されば一尺の布も人之を得て百丈の錦にまさるの感に堪へず、一粒の米も人之を受けて、一石の穀にまさるの念を生じ、歡び極りて泣かんとするものあるに至れり、



◎銅像

岩女はなき人の數に入りたれども、其身一代と矯風、慈善、育兒等の業に委ねし功績は、末代までも忘るべからず、以て萬世の龜鑑と爲すべしとて、かねて土方夫人を始め、三島、原、河野、後藤等の諸夫人の發起にて、其銅像建設の企ありしが、澁澤、三島、後藤、箕浦等の諸氏委員として之を淺草公園に樹立し、本年四月十九日を以て除幕式を行へり、婦人の銅像は本邦に

ありては、實に岩女を以て嚆矢とす

◎四恩瓜生會

予も亦聊か故刀自を知るもの、一たび刀自の一生を考ふれば風手眼前に彷彿として、愛慕の情に堪へざるものあり、其遺志の一端を嗣がんとの念抑ふる能はず、土方、板垣、三島、鳥尾、原、河野、下田諸夫人の驥尾に附して少しく、奔走の勞を執り、三十二年六月を以て、瓜生會を組織し、十月に至り、故刀自と關係淺からざる養育院内に於て、同年に起れる四恩會と合併して、遂に四恩瓜生會の名義の下に繼續し來り、爾來例會を重ぬる廿餘回、大會四回を擧げ、目下月を追ひて盛况を呈しつゝあり、曩に土方會長を失ひてより、現時猶會長を缺くと雖、三島、澁澤兩副會長の下に、原、岩佐、河野、松平、等の各夫人の熱心と、安達建忠、瓜生祐二郎等の諸氏の盡力によりて、會務漸く整頓の緒につきつゝあるは他の熟知する所なれば今贅せず、唯同會の現况を掲げて以て本稿を終へん、刀自の遺志は同會の發達と共に、世に發表せらるべければなり、

◎現時の會務　主として施齋(此際法要、講話あり)教育、補助の三者にあり、

一、施齋、例會當日例として養育院内幼老病者に白飯と菜とを施齋し、參會者は其室に就きて之を慰藉す、

一、教育、卅二年五月以來德風夜學舍の名によりて、不幸なる子弟の爲に、毎夜低度の普通學科を授く、現在生三十餘名、當初よりこゝに學べるもの百五十餘名、無就學者は其三分の一に居る、

一、補助、同會々員中の有志者の主唱により、本年四月淺草區神吉町六番地に設置せられたる無料宿泊所は、路頭に迷ふ無宿の者を二夜又は一時宿泊せしめ、養育院、育兒院、病院、感化院等に入院の手續を取り、或は職業の紹介を爲すものなり、同會は率先之を贊同して同所費額の三分一を補助しつゝあり、

◎經濟　本年九月例會の決議に基き從來例會々場に

具へたる喜捨函を廢して、一口毎月三拾錢宛の特別寄附百口以上を會費以下に募集することゝ爲し、目下之が募集中にあり、

猶同會收支結算後の殘額四百四拾五圓餘にして、其中四百拾圓は東京貯蓄銀行に預入れあり、

◎將來の目的　近くは下層社會の爲、簡易なる幼稚園様のものを設け、勞働者の幼兒を終日預りて、其の扶掖敎養に力を盡し、兼て勞働父兄をして煩累なく其業に就くを得せしめん事を期し、遠くは他の諸婦人會と氣脈を通じて東都の中央に一の會堂を設置せんことを期す、

◎同會略則　（主義）慈善矯風の實を擧げ、四恩の報答を期するにあり、（事務所）東京小石川區大塚辻町十八番地（會員）婦人を正會員とし、男子を賛助員とす、（會費）一ヶ月五錢宛、（役員）會長一名、副會長二名、會計二名、幹事五名、評議員、顧問、事務員若干名（例會）毎月二十日を定日とし、東京市養育院内會堂に於て法要、講話を行ひ同時に施齋す、（大會）春秋二季便宜の地に開くを例とす、

（大尾）

西洋人の觀たる日本の婦人

池田再來

外國人の觀察に二種類ある、其國の表面に顯はれた一時の流行とか、或は鳥渡した出來事の狀況を報ずるのと又容易に改め難い者と成つて居る風俗習慣を報ずるのと、即ち二樣の區別がある、今此所に記したものは重に其風俗習慣に關係した所を撰んだのである。

◎上流婦人○昔の日本上流の婦人方は、數多の女僕の隊列に附き從はれ（多くの腰元にかしづかれ居るとの意）美麗なる幽室（深窓の人とは爭ふべからず）に棲ふて居つたのである、されば婦人の自由といふ事に就ては更らに其の觀念がなかつた、妻たり、媳たる者は唯其夫又は父に對して、一身を捧げて忠實をつくし、其上ならず一切の事件に關する事又は政事向に立障ること

を堅く禁じられて居つたのである、然るに今は大にこの風習が改まつた、併しまだ或部分に於ては尚舊習が殘つて居る、華族女學校抔が一般上流婦人方の狀態を改むるに有力なる勢力である事は私が保證する。

◎下流の婦人　中より下流の婦人に至りては其生活の有樣が上流に比べては何事の上にも遙かに自由であつた、擔夫や一般の傭人足などの社會に至つては女房が賃銀を受取つて、家政の始末をする、そこで其夫が日々の勞働に從事する間は、止むを得ざる必要の上から、多くの自由を其の婦に與へてゐる、されば自然其結果として或事件の處置に就ては嘴を添ふるともあるのである。

◎農夫の妻　農夫の妻は其夫と袖を列ねて、芳ばしき田野に働き、稻苗を移し植ゆる(即ち田植)迄は、泥中や水中に膝を埋めて働くのである、それから又收穫の手助をなし、其を又倉庫に收め、遂には又其れを市場に負運びもする、偖斯樣に其夫にも讓らぬ勞働を爲すが上に米穀や魚類、茶、酒等夫々日々の給與を備へ、且つは一般普通の家事をも務むるのである、但し是は我國(米國)に於ける同階級の人民に比ぶれば遙かに簡易な生活樣をして居るから蔭で思ふ程の煩はしい業ではない。

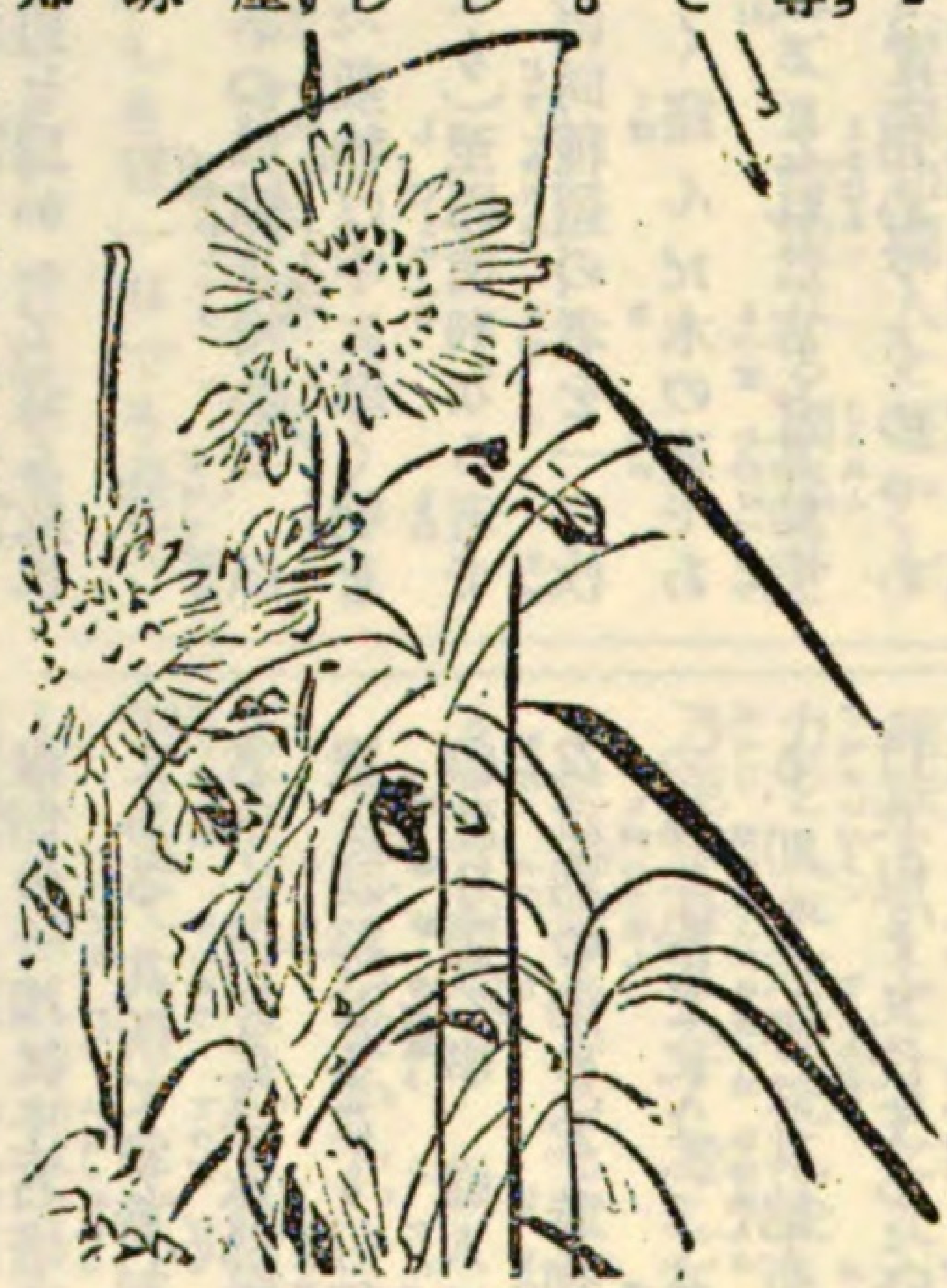
◎町人の妻　町に住まふ人の妻や娘に就て見るに、是は歐洲ならばマア貴女の婢、子供の婢姆、裁縫婦の如き役務を執つて居るのである、基督教化せる數多の娘達は多く外國女教師の學校に教を受けて、仲々明亮に英語を話す、其小さな美はしい手(纖手は舊來日本美人の特徴なり)と大層巧みな指先で以て見事に裁縫をし、美はしく刺繡する、彼等は美術の事に就ては無量の忍耐心がある、そして何んな仕事も擔任して長過ぎ難かし過ぎるとは見えぬのである。

◎子守女　一般に子供の娯姆は甚だ善良である、彼等は子供を愛する、殊に自分の子の一人か二人も持つ者は尙宜しい、而して遊戲の仕方に至ッては誠にその種類に富んで居る、別に大人の管理も受けもせないが、決して不安でない、彼等は一人の小供より多くをは注意

せぬ、若し一家に六人の小供があれば六人の娯姆が入用である、

◎生物に對する同情　日本の婦人は凡て生物を愛する避けて避けらるゝ限りは、いと小さき羽虫の生命をも取らない、色黒くして且つ大きなる蜘蛛は新たに日本へ參る外國人等の等しく恐るゝ所であるのに、それが日本婦人等に取つては、我々が蠅を見るのと一般である、此を殺せといふても唯々笑ふのみである、而して殺しても差支の無い譯があつても決して左樣はせぬのである　彼等は塵拂か箒を取りに行く、歸れば蜘蛛は居らぬ――固より斯うあると知つて居る――左うすると彼等はまた笑ふ(此の觀察頗る妙なり)

◎日本服は風土に適す　日本婦人が一時窮屈な洋服を用ゐた反動として、續々以前の日本服に歸つたとがある、元來日本服は其土地の氣候に適し、其生活の態に適して居る、のみならず佛蘭西や、獨逸の上着に比ぶれば遙かに優美である、私も一年程日本に居つて見た事があるが、洋服を着て好く見ゆる婦人といふは、其間に半ダースにも至らなかつたのである、



◎祭禮　祭の日には幼き子供等の顏や頸に、一躰白い物を塗り、下唇の眞中に赤い繪具を塗抹する、(紅白粉の形容おもしろし)彼等は此樣いふ物を臆面無く用ゐる、そうして些つとも此等を隱さうとも思はない、人を欺く仕業であるとも考ひないのである(紅粉をつけるを人を欺くといふ奇なり)

◎家政　日本婦人の家政は大層單純な仕組になつて居る、平常用ゐる食料はその種類が多く無い、即ち食料に變化が少ない、而してその種を極めて簡易に料理す

る、茲に若し若干の客人を招いて馳走する時には、一切の食物は料理店から取寄するのである、名々の前に小さい臺（膳の事）が置かれて、入換り食物を其上に置くのである、彼等は一時に唯一つの物を食ふといふとはせぬのである。（西洋は一品づゝ皿を取かへて食ふ故に斯くいふなり）

◎臥床の事　こゝに又おもしろいのは臥床である、臥床はたゞ床の上に厚い敷物を展べ敷物は中に厚く物を塡充して製せるもの（布團の事なり）至極便利なる者である、而して其の上を覆ふ爲めに同種類の者を一二枚用ゐる。枕は多くは上部の少しく窪んだ木の臺である、婦人は此枕に頸部を當てゝ眠る。これは專ら其結髪を亂さぬやうに數日間保存しやうと用心するのである。（記者曰く西人の觀察はいつも此のごとし奇警く）

◎戸棚と押入　戸棚と押入が辷るやうに（西洋に曳戸なし故に斯言ふ）出來て居る、戸と障子でもつて閉遮してある、是は何の家にも「ふとん」即ち寢具を納めて置く爲に設けられてある、朝になると此蒲團を迅速に捲き收めて仕舞ふ、夫から大抵家の三面を圍むであるが、滑べるやうに出來て居る戸を瞬時に開けて仕舞ふ、而して數分の中に全室悉く空氣が流通するのである、椽側の一端に土石若くは鐵製の鉢があつて水を充たしてある、其所で家族が順次に盥嗽をするのである。（記者曰く西洋に手水鉢なし、故に便所の側の水鉢を洗面盥と誤解せるなり好笑）

◎洗ひ張の事　婦人は日中に着ると同じやうな着物か又は別の染めた着物を着て眠に就く、此風習と又寢床の違ふ點とによつて洗濯の勞は至つて輕いものである、即ち彼等は其綿布の「きもの」を通例水で洗ふ、彼等は衣服を丸洗するとは稀である、別々に切を解き離すなり、而して太陽に向けた板の上に之を乾かすのである、併し是は我々の想像する程の手數を要せない、何故なれば至つてこれは粗い綿布であるのみならず、針足が遠くて以前の縫目を唯縫合はするのみであるから、容易に且つ迅速に再び元の樣な立派な衣服が出來上る

のである。是等は迚も我々外國人の想像の及ぶ所でない。

◎入浴　彼等は一日に一回、時としては二回三回の入浴をするからであるが、左もなくば種々なる點に於て穢ない風習と見ゆることがあるでもあらう、然し其家と其身躰とを全く清潔にすることは、實際和蘭人を羞かしむる程である。(和蘭人は歐洲中にても清潔なる國民なり)

睡眠のはなし

御茶の水學人

此の世に生れ出て來た人はたれしも皆一日でも長生をしやうと心掛けぬものはありますまい　けれども一生の三分一、時としては其の半分は全く睡眠に費してしまうのでございます。「そんなに澤山睡眠に費やさなければならぬならば、どうして、人間は命を延ばさう延ばさうとあせるのであるか」とはカントと申ずドイツの大哲學者が、早起とそして睡眠時間を減らすことを警告せうとして吐かれた冷刻のことばでございます。

目覺めてゐる間のことは何のかのと、頭をひねり胸を痛めて色々計畫し、色々考窮しますけれども、さて睡眠といふことになつては西洋でも日本でも、とんと力を入れて研究した人はありません。一生の三分一乃至半分も全く費してゐるそんな重大な事件に、こんなに冷淡であるとは、思へば合點の行かぬことではありませぬか。

日本では昔から、一晝夜廿四時間を三つに分けましてそして、それを仕事と休息と睡眠との三つの事柄に割り當てゝあります、さすれば八時間寐て八時間休息して、正味八時間仕事するのでございます。此の分け方は一躰何を標準としたものでございますか、恐らくはまあこゝらがと大躰の目安目分量できめたので、決して學問上から割り出したものではありますまい。よし此の分けかたが實際正當なもので、我々が日常身

を處して行く上の指南車であるといたしましてからが、私は今一層はつきりした土臺の理由がほしいのでございます、何故にそれが正當であるかとの問にはつきり答への出來るやうにしたいのでございます。

應用電氣學では世界に雙ぶものがないと申されてゐますアメリカのエヂソンと申す人が、自分で或る新聞記者に話されたことによれば、エヂソンは極めて睡眠時間を節する人と見え、毎日眠る時間は三時間乃至四時間だといふことです、こんなに睡眠時間が少く　それに何もせずにたゞボンヤリしてゐるのが大層きらいな人ださうですから、かの休憩時間といふものも所謂八時間よりはずつと少いことはきまつてゐます、それに精神の活動があんなに盛で、あの人の腦味噌から生れ來て、今日文明の利器といはれてゐるものは、くだ〲しく、こゝに色々數へ立てるには及びますまい、皆さんがとくに知つてお出になる蓄音器（蘇言機）それから電燈のランプなどでおわかりでございませう。

此は一例でございますが、とにかく、八時間睡眠のことはたしかな土臺があるらしくはない、又人々によつて睡眠の時間に相違があり、猶又年齡により、習慣により、相違があるでせう、故にこれからすこし學問的に研究して、そして皆さんの日常身を處して行かれる上の指針やら、參考やらにしたいものである、これが私の目的でございます。

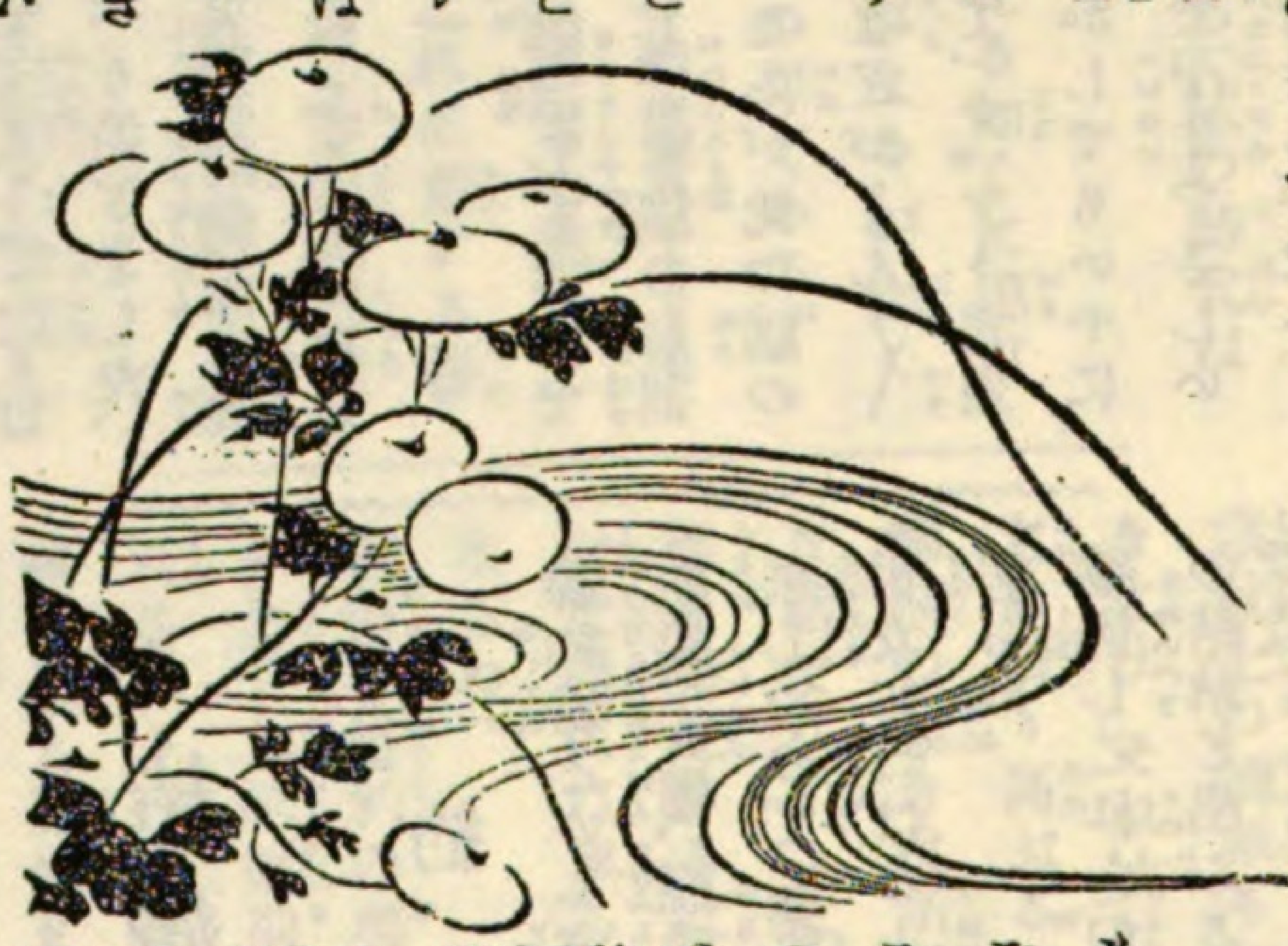
それに此の睡眠は子供の發育と密接な關係を有してゐるのでございます よくいふことですが「ねる子はふとる」といふのは、いくらかの眞理を含んでゐるだらうとおもひます。皆さんは何れ母たる大任をお引き受けになつて第二國民を育て上げる重い務を果たさねばならぬことでございますから、此の點からも即ち自分自身の處生ばかりでございませず、育兒といふことの上からも、睡眠のことを知ておくの必要があらうとおもふのです。

さて、それならば、多少學問的に睡眠と研究せうといふのには、どんな鹽梅に手をつくべきであるか、これについては私も淺學ながら直接或は間接にドイツ、

フランス、イタリー、イギリス、アメリカ、オーストロハンガリー、デンマルクなどのそれ〴〵の著書や雑誌をできるだけ調べて見ましたが、あまりありませぬ、けれどもさすがは西洋の人たちは考が精密ですから、別に睡眠論といつて専問の書ではなくとも、生理學、病理學、心理學などにチョッチョッと有益なことが載せてあります。

私の智識の及ぶ所で、はずつと古いことは措いてまづ近年、此の睡眠の研究といふことに目を注いだ最初の人はフランスのマカリオでございませう。此の人は千八百五十七年今より四十四年前にDu Sommeil（睡眠について）といふ本を書きまして、此の位面白い問題は外にはないと申してゐます。

マカリオの申されたことばに從つて睡眠を研究せうといふのには、四つの道筋を經なければなりませぬ、とばをかへて申せば、四つの方面からそれ〴〵睡眠の現象を研究せうといふのでございます。四つの方面とは生理學、病理學、健全學及び心理學でございます。



此の内で睡眠の心理的側面は西洋でもまた東洋でも、論じ方に精粗の別はございますけれども、多少手を着けて、ございます。睡眠の心理的側面と申すのはとりもさほさず夢のことなのでございます。誠に夢と申すものは一種不可思議（と申しておきませう）だん〳〵研究して行くと不可思議といふ程ではなく、やはり意識現象の一種で、意識の法則に從ふのでございますが）のもので、しごくの野蠻人でも此の現象には早く既に目を注いだに違ひございませぬ、てこんな野蠻人の夢に對する觀念を調査して見ると中々面白いことが發見せられて、彼等の知識の程度進化の道程がわかるのでございます。支那では夙に夢

を判斷する役人がわつたといふことでありますし、日本でも夢に吉夢あり凶夢あり、實夢あり虛夢ありとかいふやうに、矢張東洋的の、非科學的の、ボンヤリした總合的の言葉があり「夢はさかさま」などいふことばもあります――いや、すこし口がすべり過ぎました、とにかく睡眠の他の側面の割合に此の心理的側面は幾分か昔から人の注意を惹いておつたといふことはたしかでございます。

て、順序として睡眠の生理的側面を御話しすべきですが、生理的側面になつてくると、どうしても腦の解剖のことを話さなければなりませぬ、ところが此の腦の研究はエキスナールやムンクやゴルツなどがどん〳〵研究の結果、益々精細の域に進みまして、チョット普通の人にはわかりにくゝ、名を聞いたばかしでもいやになつてしまうのでございます。それで平生やさしい優美なことに目なれ耳なれておいでの皆さんがたへ、突然こんなゴツゴツしたことをお見せおきかせ申してはいやけのために折角の私の苦心も水のあわとなり果てはせぬかといふことを私はひどく恐れるのでございます。で、かうしませう、すこし順序はあべこべになりますが、睡眠の病理から說くことに。

結婚叢話（完）

淺田空花

約婚

◉約婚といふ言葉は英語のエンゲーヂメントで、自由結婚、女權、戀愛の神聖、などいふ言葉と同時に近頃舶來したので、基督敎信者の間、歐風の敎育を受けた青年男女に行はるゝのみで、未だ日本の一般には行はれて居らぬ。

◉併しこれと似寄たことは古來から行はれて居て、彼の結納と唱ふるものゝ如きは全たく更に一步を進めた約婚といつても可い、結納までしたからと云つて未だ全く結婚の成立したものではなく、約婚を破つたからと謂つて別に相應の個人性を傷ける譯ではない。

◉が、約婚、結納、何れといふも、試中のものでは決してない、其結婚の十中八九迄は何れも既に成立したもので、大事に大事を取た上、これならばと相互領意して初て約婚となり、結納となるのであるから、試の時代は最早疾に經過したものである。

◉然るを約婚といへば尚ほ試み中に在る如くに思はれこれが、成立と破約と殆ど普通尋常の事なるが如くに思しむるに至つたは、全く歐米約婚者の罪である。

◉古しは却ゝ嚴重で宗教の敎會などでは結婚式よりも却て約婚といふ事に重きを置き、牧師は兩者の前に立ち聖壇に向ひ、多數信徒の面前に於て之れに對する誓文を讀みきかせ、兩者之によりて誓を立て、多數の信徒又之に向つて一の故障を言はざる場合にのみ之れを許したのである。

◉故に當時の約婚といふ事は、日本人が結納の取交しに對するよりも遙かに嚴重の考の下に初めて成立し、一度約婚せしものは止を得ざる大事由の約婚後に於て發見されざる限りは決して破約することを免さなかつた。

◉目下普通に行はなるゝ所の約婚は當時に比すれば餘程墮落して、一二回の約婚を破る位は社會も之を許し、宗教上の制裁も加はらず、中には約婚を破つた數の多き丈け、それ丈け女子の品位を高むるものとし、却つて之を誇り高ぶるの風がある。

◉斯の如きは所謂戀を弄ぶ物とするので、決して譽むべき話でない、この種の約婚が約婚ならば却て浮薄の氣風を養成するばかりで、害がある共、益がない、日本の淑女間には寧ろ全然排斥されむことを希望しなければならぬ。

◉假令婚約の美風のみを學ぶとするも、泰西婦人の爲す如く其約婚期の二年、三年、若くは五年等の長年限に亘ることは全然要なき事である。

◉約婚と結婚との間が、將來睦まじき一家を作すべき下拵へてあるとすれば、其間は長くて半ケ年、大抵三ケ月位で充分である。

◉所謂好事魔多して、結婚といはず、約婚といはず、正

式の婚禮までの間に長引くと、概して種々なる障害、感情の行違等を起して、つまらぬ事に折角成立した慶事が破れ、之が爲に心靈上の負傷者を出す例は、世間に澤山ある。

◉物新らしく戀愛論を持ち出すのではないが、本來から云へば戀といふものが、約婚とか、結納とかいふ形式上の鎖の爲めに一度結ばれたる上でなければ成立せぬ樣では頗る覺束ない話である、眞正の戀には誓を要せぬ、約束なくして互に相信するといふ位でなければ圓滿とは云ひ難い。

季節と月

◉女子は結婚の夜より全然新しき生活に入るので、所謂諺からか知らねど柿の初ちぎり、の境活に立つのであるから、この新らしき生活は對して障害となるべき事は豫じめ除去し、可成凡ての點に於て新生活に利益あるべき事情を撰まねばならぬ、結婚の季節の如きも正に其一である。

◉非常に熱い時、非常に寒い時、酷熱、酷寒の季節は概して人の健康に適しない、故に盛夏、嚴冬は決して結婚に適當なる季節とは言ひ難い、盛夏は殊に避くべきである。

◉大抵の人は、熱からず、寒からず、春秋二季の間に於て所謂黄道吉日を撰ぶを例として居る、これは自然に當を得たもので、何れかといへば、枯葉黄落の秋日よりも、麗日和風の春日を以て最も適當とする。

◉初春の結婚により、其年内に子女を擧ぐる時は、其子女の養育に對しても非常の便利を感ずる、養育上最も困難なる盛夏の頃ともなれば、既に其子女も一通の發育をなして餘程抵抗力の付いた後であるから、左程に骨折らずして濟む。

◉月といふも同く女子の月で、經後二週若くは三週の後、言を換れば月と月との中間を撰むが最も適當である、是れには別に六ケ敷理窟もないのである。

新婚旅行

◉新婚旅行、これも全たく舶來の言葉で、氣取た夫婦、假令ば高襟黨とも言はるゝ向が、非常に理窟があるら

しく云ふ所のものであるが、實は存外難有からぬものである。成う事なら何時までも日本には流行させたくない。

◉健康上、心意上、幸福上、新婚旅行程害あつて益なきものはない、一二週間なら未だしも、一ヶ月、二ヶ月の長きに亘つて、この旅行に出掛るものがある、夫も一ヶ所には多く滯留せず、其處此處を驅けめぐる。

◉或ひは狹き船中の客房に閉ぢこめられ、汽車に搖られ、駕籠、馬車、人力に困まされた揚句、落ち付く處は、何れや旅宿で、不自由、不便の數〳〵を嘗めねばならぬ。

◉獨身の旅行と違つて、未だ新生活に入た儘の新郎新婦何うしても氣兼は失せぬ、自然思遣り助け合ふ心を加ふるも、夫が爲めに贏ち得る所の氣苦勞は一通でない。

◉新婚の女子に如何に健康なるものも身躰に必ず異常を生じて居る、暫時くは最も平静なる生活を要するに引換へ、この氣苦勞、この激動を受くるのであるから、勢ひ健康を破らざるを得ぬ。

◉新婦の不健康は忽ち新郎に及び、身躰の不快は心性上の不快を誘ひ、結婚後未だ數日ならずして、獨身生活の呑氣を思ひ出し、之が爲めに過半結婚の幸福を減殺さるといふが、殆ど普通の成行である。

◉左なきだに結婚前に於ては、男女共互に相買被る所のあるもので、夫妻の親密の度を重ぬるに從ひ相方赤裸々となつて見ると、缺點も新たに發見され、不快の念も新に生じて、結婚前と、結婚後の思想に著しく變化を來のものである。

◉シルレルが嘗て歌ふた如く、被布の脱せられた時、伯は忽ち剝げ、多くの幻影は消えて仕舞ふものである、世間には絶えずこの歌が繰り返されて居る。

◉新婚旅行が相互の同情心を興隆せしむると同時に、相助くるといふ心の増長すると同時に、女子は槪して依賴心の塊りてなり、自から制し、自から起つといふ考へが減少する、何事も夫の手を借る、斯して一ヶ月乃至三ヶ月の旅行も了た後厄介物といふ觀念を夫に與へぬ

ものは殆ど稀である。

◉この旅行を經驗した女は十人が八人まで、其一生の不幸を茲に萌した悲しむべき事情を告白せぬものはない。

◉併し新婚の家庭は必ず知已朋友の爲に特更ら注目を受くるもので、際分新郎新婦に堪へられぬ事情もあるとすれば、一週、若しくは二週の間、或る閑靜なる一定の場所を撰むで茲に一家幸福の土臺を作すもよかろう、只歐米に於て普通行はるゝ所のハネームーンに至ては、決して嘉すべきでない。

◉歐米では事既に慣習となつて、約婚、結婚、新婚旅行とこの三通の順序を經ねば夫婦になつた心持がないかも知れぬが、日本人には一向其必要を認めぬから、この點丈けは大に仕合といつて可かろう。

模範の女學生

日東生

呼んで女學生といふ、其稱や美、人をして羨艶せしむるものあり、彼れ女學生とは何ぞ、修學の道程に在る妙齢の女子を通稱するなり、されば、女學生たるの時代は、婦人が其一生間における、智德上の修養を爲すべき時期に屬する也、女子が其將來において、良妻賢母となるも、また卓出せる女傑となるも、皆此時期における涵養修得の如何に關するもの多き也、尤も男女の二性を問はず、學生の時代は、人間の生涯中最も大切なれども、わけても婦女子に在りては、最も大切なる時期にして、且つ注意を要する時代なりといふべし、何んとなれば、男子に在りては、一生のあらゆる修養を學校教養に受くるものにあらずして、その生活の對境たる社會より、受くるもの、所謂社會教育の側よりして、人間教養の方法も存すれども、婦女子にありては然らず、重もに學校教育に憑り、彼等が年少きの時、學窓において修得

せる智識と道德心は、其學校を出でたる後、或は他家に嫁き、或は社會に獨立自活を爲すの時に至りても、其主たる材料となり、原動力となるものにして、婦人一生間の行爲行動は、殆んど其學生時代における修養に由りて支配せらるゝもの多きを見れば也、況んや男子は、其性質上より見るも、疎暴の言行あるを免がれず、また些の不良なる事を爲すも、之れを回復するの途なきに非らざれども、女子にありては、其性質上此の如き事あるを許さず、若し一たび其品行を紊亂して、所謂「濡れ衣を着る」が如きことあらんか、終生その汚名を脫する能はず、長く世間の誹謗に苦めらるゝ如きは、往々實例を見る所にあらずや、故に女學生たるの時代は、最も注意警心を要すべき時期なれば、其德操上に於ては勿論、其言語動作の末に至るまで、凡て女生らしき心情と、氣風を保つことを勉めざるべからず、想へよ、國家を組織すべき元子は國民にして、國民たる元子の母は、正しく是れ婦女子にあらずや、されば、女子たるものゝ身は、將來において、其國家に盡すべき責務や重且大なるの理、融々として其心中に解得せらるゝならん、而して此等の理を了得せば、其妙齡なる女學生時代においては、十分に其智德の修養に勉め、一生の方針を誤らざらんことを愼まざる可らざる也、

あるは、紫色に、あるは朱、海老茶色等の袴を着け、又たあるは、洋服をフワリと着流がし、衣裝携帶品の如きに至るまで、ゆかしき品を擇び、うつくしき物を取り、少しく矜色ある者になれば、近視眼ならぬも眼鏡をかけ、用もなきに横文字の書冊を手にし、喋々開化ブル話を口にしながら、大道をこれ見よがしに歩み行く者、又其墮落せる者に在りては、男女交際とか、女權擴張とかいふ立派な言葉の下、能く其眞義を了解もせぬ癖に、生意氣なる言論、交遊を爲さんとて、その結果は却て、世人よりして、お轉婆娘と噂され、浮氣女と指さゝるゝに至るが如きもの、是れ當世の女學生の眞相にあらざるなきか、而して彼等の輕薄淺浮なる、其父兄等が、經濟上において、心意上において、多少の苦痛を受けつゝあるをも知らず、競爭的に浮誇に耽けるもの、

今日女學生の精神にあらざるなきか、此の如くして彼等は、無暴にも「女は容色佳く、教育さへあれば、運よく行けば玉の輿」などを夢みつゝある也、當世女學生の心事亦た憐むべからずや、されど、美色佳容を誇るは、その浮氣心を表白するもの也、才能を衒ふは、其思想と道德心の薄弱なるを表示するもの也、此等の形式的裝飾に流がれし者、着實なる氣風を缺ける者、是れ吾人が理想とするは學生ならんや、 婦女は相應に容色を飾るは不可なし、今日の女子は、内氣、 堅氣一遍のみにても可なりといふにあらず、 疇昔の學問を稽古せる女と、今日の女學生とは、世間、氣風、 精神の差異あるは免がれざるも、小學生は、凡べてにおいて、 女生らしき所の存在し、また女學生として完全なる智德、風儀等の具備するもの無かるべからざる也、

然り而して、女學生たるものは、其の學校生として、即ち單純なる學生の資格において、 學力及び品行上の摸範を示すに足るのみならず、學校以外においては、家族の一員たる女子として、一家の幸福を圓滿ならしむることに助力せざるべからず、女子は其性質上、家庭和樂の原動力ともいふべきもの、平和なる家庭に、融々たる春風を吹かしむるものは、女子の笑談 歡語に基するもの多きを見る也、されば、女學生時代の女子は、其教育を受くべき學校にありては、精勵して專ら學業の發達、人物の向上に勉め、以て他生の摸範となる心得なかるべからざるは勿論なれど、其學校を退散せるの後は、家庭生活の範域において、其固有の柔 順なる性 情を展べ、光輝ある一家の團欒を造るべき責務あり、尙ほ其外に、一家の交際上においても、他人他家に對する情誼を温かならしめ、殊に來客の應接饗應等には、天眞爛熳にして、而かも眞正の愛嬌に富める女子は、之れが補助役たるが如き觀もあれば、女子が、人に接するの場合には、萬事親切を旨とし、其言語動作は、凡そ愼重 且優美にする心得なかるべからず、畢竟するに、女學生たるものは、學生として、其學力品行に堪能なるのみならで、その學校以外、家庭においても、世間の交際上に關しても、女性の美質を傷けじ、以て和樂の源泉 平和の鼓吹

者たることを勉めざる可からず、然らずんば、いかに學識すぐれて秀才と呼ばるゝも、性質怜悧にして俊女と稱せらるゝも、未だ遽かに善良の女學生といふこと能はざる也、好箇摸範の女學生といふこと能はざる也、



社交



北海道の女子教育

下田歌子女史の談

◉北海道の事は常に聞いて、胸中に種々な想像を描いて居りましたが、今度始めて行つて見ますると、見ない中に聞いたことは餘程違つて居るのです、北海道は私の思つて居たよりは、存外に開發して居て、良い方から云はゞ丸で文明の殖民地の有様があるのです、委しく云へば人は紳士の氣風に富み、且つ頗る活潑で利害を觀て移る事が敏捷である、隨つて新式な器械等も比較的他よりは早く使用されて居るやうです、この樣に進取の氣風に富み、萬事開發して居るのは、舊慣の束縛が無いのも其の一原因であらうと思ひます、兎に角進歩力が最も熾んであると思ひます、

◉全躰から云はゞ　北海道の或る一地方では妙な感があるのです、一方では官吏の勢力が盛んで地方官など〻言ふと實に大した勢力のものですが、一方では議員等の勢力もあるのです、何にせよ、偏隅の地ですから、自治制の事などには未だ志想も智力も進まぬと思はれる樣ですが、實際は決してさうで無いのです、また民力も隨分發達して居て、即ち殖民地の風があるのです、

◉婦人を敎育する完全な學校は未だ無いのです、北海道の婦人は外面から言へば智識の程度が低いので、只或る一部の事を講習した人はあるのですが、内地のやうに大成した人は無いと思はれます、然し社會改良とか或は其の他の美事には、世間の毀譽褒貶を少しも意に介せずしてズン〱自分の信ずる方に向つて進むと云ふことは北海道の一特色であると思ひます、これ等の點は後の經營者が指導を誤らずして發達せしめたな

らば頗る有望な分子であるのです、然し又た他の一方には恐るべき點がありまして、私の聞く處に據れば立派な進取の氣風に富んだ有爲の人があると同時に無頼者も隨分多く又惡黨も居て、折には殺伐な事を行る、それに愛郷心といふものが甚だ薄いのですから、社會の爲とか土地の爲とか云ふ事には至て冷淡です、隨て社會の制裁抔も自然に薄弱な譯です、此原因はいろ〳〵あるでせうが、住居を屢々轉ずる事も重なる一原因でしやう、中等以下の人は滿一年も同一の土地に定住することが稀で、其上一年の半分は雪の中に埋れて居て、敎育の無い人々が爲す事も無く集つて居るのですから自然と女德に缺けることもあるのでしやう、これ等の點に就いては敎育家も嘆息して居るのです、然し前に述べた樣に進取の氣風に富んで居る土地ですから、能く開發したならば却つて內地よりも有望であらうと思ひます、即ち社會の制裁が薄くて、言はゞ自由の行動を爲す餘地があるのですから、飜つて反對の惡い方に進んだ時は大に患ふ可きことになる、要は只其の指導如何にあるのです、

◉高等女學校も追々設立するといふ話があるやうですが、當局者も深く注意して能く導かねばならぬと思ひます、感心しましたのは札幌で、彼處は御承知の通り從來農學校もあつて學士、博士なども住居して居り、且つ師範學校もあるから隨分學力を有した有望な人もあるのです、また札幌にある北海道廳の前に建てられた女子尋常高等小學校は頗る盛んなもので、生徒の千人も入れる校舍があるのです、私もこの學校で開かれた夏期講習會に招聘されて、行つて見ましたが、監理が能く行き屆いて居ます、一例を擧ぐれば校舍を建築する材木も土地で充分に供給せられ地所も充分廣い場所があるのですから、餘程便利なのです、また平常學校の監理も行き屆いて居ると見え私の行つた時は休暇の時でしたが、硝子などにも曇りが無く其の他校內の机を始め器具に至るまで能く整頓して居て、厠の隅々に至るまで一つの落書も無いのです、これは校長が非常に熱心家で職員と共に全力を注いで監理に勉めて居るので

す、

◉札幌の市街は御承知の通り碁盤の目の樣に整然として居て一寸見ても氣持が宜いのです、これ等も知らず識らずの中に人の氣風を正しく感化する益が多少あるかも知れぬのです、總じて云はゞ中流以上の人は活潑な氣風があつて以下の人は患ふべき缺點もあるのです、即ち良い事の進んで居ると同時に惡い事も同じく進んで居る譯ですから之を善良なる方に導くと云ふ事は目下の大急務と思ひます、

親族との交際

親族は、自己又は夫の血緣あるものなれば、他人よりは一層厚く之を敬ひ親しみ、其親疎の等級に從ひて、睦み交るべきものとす。凡て交際は、主に男子の司るべきものなれども、特り親族の交際のみは、專ら女子の務むべきことなり。親族の不和は、多く女子に因りて生ずるものなれば、深く愼み省みて、長を敬し、幼を愛し、以て其和親を計らざるべらず。殊に己の親戚に厚くして、夫の親戚に薄くするは、甚だ惡き事なり。さりとて己の親戚なりとて、故らに作りなしたる樣に冷遇するは宜しからず。されば一家の主婦たる者は、日常夫を助け或は之に代りて、祝儀不祝儀は更なり、年始暑寒等の訪問を怠らず、又親戚の中にて、火災、水害、或は疾病、死亡等の、不慮の災厄に罹りたる者あるときは、力を盡して、之を救助し慰問すべし。若又元來貧困の者なるときは、常に應分の補助を與ふべきは勿論、或は之を侮辱し、或は之を擯斥する等の事あるべからず。其他或は酒色に耽り、或は博奕を好み、若くは懶惰にして業務を怠り、家產を蕩盡するか、又は家名を汚辱すべき樣の行ある者あるときは、豫め之に忠告して、其品行を改めしむべきは親戚たる者の義務なりとす。

婦人用美術裝飾品

▲千代田袋　十六七歲位までの令孃持として適當なるは赤地繻珍又は鹽瀨に山水花鳥等の極華美やかなる縫取摸樣の品なるべく又古代摸樣金入り繻珍などもよろ

しく代價は三圓以上六圓五十錢位まで、また十八九歳以上の婦人持としては、丸糸織の段摸樣或は繻珍等の澁き柄の品が昨今大に行はるゝ由、代價は並の品にて先三圓五十錢位、

▲福袋　此は貴夫人令孃の携帶品として玉寶堂の新案に成りたる手提袋なるが、赤地金襴、金入り繻珍、友仙等の裂を用ゐ通し待と稱する仕立にて薄き小判形に造り金梨子地の口金を附けたるものなるが、少女七五三お祝ひ當日の携帶品に適當なるべく代價は四圓四五十錢位なりと、

▲櫛笄　昨今若向きの婦人間に最も勢力ある流行の櫛は遠州形と稱する角形のものにして、蒔繪摸樣は寫生よりも光琳風の花鳥山水等の圖が一般の好みに適し脊の厚みは二分より二分二三厘位、横幅は二寸八分より三寸位、山は大抵一寸一二分程とし代價は上等品四圓四五十錢位、また之れに伴ふ笄は厚さ三分、幅四分位にして代價は六圓五十錢位なり、年增向の櫛は古代摸樣の研出し或は惣彫のツミなるものとし形は隅に少しく圓みを持たせ脊の厚さ一分、横幅二寸八分、山一寸位にして之れに伴ふ笄も矢張り小口を圓めたる三味線形が目下大に行はるゝ由、此櫛笄の代價は八圓五十錢位なり、

▲簪　近頃中流以上の婦人間に專ら行はるゝ簪は赤銅金製の丸彫花鳥紋崩し等に眞珠、ルビー、ダイヤモンド等の寶石を入れたるもの或ひは白金の波に千鳥の彫刻など種々の意匠を凝らしたるものにして丸髷、島田等にも束髪にも用ゐられ代價は金製眞珠入の花の刻崩しは十五圓乃至五十圓、また寶石入り丸彫物は二十五圓以上百圓位まで尚丸彫物は十四五歳より廿歳位までの令孃向として大流行なるが並の品は七八圓位なり

▲指環　純金の指環と稱し一時流行したる金無地幅廣又は彫刻物とも今は田舍者の商標として排斥せられ近來指環とし云へば佛朗西形と稱する最も細き金或は白金臺に金剛石又は最上の大眞珠を主とし以下ルビ・サツフィヤ等の寶石を入れしものに限る有樣となりしが兼用指環と稱し表面に寶石裏面に認印を彫刻しありて

ベ子仕掛にて表裏自由に使ひ得るものは相變らず流行しつゝあり

▲帶止　紐は繻珍或は鹽瀨の縫取又はツヾレ織にして金物に名家製作に係る葡萄又は山水花鳥の眞珠入又は七寳類流行す此外帶止襟留簪指環兼用のものありて貴婦人令孃向に適す

▲簪　金製浪に千鳥の彫にて眞珠を水玉に擬し至極優美高尙のもの最も多く見受けられ花鳥紋崩し彫刻物又少なからざるも槪して寳石入なるが如し

▲洋服手釦　夫婦形鎖附にて寳石入自轉車形の流行最も盛にして其他は金製丸彫形に限るが如し

▲アヅマ七寳　近來上流社會に於てはアヅマ七寳と稱するもの大に流行せるが此アヅマ七寳は我國及佛國の七寳法に種々の改良を施せしものにて一種優美なる光澤ありて色と云ひ寳石類との移りと云ひ在來の七寳の比にあらず至極高尙のものなるにぞ某男爵婦人の如きは痛く之を愛用し去月末以來三千餘圓を投じて同種の指輪帶止和洋簪類を買入れしが昨今の模樣にては遠からず流行品の王たるに至るべしと云ふ

▲紙入　繻珍又は斜子多きも上等品は鹽瀨の縫模樣又は綴にして裏地は鹽瀨の無地又は繻珍の更紗形最も流行す

▲卷煙草入　鰐皮製の外は一閑張に蒔繪せるもの或は古代裂地又は革製にてパイプマッチ入發火器等の附屬せしもの和洋兩服用殊に旅行用として流行盛んなり

▲婦人用刻煙草入　繻珍又は鹽瀨の縫取にして利久形と稱するもの人形と共に流行せり其他婦人頸飾腕環男子襟針等の如き孰れも新意匠物多しと雖も要するに其流行は成るべく多くの金剛石眞珠其他の寳石類を用ゐて澁味多き者を貴ぶにあるが如し

流行生花根掛

生花根掛といふを近頃自然花をとつて直に根掛けとすること中流以下の婦人間にも行はるゝやうなりぬ、元貴婦人方より流行せしものにて先づ此頃の季節にては、

◎色楓の生葉掛　紅葉の先葉を小枝二三寸付て折取り、沸湯に小枝を浸し柔らげ、剃刀にてソツと二つに割きて心を去り、結び合せて掛るなり、

◎野菊の花掛　これも前の如くして心を去り、湯にて莖を殺したるを直

に冷水に浸し、髮を梳いて結び上げる迄置き、扨て之れを根に掛くるに、翌朝迄活々として少しも萎まず、上品に且つ粹なりとて下町邊て大流行

◎黍の生穗　十二分に成熟したる黍の生穗を剪み取り、髷に應じて適度に結び合せ、湯に浸し置いて掛けるなり、穗の色の白くして一種の光あり、其れに油づきて一入の光澤を増して麗はし、洗髮の銀杏返し又は結髮に妙なり、

◎又生花の簪　は紫菊、大和菊、四季撫子あるは山茶花、椿、薔薇の花、西洋花は室咲にて種々あり、年若き婦人は紫菊が華美にて品よし、二十歲前後には大和菊などよからん、

關西の流行

▲令孃向　上着は小紋御召にて千代鼠、御幸茶の地に桐に鳳凰の模樣、裏八掛は櫻鼠、千代鼠、小豆色等にしてその他總て紅色を帶たるもの、襦袢は紅絹(價廿三四圓位)、下着は袷なれば一枚また綿入なれば二枚なるが胴拔きは絞り絹、下着の地質は地變御召、又は繻珍織にて曙色に上着と同じ模樣(價二十四圓より二十七圓位)、繻袢は緋地の友禪又は紅霞地に花模樣か都名所(價十二三圓位)、帶は繻珍織にて黑地、また錆茶に菊、牡丹その他花模樣また有職のもの(價十圓位)、▲夫人向となれば上着縞風通にて薩摩筋、また金通し、間明大名、八掛ば梅鼠、栗小豆、利久茶色などの縮緬にて襦は紅絹(價二十二三圓位)、下着は矢張り縞風通の同柄か繻珍織また紋風通にて裏は上着と同じ(價二十二三圓位)、繻袢は友禪縮緬にて御園鼠、千代鼠、櫻鼠の地に花か山水の模樣、また近頃は袷端模樣が專ら流行せり(價十三四圓位)、帶は繻珍織、厚板織にて錆茶、栗茶地に光琳の鶴に金通して霞の模樣(價三十圓位)、その他は陽樂織、吉野御召、縞御召(價十圓より十三四圓位)、また平素着としては米澤縞、九重糸織、秩父縞の類(價五圓より七八圓位)、帶は都織の打合せ(價十二圓位)、丸帶なれば博多の惣紋織(十七八圓位)が流行せり、

◎男子向

▲意氣好みのにては上着は唐棧柄の持はやさるゝと共に古渡織洗納戶地に素鼠白茶の竪縞が最も恰好の品なるべく之に次ては平絲雙子、紺地の微塵格子等が通の側なり

▲下着　唐棧雙子の赤絲萬兩縞又は胡麻柄等にて極氣取りては瓦斯織、絹紬織、地は革色の古代形更紗などなるべし

▲羽織　本八重織、諸瓦斯織、筵織の紺地鐵地の三筋立等上着に副うて似つかはし又質素なる側にては

▲上着　諸雙子、八重雙子の紺地に藍鼠或は黑味茶の大名には片羽縞等穩當しく動かぬ所にしてその外には和絲結城、諸結城の鶯茶の竪縞など眞面目にて品位あり

▲下着　は檗紬、細絲新紬の茶地柳絣、其他は前の地風にて白茶、濡立格子、翁格等面白し

▲羽織　は紬入結城、諸雙子、高樂織の紺地、黑地の縞絲等にて色氣の派手ならぬが價値なり

◎子供向

十歲前後の子供物には八重雙子、唐棧雙子、諸瓦斯織の紺地に限り縞絲白茶の棒筋又は薩摩縞、格子等殊に淡白にして新秩父、大島新紬の黑地、白茶絣等は活潑の方なるべし、次に

◎婦人向

婦人向高尙好みの側にては

▲上着　は平絲雙子、八重雙子、諸瓦新織の紺地、革色地の子持筋又は絹絲新紬、利久錆、高樂織の藍鼠、柳茶の入りし竪縞など與床し
▲下着　は唐棧雙子か錆赤地又は白茶地赤入亂立縞等か或は瓦新更紗の朱の入りしもの雅にして優美なり
▲羽織　は諸雙子、鍋織、陽樂織、諸節織の鐵地西川縞などにして書生羽織としては沖繩紬、利久紬の縞及び龜甲絣か風通大島等なるべし、次に華美なるは
▲上着　に錦光織、都織、琥珀お召、九重お召の花色地、紺地の鼠、白茶海老茶の竪縞等光澤ありて美し
▲下着　は關東織、富貴織、風通織の赤入工風柄等
▲羽織　は利久革、鐵、納戸等の琥珀織、陽樂織、鳳娥お召等孰れも優美にして殆ど絹織物の代をなし一種の趣味ありといふべし
▲意氣好みの方にては
▲上着　は唐棧雙子の古渡り柄又は縫織赤入納戸地に限り、其外には紺雙子の紺地、納戸地に藍か紅の辨慶格子等酋に返りて好む向多し
▲下着　は專ら上着と同樣の柄を用ふるか又は瓦斯織地、本染更紗の柳色、海老茶、時代紫の淡白した模樣を穿ちたる側とす
▲羽織　は前の地風にて錆赤絲の入りしもの又は利久紬の茶地絣等にてなほ新機になれろ吾妻紬（大島紬の如きもの）納戸地赤入など床しき澤あり書生羽織としても恰好なるべし

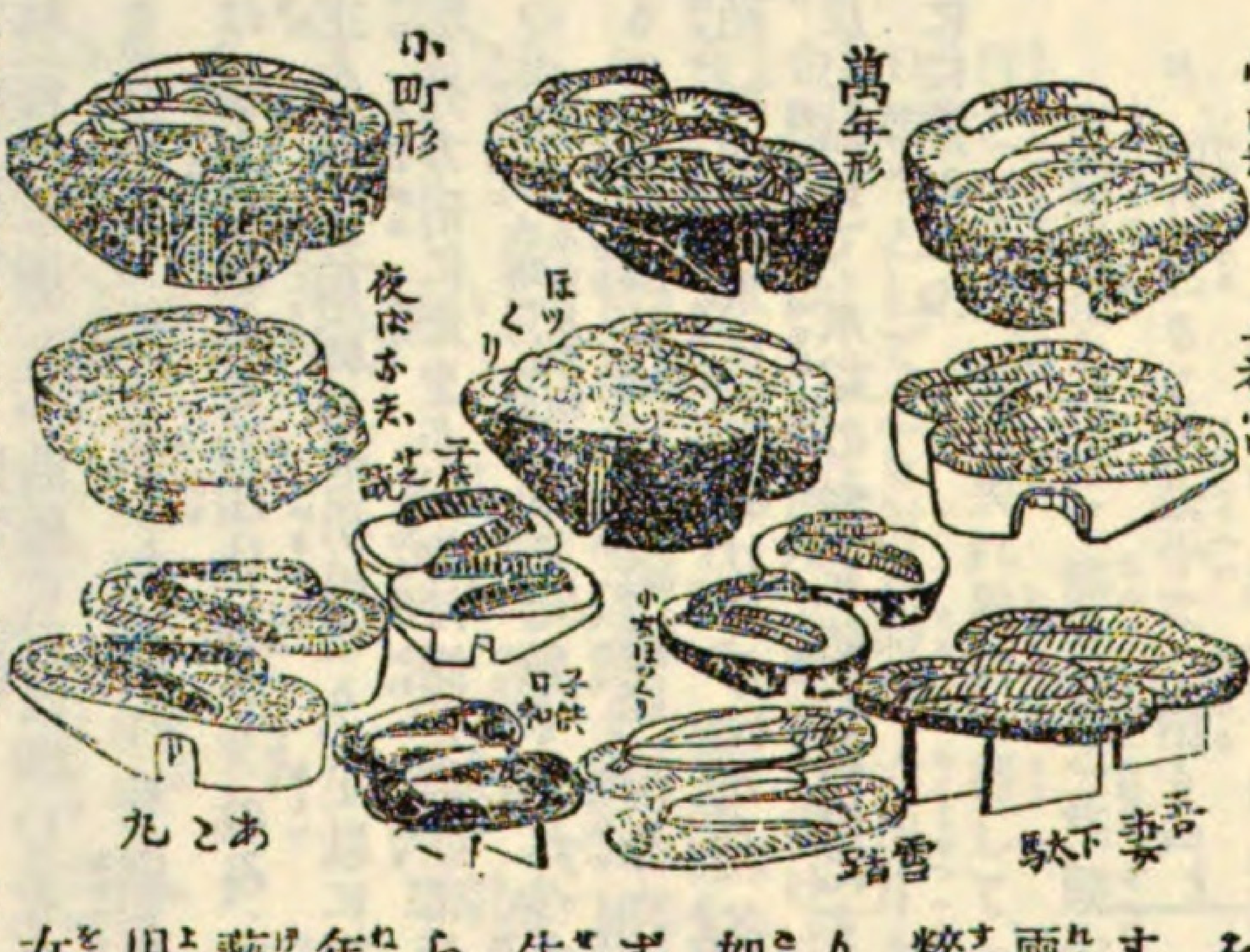
○少　女　向

は十一二歲までには新機の風通織（眞田を織込みしもの）の紺地、總絣及び風通織の花色地大模樣など殊に愛らしかるべし其他各地合にて赤、金茶、桔梗色の入りしぼかし縞か縞絣、段絣、経目絣絣入など好み多し

東京婦人風俗一斑

◎履物の種類

履物中下駄は種類多くして、總べて駒下駄殊に疊附のを以て晴れの用とす、男物には堂島、雨抉、櫛形行はる、粋肌には後丸あり、芝翫は往時の如くに賞せられず、薩摩下駄は書生などに盛に用ひらる、新橋形は近年の創作にして、藝人又は洒落者の用に止まるのみ、女物には小町形、二股小町、萬年形、雨抉、堂島、あと角など用ひらる、夜話は意氣に過ぎて良家の婦女の用ひざる所とす、半四



郞は今全く廢れぬ、ぱッくりは少女より新造ともいはるゝ娘の好むで穿く所なり、日和下駄は角形、丸形外大、つま切(吉原下駄)共に行はるれど、女は特に丸形を用ひ、又後齒を用ふるなり、日和下駄に疊を附けたるを吾妻下駄といひ、また女のみに限れり、足に輕く品格また卑しからざれば學校通ひの女生徒など大方これを用ふめり、近年桐材の價暴騰し、絲柾臺の如き幾圓を値するやを知らざれば、自ら山桐などに製したる贋作物も多く、神代杉などを以て、いと高尙に作れるもあれど足に重し、女物には其木地を隱すが爲めに塗下駄最も行はれ、これに金蒔繪などして、さも見事に仕上げたるもの少からず、鼻緒も日清戰役の後、革皮の價騰貴せし爲めに織物、組物を用ひたるが多く、男は繻珍、風通、一樂、女は繻珍、厚板、天鵞絨など用ひらる、下りては瓦斯風通、裕爾天、小倉織を以てす、疊も南部或は籐編最も用ひられ、間々竹を展べて作れるもあり、廿五年の頃より雪蹈、男女共に大いに行はれ、藝人洒落者などは必ずこれを穿くことゝなりしに、兎角に夏は水撒きの爲に穎ませられ、冬は地氷の爲に滑る憂ひあるが上に、既にして革皮の騰貴し頗る高價となりしかば、何時しか衰ふ、草履下駄(板付草履)も一時盛に行はれしものゝ、足の疲れ易き爲めにや、幾もなくして廢れぬ、麻裏は職工などの外は、唯上草履として用ひらるゝのみ、あがりの麻裏は、主として男用にして勇風なり、足駄に至りては、概ね角形、外方形に止まり女物は側を黒塗にしたるが多し、齒の火塔形(火塔口に似たるよりの稱)なるは躓く恐れ少しとて行はれしもの、今は廢れぬ、雨天の道路、泥深き土地のことゝて、殆ど前靴(爪皮)を着けざるはなく、冬向とて其裏に毛皮を貼付て、爪端の寒を防ぐ爲めにするものさへあるには驚かれぬ。



娯樂



冬のたのしみ

梢の花は再び開きぬ、されど香なきは如何にせん、軒の玉水も夜半より音絶えて、夏ならば黄金抛ちてもと思はるゝ氷白玉をかけたり。冷たくとも雪はたのしみ多し、冬にても氷は心地よきものなり、あはれ夫れにしても氷の姿雪の色、共に女子が潔白なる節操に類えらるゝ因縁、又不思議ならずや。

雲かとばかり眺められし春の花は、やがて風薫る若葉のみどりとなり、更に又滴翠の深みどりとなり、一葉の秋より、よふ〳〵葉緑素は古根にかへりて紅色の色素とじまりて、人の心を喜ばせしも、降る霜に大方素枯れはてゝ、今は檣の立ちならびたらん樣なる空林折りふし寒鳥の飢に泣くを聞く、あゝ吾等は樂しき春の忘れがほなるに、悲愁深き秋を迎え、彼去らんとして又荒涼たる冬に逢ふ。

雪は總べての冬の荒涼をかくして、しばしなり共陽氣なる心地を抱かしむ、一夜飛雪の來つて、我窓を輕くうつあり、明る間をまつて、急ぎ起き出てゝ見れば雪は嬉しくも一面に降り來りぬ、賤夫の小舍も大盡の高樓も、同じ色もて不公平なく積りぬ。

空林白花をかけて滿枝皆之花、賤舍白帽を戴いて、滿目之水晶宮、若し夫れ陰雲一掃して、青空絹の如く、旭日輝々として之を射る時は、六出片々反映して、無量の金剛石の如し、鷄飛んで曲線を畫けば楓葉を散らし、狗歩けば香なき梅花を點ず、雞狗雪を得て美心ありと云ふべし、小兒集つて雪達磨を弄し、攘來つて盆上に白兎を現ず、雪巴となり鵝毛と飛び、一度地に積れば此銀世界をなし、解くる時は木々の枝々瑶をつるし天晴れたるに軒に雨聲あり。

雪と共に美を飾るは霜と氷なり、吾等はこの三の物を得て荒涼たる冬に聊かの趣味を得るを知る、さあれ冬は最も希望多き時代なり、鶯の初音も梅の薫りも、其他百花千鳥、すべて春に於いて美を競ひ、艶を爭ふものは、皆此の三冬に於て、其潜勢力を養ひつゝあり、春

菅野の若菜は雪氷霜のとけて、うらゝかなる日光のめぐみにて、初かすみとなつて棚引く時をまちつゝ有り、鶯は洞底に籠つて秘かに音聲を練習し梅花の香の來るを待つ、孃達又新春の衣を調し、若菜籠を新らしくして春信の第一報をまつ切なり。あゝ冬も中々に樂しみ多からずや。（小舟生）

時事問題

集會の作法

徳富蘇峰

◎恭敬なる紳士も、一たび群衆の中に入れば、乍ち暴徒となる。豈に奇怪千萬ならずや。吾人は返す返すも我が國民が、未だ集會の作法に慣れざるを遺憾とせずんばあらず。

◎集會にも類多し、或は政治的集會あり、或は宗教的禮拜あり、或は文學、技藝、産業等の講話あり。或は親睦會とか、懇親會とか、所謂純乎たる社交的のものあり。然れども如何なる集會たりとも、必らず賓主あらざる可らず。主賓は集會の骨子にして、主賓互ひに其作法を守りて、此に於て多人數の集會も、其の秩序を保つを得る也。

◎然るに我國に於ては、個人的訪問、若くは個人相互に會する場合には、主賓の禮、寧ろ煩多に失し、聊か窮窟を覺ゆるが如きの嫌あるに係はらず、其の多人數の集會となるや、眼中一物なく、主人もなく、賓客もなく、況んや主賓相互の心得方を顧慮するものある可き筈もなく。滿場唯だ暴徒の群り居るを見るに過ぎざるは何ぞや。

◎例せば一の懇親會ありとせよ、會主若くは幹事は則ち主人役也。左れば會主若くは幹事たるものは、飽迄も主人役たるの義務を忘る可らず。會主若くは幹事は決して氣の利きたる小使を以て、滿足す可きにあらず。其の集會を取締り、總ての會合者に向て、其の不愉快を被らざらしめざる可らず。極言すれば會主若しくは幹事は當然其の會合者たる賓客を保護するの義務を負ふもの也。而して此の義務と與に、其の賓客たる會合者に對して、多少の統制權を有す可きは、固より論なし。

◎集會者は、亦自ら賓客たるの心得を以て、會主若くは幹事の命に奬順し、會主若くは幹事の權威を敬重せざる可らず。即ち其の一たび集會の席に臨むや、其の動作の自由の一半は、會主若くは幹事に委托したるとを覺悟せざる可らず。試みに個人相對の會合を見よ、未だ主人の許可を得ずして、其の坐を起つものある乎。而して一たび多人數集會すれば、如何なる約束なるも、實行するものなく、如何なる命令なるも、聽き納るゝものなきは何ぞや。

◎暫く記者の實驗したる一事を語らしめよ。數年前或る紳士が、海外漫遊するに際し、其の送別會を都下の或る西洋料理店に開かれたるとありき。其の送らるゝ者も、當世の名士たり。而して其の送りし多數も亦た名士、若くは其の類たりき。而して何人も一言の挨拶する者なく、從つて亦た答辭を陳ぶる者なく。何人も何の爲めに來り集まりたる乎、更に曖氣にも出すものなく、唯だ雜談を以て始まり、雜談を以て終り、而して無意義に、西洋料理を喫し去りたるのみ。若し此れが主客差し向ひの會名たりしならば、如何にも不思議の至にして、無禮の沙汰と申すの外なかる可しと雖も、唯多人數の集會なるが故に、何人も之を異む者なかりしのみ。

◎されど斯る無意義の集會の如きは、先づ上出來と許せざる可らず。其の猥褻の談をなし、酒を被りて坐を罵り、杯を抛つものあり、堤子を飛

ばするものあり。遂に組打やら、撲き合やら、果ては仲裁やら、中ろ迄も殺風景を以て終るもの、必ずしも稀有にあらず。此に到れば會主も、幹事も、其の主人役を怠り、集會の面々、何れも賓客たる心得を失ひ、何れの方面に向つても、非難の聲を揚ぐ可き點もなし。何となれば若し非難せんとせば、總ての者を非難せざる可らざれば也。况んや多人數の野外集會の如きに於てをや、集會者一人に、一人の警官を要するの外、殆んど他に取締りの道無かる可きは、洵に致し方なき也。

◎故に集會の秩序を維持せんと欲せば、一方に於ては會主若くは幹事の義務を勵行し、地方に於ては集會者の義務を勵行し、主たる者は主たる丈けの事を做し、客たる者は、客たる丈けの事をなすにあり。別言すれば個人間に行なはるゝ、主賓の作法をば、群集の間に行ふにあるのみ。

（國民新聞）

診察料と車代

從來我國の習慣に據れば診察料は無論、藥にも一定の價を附したることなく、醫者の收入は只盆暮二季の謝儀に依りたるのみ、誠に割に合はぬ話なれども、實際の收入は相應に豐にして貧人などに對しては强ひて謝儀を求むるの必要を見ざるより是種の患者は恰も施療同樣に取扱うて醫は仁術なりなど稱したる所以なれども今日の醫者は一個の營業にして其營業を維持するには漠然たる隨意の謝儀に依賴するを得ず診察料なり藥價なり一定の代價を收むるは固より至當の事にして怪むに足らざるのみならず成る可くは醫藥分業の趣旨に從ひ醫者は單に診察料を收めて藥は藥劑師に賣らしむるこそ至當ならんと思へども我國の習慣は容易に行はる可らず即ち有名なる大家の外は診察料は一定せずして之を病家の隨意に一任する其代りに藥價の中に診察料を籠めて自から其價を高からしめたる所以なり、即ち醫藥分業の行はれざるは習慣の然らしむる所とは申しながら第一に醫者の利害より來るものなるに近來都鄙共に診察料を收むるの風漸く行はれて或は醫會などの議決として之れ勵行するものもありと云ふ、果して從來の習慣を一變するを得ば甚だ妙なれどもいよ／＼診察料を實行するの一段に至れば藥の代價は如何す可きや、本來今の藥價は診察料をも籠めたる代價にして中には所謂藥九層倍も啻ならず一方には一々診察料を收めながら一方には依然高價なる藥を與ふるとありては恰も二重の利を利するものにして甚だ穩當ならざるのみならず漸次に患者の減少を致す其結果は詰り醫者の不利益に歸して止むの外なきのみ左れば一般の開業醫が有名なる大家の例に倣ひ診察料を勵行するが如き徒に人情習慣に反して却て自から不利を招くの基にこそあれば永く營業の繁昌を期するものは篤と其邊の事情を考へて急激の手段を避け徐ろに之に處するの心掛肝要なる可し、又病家に於て甚だ迷惑なるに醫者の來診ごとに車夫に車代を與ふることなり、封建時代の醫者は患者を見舞ふに駕籠に乘りたれども病家に於て駕籠代を拂ひたるの談を聞かず、今の人力車は即ち昔しの駕籠にして醫者自身の便利に供するものなるに聞く處に據れば醫者の車夫は多くは無給にして病家よりの給與を當にするのみならず甚たしきは醫者と車夫との間に車代を山分けするものさへなきに非ずと云ふ、本來醫者の來診を求むる病家に於ては其報酬は固より期する所なれども日々來診の度ごとに車代を與ふるが如き繁雜に堪へざるは勿論、多忙取込みの際に之を與ふるを忘るることもあれば車夫より催促せらるゝなどの沙汰もなきに非ず病家の迷惑一方ならざる所以なれば醫者の雇人たる車夫には雇主に於て相當の給料を與ふることゝ爲し車代の如き果しの病家に拂はしむ可き性質のものならんには別に醫者より請求すること至當なる可し、云々、

（時事新報）

才媛詞藻

第十一回懸賞文披露

和歌

文學士 大町桂月先生選評

大阪市南區惠美須町四の三二八 西島喜美子

《天》 枯野

僧ゆきて山伏ゆきて日はくれぬ十里の枯野只風の聲

（評） 凄涼なる光景、紙表に躍動す。

橫濱市鷂町三ノ九〇佐竹方 長谷川さく子

《地》 仝

けだものゝ足あとみゆる霜の上に三日月さむきかれ野原かな

（評） 初冬の曉景、睹るが如し。

鎌倉長谷一三七四番地加藤方 伊東藎子

《人》 女學生

行末は如何なるいろにさき出てんひとつをしへの庭の撫子

（評） 他の奇なけれど、自から穩雅、女學生を咏するものゝ中の白眉也。

佳調

⊙枯野　三重 宮田つれ

ひと筋の電線遠くたそがれて枯野さびしく秋の風ふく

⊙仝　安房 木川のち子

三日目は芒のかげに傾きて枯野の北に星一つ流る

⊙仝　赤坂 長野きむ子

輪なかきて舞ひし荒鷲みえずなりて雪雲ひくし冬枯の野邊

⊙仝　香川 清川奈美

たそがれまでの蟲歌かすかなり十里の枯野雪降らんとす

⊙仝　伊勢 西井とら子

枯れはてし尾花がくれに僧見えて夕日淋しき宮城野の原

⊙仝　奈良 山田美惠子

一人ゆく旅の法師のさびしげにみえて暮ぬる枯野原哉

⊙仝　赤間關 梶間まさ子

冬枯れに野守が庵も顯はれて小犬たはむる柴垣のもと

⊙仝　下谷 白井すみ子

鷹狩りのぬり笠あまたゆく見えて枯生にひろき冬の野べ哉

⊙仝　本所 稻葉すゞ子

枯野原遠くきつれと道とひしやとはあらはに見えわたるかな

⊙仝　大阪 井上清子

わづらへる野守が庵の一つ見えて虫の音ほそき冬の野邊哉

◎仝　近江　谷田たみの

ますら雄の石ふみひとつ白きかな星かけさむき霜枯の野に

◎仝　信濃　竹鼻はる子

ところところ田畑ひらけてむらてきし十里のかれ野を滊車のはせゆく

◎仝　埼玉　林　靜志子

山の端の風も靜けき枯野原夕日をあびて牛のたゝずむ

◎仝　仝　仝　人

犬つれて一人の狩夫歸りくる枯野が原に夕日かたぶく

◎仝　仙臺　村田さく子

風さゆる小野にわなゝく枯尾花月に昔を言はんとすらん

◎仝　埼玉　倉林　學

風寒み身にしむ聲を歌ひつゝ枯野たどれり馬ひく乙女

◎仝　山梨　神奈なみ

八千草におもひみたれし虫のねもいまは枯野となりにける哉

◎仝　岩代　志賀　學子

あかず見し千草は枯れて朝な／＼霜の花さくむさし野の原

◎仝　薩摩　二の宮　波留子

枯芒そよぐ彼方に塔一つこの夕ぐれを見えみ見えずみ

◎仝　相模　田中しげ子

一つらの雁のねすぎて枯野原ふく風さむく入日さびしき

◎仝　和泉　登美子

八千草はあとかたもなし武藏野のすゑ野に白く見ゆる富士のね

◎仝　伊勢　前田久子

おも子どちつばなぬきしは夢なれや霜こそさゆれ豐久野の原

◎仝　相模　大谷津峯子

吹きすさぶ風にたぐひて冬枯の野邊に亂るゝのぎつれのこゑ

◎仝　淺草　武內はま子

枯野はら一もと咲ける菊のうへにさはれ一羽の蝶のとまれり

◎仝　加賀　雨路花子

僧一人さびしげに行く夕間暮枯野の末に日は落んとす

◎仝　信州　やよひ子

いろもなき冬野の原のしのすゝき今はた誰れをうちまねくらむ

◎仝　香川　有信露子

宿るべき家だに見えず一人旅知らぬ枯野に日は暮れんとす

◎仝　鹿兒島　遠矢ひで子

ゆふきぐれ枯野を迦る旅僧の菅笠のあたり霰たばしる

◎仝　埼玉　石井ふみ子

見わたせば秩父早斐か根雪白し八千草枯れし武藏野の原

◎仝　渡島　關川せき子

えものさげてかり人かへるたそがれの枯野さびしく霰たばしる

◎女學生　横濱　長谷川さく子

世の人にうち誇れとてまなびやにやな子をいろし親はあらじな

雅　文

海のほとり

和歌山市北田邊町三十九番地西村方　藤田いさを

《天》

日の女神漸く其遐幸の御車をはやめ給ひて今や淡路島の上に近づけり。島山のいたゞきに觸きて、むよむらと重り居る灰色おもしろき様したる雲のうちにかくれぬ。このまゝにて山のあなたに沈み行くらむと思ひ居

し折りしも、その雲うすき所々よごもるゝ光は、金糸をつがれたるごとく、四方の空にかゞやき渡り、下方に向ひたる一條は、直に暗碧たる大海を射、そこにたとしへもなく美しき波のかゞやきをつくりて、我が足下まで夢の如くかすかに續けり。

はるけき海原を渡り來て、後ろの松が枝にくしき音たつる勇ましき風よ。遠くかすかにむせびかへりて、白き砂路に海のひめごとさゝやく、さびしき夕暮れの波よ。紫、赤、オレンヂ、黄、青、紅、薄紅など樣々なる光の巧みをつくして織りこまれ、畫これをゑがき得ず筆これを狀する能はざる無限の變化をつくせる夕雲よ。あゝ、なつかしくもいさましき風や、波や、雲や。自然の母のふところに、そが意にさからはず靜かに永劫に暖くやすらへる姿の愛らしや。

我れの和歌この浦わに客人となりて、浪しづかにゑのごとき風光に親しみそめしより、早や幾年かへぬ。心におもしろからず思ふたびごと、かなたの小山の麓なる我が家を出でゝ、夕日の光を滿面に浴みつゝ、一路の白砂松原を通りぬけて、此の岩頭にたゝずむ時、彩あり色ある自然の大景はほゝゑみつゝ我れを迎へき。今日も亦、混沌たる現世金力り暴力を生み、其の暴力によりて、肉やわらかき肌、頰うるはしきかんばせ、影ほそき嬌姿を、苦しき犧牲とならしめられたる我が一人の花の友垣の、共に遊びし野邊に、なかじと見たる草葉の露を、今やおのが目にたゝへてこの夜ごろかなしびむせぶ哀はれなる姿をしのび出でゝは、やるせなく苦しき思ひ胸にわだかまり、中々に晴るべうも覺へねば、なつかしき親しき風趣にこの心やらむものと思ひて、いつしかこゝに來りつ。

夕陽山の端に近づくに從ひ、雲漸く四方に散りてうすらぎ行けば、火の球のごとき紅の玉そこにあらはれたり。しばらくにして其の半ばはすはゝが如くかくれぬる。あゝ、靜かなるよ此の時の天地、實に靜かなるよ。

恰も、神の子として此の下界に降臨したまひし聖の君の今や臨終の床にて、漸々細くかすかになりまさる氣高きいぶきの下より、尊き紫の帷の裡に最後の祈禱を神にさげゝ給ふにさも似て、世にありとあらゆる森羅萬象、皆こゑをひそめ首うなだれて、永劫の別れに哀れを表すが如く思はれ、はては、波の音さへ、松風のこゑさへ何となう、しづみてきこゆ。

一呼一吸、日は漸く細く、僅かは眉の形してのこり、最後に近きかなしげなる光を名殘なく放つよと見るも、やがて瞬間其の大聖の祈禱をへて此度は淋しき笑みをたゝへつゝ靜かに天國に行くらむ樣して、全く沈みはてぬ。

我が友は常に我れに語りき、靈魂のやすらふ里は明くして、むくろの止まる所は暗かりきと、我れもしか思へるなり。されば、かくれ行く日の光をのぞむ每、魂魄はそのあとを慕ひて、かの紅の燃ゆるが如き夕の雲かなたに飛び去るなり。而して思ひき、かの雲のうちには定めて、運命の神のうるはしくて花の如き御かんばせに、ほゝゑみの雲たゞよはせつゝ、下界の人のをかしき業を見下し居給ふらむと。實にや、人の及ばぬ力に知り得べくもあらぬ黑暗々たる未來の路を、よろめきながらたどり行きつゝ、英雄なりとて空威を張り、豪傑なりとて驕を費り、美人なりとてなまめき、貴族、富者なりとて自ら奢り、學者なりとて高く構うることどもを、運命の神より見給ふ時は、兒戲にもまさりてあどげなう思ひ給ならむ。あはれ、人生の果敢なきこと、一にこゝに至れるなり。

されは、强しとて弱きものを苛責する者共よ、富みたりとて貧しき者を卑むる者共よ、須く運命を思へ。而して汝等が小さき望みの如何に甲斐なきわざなるかをさとれ。

さすれば、まがつ神の强きさいなみの手に捕へられ、日夜煩悶懊惱する

我が花の友垣も、暖き平和の光に浴してまがきのかたへにほゝゑむ梅花のごとく、浮世の人の花の一輪、そこにうれしさに咲き出でなむな。あゝ君、なつかしき君、美妙なる戀に心を傾け、忌はしきおのが身を顧みて、紅涙にむせぶ君よ、いざこの上は泣かざれ、泣かざれ、運命の神の業として何事も忘れたまへ、このまゝにして日夜すぐし給はむには、よしや、君の紅唇肉破れて、血汐にましろき齒をそめなすまで、口惜しく恨めしく思ひ給ふとも、瀧壺にうかぶ木の葉のそれにも似て、一轉又一轉、涙はいよゝ亂れ、身はいよゝ疲れ、遂には命失ふより外に得る所はなかるべし。

＊　＊　＊　＊

あゝおもしろき哉天地の樣、山は屹として聳ち、水は汪として漲る、飛鳥空をかすめて天窮まる所を知らず、長鯨波を蹴つて、てつくる時なし、花あり、鳥あり、草あり、木あり、天と地と、これを載せて蔽ひて時と共に轉々す。悠なるかな。悠なりとしたまはずや君。この間に生れ來る人、須らく運命を天地の樣に任すべし。强ひてさからひ、戰ひを求めて苦悶す、甲斐なきわざにあらずや。あゝ君と我れ、このおもしろき天地に、鳥に歌ひ、花に笑ひ、波に和し、風にさゝやきて、樂しくもうれしく、手とりかはして歩まばや。さらば、自然の御母はうつくしき御姿もて、我れ等二人をめでまさむ。

＊　＊　＊　＊



＊　＊　＊　＊

いつしか日はくれぬ。紫の光にかゞやく星ども、この世を見下して、戰ひになやめる子等をなぐさめ顔なり。こよひは月なし、幽闇のかげ、愁の色、我がかよわき身を惱ひ、初冬の寒む風、肌にしみて、筆持つ手のふるひ勝ちなり。いざ去らむ、母君待ちわび居たまふらむを、さらば、さらば、海よ、山よ、波よ、又來む夕は我が思ひの友となれ。さらば。（十一月十日、浪華なる花の友垣、松木浪子の君が哀れなる御姿をなぐさむる心起りて、其の夕、和歌の浦わのなぎさに立ちてしたゝむ。）

評　作者の詩才に富めるは、油々として岫を出づる雲の如き乎、其手に成れる抒情的の文は、詞華煥發、意想縱橫、其筆端毫も窘束せざるが如き風あり、眞に得難きの才筆也、もし此の如くにして、前途その文想の窮極するなくんば、造詣する所實に測知すべからざるものあらん、故に作者に注告したきは、今においてあまりに多作せんよりは、寧ろ多讀に努め、將來のために學問上の素養を怠ることなかれといふに在り。（日東）

母のおもかげ

赤間關市外濱町
金子方　五條橋春子

《地》

ひとゝせ冬の始めつかた、身にいさゝかの障りありければとて、ほど遠

からぬ蟠生の里に、とある家のはなれ座敷かりうけ、靜かに養ひつるこ
とありけり。
家より連れ來し、召使のおそてとなん云へる、五十路ちかき、氣の勝ち
たる婆のほか、誰かたらひの友どちもあらざるまゝ、たゞ二人四方山の
話などして、さびしきなかにもいとたのしう、ひとひふたびとかきくら
しつ。かゝりけるほどに、病ひ日毎おこたりゆきて、からだいと勝れけ
れば、近きうちに歸へるべきよしふるさとに音づれせし夜の、うたゝね
の夢に、十七とせの今日まだ、顔えしらぬ母上の尋れ來たまへるにあひ
ぬ。
とりあげ給ひしお姿の、やさしさ、うるはしさ、駿河なる三保の松原に
あもりにしと云ひ傳ふ、天津乙女のそれならぬも、筆にうつさんは長れ
なるばかりなり。靜かに絹の裳をさばきて、そばちかくあゆみよりたま
ひ、雪を欺く白妙の優しきかひなに、しかとわがやめるうなじまきて、
いたづきのさてもくるしからんと、薔薇の蕾の、しかも露ふくみたらん
とき唇もて、わが熱に乾ける頬のあたりをちゆと吸ひ給ひぬ。
あわやといふまもあらせず、お姿はあへなく消えて、わが目ははたとさ
めたり。
あまりのあやしさに、胸くるほしう覺えて、そのよしおそてにきかせば、
夢は五臟のわづらひにてさふらふとのみこたへて、あとはいはず。
そは餘りに罪おほからずや、語らひ給ひし君は今定かなられど、おん身
が常に戀ひ慕ひ給ふ母上は、おん身のいまだいとけなかりけるころ、さ
ゝやかのことよりして歸へり給ひ、今はおん身の家ちかきあたりにかし
づき給ひて、おん子さへあまだおはしぬ。とのやさしき詞の、今なほ耳
にのこりて、時々の思ひ出になるをかされて問ひかくれば、わが家のか
りの主なる伯母上は、よろづ心かたきおんかたにてはべれば、めしつか
ひの、なのこなごどもに、わが母のこと必ず口外すべからずと、いとく
いさしめおき給へるよし語りて、おそてはたゝ涙にぞくれたりける。
誰うらむとにはあらねど、いたくむねせまりて、その夜は常のごと、語
らひせず又おほくれむらで。松吹く峯のあらし、雨戸うつ小夜あられに。
山里の冬のわびしさを、一入深う感じけり。
明るあした、頭おもくてあがらず、からだいたくつかれたるやうにて、
歸へる期の、とはにうけがはれぬほどになりしぞうたてき。

評　筆致頗る老熟にして、輕婉なる文詞の間、趣味津々たるを見る、作者の如きは、勉めて文筆を修練せば、其造詣期して待つこと得べきか（日東）

菊を愛づる詞

伊勢宇治山田町
岡本藤田喜作方　島村艶子

《人》
秋もやう〳〵深ふなり行くまゝに、千草のうら枯れてもの淋しさいとゞ
まさり來て、庭もせにふりしきる霜さへいと白うなりぬるに、花ざまの
ことものにすぐれて、香ひまたなき花こそはありけれ、萩芒などは更ら
に、桔梗かるかや女郎花など、七草も遠くたぐうべくもあらず、そも此
花は春のはじめに生ひ初めてより、夏もすぎ、秋も露霜にからけずおじ
す、秋の名殘をとゞめていさぎよきこと限りなし、花は黄菊白菊さては
紅なる樺なるなど、八重に一重に咲きそろひ、色も濃かに香さへいと深
くして、いづれとも言ひがたけれど、強ひて品定めせば、黄菊白菊こそ
こよなき心地ぞせらるゝ。
さればかの東なる籬がもとにうゑおほして、世をのがれ初め名をとゞめ
し人さへあるに、皇國にても玉敷の平らの宮に愛で初め玉ひしより、今

にいたりては、いづこともなく植えもて來たり、いとぞ盛りになりたりにける、ましてやこの明けく治まれる大御代になりては、あやにかしこに九重の大御しるしに用ひさせ玉ひて、殊にたふときものとなりぬれば、世の人のめづるも理にこそ、さても畏きあたりにては、赤坂青山の御苑きて、春の頃より數多の花作りを召しつどひ、心をつくさせ玉ひて、花咲けば御幸ありて、やむごとなき司人たちに拜觀を許さるゝも、畏き雲井の花を見むことは、世の常の園とは事かはれば、自ら心をくるゝことにて、ましてやいやしき民草の、夢にもかなふべくもあらぬを、いかにかはせむ、されば人のけじめにかなひて、塵の世をさけて亭など設けて、ひれもすこの花に向ひ居る人もあらむも、大方のいやしき民草の中にては、齋所となむいへるほとりにて、この花をうゑおほし、さては、さま〲の姿、くさ〲の貌をよそほひ巧をつくし、都にて齋所と云へば、この花を思ひ、菊とし云へば、齋所を思はしめ、人の心をつどへさせ、物する人の車、さては馬車など、たえず往來きすときこえぬ。

今日は空もいとほがらかなれば、かの齋所となむへものせむはと、妹の云ふがまゝにしたがひて、午すぐる頃よりいでたちぬ、桂木池のほとりには、紙づくりの菊花をもてる珍客の引きも切らぬは、そのかへるさにやあらむ、やがて行きつくに、聞きしにたがはぬ人出にて、まことに廣くはあらむ道ながら、人もてきづける垣根の如くにも見えぬ、まづ百花園などいふにつきて見るに、流石は橐駝師が心とつくりなしたるかひありて、さがしき岨のさま白く漲りて、玉を散らさむばかりなる瀧、さては、俳優のいで立など、うつしえて艷なる衣粧のよそをひなど、たゞ友仙染の衣きたらむやうなるも、おのが心なるのみかは、されどこの草の心にはいかに思ひつらむ、わが思ふまゝに生ひもえで、只つくらるゝまゝにしたがひてぞいるなる、これぞ彼の不具なる猿を見て、おのがめでつる小松など、人にとらせしと云ふ大臣にみせなば、そのなげきいかならむ、さても花はすべておのが姿と咲きいでたるぞめでたけれ、かくよしなき言を思ひつゞくるほどに、短き頃とて日のやう〱かたぶきぬるに、うちおどろかされ、餘におしき別れをして家にこそかへりしか。

評　數多き花の中にても、菊の花ばかり、ゆかしく、またすぐれたるものはあらじ、されば、この花をめづる人多きも、げに理りにこそ、この文、其愛づるこゝろを描きて妙、文意兩ながら氣品のたかきを見る也、（日東）

◉またるゝもの　すみれ女

〔秀〕

都の君たち、またるゝものは何、春は上野の花、秋はもみぢの消息ならめ、京の子、優なる洛陽の空に、なもひまつは何、必ずや嵐山栂尾のながめなるらんを、こゝとほき山家のあふくれ、まことや朝に夕にまつものとては外ならず、雁のたよりのおとづれなりけり。

都の友より新婚のしらせありつる夕よ、たゞうるはしき妹脊のかたらひ玉椿八千代の末かけてと祈り、そが偕老ちぎりし人の、いかなる御方ならんなど、怪しき想像に耽る折しも、金色の雲、西よりたちて、つゝましげなる玉章、天津使も見給ふやうなり、この春祝言ありつる人の、霜月上旬某の日、初めての手柄に、男の子まうけし由、母なる人よりたよりありつるは、さすがにまたざりしこの消息、身重の事知りたらんには、如何ばかりまちけんものを。

さても日々の新聞、縣下の信濃毎日は更らなり、都よりの萬朝報、木曜日毎の短篇おもしろくて、くれゆく秋も寂しからず、五日の明星、これ

は十日頃ならでは屆かず、女學世界もまた發行日は明星と等しけれどいつも十二日十三日に見ゆるを常とす、取りつけの雜誌店より十四日に持參の事もあり、又時としては其月のをおくらぬさへありて、まちあこがるゝはそも幾度、新聲亦下旬ならではよむ事叶はじ、何も〳〵遲るゝなつれの山里は、おのが身も亦世にいたくおくれゆくらんと歎かはし。

こなたより折にふれ、あはれは萩薄の上にもかばりて、拙なき歌の二つ三つ、露に筆ふくませて、さる方へおくりしを、けふは優しき返事のあらん、あすこそはとまつにいつしか一月もたちて、やゝ忘るゝ頃、さすがに惡くからぬ筆のあとゝはいへ、しかも葉書の走書、夫の君諸共、さる溫泉に旅行の不在中なりしとは、しかもこの人文才のほまれ高かりしを、あられ歌一つもなかりしよ。

君の御寶みせ給へこなたのも鄙びたる風情恥かしけれど、さる友のもとへおくりしより幾日經て、愛らしきちごの寫眞、母君がやさしき御筆と共にみし折のうれしさ、眼許口許は友に其儘、さては太眉の凜乎として髮の毛のいとあつきは、まだ見ぬ友が夫の君に似たるらん、またれし我嬉しうて、其日配達のものに、園の柿など數多つかはしぬ。今更いふも愚なれど、こゝ三十年の昔ならんには、碓氷の險阻越ゆるに日數かゝりて、小さき〳〵心のまこと通ひ通ふまじきを、文明の世、まことに謝すべきいたりにこそ、さばれ聊かの紙と筆、印紙の一枚あるありて、そこかしこへの文通自在なるらんを、女は友情ともしくてや、山里の我がおもひ參らする半ばも、都の友はおもはぬなりけり、まなびし文字、まなびし歌、いかに彼等は用ふるらむ、夫の君にやあらゆる正誠棒げ給ふてのゆゑか、お子の愛にむかしの友垣はすれつるか、むべ都には秋なほ春のよそほひあり、冬猶花の見るべきさりて、內外の歡樂つきず、たのしきたのしきあけくれ、山莊の朝夕とは大に趣きを異にすべければなるべし。

北信の秋よ、すゝきに露いとしげく、野分に萩の早く散りけるを、今は紅葉さへ冬の寬崖にいそぎゆく風情、わけてもことしの秋は雨多く、春雨五月雨大かたいぶせかりしを、しかも猶花に望、靑葉になさけはありぬ、きのふけふの秋雨よ、初冬の先驅にして、これたゞ雪の宣告なり、北信雪ふかし丈餘に及ぶ、くらき軒、くらき小座敷にわれ何をかまたん、ひとへにまたるゝものは、新聞雜誌なり、郵便脚夫のよびごゑなり、まして友の消息、わけても〳〵こたへ給はるべき返しごとになん。

評　いつもながらの才筆、筆路は暢達なれど、稍々蕪雜になりたるが如し、文に忠實なるをば、終始忘るゝこと莫れ、（日　東）

◉晚秋の山ぶみ

（秀）　みちのくの里　杜陵茂子

匂ひやかなる大空の氣もとゞめて、耳なるゝ軒端の鳥の音もそゞろ人を誘ひ顏なるを、如何でけふの休日、本意あるさまにあくがれ遊ばなんと思ひつゝ、晝すぐるまでも家にとぢこもりて、つれ〴〵とかこちむづかれる折しも、隣なる兄君きまして、晚秋の面影たづれつゝ奧山なる友のいほり訪はばやと思ふを、共に連れ立たずやとそゝのかしたまふに、思ほへぬ幸とり出てたる心地してうれしく勇み立ちぬ。一行はゑたしき限り四人にぞありける。

柿の實の花を見まがふ人里のあたりは早や疾くすぎて、やう〳〵つま先あふぐ山路にさしかゝりぬ。見渡せば、紅葉の衣よそほへる山また山、幾重おかしく連り立ち、森のたゞずまゐ、木立のすがた、奇巖の置き所など步々幽邃の趣うちそへて、落葉聲ある秋の山ぶみ、鹿のなく音もゑのばれてなん。

かつて初秋のやさしき姿いろどりて、美しき蟲の宿たりし七草の花むしろも、今はつめたき霜の床となりはてゝ、それとだにあはれをとはん名残りさへ止めぬを、薄のみぞひとり老ぼれて、穂に出てし昔忍び顔にうちよろぼひ立ちて、山風におのゝげる樣、さすがに淋しき秋のくれや。若きどち思のまゝの物語にうち興じつゝ、歩みゆく足の疲も更に覺えで、わけ進む山の變化の面白さよ。忽にしてゑがくなる千種の繪卷を。かの山のすそもと、溪間あやうく渡せる土橋の所、わざとこしらひ置かれたるが如き茅屋の二つ三つのおもむきある、かしこの野路ゆく手の背を塵としめて罪なげにうたひ行く童ののどけさなど、いづれ塵をはなれしものにやはあらぬ。ゆくまゝに染めなせる木々の梢もいよゝ光そへて覺ゆるに色かえぬ緑を所々にまじへたる、さなから織りなせる錦と見えて、春の花も及びなくやとまでながめらる。源々たる溪流の音、脚下ふかく微かにせゝらぐもなつかしく、集まりて瀧つせくれるなど夏ならねどなほうれしく心とゞめらるゝあたり、眞白にけづられたる崖おかしう高く仰がれたるに、殊にいろこき紅葉の一本さまおもしろうはひのぼりて、かたはらに常盤の松おどり落ちんとしたる樣、山景の粹も茲に至りてきはまれり。かふまでめでたき玉の世にもかくれけるよと、かたみにほめたゝえあへるに、繪に堪能なる君の殊にすてがたうちかたぶきて、立たまく惜しふせらるゝも理りや。已れもいかで一句などすゝめられけれど、中々此幽味なけがさんに詩神のとがめ恐ろしくてうち止みぬ。たづなとりて來る馬子の目なれぬ吾等の樣をあやしみとがむるに道とへば、質朴なる田舍翁のにこ〳〵と笑のくぼみかせて、したり顔にも細々をしへくれ、なほもかなたの聳れる山の上指して、あれこそ舊幕の頃の何々樣の御館なりけるなど問はず談りまでするも、裏なき心のほど見えてられし。

名も知らぬ鳥の聲のかなたこなた木傳ふをきくにも、いよゝ深山に入りぬるもしるく、登りてはくだりまた登る山坂の險しさやう〳〵つらく覺えて、兎角姿のおくれ勝なるをあはれやとて、友なる君のかたへの木の枝折りて杖にたまふをよすがにすがり行けば、今より麵の稽古やなどはやし笑ひたまふも暫し疲忘るゝ心地ぞすなる、年わかき君は知らぬ顔にも空むきて唱歌など高らかにうたひつゝ早うさき立ち給ふぞねたしや。あいぐ喉もいみじふ渇きて覺ふるに路傍の藪にとり殘されたる葡萄の、枯葉がくれにさしのぞきたるもうれしく、あなやといひざま爭ひ走りてとりなどするも、吾ながら年の三つ四つもなげすてたる心地するや。ゆき〳〵て日脚も山の端近くなるに、ほそみちいよゝかすかなり。天地もいたくせまくなりて空も近き心地するに吾足下幾仭のそこに犬のほゆる聲するは、そこにもまた人の家居はあるにや。やう〳〵米つく音などもれて、賤が男のうた耳近くなり、三里の山坂こゝに越えはてゝ、いきかへる心地して友の家につきぬ。

評　才筆といふにあらねど、詞づかひ流麗にして、また見立つほどの癖もなし、只その缺點は、自然の風趣を描くに勉めずして、いたずらに、不自然的なる文句をならべ、古來慣用の文想を踏襲したるが如き痕、歴々として見ゆるに在り、（日東）

消息文

◎白菊に添へて病める人の許に

信州　すみ子

《天》

くれゆく秋の空、ものあはぬ身も何となう涙ぐまれ候を、ましてながき夜すがら、御ねがへりがちの御枕べに、朦朧としてうつるは、誰が御姿

なるらん、昔々うせ給ひし父様が、君が花の面影さかりならんとするをあとにのこし給ひし母上のそれか、ある夜の夢まぼろしは或はさもありなん、今はなか〳〵推しまつるわが袂まづつゆけくて、ひろき野原にたゝずむやうおもはれ申候。ゆるし給へ、七七の御佛事もはてしけふこの頃、やゝわすれんとし給ふを、またおろかなる我の、御歎くりかへし參らすることよ、さりながら、わすれ草わすれかれ給ひて、フォールゲットミーナットのやさしき小草、御まくらべの小がめにまだ〳〵にほふらんと推し參らせ候、十年の御かたらひ御宿世の目出度かりしは、我も人も御うらやみ參らしゝものを、あはれ長生殿裡、春の夜の夢、終なきにしも非ず、不老門外の花、また枯るゝときありてか、今もむかしもうらみ多きは世のならひ、君ひとりにせまりたる悲痛に候はぬを、少しは御あきらめ遊して、折りふし參上のせつ、うつくしきみかほに涙かくし給へや、御上なるはいまだ七つの孃様、ぼつちやまは漸う三つの、父様の御名、おぼつかなげに御よび遊しゝほどの御よはひにて候を、もし母御の御前に、悲しき事のありもせば、この君たちを何とし給ふらむ、忍ぶべきはこゝなり、おもふさま泣き、おもふさま、なき人したひて同じ烟にもとおぼしめすかは知られど、つよき〳〵愛のきづな、母上〳〵と右より左より、いひより給ふ御子達によろづは御なぐさめ遊して、あすは早や〳〵藥を無益のものとし給ふやう、今世に時めく博士學士の御診斷も、心からの御病には功あるまじく存じられ候。

ことしは霜ふる事のいと遲く、菊もおもひの外にほひこまやかにて、ひとりながめんは口惜しう、今朝つゆの儘二枝三枝手折り候まゝ、なき御人がことはも白をこのませ給ひしをゆかりに、わざと赤、黄、なるは省きて、これのみつぼみ數多もちたるをも添へ、御目にかけまゐらせ候、御靈前に御手づから御備ひ遊ばすやう、さらば方様在天のみたまははほゝゑみてうけ給ふらん。さて靈はむらさきの雲たつかた、夜はあかき星の中におはしますやうおもはれて、御在世の折御かきながし給ひし御うた共、今更あはれにもうれしくも拜見いたされ候を、ましてよろづを解し得たまひし君の、なか〳〵涙の種なるらんと存候、あはれ死とはいかなる意味のものに候や、世一世、人と人、同じ歎きをくりかへして、而かもいまだ盡きず、かくいふ我への死の使、こよひや來る明日やはくる、紅顏の美少年やがて白骨となり、絕世の佳人一片と烟と化せ去る世のさだめ、到底一たびはなげきなげかるゝの次第と存じ申候、君もこの理を御さとり遊して、あすは夜の御床よいでさせおはしませ、くれゆく空、また見所多く、そこゝ立てる枯尾花にも、ちりゆくもみぢばにも秋の名ごりのとゞまりて、見すてがたなの世の風景、こゝらゐなかの山川も、いさゝか御こゝろなぐさめ參らするやも知れず、例の手製のそばなど御口にかけん、嘗てはいと拙かりしが昨今の上達、ところの人をも驚かすばかりにて候を、御ふたかたおつれ遊して、御いでたまはり度、その折よ、まのあたり再びいろ〳〵申上ん、その折よ、例の白菊御みづから御手折遊して、とほき〳〵戀人に率らせ給へ、さらば方様ほゝゑみて、再び下界にくだりましまさんか、必ず〳〵御入りのほどまち上參らせ候、

かしこ

評　さら〳〵と書き流がしたる筆のあと、凡を拔くこと幾等、まして文詞の間に、趣味津々として橫溢せるをや、書翰も此に至りて、上達の域に入れるものといふべき乎、（日東）

◉離緣せんとする妹の許に

日本橋　生方ひて子

《地》

文して申上まゐらせ候追々寒さ相增ゆき候折柄、御許様始め御家内御一

統如何御暮しなされ候哉何上候、何事につけても身躰の丈夫なるが第一に候故折角御養生なさるべく候。偖其許縁ずかれ候てより早や年餘りに相成、四海波静にと舞ひ納めたる高砂の曲の尾上の松の相生のみどり、いやこまかく御暮しなさるゝことゝばかり存居候處昨日母上より御手紙にて承れば御家内何となく圓からで角芽たつ葦の葉風の縺合も少なからず、母には忌はしき話なさへ持出され候由、一方ならず驚き入申候、すべて内輪の縺れあひなど云ふものは池の面の小波と、ひとしく絶へずありとは見ゆれども、ゆゝしきものには御座なく候。なる程姑御樣は人並勝れて才利きたる御方と聞けば、足らぬ勝の御身の一より十迄氣に召さむ樣なきは今更知り得たる事にも有る間敷、すてにそな知りたらんには只々忍を凝らして仕へはべるが御身の勤め、如何に我儘強き御方とて何時かは挫け折れ給はるべく、柔能く剛を制すと云ふ程の心よく／＼思ひ究めらるべく候。また、夫殿のつれなしと云ふも、そは深き根ざしあるには有らざるべく、全く會社の方の思ふまゝにならぬより常より御酒（ごしゅ）も過させ、外遊（そとあそび）も繁くなり給ひしを其許の澁面つくりて死や角と申せしより起りし事と察せられ候、かゝる折柄圓からぬ事など云ひ出て候ては、波風いよ／＼荒れて相生の松は名のみにて鴛鴦の契りも破れ候はゞ、またつぎ合すべき由なくなり行き申すべく、後に至りて何として彼の時、あのやうに心短かゝりしか、さまでせぬもすみしものをなど悔ゆるが大方の常に候が、一度覆したる水は再びもとの盆にかへらずとか申され候へば、唯々女の身の何事も辛抱が肝要に御座候、されば元に柔順なるべき身を一入優しくして勤め事づき給へば、鬼の目にも涙はあるのたとへ、風に裏返れる葛の葉のまた元の如くに直る日も有之べく候、氣に入らぬ風もあらうに柳かな、先づ／＼巳が心を練り氣を鎮め、ならぬかん忍、するが御身の得策と母上も仰せられ候、何れ近きうちに里方に參るべく候間、其節御身にも何とか御都合なされ御目もじの上細々御噺し申可ければ委細は其折にと申殘しまゐらせ候、其節柄炎々も身躰を大事に、物事には細かく御注意なさるべく候、あら／＼かしく、



評　文詞婉曲にして、注告の意徹せるが如し、（日東）

◉遠方の友に同窓の消息を報する文

《人》　茨城縣　山口すみ子

青葉しげれる西子岡にて、涙のうちにおしき袂を別ちまゐらせしは、昨日の如くおぼへ候ひしに、いつしか夏と過ぎ秋と暮らして、早や二年の長き夢とは相成候りぬ、御別れ申せしよりは、花につけ月につけ、物思ひなき世の春、樂しき園に袖ふりあへて遊びたはぶれ、胡蝶の夢のそのかげを慕ひめぐりし事ども、何やかと思ひ出されて、日毎々々、御地の空のみなつかしく、君こひしさのいとゞやるかたなくぞ侍りしが、時折々の御玉章にせめては心を慰め居申候。さ

るにても、露しげく霜おきそめて吹く風いと物寒き此頃、御許樣には如何に過させ給ふらん、御氣色きかまほしうてなん。次に此方一同事なく暮し居候まゝ御安心下され度候。

さて昨日、西川花子の君がりおとづれ申候ひしに、清川富子の君、坂本露子の君の、內くりなふおはし給ひて、嬉しき事樂しき事面白き事ども、かたみに語り合ひつゝ、數草つみし園の樂しかりし昔をくりかへすにつけ、あはれ御許樣のおはし給はゞ猶一しほ樂しかりし事ならめと、いといゝ物足らぬ心地ぞし侍りぬ。夜會まき好み給ひし露子の君は、いつの間にか丸髷の姿世なれて、みどり兒さへ抱きておはし給ひぬ、富子の君は今猶學びの奧を極めむと、日每々々學びの園に行き通ひ、螢雪の功を積みて屈せず撓まず一意專心いそしみはげみゐ給へりと承り、我身の申斐なさ今更にうち恥しく感ぜられ申候。其他とり〴〵に昔の君樣の珍らしき事ども承り侍りぬ、さるにても人の世の運命は中々思ひはかられざる事に候よ、彼の校中の花ともたゝえられて、御容色殊にうるはしかりし橫田淺子の君は、昨年さる名家に嫁き給へしとか、さるにうたてや、我身の美はほこりてそれが爲家のうちとかく睦しからず、遂に先月御離緣に相成候よし、實に淺ましく歎かはしう存じ申候。また、情深く溫和なりし山田とも子の君は、語るも淚の種に侍れど、あはれ人の世のうき悲しさはのがれずと見え、杖柱とも賴みまゐらせし夫の君の行正しからで、日每夜每小さき胸をいたく惱ませ給ひしとか、さるを雄々しくも色かへぬ松の操になちひて、誠心こめ力の及ぶ限り諫めまゐらせしが、されどそは仇にて、猶一しほ露けき袖をぬらしにぬらし添えつゝ胸の時雨のいつ晴るべきとも見え給はざりしが、遂に果敢なき思ひの積りて、朝の露と消へ失せ給ひしと、露子の君の淚ながらの御物語に候、きく人語る人ともども、せきくる淚とゞめ難くてしとゞに袖をぬらし申候。それに引かへ、時田かれ子の君は圓滿なる家庭に嫁き給ひて、妹脊の御かたらひめでたく今は早や御子さへ設けられて、世を面白う過させ給ふよしに候、御許樣にも幸深う、美しき家庭に嫁き給ひし事故、此上は只々、愛着の御きづな、早う設けさせ給はん事をのみ祈り申候。

同じ學びの園に生立しやまと撫子、色さま〴〵に咲き亂れ、拙き筆には中々にかきつくすべふも候はれねは、餘はゆる〴〵と後なる天の使に事傳侍らむ、あなかしく。

評　筆にれれぬ痕もあれど、その報ぜんとする消息は、細大洩らさゞるが如し、（日東）

雜文

◎田舍の冬

佐藤源子

『なきあかす秋のわかれの袖のつゆ、霜のそむすへ冬や來ぬらむ』。あはれ今年も秋はや過ぎて冬とはなりぬ。見渡せば野邊には霜白う置き渡して、見るめだになき枯尾花がもとに、秋になくれしこほろぎの聲かれがれなり。紅葉の錦もやゝうつろひそめて、木々の梢やう〳〵まばらに、吹く風そゞろに身に泌みて寒さ次第にきびしうなりぬ。まこと冬枯のあはれのいづこはあれど、わきて人目も草もと云ひけむ、田舍の景色こそひとしほ哀れなれ。麥蒔の手わざやう〳〵終へて、これより冬籠せむとするもあはれなり、世を隔てたらむ心地せらるゝも、げに所がらなりや。訪ふ人もなき柴のとぼそも峯の松風絶へず訪づれて、時雨にまじる落葉の軒端叩く音いと寒げなり。ふりみふらずみ定めなき

村しぐれもやみぬれば日やゝ暖かなるものから、ゐかひ睡してつゞれさす縕のたへに打臥す小猫さへなほ小春の日盛は戀しかるらんなど思はるゝも可笑しう。いつしかも日數かさぬる程にやがて木殺風はげしう吹きたつれば落葉雨の如く降り梢あらはに山はみながら瘠せはてゝこちゝゝしき岩が根のけはひの見ゆるにつけても、ゆくりなく常なき浮世の慘なさ覺ゆるぞ物憂き限りなるに、なにがし法師の『人木石にあられば時にとりて物に感ずるとなきにあらず』といひなかれけむ言の葉もそゞろに思ひ出でらるゝよ。

あけくれの眺め斗りははれなるはあらじ、峯の炭がま木の間にけぶるあした、霰まどうつ夕べはさらなり。夜空しき枝にすまめる木がらしなやみて旭陸ゆくさし出でたる空に小鳥の聲も絕えて、見渡せば荒れはてし門田の畦に倒れたるそぼつ、茅もてふける屋根、道のべにちりぼひたる藁ども、さては野末ましろに置き渡したる霜の朝、落葉に埋もれて音たえぐなるやり水よりけふりのたつこそあはれなれ。

門べに老いたる柿の木の、枝ぶりくれりてなかしげなるに聲細く夕べ告ぐるに何鳥ならん。日は落ちて紅の雲はた手のやうに流れたる、西の方より三つ四つ二つ飛び來るに、親鳥も交りけむ、子もその群に入り諸共に鳴きつれつ飛びて行手の松原より薄う立ちのぼる夕烟とほして入相の鐘の音の常よりも近う響きたる、いたく身に泌みてふと空見あぐれば一と本淋しげなる杉の梢に氷れる如き片破月のかゝりたるけはひ、云ひしらずけのすごし。

さても冬深ふなりゆけば雪のけしきこそこよなうなかしけれ。昨日迄遠山にのみ眺めしものも庭白妙にふりつもればいぶせき伏家さへ玉のうてなとまがひ、あらはける梢にも一夜のうちに匂はぬ花の咲き出てたるなどそのながめたとしへなしや。まいて風なく雲なく見る人もなき月影の冴え渡りたる夕べ、白銀の光も殊更さやかなるなど、つたなき水茎にはかきつくすべうもあらず。げにや雪と月とのうれしきけしきに冬枯のさびしさ忘らるゝともありしか。

そも日頃北風激しう、雪を飛ばすことたえれば筧の水も凍りやしけむ音もなく、雀どもの餌失ひて軒近くかしましう囀るも、またあはれにかなしうなむ。

折しもあれ彼方の山陸に銃の音すさまじうなりひゞく、こや雪に苦しむ雉子兎など狩らむとてのかり人がすさびなるらむ。いと心うし。

さはれ、ひつぎ雪いみじう降りつゞきて戸出づるともかたければ門の戸深くとさし、獨り埋火の下に見ぬ世の友を訪ひなどしてつれにたれこめがちなるものからさすがにくれゆく歲の名殘の惜まるれど、やがて又こむ春のたのしさくり返さるゝも世の人心の常なりや。あなあはれ。

評　文の修練は勉めたるが如きも、尙ほ幼稚なる姿態あるを免かれず、言はゞ想なさに强いて佳語を駢べたるが如き病あり、作者の如きは想の涵養を爲すこそ先務なれ、さりがなら、田舍の冬の風趣の一部分は描き出だされたり、(日東)

◉袖あふ緣

大阪　井上清子

あはれなつかし故鄕の、落英の下に歎ひし花の友垣といふもの、すべて幾人かありけん、ことしの春の里かへりに、燭を剪つて巴山の夜雨舊交をつながんとするも、皆いつくへか去りてよしなし。學び舍に幾とせの螢雪をつみたる學びの友は、元數まへられぬ許りなるに、去るものは日々うとく今は小路の道ゆくふりにも、知らぬさまさへしてつれなく行き

過ぐもの多かり。かゝる習はしの世にありて、故郷を同じうするとにもあらず、はた一そうのゆかりあるにもあらぬに、袖あふも深きえにし、たゞかりそめにあふて、相見るやがて懐かしく慕はしく、かたみに宿世ゆかしく友と契りて睦みかはし、別れては雨のふる夜、風の晨、なほその人を忘るあたはず、あはれ人の心のかくばりあつかりける、わが世に幾りばくの慰めと樂しみとを與へしぞや。

數まふれば三とせばかりの昔なりけむ、東の都の博文館より少年文集といふ出でしころ、おのれ拙き文などつゞりて投書したるが、いかなれば色も香もなきわがふみを見出し給ひけむ、雲の八重垣とぢこめて幾山川を隔つるところより、一ひらの玉章にことよせて、交りを求めらるゝ人は數多あれど、概れは色さめやすめ心の花の、うつろひはつるはつれなる中にも、和文の投書したまひて優に妙なる筆のほまれ高かりし石神ふき子の君とは、われ初めより見知りしにはあらざれど、ところを東の方山川遙か隔てたれど、隔てなき心の奥には行燕歸雁に言をよせて、たけにあまる玉章の中には、われと齡を同うし嗜好をも同うし給ふことも知られつ、面影はかたみにとりかわす給すがたの上に浮び出てゝなかしく、若し都にてめぐりあふこともはべらばなんどたのみつゝありしに、三十年の菊月なかばかの君よ消文して、こたび父君事につきて大阪の方に下り給ふにしたかひて、今朝出立の用意そこ〳〵いつまでには必ずその地に着かむなど、事細かに書きしるしたまへり、妾は世の中狹く暮し來し身の未だ頼もしき友との交りを知らねば、今かゝる方と交りを結びて親しう往來の出來んには、其樂しみ如何ばかりなるらむと、嬉しさに夢心地して車をとばしかの君が旅の宿を音なひぬ、いかにして物いひ出ましとうれしくて胸ふたがるに、出むかへくれしは日頃慕ひまゐらせて、わが心にゑがきしにたがはぬ優姿の、かの君にてありき、來しよしないへばよろこびみちびきて、われにあるじもうけさせたまふ、互に語るより先づ涙ぐみて、年久しう知れる人に逢ひし心地せられぬ、友垣の結びわれをば姉としも頼まなんど互にわすれまじういひかはし、往來のいとしげくなりきてわれにはかのうさといふもの少しもなく月日を樂しう暮しゝが、世は芦分船のさはりのみ多かるべくして、われはその後背の君の事にかゝつらひて、東の都にうつりすむことゝなり、山川遠く隔てかつ事繁くて久しうえあふまじけれども、ふき子の君には永く大阪の地にとゞまり給ふことゝなりしよし、通ふ心づくしの玉づさに書き添へ給へり、あはれ旅路のそらに君を思ふてよな〳〵夢は通ひぬ、ふるさとのしのぶの秋のみだれに病み臥せし枕に、君が玉づさをえて慰さめつ、造幣局の櫻狩、高津の菊見、わが宿の雪の日、いかに樂しかりしよ、その折の事今もなほ思ひ出し給ふや、わすれかたくてなん。

評　處を隔てゝ、親友を想ふの情を逃べたるもの、人をして同感を催さしむるも、只文章の未だ至らさるを憾む、（日東）

◉思出の記

越後　江部謙子

明治三十四年十月二十あまり四日の夜、妾は聽潮閣の欄干により、清き空の明なる月影にむかひて、夜もすから泣きくらしき。この夜は、陰暦九月十三夜なり、この欄干は、去年の今夜、兄上と共におなしくこの明月をめてたりしところなり、されど、今や兄上は、かへらぬ旅路につかせられ、梓弓世になき數に入り給ひにき、實に哀しく頼りなきは浮世なるかな、

つら〳〵おもひつゞくれば、ひろき天地の間に、妾か胸の琴は、むれをはなれし鴈がれのたくひなき寂しき響ぞすなる、ひてや殘むのともし火かばあけて、さいつ年の夜ありし事ともかきつゞけ、せめてもの心やりともなきなまし、心むつかしうみだれたれば、日頃擱き筆の一しほにぶりて、たゞ涙のみぞいやまさりたる、

おもふ、いぬる年の今月今夜兄上に從へて、この欄干により、淨きつめたき月の光をあびて、いろ〳〵の物語に夜をふかし侍りき、その夜は、大空高く晴れわたり、また一ひらの雲だに見えず、久方の月は、新に磨きあげたるますみの鏡をかけたらむやうにて、美しさ例へむものなく、一瀉の風露輕く衣襟にそゝぎ、心何となうすが〳〵しくなりもてゆき、また塵の世に在りとは思はさりき、信濃の長江は溶溶として欄下を流れ、琥璃よりもみどりなり、その靜かなるときは、白玉を沈めたらむか如く、その波たつときは、忽ち黄金を散らすかとぞ疑はれし、草や木や、山や川や田野や市街や、天地間のありとあるものは、見わたす限り皆この微妙なる月光に閉ぢこめられ、春の夜の夢よりもいと淡かり、鴈がれの二聲三聲、櫓聲とともに忽ち渺茫の間におちゆけるなむ、と、また一しほの興をぞ添へける、

妾は、この玲瓏玉の如く、窈窕女神の如き、明月にむかひて、幽渺の感にうたれ、暫しの程は、恍惚として何事もえいはれさりき、兄上もまたおなじく情に堪へ給はざるが如かりしが、やゝありて、嘆美の聲をもらし給ひけらく、あゝ美しきかな今宵の月や、實に古より美しきものゝ例へにも月花とぞいふめる、さばれ、まことに明月の美しきことを讃ふるにふさはしき言の葉は、この世には幾許もあらざらむ、恨むべきはかの詩人の筆の短きことにぞあると、かくて、夕月夜の美しき事について、いとつばらに說き給ひつれと、その旨の深かりしため、ざえ淺き妾には、うち傾かるゝ節のみぞ多かりける、

やがて話は進みて懐郷の情に移りぬ、この時兄上は故郷を出て給ひしより、一領の靑衫已に五歲をけみし給ひき、妾はこの地に來りて、未だ年の半だに滿たざりしも、故郷を戀ふる情に至りては、兄上のそれよりも切なりしならむ、兄上のたまはく、人誰か故郷を戀ひ慕はさるものやある、老いたるも幼きも盛なるも衰ひたるも、故郷てふ言葉には、多少の愉快を覺えざるはあらじ、胡馬北の風に嘶き、越鳥みんなみの枝に巣ふ、心なの鳥獸に於てする然り、兩行の涙を添へて、故郷に向ふて流さなむと、古の人の歌へりしも、なべての人の思ぞや、ことに人は光まばゆき日中よりも、ぬば玉の闇夜よりも、一しほ故郷を偲ふこと切なるは、皎々たる明月の夜にこそあむなれ、

牀前に明月を見る　疑ふらくはこれ地上の霜か
頭を擧けて山月を望み　頭を低れて故郷を思ふ

この時この情豈獨り李白のみなるべきやは、あゝこれ微妙なる月夜の美感とえもいひがたき望郷の快感と相あひて然るにやあらむ、とて、月夜と懐郷の情とにつき、なほくはしう說き出てられける、

又兄上はいたく唐歌を好ませられ、講習の餘、常に吟哦を絕ち給はさりき、もとも錢塘の詩人袁子才が淮上中秋對月の七律をめでさせられ、をりふし打ち誦させ給ひしが、この夜もまた欄干によりて、ほがらかに吟じ出てられつ、そのたへなる聲、今なほ耳の底に響く心地ぞすなり、詩にいふ、

長淮波冷にして碧雲殘れり　皎々たり空に當れる白玉盤
四海共に此夕の好きことを傳ふれとも八年故郷にありて見す
銀河影あり秋心老い　仙路聲なく鴈背寒し
建業の風情京國の夢　一時酒に和して肩端に上りぬ

と、あゝ、舟江の秋色は、長淮のそれに讓ることなかるべく、空に當れる明月は、とこしへに、むかしにかはらざるなり、今宵の明月は、中秋

の月にあらざるも、そのかみ長滙のほとり子才の詠に上りたる月なり、今宵の明月は、四海共にめでそやして、歌に詠じ詩に入るゝ人は多かんめれど、またこの欄干によりて、妾とともに月夜の美しきを說き給へる兄上はゐまさぬなり、水の流るゝ、山の峙てる、さては秋の景色や、鷗かれの聲や、ともにむかしにかはられど、獨りおなじからさるは、妾の心にぞある、實にかなしく賴りなきは浮世なるかな、夜もいたうふけわたりぬ、千草にすたく蟲の聲もやう〳〵絕え〳〵になりぬ、澄みわたれる月影もいとゞおぼろにうすらぎゆきつ、浮き雲のかゝれるにや、あらず〳〵わが眼の淚にうるほひたればなり、

◉寫眞に添へて送る

下總　郡司文子

雲井をわたる雁の一つら、いづくをやおとなふらむ。さても物ごとに、哀れを催されつる此の折から、君には如何ますらん。御さう伺ひまゐらするよ。身共は昔ながらの山櫻、いとすくよかに侍れば、例とのみおぼされ給ひね。大學の科程を背負はせらるゝこと、其の御勞きの程は、左社と推し參る。それと違ひ、こちにては心安う、春の草摘み、秋の茵狩り、何のくれのと、田舍にも田舍の樂みあれば、おもしろく暮しゐ侍り。

名殘を惜ませられし當地の風景、近頃の趣は、拙なき筆にて寫さるべうもおぼえす。かの向ひ村の桑岡には、此程大いなる製糸場を設けられたれば、一の風致を加味しぬ。又ステーションとの間に帆船も通ひそめ、馬車も人車もしげくなりたれば、文明の姿を郵便集配夫にのみ見し頃とは、いたう變りぬるよ。

妾等が樂しき昔の夢の枕なる、後ろの臺にはこれまた、小學校を新設せられぬ。去にし遊びの庭に手をとりつゝありし折、よく其の下にて鞠を弄び、鬮をまはしなどして戯れし、忘れがたなき彼の櫻は之に移されて、今も尙生徒等に愛せられあり。共に傘となして、炎帝樣のお睨みを避けつゝ、文どもありし臺の松は、今その門前に千代の色を示して、いと靜かにあり。直ぐ上のことゝて、もの讀むこゑ、遊戯の樣など見聞きせられて、すゞろ昔のしのばれてなむ。あゝ樂しき追懷ほど嬉しきはなかるべくや。おのれはこの思ひ出の料を、一寸とむるまでなれど、君にはそを多く畜へられつゝあること、誠に羨ましさにえ堪へずよ。かの師範學校に入れりし照子の君は、本年業を卒へて、當地の小學校に鞭をとりゐ給へば、かたみに訪ひつゝ君のことなど語り合へり。

かく友はいはてものこと、野も山も文明の空氣通ひて、日に〳〵あらたになりもて行くに、おのれひとり時に後れやせむとばかり思ひ煩ひては、はらわたに回らん心地なむせらるゝ。仄かに通ふ欸乃も、千代の調べかはる松が枝鳴らす風の音色も、轉た我が胸の琴線に響いて、悲哀の曲ぞ奏でらるゝ。田園生活の趣味てふ御持說もさることながら、人は畢竟經歴をもとむる動物にや。おのれのごと、未だ浮世のうひ旅ものには、中々にこれやりて見ばやと思ふことも多かり。こは男も女もけぢめあるまじとや。さるはつゝましからぬ云ひ分の樣なめれど、おぞきおのれとて、却て都の塵のゆかしうて〳〵堪へぞえられぬ。かく胸の程聞え上げ侍るを、かまへてよしなしごとゝな思召されそ。今の處これのみが心遣りにてあればよ。されば二なう嬉しきは、君よりのみ消息になん侍る。いかで學びやのさま、近頃の御感想など、くさ〴〵もらし給へや。さりや友睦ましき一と連の鷗、やがて我が門田におちむ時を、早う〳〵とのみ待ちわびんかな。

別にまめちせし寫眞は、一つは新築の學校、外一つはかれてより戀しと仰せらるゝ、故里の臺にし侍れば、よく〳〵御覽あられまほしうてこそ。かしこ。

◉懸賞和歌兼題

立春（一月分）〆切十二月十日

新婚（同）同

（天、地、人、秀逸十種を選び金壹圓以下の圖書切符を呈す）

投稿用紙は必ず端書を用ゐること

◉懸賞文（文題隨意）

◎國文◎普通文◎小說

◎消息文◎新體詩

（甲、乙、丙の外秀逸十種を選び金貳圓以下の圖書切符を呈す）

◉懸賞才媛畫箋募集

◎山水◎花鳥◎人物◎氣形◎器財其他

揮毫は縑、畫箋紙共隨意、毎號逸品十種を撰び卷頭寫眞版として揭載し、賞金（圖書切符）を呈す

◉各地風俗の寄稿を募る

本誌の編輯は、號毎に改頁を施し來たれるも、其の風俗人情に關する材料は、主として中央都會に採りたれば、聊か遺憾なしとせず、由て今後は廣く全國各地に於けるものを揭げ、以て相互に異なれる地方の風俗人情を知るの便に供する爲め、這回左記諸項に關する寄稿を歡迎す、江湖篤志の諸孃よ、乞ふ其地方に於ける特種的の風俗人情に關する事柄を其儘に記述し、續々投稿せられんとを

◎冠婚◎葬祭◎交際◎家庭◎奇習◎俚諺◎生活◎物價◎其他孝女節婦の美談佳話くさ〴〵

投稿規程（今後嚴行）

▲本誌は女子の手に成れる投稿を歡迎す▲投書の種類は文章（文は國文體及普通文に限る）詩歌（新體詩及短歌今樣の類）小說は優美にして卑猥ならざる者等とす▲投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る▲投書の用紙は半紙二ツ折（和歌は端書に限る一葉一首の事）半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る▲投書は各種類を別紙に認め匿名を欲する者と雖も原稿紙には必其姓名住所を明記するを要す▲投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面は『女學世界原稿』と記載すると▲投書は採否に拘らず一切返戻せざる者とす

◎女流十二大家投票（第三回被露）

教育家
- 三百五拾三　下田歌子
- 三百四十六　棚橋絢子
- 三百二十五　跡見花蹊
- 三百七十三　三輪眞佐子
- 百八十二　矢島楫子
- 四十二　津田梅子
- 三十三　安井哲子
- 二十三　嘉悦孝子

宗敎家
- 二百三十四　村雲尼公
- 四十三　長谷川喜多子
- 七十七　河野闘子
- 二十六　島村光津
- 三十五　潮田千勢子

著述家
- 八百十六　下田歌子

英學家
- 百五十五　津田梅子
- 五十五　長谷川喜多子
- 二十三　安井哲子

女丈夫
- 百八十三　野中千代子
- 百四十七　鄭　漵子
- 百六十五　奥村五百子
- 四十三　原　禮子

小說家
- 百三十三　三宅花圃
- 百五十六　大塚楠緒子
- 七十五　小石井喜美子

事業家
- 四百三十二　奥村五百子
- 七十三　原　禮子
- 百二十二　下田歌子

交際家
- 百四十八　鳩山春子
- 九十五　大隈綾子
- 五十七　鍋島榮子
- 九十八　下田歌子
- 十五　廣岡淺子
- 四十三　原　禮子
- 十二　毛利安子
- 三十七　楢原重子

音樂家
- 三十七　楢原重子
- 百二十八　幸田延子

歌人
- 百六十五　中島歌子
- 六十七　大谷章子
- 百五十七　小池道子
- 二十三　鳳　晶子
- 三十四　佐々木雪子

書家
- 二百九十四　跡見花蹊
- 百二十五　中島歌子

畫家
- 三百九十七　野口小蘋
- 七十五　武村千佐子
- 百四十七　跡見花蹊

學校案內

私立女子實業學校

同校は、今般女子に須要なる學藝を敎へ、又た婦德の養成を計るの目的を以て、校舍を本鄕元町一丁目二十番地に設立し、已に其筋の認可をも經て、去月七日より授業を開始せるが、其學科程度は、高等女學校に準じ、二ヶ年を以て、速成的に敎授すると云ふ

(詳細左揭の規則を看よ)

◎女子實業學校規則

第一條　本校は、女子に日用必須なる學術技藝を授くるを目的とす。

第二條　本校の學科を分ちて、本科、別科とす。

第三條　修業年限は、本科二ヶ年、別科一ヶ年とす。

第四條　各學年授業は九月一日に始まり、翌年八月卅一日に終はる。之を三學期に分ち、第一學期は九月一日より十二月卅一日までとし、第二學期は一月一日より三月卅一日までとし、第三學期は四月一日より八月卅一日までとす。

第五條　授業時間は、本科は毎日午後とし、別科は毎日午前とす。

第六條　本校ノ休業は左の如し

大祭祝日　地久節　日曜日　春期休業自三月廿八日至四月三日

夏期休業自八月一日至八月卅一日　冬期業休自十二月廿五日至一月七日

第七條　本校の學科課程、及毎週授業時間は左表の如し

學科目＼學年	本科一學年	授業時間	本科二學年	授業時間	別科	授業時間
修身及家政	人倫道德の要旨、禮儀、作法	一	仝上 家事、經濟	一	―	一
國語	解釋、文法 作文	四	仝上 作歌	四	解釋、作文	三
數學	算術、球算 幾何畫法	四	仝上 幾何學初步	四	算術、珠算	三
裁縫	常通和服 裁方、縫方	一〇	仝上	一〇	通常和服	一二
編物	通常編物	三	仝上	三	通常編物	六
割烹	日常料理法	二	仝上	二	日常料理	二

第八條　入學の期は毎學年の始とす。但し、缺員あるときは隨時入學を許す。

第九條　本科に入學せんとするものは、高等小學四學年卒業の者若しくは同程度の學力を有する者たるべく、別科に入學せんとするものは、尋常小學四學年卒業の者、若しくは同程度の學力を有する者たるべし。

第十條　本校に入學せんと欲する者は、左式の入學願書に學業履歷書を添へて申込まるべし。但し、別科入學志願者は履歷書を要せず。

(書式省略)

第十一條　本校へ入學を許可せられたるものは、左式の在學證書に束修を添へて差出すべし。（書左省略）

第十二條　疾病、其他止むを得ざる事情により退學せんとする者は左式の退學願書を差出すべし。（書式省略）

第十三條　保證人に東京市內に居住し、滿二十歲以上にして一家計を立つる者に限る。

第十四條　保證人轉居、若しくは氏名を變更したるときは直に之を屆出て、死亡、若しくは本校より變更を命じたるときは、更に之を定むべし。

第十五條　束修は本科金壹圓、別科金五拾錢とし、在學證書と共に納付するものとす。但し兩科を兼修する者も金壹圓とす。
第十六條　授業料は本科金壹圓五十錢、別科金壹圓とし、毎月五日までに本校會計課に納付するものとす。
第十七條　在學中は出席の有無に拘はらず、授業料は全月分を徵收す。但し毎年八月は徵收せざるものとす。
第十八條　既納の束修、及授業料は、如何なる事情ありとも返付せず。
第十九條　以下省畧す。

女子講習會

同會は、本月一月より設置を企てしも、事故ありて暫く中止し居りしが、今般更らに組織を一變し、規則を改正して、愈本月より專修科及び受驗科に分ち、倫理、國語、英語、數學、教育、家政等の諸學科を敎授し、以て女子敎育の普及に盡力するといふ

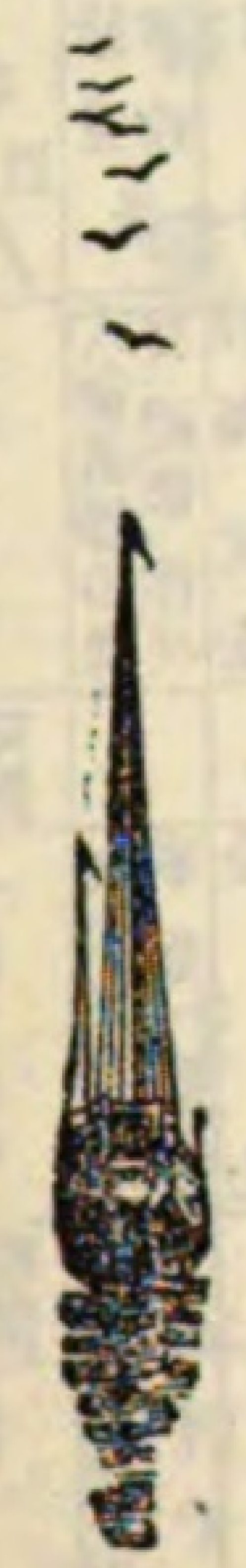
◉女子講學會規則

第一條　本會の目的は女子に必須なる道德學術を講じ新智識を附與し以て其品格を高めんことを期す
第二條　本會を分つて專修科及び受驗科の二種とす其學科凡そ左の如し

▲專修科
一、倫理科　一、國學科　一、漢學科　一、英學科
一、數學科　一、敎育學科　一、家政科

▲受驗科
一、國語科　一、漢文科　一、英語科　一、數學科
一、理科　一、地理科　一、歷史科

第三條　講習の時間割及び教科用書は別に之を定む
第四條　本會は時々贊成大家を聘し科外高等講演を開く但時宜に依り聽講料を徵收することあるべし
第五條　入會せんとする者は族籍、住所、姓名、生年月を詳記し入會金五拾錢を添へて申込むべし
第六條　本會は何人を問はず何時にても入會を許す
第七條　退會せんとする時は速かに屆出べし
第八條　會費は一ヶ月左の如し但十五日以內に入會する者は其月に限り會費半減す
專修科　一科金五拾錢　二科兼修金八拾錢　三科兼修金壹圓　四科兼修金壹圓貳拾錢（二科以上兼修する者は倫理、家政、教育學科は無料にて聽講することを得）
受驗科　一科金四拾錢　三科以上兼修は一科毎に金三拾錢　六科以上兼修は一科毎に金貳拾錢
第九條　會費は毎月五日迄に納入すべし三ヶ月以上怠納したる時は退會者と見做し除名す
第十條　品行方正學術優等にして他の摸範たる者と認むる時は之を儀表し且一科若くは全科の會費を免除削減し特に優待すべし
第十一條　本會の名譽を毀損し其他不正の行狀ある者に退會を命ずることあるべし
第十二條　本會は漸次各地に支部を設置すべし
第十三條　本會への照會は返信郵税封入たるべし



雜報

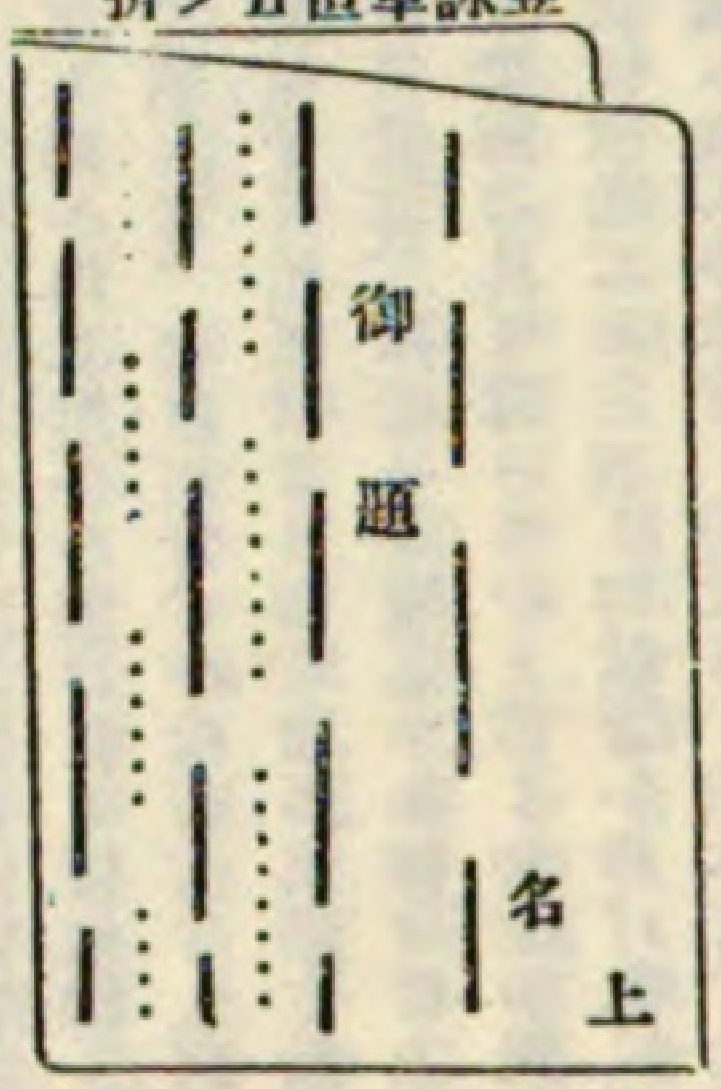
◎歌御會始御題

明治三十五年歌御會始御題左の通仰出されたり

「新年梅」

料紙は檀紙奉書杉原紙又は美濃紙を用ふべく詠進は一月十日迄に宮內省御歌所へ差出すべし但し一人一首に限る

竪詠草但五ツ折



裏面書式
某府縣某郡某市某町村住
華族士族又は平民
苗 氏 名
(官位勳功爵を有する者は苗字の上に記載すべし)

◎觀菊御宴

去月十九日は觀菊御會なり天皇陛下は御風氣の爲め臨幸なきも皇后陛下は御豫定の如く午後二時御出門略式の鹵簿にて赤坂離宮へ行啓あらせらる參列するもの閑院宮、同妃、小松若宮妃、梨本宮の四殿下を始め奉り內外の群臣男女約二千餘名、萩の御茶屋にて御休憩の後先づ僊錦閣の背後にある君の惠(淺黃)旭鶴(薄紅)等數百種の菊花より丘上なる洗心亭前の小夜衣(赤)佐野の渡(白)赤八百五十輪の赤城、黃七百二十五輪の金鷹等隈なく御覽畢て丘上左側なる假立食場にて御宴を開かせらる立食場は橫三十間奥行十五間の御假屋にて柱、天井、悉く菊花菊葉常磐樹にて飾らる、軈て四時還啓仰出されしが小雨降りては日影を漏らし曇りては又霽れたる秋の空の午後は全く晴天となりしと思ひの外三時過ぎより東南の風俄かに吹き起りて次で大雨さへ到り凄じき荒模樣となれるは誠に生憎の事にてありけり

◎久邇宮御降嫁

邦彥王御妹純子殿下(十八歲)舊大和柳本藩主織田子爵へ御降嫁の事は去二十七日本所なる同子爵邸にて華燭の典を擧げられたり又子爵の令妹とも子は片桐子爵の令息と結婚の約整ひたる由

◎山階宮妃殿下御葬儀

山階宮邸に於ては十七日午前九時より御棺前祭を執行相成りたる後御棺御靈に納めて御出棺の準備を爲し軈て午後一時御出棺を報ずるや先驅の部は警視を中央に四騎轡を駢べて進行を始め次に第一師團の歩兵二個中隊は悲愴なる喇叭の吹奏に隨ひ先頭儀仗兵として行進し次に錦旗次に眞榊一對次に白旗十旒を二列に捧げ次に神饌辛櫃は八木、牧の兩祭官中これを護して左右に隨ひ奥床、雨皮これに次ぐ次は左右に藤井、野間兩大祭官（狩衣）伊藤副祭官（衣冠）眞木齋官（衣冠）徒歩にて隨ひ次は伶人左右に六人列を爲し廐手を懸けたる根越榊一對これに續きて小松宮、有栖川宮、閑院宮、北白川宮、小松若宮、久邇宮、其他各皇族殿下を始め九條公爵父子其他諸家より御寄贈の眞榊十數對次棒三對、眞榊二對、續て香川家扶（狩衣）は勳一等寶冠章を捧げ村上島居兩家從左右に從ふ次は御柩なり御飾の具は總きていと美く御柩の後には家從二人從ひ次に奥床、雨皮次に家從二人左右に御杖沓を捧げ次に喪主近藤家令（衣冠）左右に家從を隨へ次に小松宮、閑院宮、梨本宮、久邇宮各殿下を始め奉り有栖川宮、賀陽宮其地御名代次に御親族次に德大寺内大臣、田中宮内大臣、同夫人、大山參謀總長、野津大將、桂總理、東久世樞密院副議長以下各顧問官德川、二條、毛利、嶋津（忠重）岩倉の諸公德川從一位鍋島侯、山内侯、同夫人、松方伯、榎本曾我兩子伊東海軍々令部長、岡澤侍從武官長、川口宮内次官、花房男、長崎、齋藤、廣橋、丹羽其他宮内高等官、柳原、園兩權典侍以下各女官、橋本宮中顧問官、伊東常備艦隊司令官、奥、寺内、黒瀬の各陸軍中將　中岡福嶋兩少將、佐双造船總監、小池軍醫監、中村陸軍、齋藤海軍兩總務長官及陸海軍將校何も馬車にて奉送次に儀仗兵二個中隊次に海城學校生徒隊、後に警部二騎正裝して左右を打ち御行列の長さは數町に亘りて御順路を午後二時豐島ヶ岡なる御墓所に着伶人は幄舍の前に整列して道樂を奏し各皇族殿下御親族の方々は左の幄舍前に進み齋主以下は右の幄舍前に立ち奉送諸員も又左右の幄舍前に控へ次で御棺を祭場に奉安し錦旗を御棺の後に樹て御杖沓を御棺の側に置き勳章を御棺の前に進めて各員著床畢て齋主眞木男爵祝詞を申し次に天皇陛下御代拜廣幡侍從、皇后陛下御代拜、山内亮東宮同妃兩殿下御代拜錦小路御用掛等各御拜御玉串を捧げ次に喪主、各皇族殿下御親族の方々始め家令以下拜禮御玉串を奉り畢て奏樂の内に神饌を撤し諸式全く終り夫れより御埋棺の御準備に取掛らせられ午後四時頃輿丁は御棺を舁ぎ參らせてな墓所へ移し奉り此所にて喪主は御埋葬の詞を白し後御柩を御壙に埋葬し了りて御墓標の根越榊を樹て參らせ又寄贈の眞榊を左右に樹て神饌を供へ次て喪主以下諸員の拜禮ありて式全く終りたるは午後五時頃なりし猶ほ當日山本、曾禰、菊池の各大臣佛國公使デュバイユ、獨國公使フアルレー伯其他各國公使を始め有位有爵者及び各省高等官等は豐島ヶ岡に參着奉送したり尙當日御葬儀の御模樣を拜觀せん爲め麹町富士見町の御邸附近は云ふ迄もなく小石川豐島ヶ岡の御墓所に至る御道筋の南側は老若男女群集し恰も人塀を築きたる程にて所轄麹町警察署を始め沿道筋なる牛込、小石川の兩署員は神田、赤坂、四谷、麻布の各署より應援の巡査と合して取締を爲したるが何れも靜肅に拜觀したり

●四恩瓜生會秋季大會

慈善矯風の實を擧げ四恩の奉答を期するてふ四恩瓜生會の秋季大會は去十七日午後一時より團子坂上なる須藤氏邸園に於て擧行し來會者約千八百餘名あり今其の模樣を記すれば邸園廣き凡そ一萬坪計り滿園の紅葉二月の花よりも紅なる中には芝生、小丘、池、辨才天など配置よく點綴せられ池には小舟を浮べて花の如き令孃の舵を盪すも見ゆめり小丘の絕頂に三々五々置列ねられたる椽臺のあたり、初冬の好晴得も言はれぬに園

子坂菊人形の賑ひしき有樣も手に取る如く光景言はん方なかりし當日は恰も山階宮故妃殿下御葬儀日に相當せしを以て餘興等の催しは凡て全廢し其の代りとして庭園裏手なる將軍宣下行列人形を隨意に觀覽せしむる事とし軈て午後一時頃東京市養育院より役員一名保母四名の附添にて兒童五十二名と同院感化部生徒三十八名も來會し隨意に遊戲し居たるは頗る來會者の心を動せり

午後二時演説會場に於て演説始まる先づ同會員常盤文學士より會計の報告あり次に村上文學博士は一同に向ひ四恩瓜生會設立の由來を説き尚佛教の八福田に就き丁寧懇切なる演説を爲して頗る滿堂に感動を與へ次て東京法科大學教師ルイ、ブリデル博士は起て男女同權論に就き通辯を從へて一場の英語演説をなし夫れより茶菓の饗應ありて各自園内を逍遙し散會せしは日暮なりし

尚同會の一斑を聞くに目下會務として擧行しつゝあるは施齋、教育、補助の三案にして施齋は毎月二十日の例會日毎に養育院内幼老病者へ白飯と菜とを施齋し同時に院内先亡者の爲めに法要を行ひ各宗順次に擧行し居れり教育は三十二年五月以來德風夜學舍の名を以て不幸なる子弟の爲めに毎夜低度の普通學科を授け現在は三十餘名なるが今日迄茲に學べる者は總計百五十餘名ありと又補助は本年四月淺草神吉町六番地に設置せられたる無料宿泊所を贊同して同所設額三分の一を補助しつゝありて將來の目的は近くは下層社會の爲め簡易なる幼稚園樣のものを設け勞働者の幼兒を終日預りて其の扶掖教育に力を盡し兼て勞動父兄をして煩累なく其業に就くを得せしめん事を期し遠くは他の諸婦人會と氣脈を通じて歩調の一致を謀る事を期する由

●女子大學生徒の調（卅四年十一月十五日調查）

府縣	大學部	英文豫科	高等女學校	合計
東京	二二	五	七六	一〇三
京都	八	〇	五	一三
大阪	七	一	四	一二
神奈川	三	一	六	一〇
兵庫	八	一	三	一二
長崎	四	〇	四	八
新潟	一〇	一	六	一七
埼玉	四	〇	一五	一九
群馬	二	一	五	八
千葉	七	一	一五	二三
茨城	五	〇	一三	一八
栃木	八	三	九	二〇
奈良	二	一	一	四
三重	四	〇	三	七
愛知	三	一	六	一〇
靜岡	五	二	一七	二四
山梨	二	〇	〇	二
滋賀	三	〇	〇	三
岐阜	二	一	一	四
長野	七	二	一五	二四
宮城	一〇	一	七	一八
福島	六	〇	一一	一七
岩手	四	〇	八	一二
青森	一	〇	一	二
山形	七	一	九	一七
秋田	〇	〇	四	四
福井	一	一	五	七
石川	〇	二	三	五
富山	〇	二	四	六
島根	一	一	〇	二
岡山	六	四	一	一一
廣島	四	一	二	七
山口	三	一	六	一〇
和歌山	一	一	三	五
德島	三	〇	二	五
香川	四	一	一	六
愛媛	五	四	七	一六
高知	四	〇	三	七
福岡	二	〇	九	一一
大分	三	〇	三	六
佐賀	四	一	三	八
熊本	四	〇	六	一〇
宮崎	〇	〇	一	一
鹿兒島	四	二	七	一三
北海道	五	三	一六	二四
合計	一九七	四七	三二六	五七〇

◎各科別調

▲國文學部　九六　▲家政學部　九二

▲英文學部 九 ▲英文豫科 四七
○附屬高等女學校 三二六 合計 五七〇

◎大學部（英文豫科ヲ含ム）生徒從前ノ教育調

△高等女學校卒業	一四七
△師範學校卒業	二四
△私立學校其他	七三
計	二四四

◎寄宿在寮生徒

△大學部	一〇四
△高等女學校	一一六
計	二二〇

◎成女學校創立二週年紀念會

喧嘩ても挑みたき程のしつこき雨も、今日ばかりはあつらへの日本晴、天長の佳節、豫て案内されたる成女學校紀念會の式場へと趣きぬ式は正午に開かれまづ校長の式辭ありてそれより各自生徒の趣向になるといふ英文、國文の朗讀、暗誦及對話等代る代る壇上にあらはれて演奏せしが、就中對話のステーシヨン夢の三十年、花井中佐、小國手等最もおもしろく大森令孃の國文朗讀村井令孃の國文暗誦朝倉令孃の英詩暗誦等いづれも來賓の拍手喝采を博しぬ。式了りて、運動場において茶菓の饗應あり、賣店に柿あり、スシあり、餅あり、菓子あり、珈琲ありたり。當日來賓は大森總務長官母堂、坂井少將夫人、三菱銀行頭取豐川良平夫人、日本郵船會社長近藤廉平夫人、代議士松岡長康氏布施甚七氏、黒川男爵令孃、(二)棚橋絢子原令孃等無慮五百餘名なりし。

◎鳩山春子氏の消息

先項エール大學の招待に應じ渡米せし鳩山博士の夫人春子女史の消息を聞くに婦人の漫遊は珍らしき故か同地の新聞記者は爭うて夫人を訪問し來たり夫人は晝夜とも諸方の宴會等に招かれ外出勝ちなれば訪問者は無駄骨に終るもの多く偶々時間を得れば數分間づゝ面會し居るなどにて夫人の同地に於ける歡迎は甚だ盛んなる由なるが近頃同地より發せる書信は左の如し

ヘラルドのSun day paper婦人記者に面會いたし候その婦人は私に日本服をつけて寫眞を寫させくれと迫り候へども忙しくもあり且好ましくもなき故謝絶いたし候處再三再四懇願せられ候に付已むを得ず承諾いたし候されど適當なる時間の繰合もつきがたく夕刻(出發の前日)薄暗き處にて寫し申候……

新聞記者の續々參り候には驚き申候最早夕飯の時刻も近づき候を幾人も待ち居り候て中には面會もせざるに自分にて何か作り全く跡方もなき記者など出し申候また私の話し候も此方にて出して吳れゝばよきにと思ひ候事は揭げず餘程想像を加へて虛談を揭げたるも有之誠に迷惑に存じ候昨日ラッド氏に右の話致候處それは皆々承知の事と申され候新聞記者は別段惡意には無之候も世人の好奇心を惹かんとの考より自然話を橫道に入れ候事と存候但し惡口と申程の記事は御座なく候…

◉風俗改良會の活動

同會は會長副會長の關西遊說後大に其氣勢を揚げ來れるが去月十八日午後六時同氣倶樂部の樓上に臨時總會を開き規則を改正し又た左の改良事項を決議したる由

一 訪問は午前は九時より十二時午後は二時より四時（日の永き季節は五時）に至る間を通例とすべし
一 業務上の訪問は豫め時間を定むる能はざるも單に用務を談ずるの外餘事を語るべからず
一 文章演說は勿論對話の上に於て人の氏名を呼捨にせざるを良とす
一 公衆の眼に觸るゝ場所に設置する時計は其時刻を正確にするを心掛くべし
一 酒杯の獻酬を廢止すべし
一 虛飾無用の物品贈答を廢すべし
一 旅店其他の茶代は一切廢止すべし

◉大隈伯の女子大學招待

伯は去る十六日女子大學の職員生徒五百餘名を招待して庭園の菊花を披露し且つ伯が多年の經驗を基として演藝に關する一場の談話を試みられたり

◉官幣大社臺灣神社（口繪參照）

明治二十七八年征臺の役に近衛師團長として御渡臺、櫛風沐雨を冒かせて各地に御轉戰の末病篤の爲めに薨去あらせられたる故能久親王殿下の御神靈を始め奉り大國主尊外二柱を合祀せる官幣大社臺灣神社は新築落成を告げて昨夜半御靈遷の御神事あり引續き今明兩日間、盛んたる大祭を擧行せらるゝ圖に示す所のものは即ち同神社の見取圖にして臺北を距る北西約一里の劍潭山の半腹に在り基隆河を隔てゝ圓山の公園と相對し風景頗ぶる佳、御宮居の規模は概ね伊勢大廟の結構に傚はれて拜殿の設け無く御神殿正面の左傍に見ゆるは社務所にして之れと相對せるは神器を納めたる倉庫の由、臺灣總督府が始めて此の土工を起したるは去る三十二年五六月の交にして翌三十三年の夏より御神殿其他の建築工事に取掛り本年八月竣成を告げ總費額三十萬圓餘を支出せるなりといふ

◉女子美術展覽會

目下上野公園第五號館に開會中なる女流專門の美術展覽會には書畫あり彫刻あり刺繡あり造花あり其他華道茶談等女子一切の手藝は兎も角も茲に觀るを得べし今其成立を聞くに現今美術工藝の隆盛に伴ひ女流作家も追々增加したるが其作品を弘く世に示すべき設備なければ隨つて發達奬勵の途に於て缺くる所ありとし副會長佐藤夫人等熱心に盡力して同會を設立し尙女子美術學校、跡見學校、青山女子手藝學校等を始め閨秀畫家奧原晴翠、跡見玉枝前島靜閑及び畫伯荒木寬畝、森脇雲溪の諸氏も是を幫けて終に展覽會を開くに至りしなりと、出品中の重なるは青山手藝學校の刺繡彫刻造花女流畫家にては前島靜閑女史の漢畫の大幅跡見花蹊及玉枝門下、荒木寬畝崇の社中など競つて出品せり、

新年の女

吾人多年の希望たりし女子教育は、今や正に青春期に達し、女學の隆昌、前代無比の勢となれり、本誌創刊年を閲する此に一年、主婦の務めを全ふすべき家庭と、未來の善母を造るべき學窓とに對して、多少の貢獻ありしを信ず、明年一月以來更らに誌上に改善を施し、實質の上、十分に材料を精選して、以て平素の愛顧に酬ひんことを期す、

◎論説　は時事に適切なる實際問題に就いて大家名士の評論せるもの

◎家庭　は家政、育兒、衛生、料理、生花、裝飾等、苟も家庭生活上必要なる日常卑近の事項を網羅し、現時の夫人と將來の主婦とをして家居處世の務を會得せしむ

◎脩身　は主として女德を説述し、以て女子教育の精神を知らしむ

◎禮法　は家内及交際に於ける和洋兩式の禮法を説述す

◎史傳　は東西古今の賢婦、女傑、貞女、孝女等の傳記逸事を、流麗明快の筆を以て描き、讀者をして親しく其の風采謦咳に

新年第一號の要目

新年第壹號大附錄　**當代貴顯夫人**　寫眞銅版菊判八ページ掛大額面

學世界

接するの想あらしめ、以つて高尚優美なる氣品と、強健毅直なる性質を養はむ ◎**文苑**は文壇名家の手に成れる近作の瓊章玉句を蒐む ◎**學藝**は專ら學術上の利益を與ふるを目的として、從來掲載の地理、理化、裁縫、造化、書籍談等の外に更らに歷史的上の談話、法律上日常心得べき事項の略解、編物、刺繡、數學の講話を以てし、現今の各女學校の課程に準じて遺漏なきを期す ◎**講義**は和歌、國文、漢文に就て、新たなる評釋を以てすべく、勉めて訓詁解釋の風を避けて、大意の了解悟得を旨とし、以て婦女子の修學に便ならしむ ◎**小說**は文壇大家の手に成れる品質佳良の作を選みて以て家庭の讀物に適せしむ ◎**雜錄**は文學的趣味を帶べるものにして、且有益なる材料を取ること ◎**社交**は冠婚、葬祭、往來、贈答等平常交際の心得となるべきものを摘錄し、又時々名門貴顯の家庭の光景を紹介す ◎**其他欄**も材料豐富又た精選 ◎**當代十二女傑**は豫てより本誌にて募集せる投票の結果に由りて當選せる當代十二女傑の中、毎回一人づゝの肖像を口繪とし、且つ其傳記閱歷を敍述し、以て後進女子が立身の羅針盤たらしむ、

新年初刷の口繪要目

每月一回五日發行

定價表

一冊(紙數二百八頁)……金二十錢
四冊(三ヶ月分)……前金七十五錢
八冊(半ヶ年分)……前金一圓四十五錢
十六冊(一ヶ年分)……前金二圓八十錢
內(定刊數十二冊 增刊四回…三、六、九、十一月價格同一)

郵稅 一冊 二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	……	四十三錢	三十五錢	三十錢
半頁廿二行	……	十三圓七十六錢	十一圓二十錢	九圓六十錢
一頁六十四行	割引 三十三圓	割引 二十七圓	割引 二十二圓	割引 十八圓

▲等級ハ位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

明治卅四年十二月五日發行　第一卷第十六號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍（東京市京橋區西紺屋町二十六七番地）

不許複製

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

博文館諸雜誌發行表

十二月發兌表

定價

雜誌	定價
太陽	一冊三拾錢・郵稅三錢・每月一回
少年世界	一冊拾錢・郵稅一錢五厘・每月一回
中學世界	一冊貳拾錢・郵稅貳錢・每月一回
女學世界	一冊貳拾錢・郵稅貳錢・每月一回
文藝倶樂部	一冊廿五錢・郵稅二錢五厘・每月一回
太平洋	一冊六錢・郵稅五厘・每月曜日
圖書世界	一冊三錢・郵稅五厘・每月一回

六大雜誌及增刊

雜誌	發行日
太陽第十四號	五日發行
少年世界第十六號	一日發行
中學增刊英才詞苑第十五號	一日發行
女學世界第十六號	五日發行
文藝倶樂部第十六號	一日發行
中學世界第十六號	十日發行
圖書世界第六號	十五日發行

太平洋

號	發行日
第四十八號	二日發行
第四十九號	九日發行
第五十號	十六日發行
第五十一號	廿三日發行
第五十二號	三十日發行

廣告料

雜誌	廣告料	活字
太陽	一行一回金四拾五錢	五號活字十八字詰
少年世界	一行一回金四拾錢	五號活字廿四字詰
中學世界	一行一回金三拾錢	五號活字廿四字詰
文學世界	一行一回金三拾錢	五號活字廿四字詰
文藝倶樂部	一行一回金四拾錢	五號活字廿四字詰
太平洋	一行一回金四拾錢	五號活字廿二字詰
圖書世界	一行一回金拾五錢	五號活字廿二字詰

詳細は御問合せの事

古來稀有茶道全書豫告



心月庵松浦伯爵題辭
半月庵石黑男爵序文
遮莫庵伊藤勇君序文
谷神庵岡崎淵沖翁著

各傳比較 **點茶活法**

全部十三卷
和裝上製
全四冊

新年一月出版

此書は篇を客法主法手前置合器物床飾露地茶室等に分ち附するに各傳々統の系譜を掲く首に斯道の總論を掲げ各編皆諸流の傳を列記し其異同と理義の所在を知らしむ初學の人は此書に依りて主客の作法を始め手前百變の基棚荘千化の起露地の繩張茶室の構造まで容易に獨習自得せらる故に師範の人の好參考書たるは素より何流何派に論なく必ず一本を座右に備置かざるべからざる古來稀有の全書なり



(後付の一)

四書新釋

文學士（漢文學専攻）久保天隨君著（製本既成）

四書新釋 中庸

全壹冊洋裝
菊判美本
正價二十錢
郵稅六錢

四書新釋、曩きに大學を出し、今や續いて中庸一卷を刊す。著者には、該博の學殖と高邁の識力とあり。故を以て、漢唐の古義に僻せず、宋明の新註に偏せず、又必ずしも近清學者の考證を師奉せず。期する所は、註疏の周匝と論斷の正確とに在り。加ふるに、本篇以下は、字解・章意・批判・餘論の數者を分說し、殊に明截簡淨を極め、譬へば庖丁牛を解くに似たる者あり、讀者をして詳細相因り、巨細畢く擧げ、脈絡貫通、曲暢旁通、麻姑を倩うて癢を搔く如くならしむ。古今の箋疏、紛然雜出、其多に堪へずと雖も、集めて之を大成したるは實に本書に在り、誠に近時稀に見るの好著と謂ふべし

四書新釋

全部六册
（目次）

- 大學　再版
- 中庸　十月中旬發行
- 論語　全貳册
- 孟子　全貳册

以上全部六册隔月發行仕候間陸續御愛購あらんことを希上候（每册價格不同）

發兌元　東京　博文館

（後付の三）

當代女流

十二大家投票募集

明治の昭代、文運の隆盛に伴ひ、女學界の趨勢著るしく發展し、女流名家の輩出近古無比と稱す、此時に際し本誌は新たに當代女流の英傑別紙投票用紙に指定せる十二大家を選ばんと欲し、普く江湖に向つて投票を募る、是れ斯界の先輩を稱揚するのみならず、又以て後進才媛の摸範となし、一般婦女社會の啓發誘掖に資せんとするの趣旨に出づ、讀者請ふ、左の規程に由り公正に投票されん事を

最高點の投票を得られたる諸大家へは精巧なる石膏製の塑像を贈呈し且つ其の肖像は明年一月より毎號女學世界卷頭寫眞版（アートペーパア）に掲載し、且つ其の小傳を掲ぐべし

投票規程

一 投票は凡て投票用紙に由る事

一 投票〆切は十二月十日限の事

一 投票披露は來三十五年一月五日女學世界第二卷第一號に於てす

一 十二大家中宗教家は佛教、神道、基督教を論ぜず、總じて道德高く信仰深き斯界の名家を擧げ又事業家と稱すべきは慈善事業矯風事業其他一般公共問題に與つて力ある人を擧げ、書家、音樂家は和漢洋を論ぜず凡て斯界に卓拔せる技能ある人を擧ぐべし

一 被選者は凡て現存者に限る事

一 投票は封筒に入れ表面に女學世界投票と朱書し博文館編輯局宛の事

博文館編輯局

（移付の五）

（此投票用紙を切取り記入の上投寄す）

投票用紙

明治女傑十二大家

教育家	宗教家	著述家	英學家	女丈夫	小說家	事業家	交際家	音樂家	歌人	書家	畫家

投票者

氏名及住所

（後付の六）

東京專門學校藏版

高安月郊君譯

イブセン作

社會劇

全一冊　洋裝上製美本

◎正價金壹圓　郵税金拾貳錢

これは北歐の大詩人イブセン氏の二大作社會の敵人形の家を高安月郊氏が苦心の筆に譯せるものの乃ち我新劇は古代の所謂ゆゑ悲劇にあらざるか吾は人間を描かんと欲するの揚言を實現せる所謂社會劇にして實に十九世紀末に於て歐米の天地を震撼せる傑作なり附するに譯者の筆に成れるイブセン傳を以てす我文壇の作物に倦める人速かに來て此清涼なる流れを掬し玉へ

綱島榮一郎君補譯

快樂派倫理

全壹冊　洋裝

◎正價金五拾五錢　郵税金六錢

本書は希臘時代より今代に至る迄の快樂派倫理説を叙述論評して快樂の果して人生唯一の目的なるべきや道德上唯一の標準なるべきやの問題を解釋したるものにして一個燃燈の明を倫理界に與へたる一異彩なり一小冊子と雖倫理學の講究者は勿論教育者の好參考書といふべし

博文館發兌

東京專門學校講師　松平康國君著

世界近世史

東京專門學校出版部藏版

全壹冊總クロース上製　石版地圖挿入紙數四百餘頁

正價金壹圓貳拾五錢

郵税金拾錢

歷史は近世史より有益なるはなく近世史より面白きはなし開闢以來未曾有の大活劇は東西混同の大舞臺に現はれ來り政教の衝突は列國を亂渦中に投ずるかと見れば君民の軋轢又天下をして修羅場に化せしめんとし或は風雨晦冥或は晴天白日亡國の歌は自由の鐘に化し文明の光は風雲の色を帶び山盡き水出て柳暗く花明に局面の遷大世態の變化眞に是れ造化得意の脚色なりといふべし今や松平破天荒其長技を逞ふして雄麗の筆を揮て之を叙す思ふに讀者樂讀又樂讀大團圓に至るを覺えず必ず大喝采を以て之を迎ふべきを知る

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

鶯亭金升君著

風雅文庫

全部六冊袖珍美本

風雅文庫第壹編 都々逸の栞

天文地理鳥獣虫魚等各部に別ち古今の秀吟を添へ季題と雑題とを親切に説き巻頭には初心の為めに作法を掲集し巻末には雑題見立物詠込折句其他數百吟を集めたる無比の珍書にして、啻に雑俳家のみの重寳にはあらず

製本既成 正價金貳拾錢 郵税六錢

風雅文庫第貳編 冠句の栞

雑俳中の流行物なる冠句は冠附、傘附、狂俳等の名は變れども全國に廣く行はる、本書は冠句中別に東京調の名ある一派を初め全國作家の秀吟を網羅し、巻頭には巻附の作例を擧けて初心の為めに東西を指し、冠附題林中には冠句の題數百を蒐集し、附録には上句附下句附の佳作を掲げたれば俳諧の參考ともなるべし

附り前句付 正價金貳拾錢 郵税六錢

續刊目次

狂俳句の栞
狂句の栞
雑俳の栞

上記の六冊を纏めて美帙に裝ひ明窓浄几の下に備へて花月の好伴侶とせば百年の長齢も此の浩氣を養ふの原素となるを得べし雅客たる人必ず一本を購入せざるべからず

新刊 **俗曲大全** 全壹册 鶯亭金升君校訂 正價金六拾錢 郵税拾六錢

再版 **都々逸一千題** 全壹册 鶯亭金升君編纂 正價金参拾五錢 郵税六錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 **博文館**

石井研堂君著

少年工藝文庫

毎月一回發行 全部十二冊

毎編寫眞版西洋木版數十面挿入

定價一冊十五錢六冊前金八十五錢十二冊前金一圓六十錢郵稅一冊四錢

文明の利器といふ物の中の利器をえらび之を解剖して其學理を窮め上は起原を探り下は一々實地につきて現況を視察し詳かに科學應用の精華を說話するもの即ちこの少年工藝文庫なり日新の社會に於ける少年の讀本これ程實益多く趣味豐なるはまた無かるべし

第一編 鐵道の卷

明治三十五年一月一日發行

定價十五錢

郵稅四錢

此書は學理を骨とし實際を肉とせる內外國の鐵道談にして記述の趣向は著者獨得の新機軸を出し挿畫は多く實地撮影の寫眞を應用したれば文明の新智識を得んと欲する少年の讀まざるべからざる好讀本なり

第二編 水道の卷
第四編 寫眞の卷
第六編 硝子の卷
第八綫 活版の卷
第十編 製紙の卷
第十二編 電燈の卷

第三編 瓦斯の卷
第五編 電話の卷
第七編 紡績の卷
第九編 滊船の卷
第十一編 銅山の卷

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女學世界

毎月一回五日發行

第壹卷第十六號

(明治三十四年十二月五日發行)

(明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可)

(定價金貳拾錢)

東京秀英舍印刷

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑧
明治34年11月～12月（第1巻第15号、第16号）

2005年12月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2842-5　C3321